大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XIV

1994年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.10

財団法人　大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告　XIV

1999. 10

本書には、長原古墳群中における最大級の古墳、一ケ塚古墳に係わる調査成果を収録する。当古墳は5世紀初めに築造された、造出しをもつ直径50mクラスの円墳で、本書ではこれまでの調査成果を含めた検討を掲載した。

また、長原・瓜破遺跡の境付近にある「馬池谷」内の土地利用状況、その中で検出した縄文時代後期の遺物、長原遺跡の西南で検出した中期旧石器時代にさかのぼるナウマンゾウの足跡化石や、東端で見つかった平安時代の土器埋納遺構などの、旧石器時代から近世に及ぶ調査成果を収録した。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XIV

1994年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.10

財団法人　大阪市文化財協会

長原一ケ塚古墳(南西から)

『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 XIV正誤表

頁	行	誤	正
39	13	131～136	131・132・134～136
55	9	粗いのハケで調整している	粗いハケで調整している
64	21	213は瓦器三足釜の	213は瓦質土器三足釜の
80	22	衣蓋形埴輪（図53）	衣蓋形埴輪（図52）
120	9	365は白磁碗で	365は白磁皿で
123	11	SD601はSR601の東肩に	SD601はSR601の西肩に
151	11	追加	趙哲済1997、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』IX、pp.14-18

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XIV

1994年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.10

財団法人　大阪市文化財協会

序　　文

大阪市の東南部、平野区の長吉・瓜破地区で区画整理事業が始まってからすでに20年近くが経過した。この間、地区内では宅地化・都市化の波が押し寄せ、それに伴う発掘調査も数多く実施され、着実に資料が蓄積されてきた。当地区の区画整理事業に伴う発掘調査の成果を年度ごとに順次報告してきた『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズは、当地区周辺の様々な開発に伴う最新の調査成果をも反映した報告書であり、本書はその14冊目である。

今回は、前書でほぼ全容が明らかにされた一ケ塚古墳外縁部で実施した調査について報告し、従来の知見を補ういくつかの資料を収めるとともに、長原遺跡では初めてとなるが、遺跡西南部で調査された中期旧石器時代のナウマンゾウの足跡化石の調査報告も収録した。

この20年間の当協会による調査・研究の成果に、新たな資料を追加していくことで、さらに研究を進展させてゆく所存であるが、今後は、これらを様々な形で市民に還元していく必要性をも痛感しているところである。

最後に、発掘調査および報告書作成に当って、ご理解やご協力を賜った関係各位に、心より御礼申し上げる次第である。

1999年10月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長　佐治　敬三

例　　言

一、本書は大阪市建設局長吉瓜破区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1994年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣慎(現調査部長)の指揮のもとで、調査課主任京嶋覚(現同課長)、調査員清水和明・松本百合子・小田木富慈美・久保和士・大庭重信・寺井誠・宮本康治、嘱託調査員細川富貴子(現奈良市教育委員会)・高橋真由美(旧姓瀬尾)が行った。各調査の地番・面積・期間・担当者は表1に記した。

一、木製品および金属製品の保存処理は調査課伊藤幸司・鳥居信子が行った。

一、本書の執筆は、第Ⅱ章第5節と第Ⅴ章第2節の動物遺体についての記載部分を久保が分担し、第Ⅲ章第3節を調査課主任越智哲済・寺井と協議した上で、その他を上記調査員との検討や調査記録をもとに主として小田木が行った。英文要旨の作成はRobert Condon氏と宮本康治(調査課調査員)が行った。本書の編集は各執筆者の協力を得て、小田木が行った。

一、遺構写真は主として担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は徳永圀治氏に委託した。

一、発掘調査にはカナダ・カルガリー大学卒業生のNicole L. Boivin氏の参加を得た。記して、深謝の意を表する次第である。

一、発掘調査および資料整理・作図には財団法人大阪市文化財協会に所属する多くの補助員諸氏の参画を得た。厚く御礼申し上げる。

一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

凡　例

一、本書において用いる地層名は原則的に各調査ごとに個別に記載する。長原遺跡の標準層序との対比は[趙哲済1997]に基づいて行い、標準層序の表記は、文中では長原○層とし、図表等ではNG○層とした。現段階の標準層序は別表１(148頁)に示した。また、断面図における粒径表記も同文献に従って行った。

一、各調査の記載の冒頭に載せた層序表での、各々の地層における遺構欄で用いた記号は、▲＝上面検出遺構、▼＝下面検出遺構、↓＝基底面検出遺構をそれぞれ示している。

一、遺構検出面の層序関係に基づく呼称および形成過程に基づく呼称は、[趙1995]に従って行った。

一、遺構名の表記には、塀・柵(SA)、掘立柱建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、ピット(SP)、畦畔(SR)、石器集中部(LC)、その他の遺構(SX)、自然流路(NR)の略号を用いた。略号の後ろには各調査次数ごとの通し番号を付し、遺構の大まかな検出層準が区別できるように、長原４層層準の溝にはSD4○○、長原７層層準の土壙にはSK7○○のように表記した。

一、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○○mと表記する。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値は国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。

一、遺物実測図中において、黒色土器Ａ類では内面、同Ｂ類では内外面、形象埴輪では剥離面にスクリーントーンを付した。また、石器遺物に関しては別表２(149頁)に石器遺物登録番号と計測値を記した。

一、石器遺物の図版の縮尺は約２／３である。

一、本書で頻繁に用いた土器編年は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。円筒埴輪：[川西宏幸1988]、古墳・飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1966]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会編1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、瓦器：[森島康雄他1995]

本 文 目 次

序文

例言

第Ⅰ章　長原遺跡の調査 …… 1
　第1節　1994年度の発掘調査と報告書の作成 …… 1
　　1)発掘調査 …… 1
　　2)報告書の作成 …… 2
　第2節　発掘調査の経過と概要 …… 3
　　1)長原遺跡西地区 …… 3
　　i)94－3・17次調査　ii)94－5次調査
　　iii)94－46次調査　iv)94－63次調査
　　2)長原遺跡西南地区 …… 4
　　i)94－18次調査　ii)94－33次調査　iii)94－52次調査
　　3)長原遺跡南地区 …… 6
　　i)94－39次調査　ii)94－47次調査　iii)94－56次調査
　　4)長原遺跡中央・東南地区 …… 7
　　i)94－19次調査　ii)94－20次調査　iii)94－4次調査

第Ⅱ章　長原遺跡西地区の調査結果 …… 9
　第1節　94－3・17次調査 …… 9
　　1)層序と各層出土の遺物 …… 9
　　2)遺構と遺物 …… 13
　　i)室町時代　ii)奈良時代
　第2節　94－5次調査 …… 14
　　1)層序と各層出土の遺物 …… 14
　　2)遺構と遺物 …… 15
　　i)室町時代後半　ii)室町時代前半
　第3節　94－46次調査 …… 19
　　1)層序 …… 19
　　2)各層出土の遺物 …… 21
　　i)第2～6層出土遺物　ii)第7～14層出土遺物
　　iii)第16～20層出土遺物　iv)その他の遺物

3)遺構と遺物 …… 28
i)室町～江戸時代　ii)平安時代末～鎌倉時代
iii)奈良～平安時代前半　iv)古墳～飛鳥時代
第4節　94－63次調査 …… 31
1)層序 …… 31
2)各層出土の遺物 …… 33
3)遺構と遺物 …… 35
i)平安時代　ii)飛鳥～奈良時代　iii)縄文時代
第5節　動物遺体の調査結果 …… 40
1)1994年度出土資料の概要 …… 40
2)西地区出土資料の記載 …… 40
3)小結 …… 43
第6節　小結 …… 44

第Ⅲ章　長原遺跡西南地区の調査結果 …… 47
第1節　94－18次調査 …… 47
1)層序と各層出土の遺物 …… 47
i)層序　ii)各層出土の遺物
2)遺構と遺物 …… 52
i)平安～江戸時代　ii)古墳～奈良時代　iii)一ケ塚古墳(長原85号墳)
第2節　94－33次調査 …… 63
1)層序と各層出土の遺物 …… 63
2)遺構と遺物 …… 65
i)室町時代　ii)一ケ塚古墳(長原85号墳)
第3節　94－52次調査 …… 69
1)層序 …… 69
2)遺構と遺物 …… 70
i)近世～近代　ii)中期旧石器時代
第4節　小結 …… 77
1)長原遺跡西南地区の調査成果 …… 77
2)長原一ケ塚古墳と出土遺物 …… 78
i)はじめに　ii)一ケ塚古墳の埴輪

第Ⅳ章　長原遺跡南地区の調査結果 …… 85
第1節　94－39次調査 …… 85
1)層序 …… 85
2)遺構と遺物 …… 86
i)平安時代　ii)飛鳥～奈良時代　iii)長原76号墳
第2節　94－47次調査 …… 93

1)層序と各層出土の遺物 …… 93
2)遺構と遺物 …… 95
i)江戸時代　ii)平安～鎌倉時代　iii)飛鳥～奈良時代
第3節　94－56次調査 …… 97
1)層序と各層出土の遺物 …… 97
i)層序　ii)各層出土の遺物
2)遺構と遺物 …… 100
i)江戸時代　ii)室町時代
iii)平安～鎌倉時代　iv)古墳～奈良時代
第4節　小結 …… 106

第Ⅴ章　長原遺跡中央・東南地区の調査結果 …… 109
第1節　94－19次調査 …… 109
1)層序と各層出土の遺物 …… 109
2)遺構と遺物 …… 112
i)江戸時代　ii)奈良～平安時代　iii)飛鳥時代
第2節　94－20次調査 …… 116
1)層序と各層出土の遺物 …… 116
2)遺構と遺物 …… 119
i)室町～江戸時代　ii)奈良～鎌倉時代
iii)飛鳥時代　iv)縄文時代
第3節　94－4次調査 …… 126
1)層序と各層出土の遺物 …… 126
2)遺構と遺物 …… 131
i)鎌倉～江戸時代　ii)奈良～鎌倉時代
iii)飛鳥時代　iv)弥生～古墳時代　v)縄文時代
第4節　小結 …… 142
1)長原遺跡中央地区の調査成果 …… 142
2)長原遺跡東南地区の調査成果 …… 144

別表 …… 148

引用・参考文献 …… 150

あとがき・索引

英文要旨

報告書抄録

原色図版

1 土器・漆製品

上：94－4次調査　土器埋納遺構出土の土器

下：94－46次調査　鎌倉時代の漆皿

図版目次

1 長原遺跡西地区94－3・17次調査地　室町時代の遺構

上左：94－3次調査　第5a層上面全景(北から)

上右：94－17次調査　第5層上面(北から)

下左：94－3次調査　第5a層上面の水田断面

下右：94－3次調査　第5c層出土のウマ骨

2 長原遺跡西地区94－5次調査地　室町時代の遺構

上：SR302(南から)

下：SD401とウマの頭蓋骨(北から)

3 長原遺跡西地区94－5次調査地　室町時代の遺構

上：SD402検出状況(西から)

下：SD402検出状況(西から)

4 長原遺跡西地区94－46次調査地　江戸時代の遺構と地層断面

上左：東半部第2層下面の小溝群(西から)

上右：西半部第2層下面の小溝群(東から)

下：調査区東半部北壁断面(南から)

5 長原遺跡西地区94－46次調査地　鎌倉～室町時代の遺構

上：第8層上面SR301(西から)

下：第14d層基底面SX403(南西から)

6 長原遺跡西地区94－46次調査地　古墳～鎌倉時代の遺物出土状況

上左：第14a層漆皿94・95出土状況(西から)

上右：第16層土師器甕58出土状況(西から)

下：第20層須恵器甕71出土状況(西から)

7 長原遺跡西地区94－63次調査地　平安時代の遺構

上：第8層上面検出遺構(南から)

下：第8層下面検出遺構(西から)

8 長原遺跡西地区94－63次調査地　飛鳥～縄文時代の遺構

上：第19層下面足跡検出状況(南から)

下：第22・23層縄文土器・石器出土状況(南から)

9 長原遺跡西南地区94－18次調査地　古墳～奈良時代の遺構

上：SD601北壁断面(南から)

下：第7層上面踏込み検出状況(東から)

10 長原遺跡西南地区94－18次調査地　古墳～奈良時代の遺構

上：第8層下面検出状況(東から)

下：一ケ塚古墳周濠基底面の埴輪出土状況(南西から)

11 長原遺跡西南地区94－33次調査地　古墳時代の遺構と地層断面

上：一ケ塚古墳周濠完掘後全景(北から)

下：調査区北壁断面

12 長原遺跡西地区94－52次調査地　中期旧石器時代の遺構

上：調査区全景(北から)

下：調査区SD1601の南半部(東から)

13 長原遺跡西地区94－52次調査地　中期旧石器時代の足跡化石

上：足印2の断面(西から)

下：足印1(南から)

14 長原遺跡南地区94－39次調査地　古墳時代の遺構

上：長原76号墳全景(南から)

下：周溝内埋土の堆積状況(北東から)

15 長原遺跡南地区94－47次調査地　飛鳥～奈良時代の遺構

上：東半部第5層上面における畦畔の検出状況(東

から)
下左：西半部SD601(東から)
下右：西半部SD602(北から)
16 長原遺跡南地区94－56次調査地　地層断面
上：西区　北壁断面(西から)
下：東区　北壁断面(西から)
17 長原遺跡南地区94－56次調査地　古墳～鎌倉時代の遺構
上左：西区　東除川の西肩検出状況(西から)
上右：西区　第17層上面検出状況(西から)
下左：西区　第21層上面検出状況(西から)
下右：西区　第20層の分布状況(西から)
18 長原遺跡中央地区94－19次調査地　全景および地層断面
上：調査地全景：奥は94－20次調査地(南東から)
下：調査区南壁断面(北から)
19 長原遺跡中央地区94－19次調査地　飛鳥・江戸時代の遺構
上：第1層基底面検出遺構(東から)
下：第18層下面検出遺構(東から)
20 長原遺跡中央地区94－20次調査地　奈良時代の遺構
上：NR501完掘状況(東から)
下：第11層上面検出状況(東から)
21 長原遺跡中央地区94－20次調査地　飛鳥～鎌倉時代の遺構
上：第14層上面検出状況(東から)
下：調査区西端の盛土・溝状遺構南壁断面(北から)
22 長原遺跡東南地区94－4次調査地　地層断面と平安時代の遺構
上：調査区北壁断面(飛鳥時代～中世)
下：第2層基底面・第6層下面検出遺構(西から)
23 長原遺跡東南地区94－4次調査地　弥生～奈良時代の遺構
上：SK601・SD601(南から)
下：SD801(西から)
24 長原遺跡東南地区94－4次調査地　平安時代の遺構
上：土器埋納遺構SP401・402(北西から)
下：土器埋納遺構SP403・404(北西から)
25 長原遺跡東南地区94－4次調査地　飛鳥時代の遺構
上左：第9層上面検出水田(西半、東から)
上右：第9層上面検出水田(東半、西から)
下左：第13層上面検出水田(西半、東から)
下右：第13層上面検出水田(東半、西から)
26 長原遺跡西地区94－3・17、94－5次調査の出土遺物
27 長原遺跡西地区94－46次調査の出土遺物
28 長原遺跡西地区94－46次調査の出土遺物
29 長原遺跡西地区94－46次調査の出土遺物
30 長原遺跡西地区94－46次調査の出土遺物
31 長原遺跡西地区94－46次調査の出土遺物
32 長原遺跡西地区94－63次調査の出土遺物
33 長原遺跡西地区94－63次、西南地区94－18次調査の出土遺物
34 長原遺跡西南地区94－18次調査の出土遺物
35 長原遺跡西南地区94－18次調査の出土遺物
36 長原遺跡西南地区94－18次調査の出土遺物
37 長原遺跡西南地区94－18次調査の出土遺物
38 長原遺跡西南地区94－18・94－33次調査の出土遺物
39 長原遺跡西南地区94－18・94－33次、南地区94－39次調査の出土遺物
40 長原遺跡南地区94－39次調査の出土遺物
41 長原遺跡南地区94－39次調査の出土遺物
42 長原遺跡南地区94－47・94－56次調査の出土遺物
43 長原遺跡南地区94－56次調査の出土遺物
44 長原遺跡南地区94－56次、中央地区94－19・94－20次調査の出土遺物
45 長原遺跡中央地区94－20次、東南地区94－4次調査の出土遺物
46 長原遺跡東南地区94－4次調査の出土遺物
47 長原遺跡東南地区94－4次調査の出土遺物
48 長原遺跡東南地区94－4次調査の出土遺物
49 長原遺跡西地区94－5・94－63次調査出土の動物遺体
50 長原遺跡西地区94－3・94－46次、中央地区94－20次調査出土の動物遺体

挿 図 目 次

図1 長吉瓜破地区土地区画整理事業施行範囲と調査地 …… 2
図2 長原遺跡西地区の調査地 …… 3
図3 長原遺跡西南地区の調査地 …… 5
図4 長原遺跡南地区の調査地 …… 6
図5 長原遺跡中央・東南地区の調査地 …… 8
図6 94－3・17次調査の東壁地層断面と検出遺構 …… 11
図7 各層出土の遺物 …… 12
図8 94－5次調査の北壁地層断面 …… 15
図9 94－5次調査の出土遺物 …… 15
図10 室町時代後半の遺構 …… 16
図11 室町時代前半の遺構 …… 17
図12 SD401・402の断面 …… 17
図13 94－46次調査の北壁地層断面 …… 21
図14 江戸時代の陶磁器・鉄器 …… 22
図15 第7～14層出土の遺物 …… 23
図16 第16～20層出土の遺物 …… 24
図17 第20層出土の遺物 …… 25
図18 各層出土の埴輪・石器・石製品 …… 26
図19 室町～江戸時代の遺構 …… 27
図20 平安時代末～鎌倉時代の遺構 …… 28
図21 第14a層漆皿出土状況および実測図 …… 29
図22 奈良～平安時代前半の遺構 …… 30
図23 94－63次調査の西壁地層断面 …… 33
図24 各層出土の遺物 …… 34
図25 平安時代の遺構と飛鳥時代動物骨の出土状況 …… 36
図26 第22・23層の遺物出土状況 …… 37
図27 第22・23層の出土遺物 …… 38
図28 西地区における古墳時代の遺構 …… 45
図29 94－18次調査の地層断面 …… 47
図30 94－18次調査地全体図 …… 49
図31 各層出土の遺物 …… 50
図32 平安時代の遺構 …… 52
図33 SR601・SD601実測図 …… 53
図34 SD601および包含層出土の埴輪 …… 54
図35 SD601および包含層出土の形象埴輪 …… 54
図36 一ケ塚古墳周濠内の埴輪出土状況 …… 57
図37 一ケ塚古墳の埴輪1 …… 58
図38 一ケ塚古墳の埴輪2 …… 59
図39 一ケ塚古墳の埴輪3 …… 60
図40 94－33次調査の層序 …… 64
図41 各層およびSX301出土の遺物 …… 65
図42 室町時代の遺構 …… 66
図43 一ケ塚古墳周濠の検出状況 …… 67
図44 出土埴輪実測図 …… 68
図45 94－52次調査の東壁地層断面と検出遺構 …… 70
図46 SD1601と足跡化石の分布状態 …… 72
図47 足跡化石実測図1 …… 73
図48 足跡化石実測図2 …… 74
図49 一ケ塚古墳全体図 …… 79
図50 一ケ塚古墳の形象埴輪 …… 81
図51 一ケ塚古墳の形象埴輪 …… 82
図52 一ケ塚古墳の形象埴輪 …… 83
図53 94－39次調査の東壁地層断面と検出遺構 …… 85
図54 SE401と出土遺物 …… 87
図55 長原76号墳平・断面図 …… 88
図56 長原76号墳出土の埴輪 …… 90
図57 94－47次調査の南壁地層断面と検出遺構 …… 94
図58 94－47次調査の出土遺物 …… 96
図59 94－56次調査の北壁地層断面と室町～江戸時代の遺構 …… 99
図60 各層出土の遺物 …… 100
図61 平安～江戸時代の遺構出土の遺物 …… 103
図62 古墳～鎌倉時代の遺構(西区) …… 104
図63 南地区における古墳～奈良時代の遺構 …… 107
図64 94－19次調査の南壁地層断面 …… 109
図65 各層出土の遺物 …… 111

図66　江戸時代の遺構とSD201の出土遺物 …… 113
図67　奈良～平安時代の遺構 …… 114
図68　飛鳥時代の遺構 …… 115
図69　94－20次調査の南壁地層断面 …… 116
図70　各層出土の遺物 …… 118
図71　室町～江戸時代の遺構 …… 120
図72　室町～江戸時代の遺構出土の遺物 …… 121
図73　奈良～鎌倉時代の遺構 …… 122
図74　奈良時代の遺構出土の遺物 …… 123
図75　縄文～飛鳥時代の遺構 …… 124
図76　94－4次調査の南・北壁地層断面 …… 128
図77　各層出土の遺物 …… 129
図78　鎌倉時代の遺構 …… 131
図79　奈良～平安時代の遺構 …… 132
図80　SE401平・断面図 …… 133
図81　土器埋納遺構と出土遺物 …… 134
図82　奈良～平安時代の出土遺物 …… 135
図83　SK601の出土遺物 …… 137
図84　飛鳥時代の水田遺構 …… 139
図85　弥生～古墳時代の遺構と縄文時代の遺物出土状況 …… 140
図86　SD801断面図および縄文～弥生時代の出土遺物実測図 …… 141
図87　中央地区における飛鳥～奈良時代の水田 …… 143
図88　東南地区における平安～鎌倉時代の遺構 …… 145

表　目　次

表1　1994年度土地区画整理事業に伴う発掘調査 …… 1
表2　94－3・17次調査の層序 …… 10
表3　94－5次調査の層序 …… 14
表4　94－46次調査の層序 …… 20
表5　94－63次調査の層序 …… 32
表6　動物遺体一覧表 …… 41
表7　ウマ臼歯計測値一覧表 …… 42
表8　94－18次調査の層序 …… 48
表9　一ケ塚古墳の埴輪観察表 …… 61
表10　94－33次調査の層序 …… 63
表11　94－52次調査の層序 …… 69
表12　粘土採掘壙の一覧 …… 71
表13　一ケ塚古墳の調査一覧 …… 78
表14　94－39次調査の層序 …… 86
表15　長原76号墳の埴輪 …… 91
表16　94－47次調査の層序 …… 93
表17　94－56次調査の層序 …… 98
表18　94－19次調査の層序 …… 110
表19　94－20次調査の層序 …… 117
表20　94－4次調査の層序 …… 127
別表1　長原遺跡の標準層序1995 …… 148
別表2　石器遺物計測表 …… 149
別表3　木製遺物計測表 …… 149

写　真　目　次

写真1　94－5次調査風景 …… 4
写真2　94－52次足跡化石の型取り作業 …… 6
写真3　SD402断面（東から） …… 17
写真4　SD401出土のウマ頭蓋骨（北から） …… 17
写真5　資料28の出土状況 …… 36
写真6　資料33の出土状況 …… 36
写真7　資料34の出土状況 …… 36
写真8　ムカシニホンジカの足跡化石 …… 75
写真9　第8層土馬404の出土状況 …… 130
写真10　土器埋納状況 …… 133

第Ⅰ章　長原遺跡の調査

第1節　1994年度の発掘調査と報告書の作成

1)発掘調査(図1、表1)

1994年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査件数は14件、発掘総面積は1,822㎡であった。そのうち長原遺跡西地区が5件528㎡、同西南地区が3件690㎡、同南地区が3件200㎡、同中央地区が2件214㎡、同東南地区が1件190㎡であった。なお、今年度は瓜破遺跡内での調査は行われなかった。

現場での作業は1994年4月9日に開始し、1995年3月15日に終了した。各調査とも、検出した遺構・遺物は写真や実測図によって記録し、保存処理が必要なものはそのつど処理した。各調査の担当者・調査面積などは表1のとおりである。

なお、発掘調査次数は遺跡略号「NG」のあとに、年度と開始順の番号をつけているが、本報告では土地区画整理事業に伴う調査はすべて「NG」を冠することから、これを省略してい

表1　1994年度土地区画整理事業に伴う発掘調査

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
長原遺跡西地区				
NG94－3次 17次	94㎡	平野区長吉長原西3丁目	京嶋覚	1994年4月11日～1994年5月23日 1994年7月11日～1994年7月26日
NG94－5次	114㎡	同　長吉長原西2丁目	松本百合子	1994年4月16日～1994年6月3日
NG94－46次	203㎡	同　長吉長原西2丁目	小田木富慈美・宮本康治・細川富貴子	1994年11月1日～1995年2月23日
NG94－63次	117㎡	同　長吉長原西2丁目	大庭重信	1994年12月10日～1995年3月2日
長原遺跡西南地区				
NG94－18次	334㎡	同　長吉長原西4丁目	清水和明・寺井誠・細川富貴子	1994年6月29日～1994年9月16日
NG94－33次	140㎡	同　長吉長原西4丁目	寺井誠	1994年9月12日～1994年10月14日
NG94－52次	216㎡	同　長吉長原西3丁目	寺井誠	1994年11月15日～1995年3月15日
長原遺跡南地区				
NG94－39次	60㎡	同　長吉川辺1丁目	大庭重信	1994年10月6日～1994年10月28日
NG94－47次	80㎡	同　長吉川辺1丁目	京嶋覚	1994年11月2日～1994年11月22日
NG94－56次	60㎡	同　長吉川辺1丁目	松本百合子・瀬尾真由美	1994年11月24日～1994年12月17日
長原遺跡中央地区				
NG94－19次	114㎡	同　長吉長原3丁目	小田木富慈美	1994年7月11日～1994年9月5日
NG94－20次	100㎡	同　長吉長原3丁目	久保和士・瀬尾真由美	1994年7月11日～1994年9月5日
長原遺跡東南地区				
NG94－4次	190㎡	同　長吉長原東3丁目	大庭重信	1994年4月9日～1994年8月3日

る。ただし、長原·瓜破遺跡では土地区画整理事業以外の調査も行っており、これらを記述するばあいには、遺跡略号をつけて呼称する。

2)報告書の作成

報告書の作成に伴う図面・遺物の整理作業は1998年度に行った。資料の基本的な整理は発掘調査終了後ただちに調査担当者が行ったが、報告書作成のための遺物復元や実測および製図作業については、担当者が整理期間中に現場作業などに当っていたため、主として小田木が行った。

図1　長吉瓜破地区土地区画整理事業施行範囲と調査地

第２節　発掘調査の経過と概要

１)長原遺跡西地区(図２)

当地区は長原遺跡西部の瓜破遺跡と隣接しており、1983年度以降多くの発掘調査が実施されてきた。地区の西部では、南東から北西に延びる「馬池谷」と呼ばれる幅約100mほどの埋没谷の存在が明らかになっており、今年度はこの谷に係わる調査が主となった。これまでの調査では、馬池谷の東西で古墳時代中期から飛鳥時代にかけての集落が営まれており、谷をはさんだ東西の両側で人間の活動が盛んであったことが判明している。また、古代から近世にかけて谷が埋る過程では、おもに水田として利用されていたことがわかっている。

ｉ)94－３・17次調査

94－３次調査の対象は、幅４ｍの道路予定地内の幅２ｍ、長さ40mの範囲である。土留めのためのH鋼が打設できなかったため、掘削深度は安全が確保できる範囲までにとどめることとした。また、この調査結果に基づき、整地工事に係わる残りの道路予定地を対象に、この南で94－17次調査を実施した。この調査では、掘削深度が約３ｍに達することが予想されたため、それに応じた土留め工事を行った。調査では飛鳥・室町時代の水田遺構が検出された。なお、本報告ではこれらを一連の調査として記載する。

ii)94－５次調査(写真１)

調査地は生活道路に当っており、現状の通行を確保するために、調査の対象は予定道路の北半部分となった。調査区は周囲にH鋼で土留め工事を行ったのち、幅約３m、長さ約42mのトレンチを設定したが、北側の水田・駐車場の出入の必要から22m(東区)と20m(西区)とに区切って調査を行った。機械掘削は道路敷設の盛土の除去だけを予定していたが、下位で長原4A層で

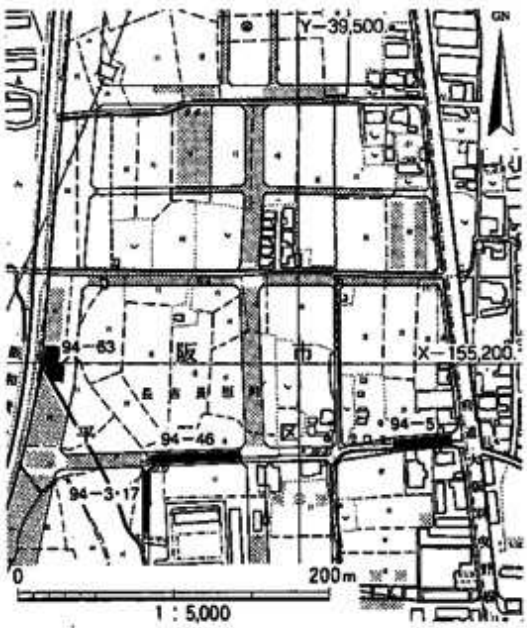


図２　長原遺跡西地区の調査地

写真1　94－5次調査風景

埋る流路が検出された。この砂層が予想外に厚いために砂層が安定する現地表下1.5mまでを機械で掘削した。以深は人力によって掘削したが、東区では調査深度に伴う安全を鑑み、一部は段丘構成層まで完掘せずに調査を終了した。

iii)94－46次調査

農道を確保するなどの事情から、予定される道路の北半分を残して幅3.5mのみの調査となった。調査地は谷地形の内部に当り、掘削が深くなることが予想されたため、H鋼の打設を行った上で、11月16日より本調査を開始した。調査は重機により現代の盛土および作土層を除去し、以下は人力による掘削を行った。飛鳥～江戸時代の水田遺構の検出に成果が得られたが、調査が進行して深くなり、H鋼が倒壊する危険が生じたために、調査区の東半部を先行して埋戻した。以後は西半部でトレンチによる断面観察を主とする調査を行った。

iv)94－63次調査

調査区の周囲にH鋼と横矢板による土留めを行いながら、深さ2mまでを機械掘削し、それ以下を人力によって掘下げた。途中、土砂運搬用のベルトコンベアーの足場を確保するため、調査区北東部の掘下げを深さ3mで停止し、それ以外の個所を深さ4mまで掘下げた。飛鳥時代の地層から、ウシ・ウマの骨が検出されたほか、西地区では類例の少ない縄文時代後期の遺物がまとまって認められた。

2)長原遺跡西南地区(図3)

今年度の調査対象となる位置には、長原古墳群では塚ノ本古墳に次ぐ規模となる、一ケ塚古墳の周濠および墳丘裾が埋没していることが予想された。一ケ塚古墳は東側に方形の造出しをもつ直径約50mの円墳で、幅約13mの周濠を巡らすことが明らかになっている。墳丘および周濠からは円筒埴輪をはじめ、壺・衣蓋・家・囲・盾・草摺・靫・靭などの多種にわたる形象埴輪が発見されている。この周辺で注目すべきものは古墳だけではなく、一ケ塚古墳の墳丘下では旧石器遺物の包含層が確認されている。また、長原古墳群の築造以後は近世にいたるまで耕地として利用され、この付近でも古墳の墳丘裾に放射状に付け

られた畦畔や、大きな水路が検出されている。さらに、この地区の西には先述した馬池谷が存在しており、谷の東では94－52次調査を行った。ここでは中期旧石器時代の調査が中心となった。

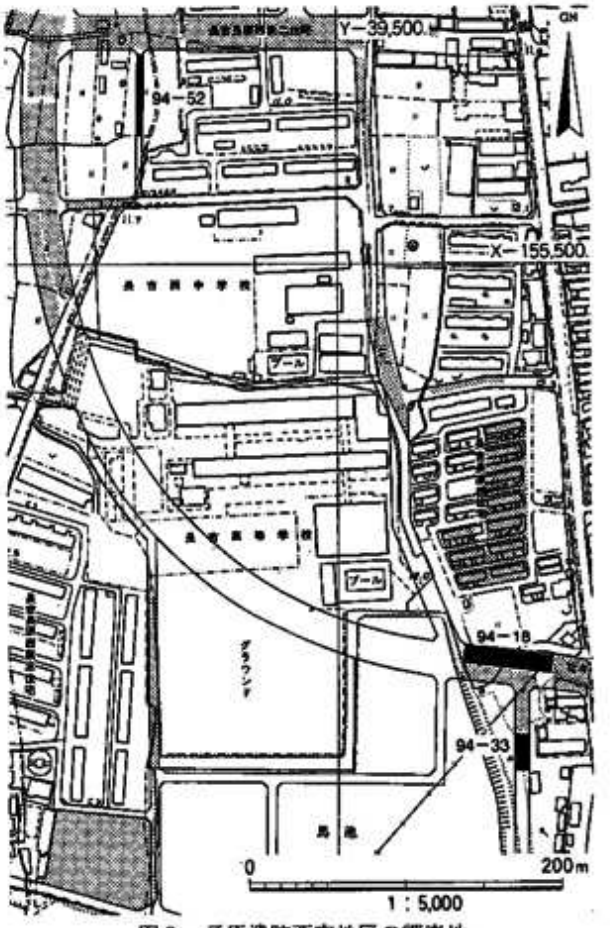


図3　長原遺跡西南地区の調査地

i)94－18次調査

調査区は道路や水田に隣接していることもあり、周囲にH鋼を打設することによって壁面を保護した上で実施した。約1mある現代盛土、および旧耕土を重機で掘削し、それ以下は人力で掘削した。調査区には中央に2つの大きな撹乱があり、これより西では遺構が大きく削平されていたが、東半部では一ケ塚古墳の周濠および墳丘裾を検出することができた。

ii)94－33次調査

調査区の東側では住宅が近接していることもあり、予定されている道路の範囲より約2m西にずらした区域が調査の対象となった。掘削では法面をつけて、現地表面から1.5mまでの現代盛土とそれ以下の厚さ約0.5mの近世作土を重機によって掘削し、この下を人力によって掘削した。また、調査の後半に周濠の輪郭と周濠内の埋土を確認することを目的として、北側を3方向に約2mずつ拡張した。

iii)94－52次調査

本調査地は馬池谷の西側にあり、東側で古墳時代の掘立柱建物群や古代以降の水田址が明らかになっていることから同様の遺構の検出が予想された。しかし、重機によって現代耕土を除去すると、粘土採掘で遺物包含層はすでに存在しないことが判明した。その一方で、粘土採掘の対象とならずに残っていた長原15層で、ナウマンゾウなど哺乳類の足跡化石が多数検出された。これら哺乳類は人類の狩猟対象動物であり、長原遺跡でこれまで検

写真2　94－52次足跡化石の型取り作業

出されたことのなかった中期旧石器時代の人類の痕跡が残っている可能性があるため、調査期間の後半はこれらの精査に努めた。なお、中期旧石器時代の調査は、1mグリッドを組んで行い、検出した足跡化石のうち、残りのよいものについては、実測作業とともに石膏による型取り作業を行った(写真2)。

3)長原遺跡南地区(図4)

この地区では、川辺小学校建設に伴う調査(NG13・18次調査)をはじめ、数多くの調査が行われている。その結果、当地域が長原古墳群の南群の中心であったこと、北側に拡がる飛鳥・奈良時代の水田を灌漑するための南北流路が多数存在したことなどが判明している。また、当地区の東側は地籍図などから、東除川の河道に当ることが判明しており、過去の調査では西岸の部分が検出されている。

図4　長原遺跡南地区の調査地

i)94－39次調査

調査の対象は川辺小学校東側の南北道路である。10月6日に南北長22m、東西幅3mのトレンチを設定し、重機掘削を開始した。現代客土をすべて除去した段階で、本調査区がNG18次調査のC6トレンチとほとんど重なっていることが判明し、段丘構成層上面までの調査はすでに終了していた。しかし、南側で再確認された古墳(長原76号墳)の墳丘斜面から埴輪が数多く出土したため調査の対象をこの古墳にしぼり、NG18次

調査範囲の再調査、および調査区東側の拡張による古墳の構造解明に努めた。

ii)94－47次調査

調査地は川辺八幡神社の北側にあり、川辺小学校東側の東西道路の敷設予定地内である。調査は道路の中央に設定された幅２mのトレンチによるものである。11月２日に調査を開始したところ、調査区の西半は近世以降の粘土採掘により、長原６層以上の地層が除去されていることが判明した。このため、主として東半部で遺構の確認を行った。

iii)94－56次調査

調査の対象となった路線は民家に近接しており、生活道路を確保するため、幅2.0m、全長約32mの調査区を設定し、既設の埋設管等の諸都合により、東西に分けて調査を行った。東トレンチは長原２層下面、西トレンチは長原３層上面まで重機による掘削を行い、以下は人力で遺構の精査を行った。掘削深度は地表下1.5mまでとし、民家に近接している南側壁面については土留めを行った。ただし、調査区内のほとんどが東除川の旧流路に当っており、河道内を埋積する砂礫層の掘削については、これまでの調査から層厚２～３mとなることが予想されたので、調査区の北と南の壁に沿ってテラスを残したうえで地表下1.5mまで掘削し、地層断面の観察を行って調査を終了した。

４)長原遺跡中央・東南地区(図５)

本年度は中央地区で２件、東南地区で１件の調査を行った。中央地区ではこれまでに古墳時代の集落や古墳、飛鳥～奈良時代の水田遺構、平安～室町時代の集落遺構などが検出されている。一方、東南地区では、旧石器時代の石器製作址や縄文時代の集落遺構のほか、平安～鎌倉時代の集落が見つかっている。

ｉ)94－19次調査

調査地では北側に移転した民家の出入り口を確保するために、道路予定地を東西に分割して調査することとなった。今回の調査地はこの東半部に当り、西半部は94－20次調査地である。機械掘削は現代盛土および現代作土までとし、以下は人力で掘削した。また、安全の確保のため周囲にはH鋼を打ち、重機掘削後は道路側から幅約1.0mの部分をテラス状に残し、調査中には地層の観察のために利用した。また、調査終了直前には遺構の全容を確認するため、この部分の掘削を行った。

ii)94－20次調査

調査は７月11日から１ケ月間の予定で開始した。調査では、94－19次調査と同じく、周

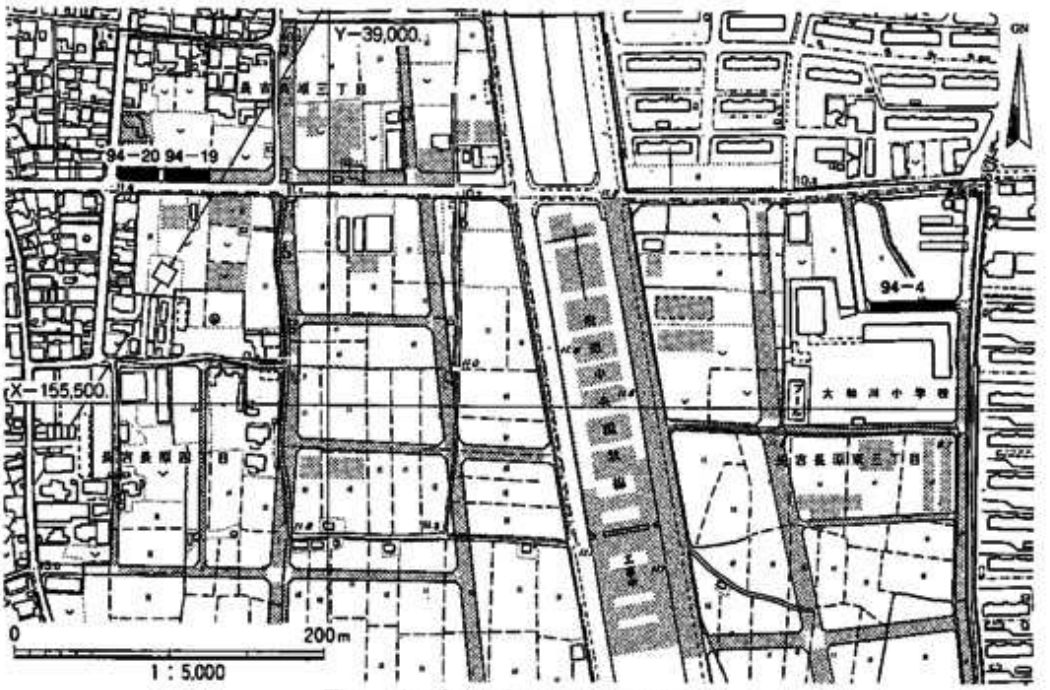


図5　長原遺跡中央・東南地区の調査地

囲にはH鋼の打設を行った。重機掘削は長原2層上面まで行い、以下は人力で掘削した。飛鳥時代の水田遺構などの調査に成果が得られ、9月5日にすべての調査を終了した。

iii)94－4次調査

調査地は東南地区の北端に位置する。周囲では土地区画整理事業に伴う調査が幾度か行われ、弥生時代から室町時代にかけての遺構・遺物が検出されている。調査区は東西に細長い道路部分であり、排土の搬出場所を確保するために東と西の2個所に分けて調査を行うこととなった。まず、4月9日から周辺の整備を始め、周囲にH鋼を打設した。掘下げは西から開始し、西半を4月20日～6月10日、東半を6月14日～8月3日の期間で調査した。現代盛土・作土は重機で掘削し、それ以深の各層を人力で掘削した。特に、奈良～平安時代を中心とする遺構・遺物の検出に成果が得られた。

第Ⅱ章　長原遺跡西地区の調査結果

第1節　94－3・17次調査

1)層序と各層出土の遺物(図6・7、表2、図版1・26)

94－3次調査では長原2層以下の各層が良好に堆積していたが、長原5層以上の水成層の堆積が厚く掘削深度が深くなったため、長原6層以下は調査区の南側を深掘りして、断面観察のみを行った。また、94－17次調査は周囲の地層が軟弱で、壁面からの出水が顕著であったため、上位における地層の観察は行えず、現地表下2m以下の地層を観察した。2つの調査区の層序は表2に示すとおりである。以下では各層の特徴や分布状態および出土遺物について述べる。

まず、94－3次調査では第2・3層から白磁・瓦質土器・須恵器・土師器のほか、唐津焼が出土した。これを2層に伴うとすれば、2層は長原2層に当るといえよう。1は第3層から出土した白磁碗で、口縁部は外反し、端部を丸く収める。

長原3層に対応する第4・5層のうち4層の層厚は、北端部のみが0.7mと厚くなる。出土遺物は青磁・白磁のほか、14世紀後半から15世紀にかけての瓦質土器の甕・瓦器・土師器細片である。2は竜泉窯系の青磁碗で、釉薬は茶色がかっている。15世紀代と思われる。次に5層の中で、5a層の中位には、中粒砂からなる薄い水成層が介在している。これを境に一部では5a層を上下に分離しえた。また、5b層は南半部では5c層との分離が困難であったが、北半部では両者の間に水成層が部分的に介在し、明瞭に分離された。5層からは青磁・瓦器・瓦質土器・東播系の須恵器・土師器・瓦が出土した。これらのうちもっとも新しいものは14世紀後半から15世紀代に属する。このほか、ウマの臼歯や骨などが出土した(図版1)。図示した3は5b層から出土した青磁碗で、外面には蓮弁文が見られる。13世紀後半のものであろう。

長原4A層に対応すると思われる第6層は、調査区北端部のみに良好に遺存する砂礫層で、この地点以南では5層との区別が困難となる。また、長原4Bi層に対応する第7層のうち、7a・7c層は調査区の北部では、第6層に侵食され遺存していない。出土した土器から本層

表2　94－3・17次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴	掲載遺物
NG1	1層	現代作土	≧20			作土	
NG2	2層	浅黄～黄灰色(2.5Y7/3～2.5Y4/1) 砂質シルト	20		磨滅・土師器	作土	
NG3Ai	3層	明黄褐色(10YR7/6)砂質シルト	10～15		白磁	作土	1
NG3Aii	4層	黄褐～黄橙色(10YR5/6～10YR7/4) 細～粗粒砂	40～50		青磁・白磁・瓦質土器・ 瓦器・土師器	水成	2
NG3B	5a層	オリーブ灰色(5GY6/1)粘土	20～25	▲SR301・302, 踏込み	瓦質土器・瓦器・瓦	作土	
	5b層	灰色(10Y5/1)粘土質シルト	10～20		青磁・瓦質土器・瓦器・ 須恵器・瓦・ウマ骨歯	作土	3
	5c層	オリーブ灰色(5GY5/1)粘土	≧30		瓦器・瓦・ウマ骨歯	作土	
NG4A	6層	灰白(7.5Y7/2)または明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)中～粗粒砂	≧50		瓦器・須恵器・土師器	水成	
NG4Bi	7a層	灰～オリーブ灰色(10Y5/1～5GY5/1)粘土	10～20	▲踏込み	瓦器・須恵器・土師器・ 骨・貝	作土	7
	7b層	オリーブ灰～暗灰黄色(5GY6/1～2.5Y4/2) 粘土質シルトまたは砂質シルト	30～40		瓦器・須恵器・土師器・ ウマ骨歯	水成 上下に分離	6
	7c層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト	10～20	▲踏込み		作土	
NG4Bii	8層	含粘土質シルトブロック灰色(10Y6/1)中～粗 粒砂または含粗粒砂灰色(10Y5/1)粘土質シルト	50～60		瓦器・須恵器・土師器・ 埴輪・ウマ骨歯	水成	4・5・8・9
NG5	9層	灰色(10Y6/1)細～粗粒砂	10～20		須恵器・土師器・瓦・貝	水成	
NG6・7A	10層	灰白色(10YR8/1)粘土～オリーブ灰色 (5GY5/1)～シルト質粘土	60	▲SD601			
NG7B	11層	含シルト暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂礫	15				
NG15	12層	含砂礫灰白色(7.5Y5/2)シルト					

準の形成時期はおおむね13世紀後半～14世紀前半と考えられる。また、ウマの上顎や臼歯、骨格の一部などが、おもに調査区の南半部で多く認められたほか、淡水産の二枚貝も数点出土した。7は7a層から出土した土師器羽釜である。Ⅳ期に当り、14世紀前半であろう。6は7b層で認められた瓦器椀の高台である。内面のヘラミガキは斜格子文に平行線を加えて三角形の文様としたものである。Ⅱ期に当り、下位層の遺物からみて本層の年代を直接示すとはいえない。

長原4Bii層に対応させうる第8層からは、12～13世紀の瓦器・土師器のほか、須恵器・土師器・円筒埴輪およびウマの骨片が少量出土した。4・5は瓦器椀で、4の底部内面には平行なヘラミガキを施す。ともに外面にヘラミガキは見られず、13世紀のものであろう。8は「て」字状口縁をもつ土師器皿である。9は土師器椀で、高台が付く可能性がある。砂粒を多く含む胎土で、焼成は堅緻である。10世紀頃であろう。

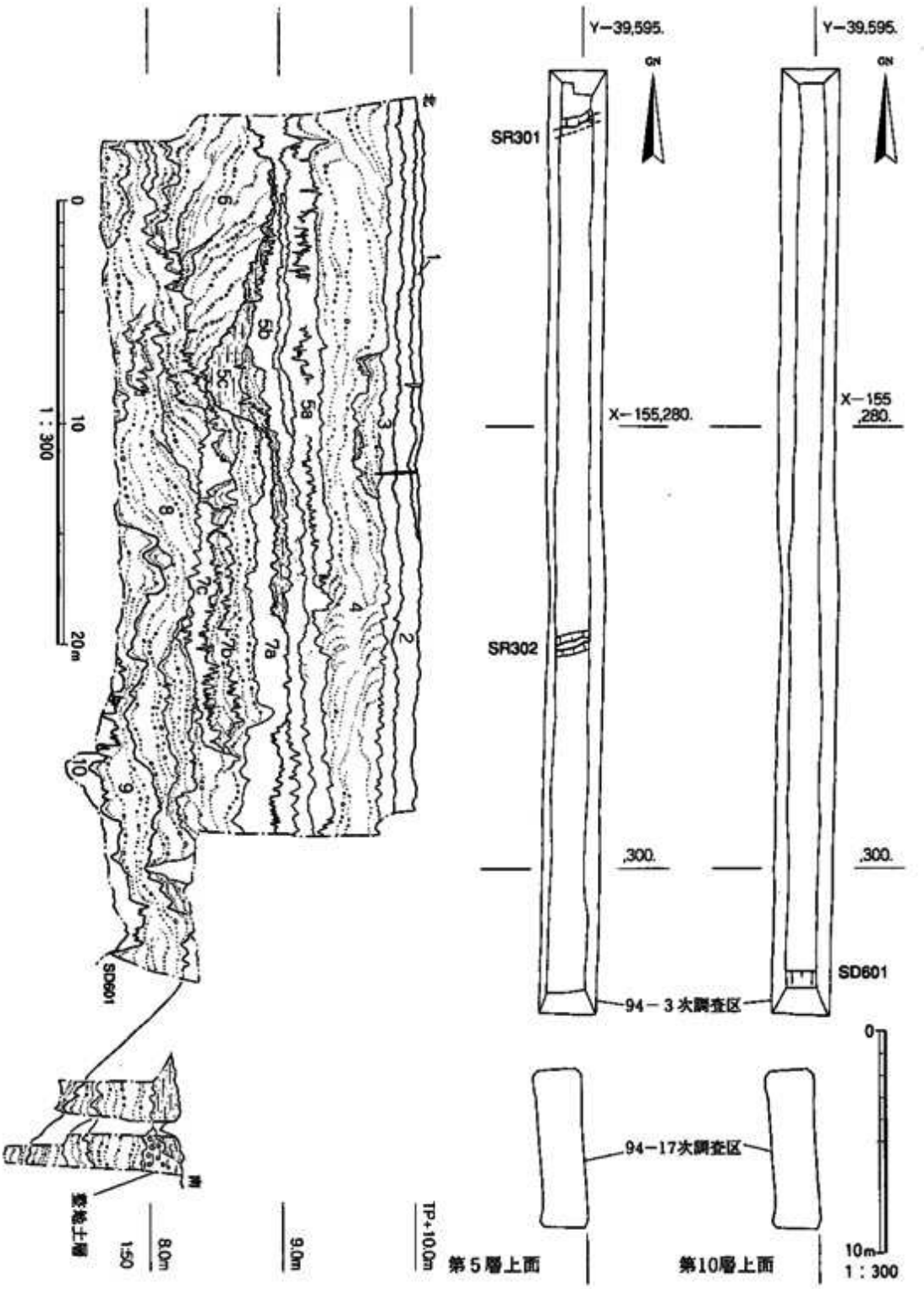


図6　94−3・17次調査の東壁地層断面と検出遺構

長原５層と思われる第９層は、上位の第８層との区分が不明瞭な部分もある。本層からは土師器・須恵器片が少量出土しただけである。なお、第５～８層で出土した動物遺体については本章第５節で述べる。

長原６～15層に対応すると思われる第10～12層は、南端の深掘りで確認した。10層の上部はやや軟弱で、上面には凹凸が見られたが、下部は黒色に近くなり、硬く締まっている。なお、10層上面はTP+7.2mで、北側で行ったNG93－71次調査で検出された長原6A層相当層上面の高さと一致する[大阪市文化財協会1999b]。第11層は硬く締まった地層で、上面は南端の東側でTP+6.6mである。第12層は南端部の西側がTP+6.7mともっとも高く、北東に向って低く傾斜していた。これらの層準からの出土遺物はない。

一方、この南で行った94－17次調査では、94－３次調査の第２～５層に対応する地層を確認できたが、それ以下の第６・７層に相当する層準については、地層の対比関係を認識しつつ掘削することはできなかった。断面観察を行いえた現地表下２m以下の地層の最上部に当るTP+7.4mの位置には、動物遺体や植物遺体を含む灰色粘土層が存在する。本層は0.4～0.7mの層厚で、上部には動物遺体が含まれ、下部にはかすかに極細粒砂によるラミナが観察できることから水成層と思われる。出土遺物はまったくないが、94－３次調査では長原３・４層相当層から動物遺体が出土したものの、長原６層相当層から動物遺体は出土していないため、長原４層相当の第８層に当る可能性が強い。また、南端部の本層上

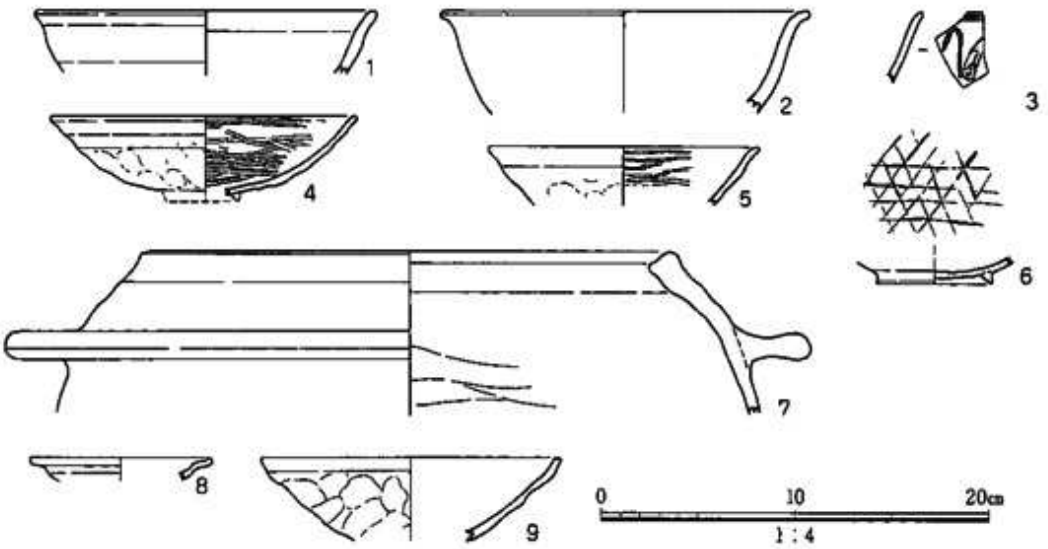


図７　各層出土の遺物
（第３層：１、第４層：２、第5b層：３、第８層：４・５・８・９、第7a層：７、第7b層：６）

面には段丘構成層中の風化した礫を含むシルト質粘土の整地土が、最大0.3mの厚さで認められた。これら粘土層の下位には水成の灰色細～粗粒砂があり、出土遺物はないものの、94－3次調査の第9層または長原6層層準の水成層と考えておきたい。この水成層の上面は南に向って高度を下げており、また、砂粒の粒径も大きくなる。

2)遺構と遺物(図6、図版1)

今回の調査で検出されたのは、94－3次調査区で検出された畦畔や踏込み遺構、流路状の遺構である。遺物は包含層からは出土したが、遺構内では認められなかった。94－17次調査では遺構・遺物ともに検出されなかった。

i)室町時代

第5a層上面では94－3次調査区の北端で東西方向の畦畔SR301、そこから南に23.5mの地点では同じく東西方向の畦畔SR302を検出した。SR301は調査区東壁付近に確認できた。しかしその大半は削平されたためか遺存しておらず、北側で0.2m低くなる段として残るのみであった。SR302は下端の幅が約1.0m、高さは0.1mである。SR301から北側の水田面の高さは平均TP+8.50m、その南側の水田面はTP+8.64m、SR302の南側の水田面はTP+8.69mで、南に高くなっている。これ以下にも表2で述べたようにいくつかの作土層があるが、踏込み状の窪みが見られるのみで、畦畔などは検出できなかった。

ii)奈良時代

94－3次調査区南端の第10層上面で、第9層で埋没する流路状のSD601を検出した。SD601は幅1.0m以上、深さ0.3m以上で、その北肩部を検出したが、埋土である砂礫は掘削できなかった。検出した狭い範囲内では、「馬池谷」に直交して流れ込んでいたと推測される。

第２節　94－５次調査

１)層序と各層出土の遺物(図８・９、表３、図版26)

現代盛土を除去すると、現代作土層の下は、調査範囲内のすべてが基本的に長原4A層で埋る流路となっていた。この埋土である水成層の堆積は厚く、長原14層以下までを深く削込んでいるようであった。流路の上に堆積する薄い作土層も水成層起源で、度重なる洪水によって著しく破壊されていた。各層の詳細については表３で述べ、以下では各層の特徴と出土遺物について触れたい。

長原２層に相当する第２層は作土層で、下部はほとんど粗粒砂である。調査区の全面に分布する。

第３・４層は長原３層に相当する。第３層はラミナが顕著な水成層で、全面に分布する。14～15世紀代の土器のほか、木製の漆皿が出土した。21の底径は7.8cmで、高台を有する。内外面は黒色漆を塗布したのち、内面に赤色漆で斜格子状の文様を描く。

第４層は作土層で、西半部に分布し、東半部は第３層に伴う洪水で流失している。上面で畦畔を検出した。本層は瓦器や瓦質土器を含んでいる。19は瓦器椀で、内面には圏線状のヘラミガキが見られる。口径は縮小しており、Ⅴ期に当ると思われる。20は瓦質土器の羽釜である。口縁部外面には凹線状のナデを施し、体部外面はヘラケズリ、内面はハケメで調整している。15世紀であろう。

第５層は長原14層以下に相当する。後述する流路によって大きく削られており、調査区の東半では検出できなかった。

表３　94－５次調査の層序

標準層序	層序	層　相	層厚(cm)	遺　構	遺　物	特　徴	掲載遺物
NG0	0層						
NG1	1層	含砂礫灰オリーブ色(5Y5/2)シルト				作土	
NG2	2層	含砂礫黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト	25			作土	
NG3	3層	明黄褐色(2.5Y6/6)粗粒砂～中礫	30～60		瓦器・土師器・陶器	水成	21
NG3～4	4層	含中粒砂にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土質シルト	≦10	▲SR301・302 ↓SD401・402	瓦器・瓦質土器	作土	19・20
NG14以下	5層	灰色(10Y5/1)砂質シルト					

2）遺構と遺物

i）室町時代後半（図10、図版2）

第4層の上面では中央部で畦畔を検出した。SR301は上端の幅0.4m、高さ0.2mで南東

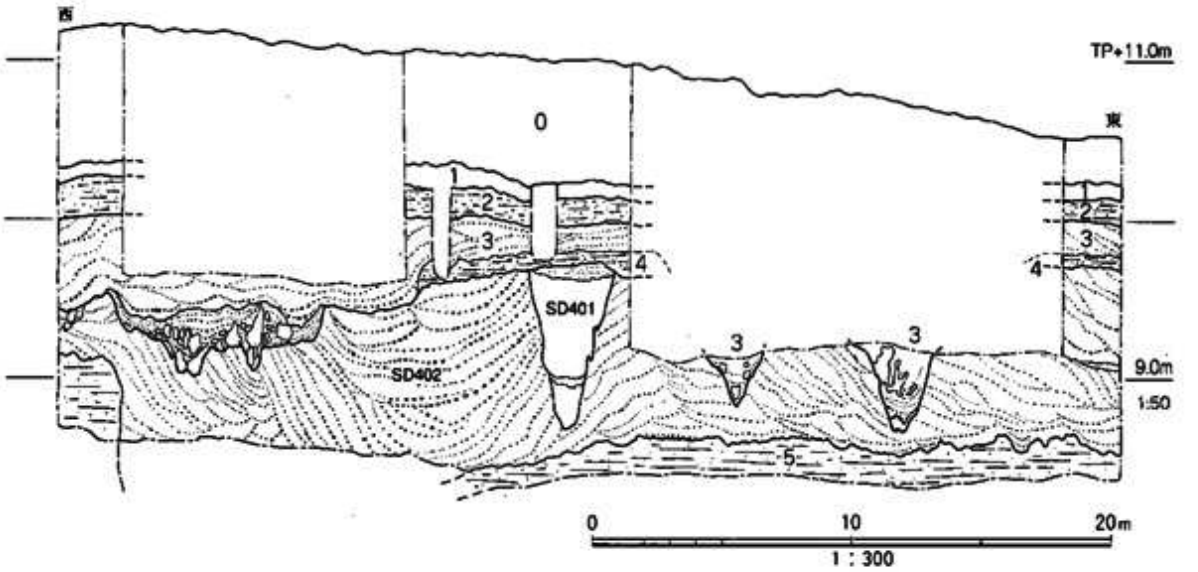


図8　94－5次調査の北壁地層断面

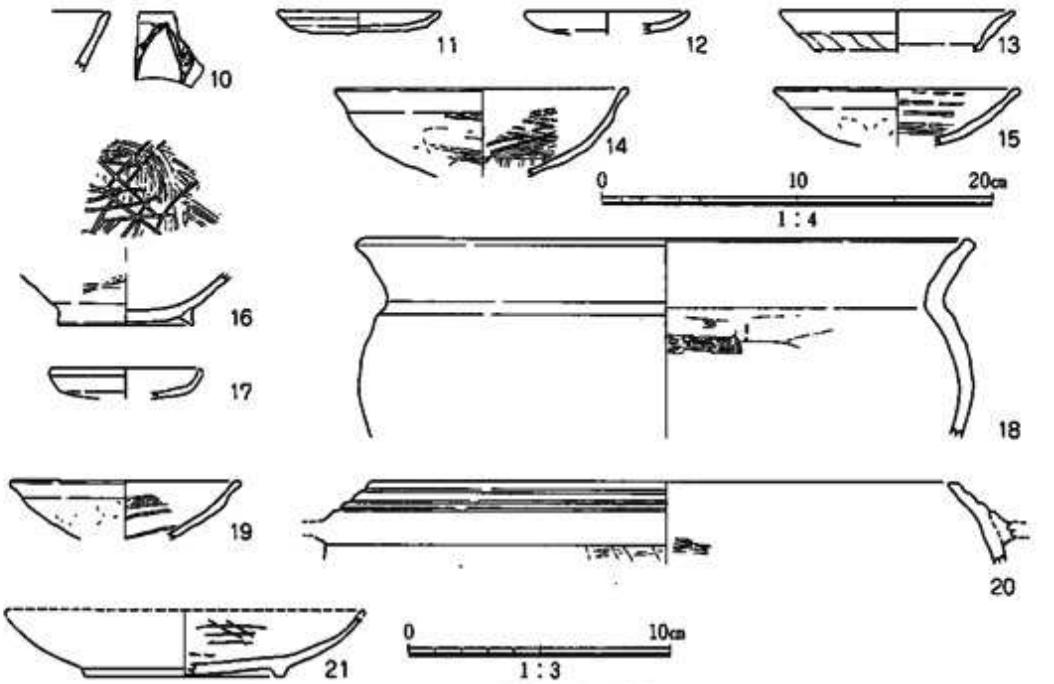


図9　94－5次調査の出土遺物

（SD402：10～18、第3層：21、第4層：19・20、縮尺は10～20：1／4、21：1／3）

から北西に延びており、SR302は上端の幅0.4m、高さ0.15mで北でやや東に振っている。いずれも洪水や攪乱によって破壊されており、方向も不統一である。

ii)室町時代前半(図9・11・12、図版2・3・26)

第4層基底面では中央部でSD401を、調査区全面でSD402を検出した。

SD401は南北方向に延びる幅3.2m、深さ1.0mの溝である。埋土は3層に細分できる(図12)。上層は灰オリーブ色で水成の粗粒砂と、灰色砂質シルトからなり、ラミナの歪みが著しい。中層は灰色粗粒砂である。下層は灰オリーブ色粗粒砂を多く含む砂質シルトで、上層と同じくラミナの歪みが著しい。下層と上層には、人の手が加わっているようすがわかる。上層の最下部からはウマの頭蓋骨が出土した(写真4、図版49)。個体数は上顎の犬歯から判断して2個体とわかったが、骨の周辺に掘形はなく、溝中に投棄されたものと考えられる。なお、これについては本章第5節で述べる。

SD402は深さ1.5m以上の東西に延びる溝である。埋土はにぶい黄色・黄褐色中粒砂～巨

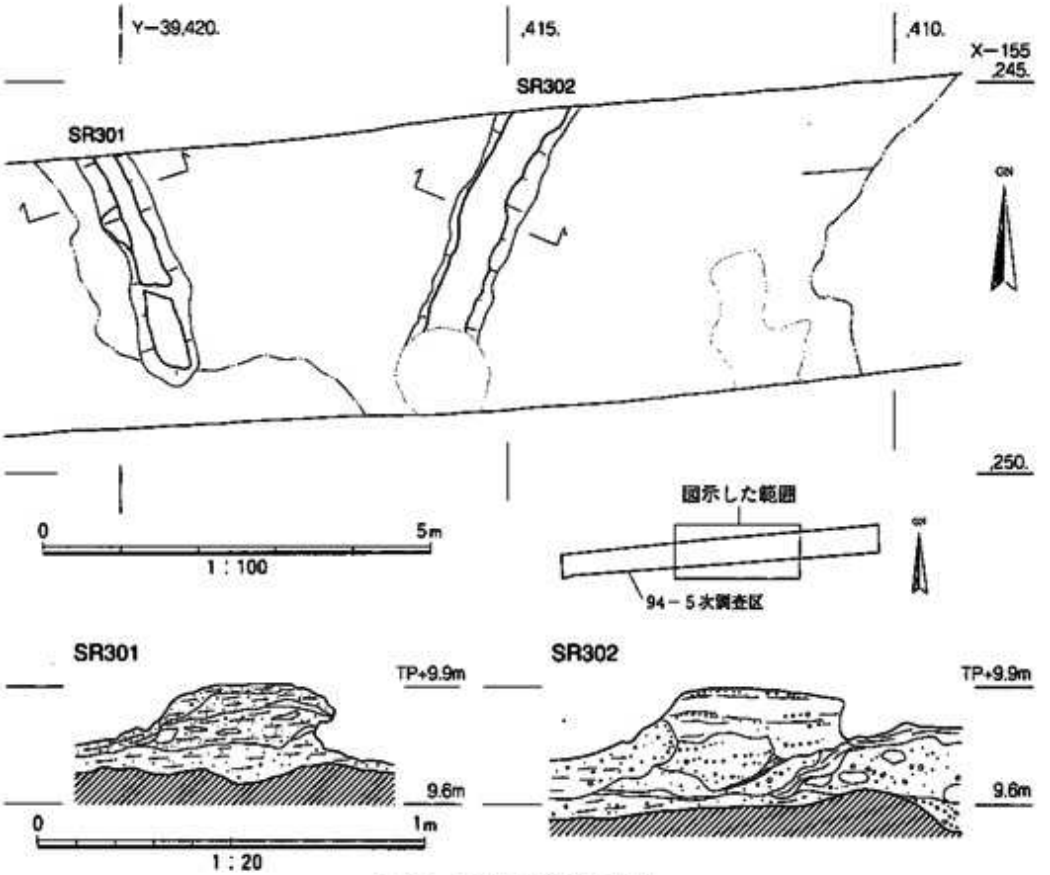


図10　室町時代後半の遺構

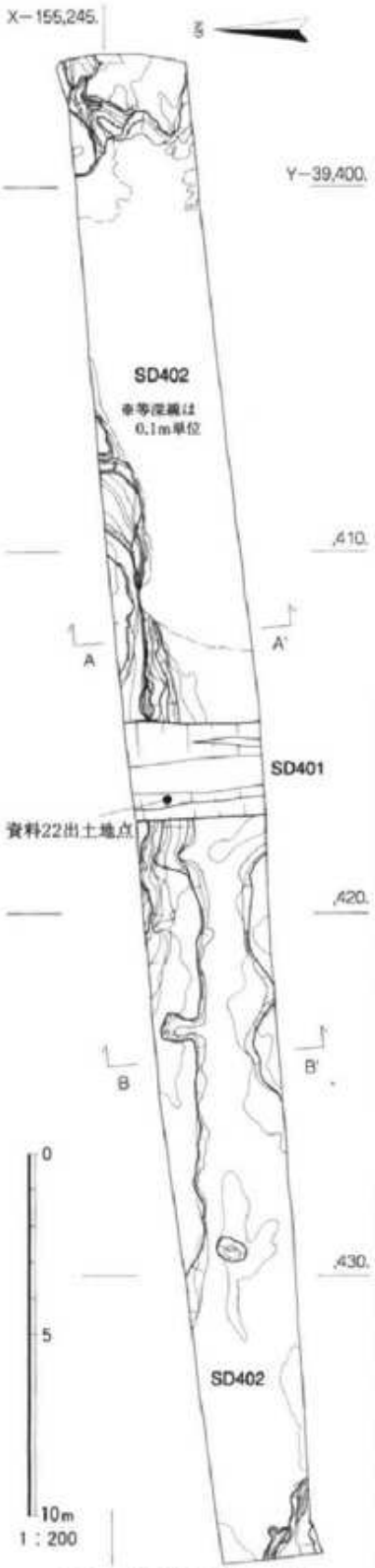


図11　室町時代前半の遺構

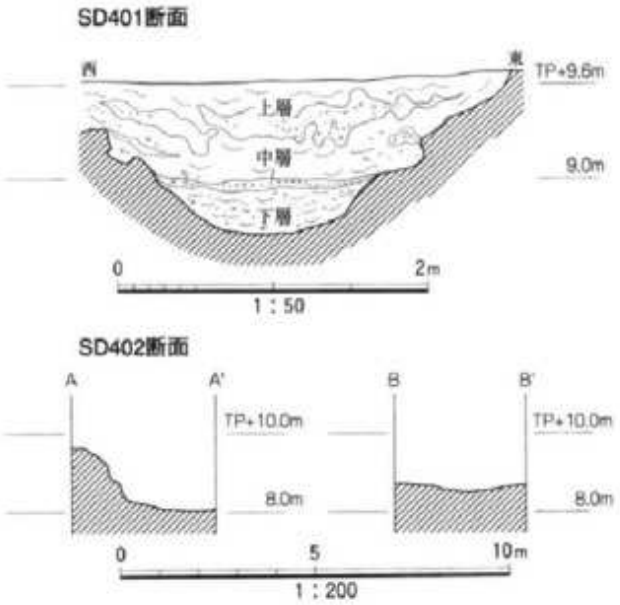


図12　SD401・402の断面

写真3　SD402断面(東から)

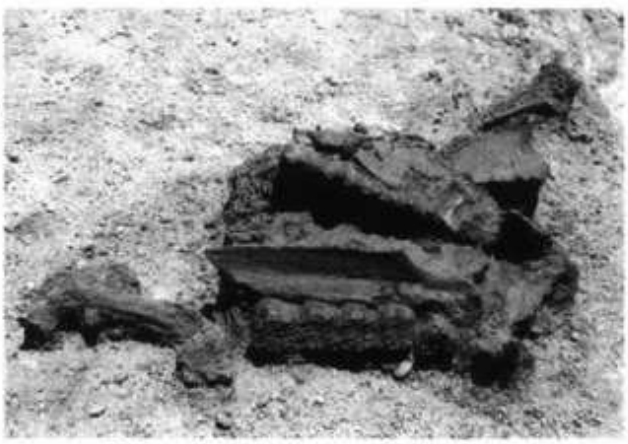


写真4　SD401出土のウマ頭蓋骨(北から)

礫からなるラミナが顕著な水成層で、長原4A層に相当する(図12、写真3)。溝は調査区の幅いっぱいに重なっていることから南北の肩を検出することができず、正確な幅はつかめなかった。しかし検出状況から復元すると、南北幅は約4mと考えられる。溝の底は東に向って低くなることから東流していたことがわかるが、東端は第5層が高くなり、そこから東の方向には延びない。つまり、「T」字形に突き当って南北に流れを変えるようすがうかがえる。

埋土には輸入陶磁器・瓦器・須恵器・土師器を含んでいる。これらのうち10～18を図9に示した。10は青磁碗の口縁部で、外面には蓮弁文が見られる。11～13・18は土師器である。11・12は小皿である。13は皿で口縁部がやや外反して膨らみ、底部が盛り上がると思われる。14世紀後半以降であろう。18は鍋で、内面にはハケメ調整を施す。14～17は瓦器である。14～16は椀で、14の見込みには平行線状のヘラミガキ、16の見込み内には斜格子文に平行線を加えた、三角形をなすヘラミガキを施している。14・16は外面にもヘラミガキが見られ、Ⅱ期であろう。15は内面のヘラミガキが圏線状をなす。Ⅴ期であろう。17は小皿で、口縁部は内傾し、内外面をナデ調整している。これらの遺物の時期はもっとも新しいもので14世紀後半となり、長原4A層の時期と矛盾しない。

第３節　94－46次調査

1)層序(図13、表４、図版４)

調査区には現代作土以下の各層が良好に堆積していたが、掘削深度の関係から、長原７層相当層から下は断面観察を行うにとどまった。各層についての詳しい内容は表４に譲り、ここでは分布状況や特徴について記していきたい。

第２～６層は長原２層に対比される。このうち第４層は調査区の西部にのみ堆積する水成層で、ほかは作土層である。第２層は調査区の全域に分布し、第３層は調査区の西半にのみ見られる。また、第５・６層は調査区の東半部に堆積する。

長原３層に対応する第７～12層は交互に水成層と作土層となっている。このうち第11・12層は東半部にのみ認められた。

第13～15層は長原４層に対応する。第13層はａ・ｂ層に細分される水成層である。Ⅲ期を中心とする瓦器が含まれ、長原4A層に相当するとみられる。第14層はａ～ｄの４層に細分され、いずれも作土層である。14a・ｂ層とｃ・ｄ層との間には水成層が挟まれ、２層に大別することができる。本層には平安時代末～鎌倉時代の瓦器が含まれ、長原4Bi層に相当すると思われる。遺構は14a層の上面で畦畔と溝を検出したほか、14c層の上面に畦畔が存在した。また、14d層の基底面では溝状の落込みが認められた。第15層はａ～ｄの４層に細分される。15a・ｃ層は水成層、15b・ｄ層は作土層で、上面で畦畔を検出している。出土遺物から15a～ｃ層は長原4Bii～iii層、15d層は長原4Cii層に対応させうる。

第16層は西に向って厚みを増す水成層で、長原５層に相当する。奈良時代末～平安時代初頭の須恵器・土師器を含む。

第17・18層は長原６層に相当する。第17層はａ・ｂ２層に細分され、ともに有機物を多く含む。17a層が長原6Ai層、17b層が長原6Aii層に当る。17a層の上面には畦畔が認められた。17b層は水成層で、西に向って厚みを増している。第18層も上下２層に区分され、上半の18a層が長原6Bi層、下半の18b層が長原6Bii層に相当する。18b層からは古墳～飛鳥時代の土器のほか、ウシの下顎骨が出土した。

第19・20層は長原7A・Ｂ層に対応する水成層で、古墳時代の土器を多く含む。

第21層は長原15層に相当すると思われ、調査区の東半ではTP+7.2～7.5mで確認されたが、西に向って深くなり、西端では確認しえなかった。

表4　94－46次調査の層序

標準層序	層序	層　相	層厚(cm)	遺　構	遺　物	特徴	掲載遺物
NG0	0層	現代盛土	70				
NG1	1層	現代作土	≦10			作土	
NG2	2層	含礫褐色(10YR4/4)中粒砂	≦10	▼SD201 ↓SX201	国産陶磁器・瓦器・瓦質土器・須恵器・土師器・瓦	作土	22・23・86
	3層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)礫質中～粗粒砂	≦10		国産陶磁器・輸入陶磁器・瓦・サヌカイト	作土	
	4層	黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂～礫	30～60		国産陶磁器・輸入陶磁器・瓦器・瓦・鉄滓	水成	
	5層	含礫にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト	≦10		国産陶磁器・輸入陶磁器・須恵器・土師器・サヌカイト	作土	
	6層	含礫黄褐色(2.5Y5/3)粘土質中～粗粒砂	≦20		国産陶磁器・瓦質土器・須恵器・土師器	作土	
NG3	7層	にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂～褐色粗粒砂・礫	40		瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・瓦・埴輪	水成	41
	8層	含礫灰黄褐色(10YR4/2)粘土質中粒砂	≦15	▲SR301	青磁・瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・瓦・サヌカイト	作土	
	9層	にぶい黄橙色(10YR6/4)粗粒砂～中礫	≦70		輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・埴輪・瓦・ｻﾇｶｲﾄ	水成	24～26・30・34・45・50・53・73～75
	10層	含礫灰黄色(2.5Y6/2)粘土質中粒砂	≦20		輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師器・瓦・杭	作土	27・31・33・37・40・49・55・89～93
	11層	にぶい黄橙色(10YR6/4)礫～灰黄色シルト	≦50		瓦器・須恵器・土師器・杭	水成	32
	12層	含礫灰黄褐色(10YR4/2)粘土質細粒砂	≦10		瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・瓦	作土	
NG4A	13a層	黄褐色(2.5Y5/3)粗～中粒砂	≦30		瓦器・白磁・須恵器・土師器・埴輪・瓦	水成	28・29・35・36・38・42～44・46・54
	13b層	オリーブ灰色(10Y6/2)細～極細粒砂	≦5			水成	
NG4Bi	14a層	含礫オリーブ灰色(2.5GY6/1)～緑灰色細・中粒砂	10	▲SR401,SD401,SX401・402	瓦器・須恵器・土師器	作土	39・47・48・51・52・88・94・95
	14b層	オリーブ灰色(5GY6/1)粘土質シルト	10			作土	
	14c層	オリーブ灰色(5GY6/2)粘土質シルト	≦15	▲SD402		作土	
	14d層	オリーブ灰色(10Y5/2)砂質シルト	≦5	↓SX403	瓦器	作土	
NG4Bii～iii	15a層	オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂	≦20		黒色土器・須恵器・土師器	水成	
	15b層	灰オリーブ色(7.5Y5/2)細粒砂	15			作土	
	15c層	灰オリーブ(7.5Y4/2)～緑灰色(5G5/1)中～細粒砂	10			水成	
NG4Ci	15d層	オリーブ灰色(10Y5/2)～緑灰色(10G5/1)粘土質シルト～細粒砂	≦20	▲SR402～404		作土	
NG5	16層	オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂～粘土質シルト	≦50		須恵器・土師器・動物骨	水成	56～58
NG6Ai	17a層	含礫暗オリーブ灰色(10Y5/2)粘土質シルト	≦15	▲SR601,SX601	須恵器・土師器	作土	
NG6Aii	17b層	緑灰色(10G6/1)中粒砂	≦40			水成	
NG6Bi	18a層	含砂礫オリーブ黒色(7.5Y3/2)～暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細粒砂質シルト	30		須恵器・土師器・ウマ骨	作土	
NG6Bii	18b層	暗オリーブ灰色(5GY3/1)細粒砂	≦10		須恵器・土師器・ウシ骨	水成	
NG7A	19層	黒褐色(2.5Y3/1)～灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土質シルト	≦30	▼落ち込み	須恵器・土師器・自然木	水成	68
NG7Bi	20層	含礫オリーブ黒色(7.5Y3/1)～暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト	30		須恵器・土師器	水成	59～67・69～72・76～84
NG15	21層	灰オリーブ色(7.5Y4/2)～緑灰色(5G5/1)細礫～礫質中・細粒砂		▲落ち込み			

2)各層出土の遺物

包含層からは、縄文～江戸時代に属するものが出土しており、古墳時代～中世のものがもっとも多い。これらの中には本来の地層から遊離したものを含む。なお、掲載遺物の出土層序は表4に記した。以下では図示しえたものについて略述することにする。

i)第2～6層出土遺物(図14、図版27・31)

22は第1層基底から出土した肥前磁器碗である。外面にはコンニャク印判が認められる。18世紀後半であろう。23は第4層から出土した鉄鎌である。刃部の残存長は10.7cm、着柄部分の残存長は4.9cmである。

ii)第7～14層出土遺物(図15、図版27・28)

24は竜泉窯系の青磁碗で、14～15世紀である。25～29は白磁である。25は皿で、底部外面は釉をかき取っている。内面には片彫りによる花文を施している。26～29は碗で、26～28

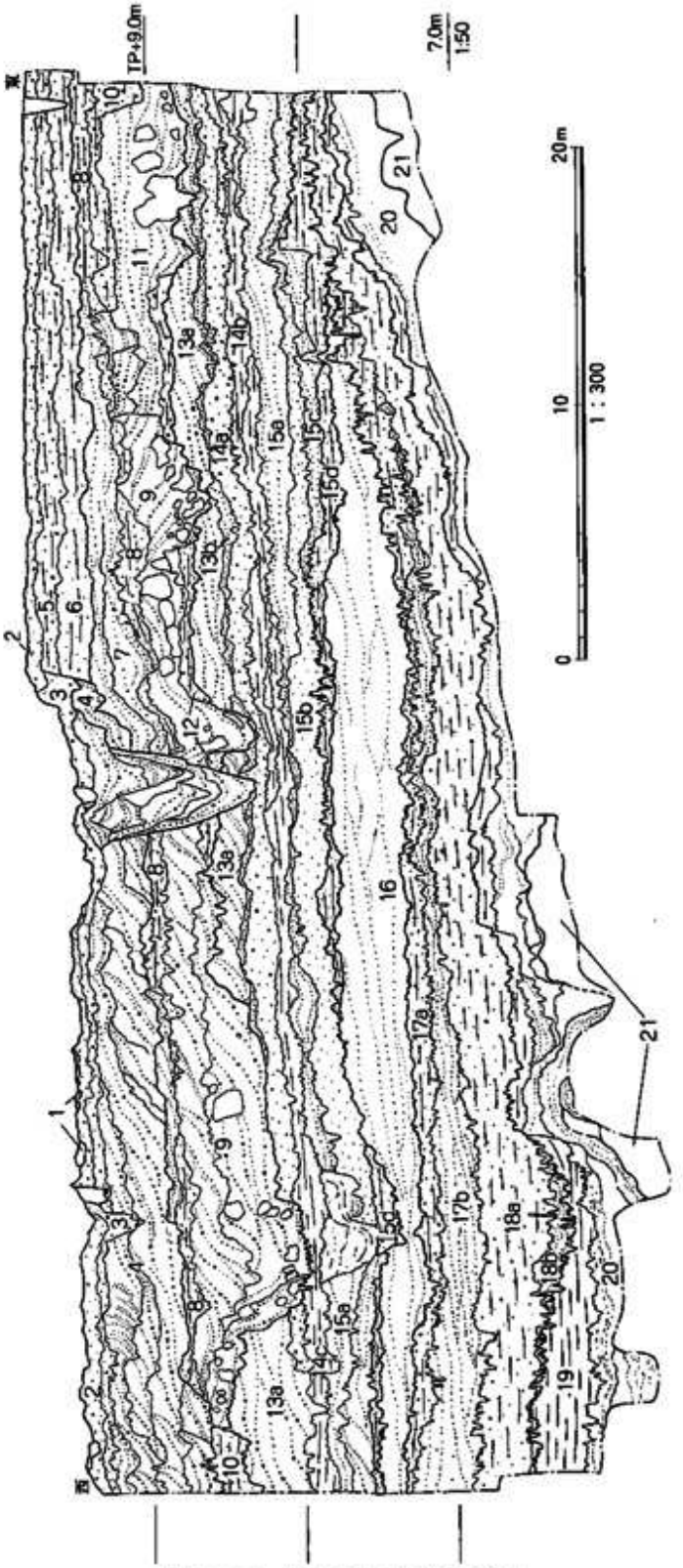


図13　94－46次調査の北壁地層断面

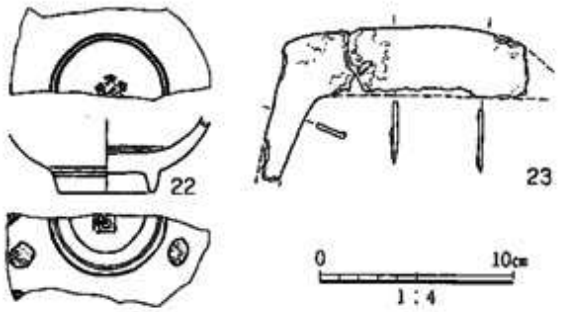


図14　江戸時代の陶磁器・鉄器

の口縁部は玉縁状である。29は高台部で、外底面を蛇の目状に仕上げる。26・28は森田勉氏による白磁碗Ⅱ類、27・29は白磁碗Ⅳ類に属するもので、12世紀である[森田勉1982]。30は備前焼の擂鉢で、備前焼Ⅳ期の初頭に当り、14世紀であろう[伊藤晃1995]。

31～40は瓦器である。31・32は小皿で、31の内面には細かなヘラミガキが見られ、見込みには平行線状のヘラミガキを施している。32は31よりやや小振りである。口縁部外面をナデ調整し、内面にはナデの後にヘラミガキを折り返すように施す。33～40は椀である。33は高台を有さず、内面には圏線状のヘラミガキを施す。34・36・37は内面に格子状のヘラミガキ、35・38は平行線状のヘラミガキを施す。37は内外面ともにていねいなヘラミガキが見られる。39・40は底部で、39の内面には連結輪状のヘラミガキを施す。40の高台の断面形は丸く、内面のヘラミガキは平行線状である。これらは37がⅡ期前半、31・34～36・38・39はⅡ－3～Ⅲ－1期、40はⅢ期、32・33はⅣ期に属する。

41～50は土師器である。41～46は小皿で、41～44は口径8㎝前後である。44は胎土が粗く器壁が厚手で、13世紀であろう。45は口縁部が厚く、底部が凹む形態で、14～15世紀代であろう。46は「て」字状口縁部をもち、11世紀後半であろう。47は杯である。器形からみて飛鳥時代にさかのぼるものであろう。内面の調整は磨滅のため不明である。48は杯で、口縁部外面には1段のナデを施している。平安時代Ⅲ期で11世紀であろう。49・50は羽釜である。ともに内外面をナデ調整している。49は13世紀後半、50は12世紀末～13世紀であろう。51～53は瓦である。51は丸瓦で、内外面に布目の圧痕が見られる。52は須恵質の平瓦で、内面には布目圧痕、外面には縄目タタキメが見られる。53は軒平瓦で、瓦当文様は水波文である。15世紀以降のものであろう。54・55は須恵器である。54は東播系の壺で、肩の部分に1条の突帯を貼付けている。兵庫県の福田天神遺跡に類例があり、12世紀末～13世紀初頭であろう[龍野市教育委員会1982]。55は擂鉢で、12世紀代であろう。

iii)第16～20層出土遺物(図16・17、図版6・28～30)

56～64は土師器である。56は杯Cである。外面はヘラミガキし、内面は放射状暗文を1段施している。57は小型の壺で、肩の張りが強い。内外面はナデており、外面にはユビオサ

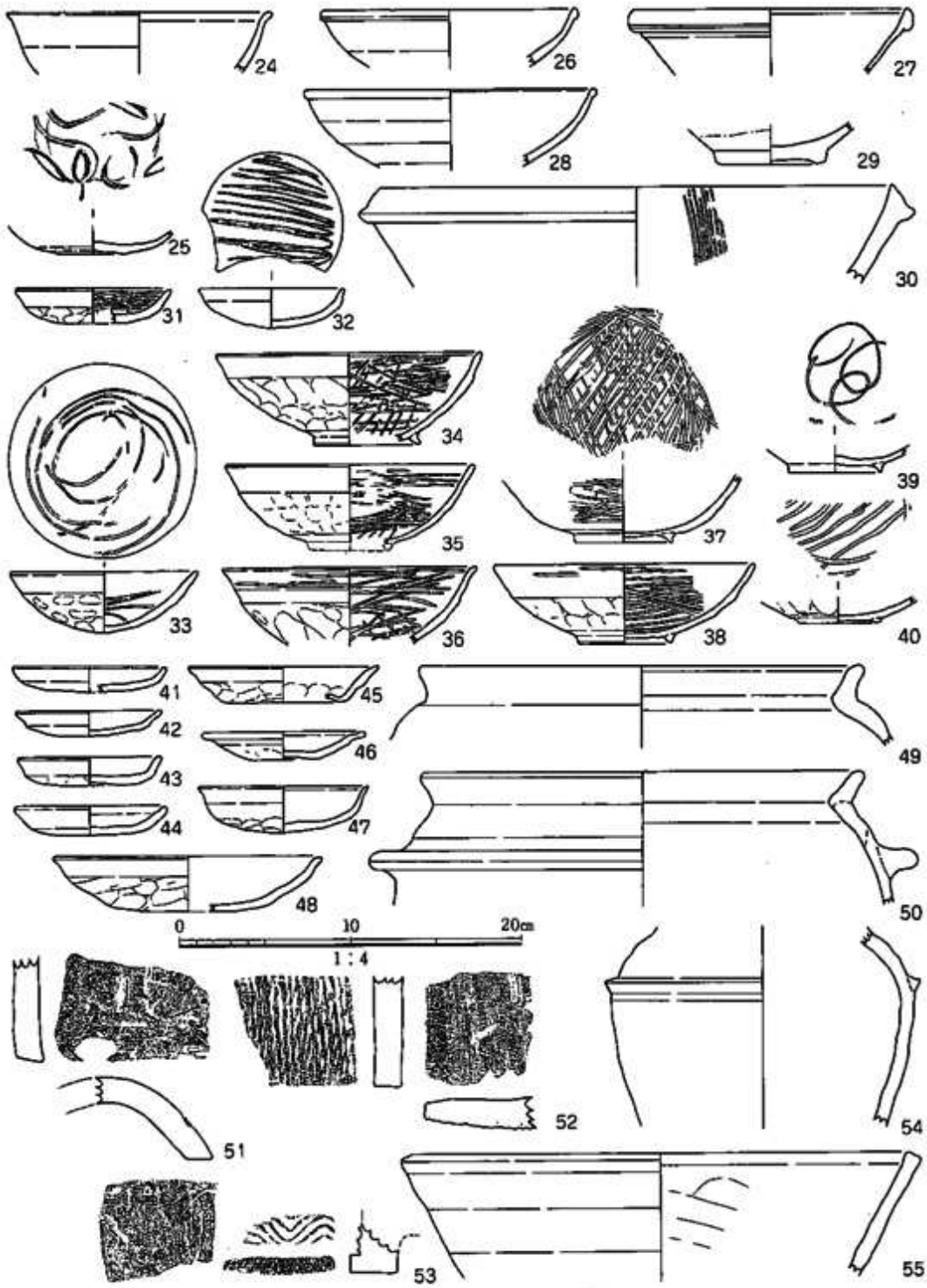


図15　第7～14層出土の遺物

(第7層：41、第9層：24～26・30・34・45・50・53、第10層：27・31・33・37・40・49・55、第11層：32、第13層：28・29・35・36・38・42～44・46・54、第14層：39・47・48・51・52)

工痕が明瞭である。58は壺Bで、口径15.5cm、器高12.6cmである。口縁部は短く外傾して伸び、端部は外上方につまみ上げている。体部はほぼ球形で底部も丸みを帯びる。体部中位に2つの把手をつける。口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面はナデとユビオサエ、内面は板状工具でナデを施す。体部外面に黒斑が残る。56は平城宮Ⅱ～Ⅲに属し8世紀前半、57・58は平城宮Ⅳ～Ⅴに当り8世紀後半～9世紀であろう。59・60は高杯の脚部で、59の接合部には棒状工具で刺突した痕跡が見られる。5世紀中葉であろう。61は製塩土器である。内外面はナデているが、外面の調整は粗雑で、粘土紐の接合痕が明瞭である。古墳時

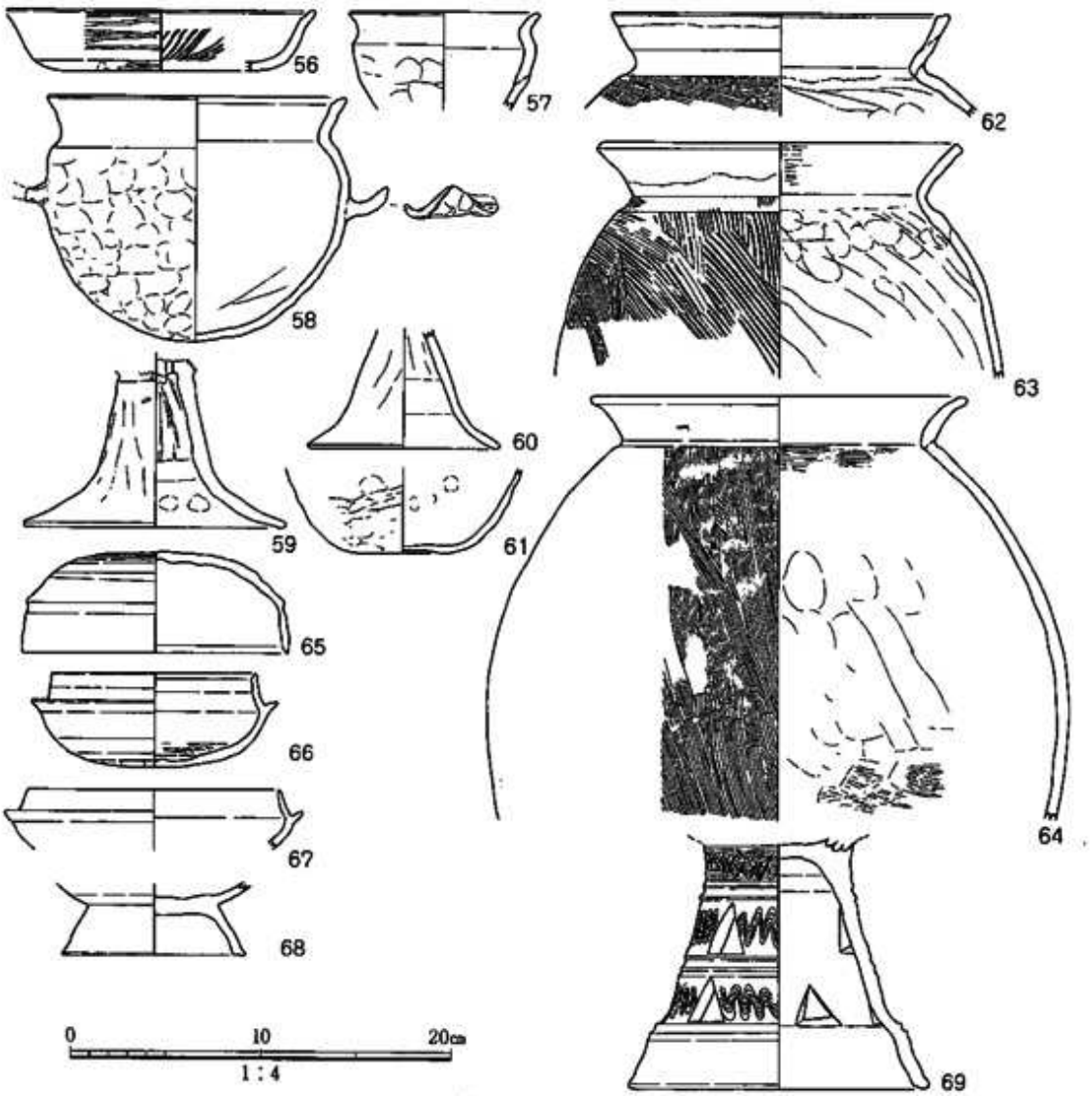


図16　第16～20層出土の遺物
（第16層：56～58、第19層：68、第20層：59～67・69）

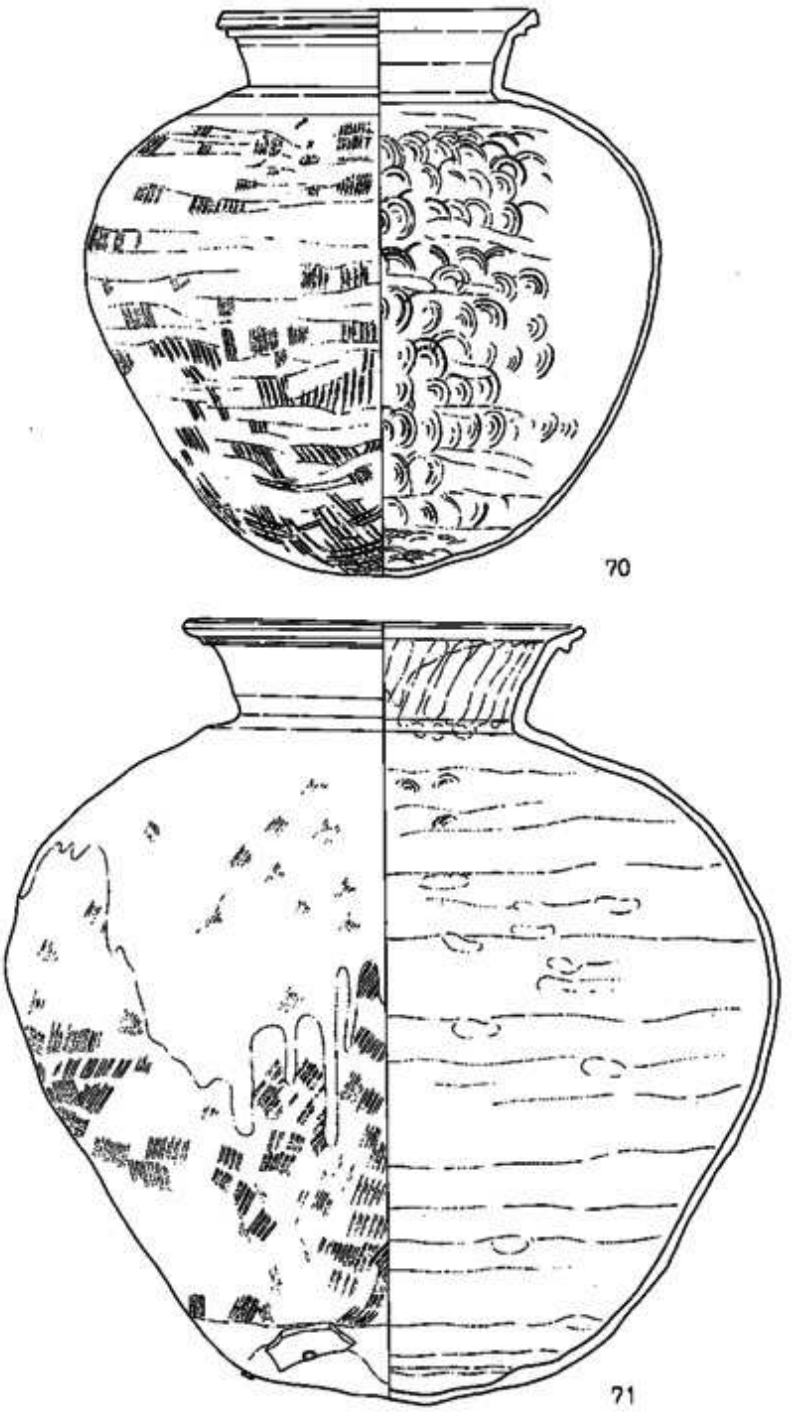


図17　第20層出土の遺物

代後期後半～飛鳥時代であろう。62～64は甕である。62は口縁部内面がわずかに肥厚する布留式系甕である。体部外面はヨコハケ、内面はナデを施す。63の口縁部は緩やかに外反し、端部は外傾する。体部はあまり肩を張らない。口縁部外面をヨコナデ調整し、内面はハケメの後にナデを施している。体部外面は粗いハケメ、内面はユビオサエおよびナデで仕上げている。64は短く外反する口縁部に長胴の体部をもつ。体部の外面はタテハケを施し、内面はヨコハケののちナデている。62・64は5世紀後葉、63は5世紀末～6世紀前葉であろう。65～71は須恵器である。65は杯蓋で、66・67は杯身である。66の底部内面には同心円文の当て具痕が残る。65はMT15型式、66はTK47型式に当り、67はTK43型式であろう。68は高杯の脚部で、スカシ孔は見られない。TK43型式に属する。69は器台の台部である。外面にはカキメの後、波状文を施す。スカシ孔は三角形である。5世紀後葉であろう。70・71は甕である。ともに大型品で、外面には平行タタキを施す。70の内面には同心円文の当て具痕があり、この一部をすり消しているが、71の内面は当て具痕をほとんどすり消している。なお、71の底部外面には焼台かと思われる別個体の体部片が融着している。70はON46型式、71はTK216型式に当る。

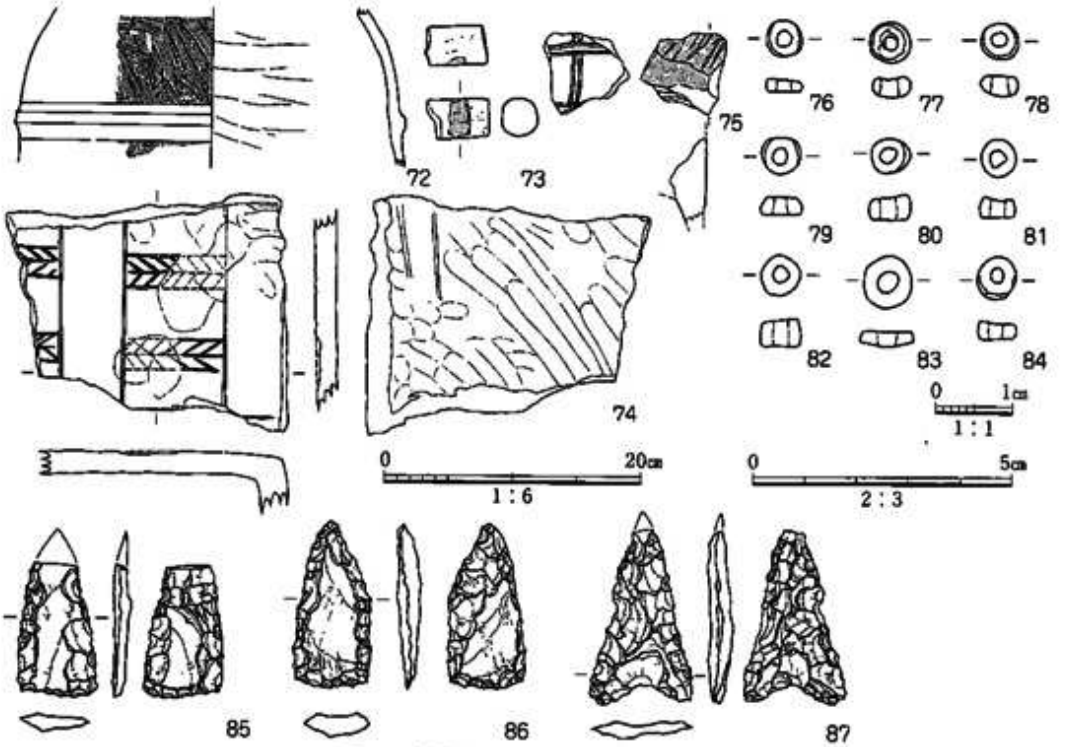


図18　各層出土の埴輪・石器・石製品

(第5層：86、第9層：73～75、第20層：72・76～84、洗浄土壌中：85・87、縮尺は72～75：1／6、76～84：1／1、85～87：2／3)

iv)その他の遺物(図18、図版29・30)

72～75は埴輪である。これらは本来の包含層から遊離したものである。72は朝顔形埴輪でⅣ期である。73・74は家形埴輪である。73は蓋木と思われ、外面には剥落した痕跡が残る。74は壁廻りである。壁面には上下反対方向の綾杉文が2列認められ、その下に線刻がある。高床の家の上半に当る可能性がある。なお、73・74は胎土・焼成ともに類似している。75は外面に2条を1単位とした線刻を施すもので、この線刻はくずれた直弧文の可能性がある。そうすると家・靭・盾形埴輪のいずれかになろう。

76～84は調査区の東半の第20層から出土した滑石製臼玉である。これらは洗浄土壌中から出土したものがほとんどで、出土位置は不明である。直径は5～6㎜前後、厚さ2～4㎜で、片面から穿孔している。

85～87は石鏃である。これらはすべて遊離資料である。85・86は平基無茎式で、両面とも中央に素材とした剥片の剥離面を大きく残している。弥生時代であろう。87は凹基無茎式で、抉りは浅い。縄文時代後半であろう。このほか第14層では、鋳造炉壁88が出土している(図版30)。

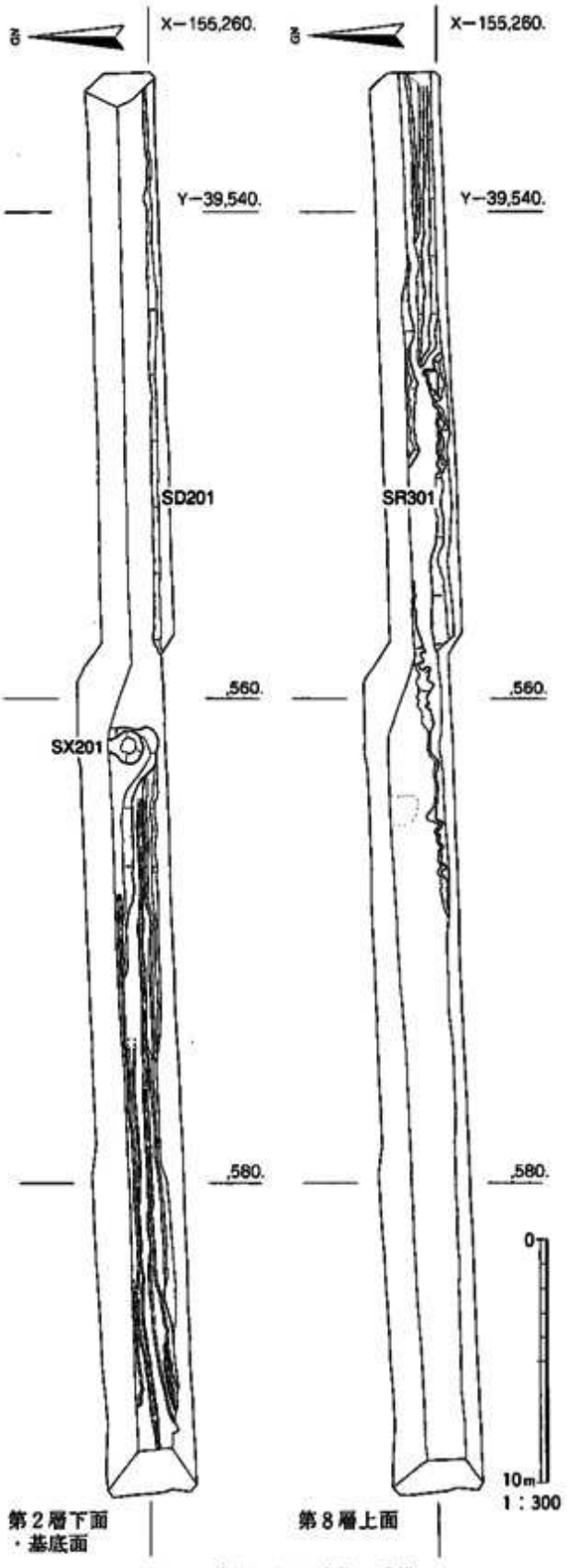


図19　室町～江戸時代の遺構

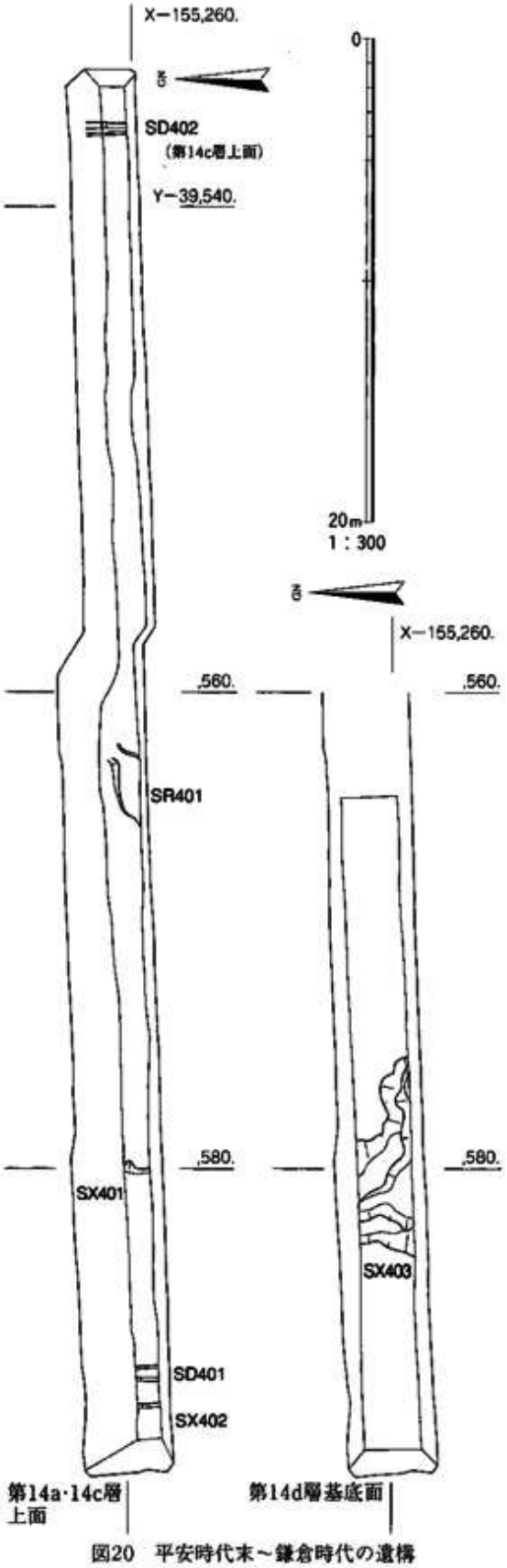


図20　平安時代末～鎌倉時代の遺構

3）遺構と遺物

ⅰ）室町～江戸時代（図19、図版５）

第２層下面・基底面で、耕作に伴う溝と、性格不明の落込みを検出した。この時期は、調査区の東側が一段高い耕作面となっている。東半部では東西方向の溝SD201があり、幅は0.7m以上、深さは0.2mである。江戸時代の陶磁器などが出土した。この中で、西半部では東西方向の小溝が多数認められた。いずれも幅0.2～0.3m、深さ0.1m程度である。また、耕作面が一段低くなる個所では、東西約２m、南北２m以上の不整形な落込みSX201を検出した。埋土は砂質または粘土質の水成層で、水溜めなどの施設かもしれない。

第８層上面では、東西方向の畦畔SR301を検出した。幅は下端で1.5m、高さ0.2mである。ただし、調査区の中央より西は上層の水成層によって削られたため、この畦畔はブロック状に残存するのみである。また第８層自体も西半ではほとんど残存していない。

また、第10層中では調査区の全域でこの地層に打込んだ杭89～93を検出した（図版30）。これらはすべて先端を細く尖らせている。なお、大きさについては別表３に記載している。杭の上部はなく、これらがどの段階で打込まれたのかは判断できなかった。

ii)平安時代末～鎌倉時代(図20、図版5・6・31)

第14a層上面では、北東から南西方向に延びる畦畔SR401が存在した。上層の水成層に削られているため不定形で、もっとも細いところは下端で幅1.0m、高さ0.1mである。西には段状の落込みSX401があり、段差は0.1mほどである。西端では南北方向の溝SD401が認められた。幅0.7m、深さ0.1mである。そのすぐ西に段状の遺構SX402を検出した。段差は0.1m未満で西側へ緩やかに下がっている。

なお、第14a層掘削中に、調査区の西部で漆皿が出土した(図21、図版6・31)。これらは口縁部を下にして、2枚重ねた状態で認められた。おそらく意図的に置かれたものと思われるが、これに伴う埋納施設は見つからなかった。94・95は木製の漆皿である。94は口径10.1cm、器高1.6cmである。全体的に薄手で、高台はない。底部以外に黒色漆を塗布したのち、内外面に赤色漆で紅葉の文様を描く。95は口径9.8cm、器高1.6cmである。底部は平坦で、94よりも厚手である。褐色がかった黒色の漆を底部以外に塗布し、口縁部内面には赤色の漆で「大」という文字に似た文様を描く。これらは鎌倉時代と考えられる。

第14c層上面では、東端において南北方向に延びるSD402が認められた。幅0.5m、深さ0.1m未満である。

第14d層基底面では、東半において不定形な落込みのSX403を検出した。調査区の南端では幅8.0m、深さ0.5mになる。埋土には踏込みが認められるものの、人為的な掘込みではなく、自然流路と考えられる。埋積の過程で人が入込める状況だったのであろう。

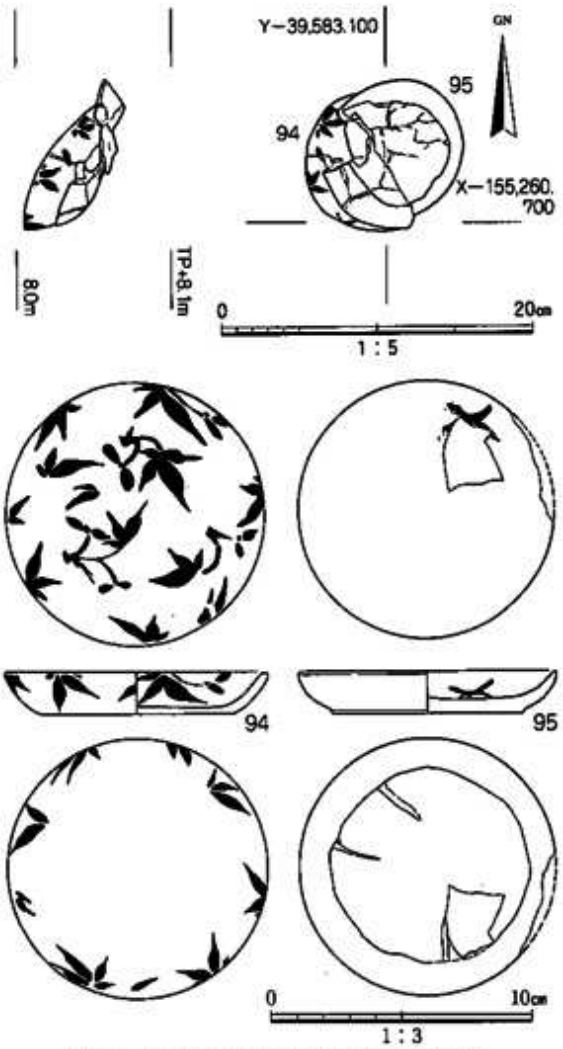


図21　第14a層漆皿出土状況および実測図

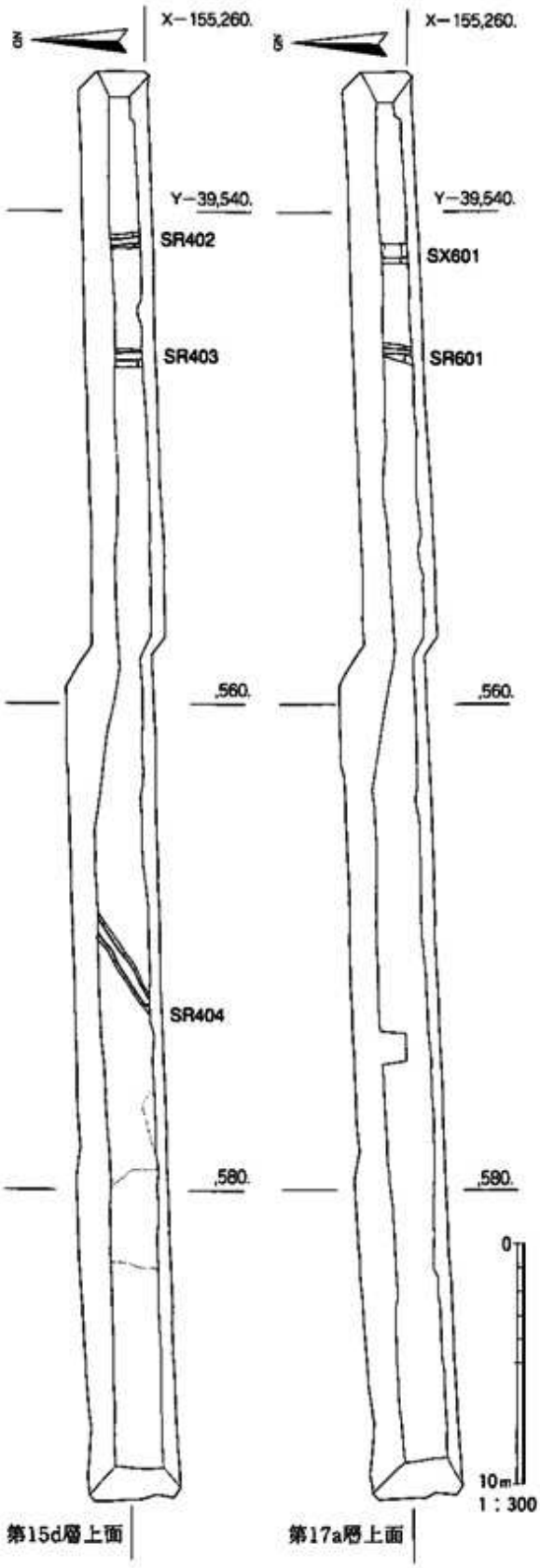


図22　奈良～平安時代前半の遺構

iii)奈良～平安時代前半(図22)

第15d層上面では、調査区の東端で畦畔SR402、その西で畦畔SR403、中央において畦畔SR404が認められた。SR402・403はともに幅0.6m、高さ0.1mで南北方向をとる。SR404は幅0.6m、高さ0.1mで、北東から南西方向へ延びる。

第17a層上面では、畦畔SR601が存在した。南北方向に延び、下端での幅0.6m、高さ0.1mである。また、東端近くでは南北方向に延びる段差0.1mほどの段状の遺構SX601を検出した。段は水田の区画に伴うものであろう。

iv)古墳～飛鳥時代

第19層中では西で自然木がまとまって出土している。また、第19層下面では東半において緩やかな落込みがいくつか認められた。これらは上位からの踏込みによって窪んだものと思われる。

第21層の上面では、中央で第20層で埋る溝状の落込みが認められた。落込みは自然地形と思われ、埋土には有機物を多く含む。断面を観察したところ、南北方向に拡がると推定された。

第4節　94－63次調査

1)層序(図23、表5)

調査区内では長原2～9層までの各層が良好な状態で確認された。詳しい記載は表5に述べたとおりである。以下ではこれらの概略を述べる。

第1～4層は長原2層に相当する作土層と水成層である。

第5・6層は長原3層に相当する水成層である。ともに粘土質シルトの作土ブロックが混り、6層は調査区の中央で下位の第8・9層を大きく抉る。

第7～9層は長原4層に対応する。7層は長原4A層に相当する水成層で2枚に細分しえた。この下の8層は瓦器・土師器を含み、長原4Biii層に相当する作土層である。9層は土師器・須恵器・黒色土器を含み、長原4C層に相当すると考えられる。

第10～12層は長原5A層、第13層は長原5B層に相当する水成層である。

第14～18層は長原6層に対応する。14層は木や草など有機質の細片を多く含んでおり、長原6Ai層に相当する。また、15・16層は長原6Aii層に相当する水成層であるが、15層は上位層からの踏込みにより、ラミナの変形が著しい。17層は長原6Bi層に相当し、飛鳥Ⅲの須恵器・土師器やウマ・ウシの骨が多く出土した。この下の18層は長原6Bii層に相当する水成層である。

第19・20層は長原7層に当る。19層は下半に第21層のブロックが巻上げられ、長原7A層に相当する。20層は長原7Bi層の暗色帯に相当し、TK208型式の須恵器のほか、土師器を若干含む。

第21層は長原7Biii～8B層にかけての暗色帯に相当し、一部に灰白色中粒砂のブロックを含む。

第22層からは縄文時代後期の土器および石器が数多く出土し、長原9層に相当すると考えられる。火山ガラスを含む。

第23層からは第22層と同様に土器や石器が出土し、また火山ガラスも22層と同程度含む。しかし、本層の粒径は下位の第24層と共通し、22層とは明瞭に区別される。このことから、本層は下位層と一連のものであり、風化や生物擾乱の度合いの差によって細分されるものと考えておく。

第24層は火山ガラスをほとんど含まず、長原13C層以下の層準と考えられる。

表5　94－63次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴	掲載遺物
NG2	1層	含礫褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂	≦15		近世陶磁器・土師器	作土	
	2層	含礫暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂	≦15			作土	
	3層	灰オリーブ色(7.5Y6/2)中礫～極細粒砂	20～50		瓦器・須恵器・土師器・瓦	水成	102
	4層	灰白色(10YR7/2)細粒砂～シルト	≦5			水成	
NG3	5層	粘土質シルトブロック混りオリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂～極細粒砂	≦20			水成	98～100・103～108
	6層	オリーブ灰色(10Y6/2)中礫～細粒砂	≦70		陶器・瓦質土器・須恵器・土師器・埴輪	水成	96・97・101
NG4A	7a層	灰オリーブ色(7.5Y6/2)粗粒砂～中礫	≦40			水成	
	7b層	オリーブ灰色(5GY6/1)極細粒砂	≦5			水成	
NG4Biii	8層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト	≦20	▲耕作 ▼耕作溝	瓦器・須恵器・土師器・瓦・サヌカイト	作土	
NG4C	9層	含礫粒砂オリーブ灰色(2.5GY5/1)含細礫細粒砂質シルト	≦15		灰釉陶器・黒色土器・須恵器・瓦・サヌカイト		109
NG5A	10層	暗オリーブ灰色(5GY4/1)礫～極粗粒砂	≦10		須恵器・瓦	水成	
	11層	緑灰色(7.5GY5/1)細粒砂～シルトの互層	10～20			水成	
	12層	オリーブ灰色(2.5G6/1)極粗粒砂～中粒砂	10～20			水成	
NG5B	13層	オリーブ灰色(5GY5/1)細粒～シルトの互層	≒20			水成	
NG6Ai	14層	灰色(7.5Y4/1)シルト質粘土	10～20	▼踏込み			
NG6Aii	15層	緑灰色(7.5GY5/1)中粒砂～シルト	10～20		須恵器	水成	
	16層	緑灰色(10GY6/1)粘土	10～25			水成	
NG6Bi	17層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土	10～25	▲踏込み ▼踏込み	須恵器・土師器・製塩土器・瓦・動物骨		
NG6Bii	18層	緑灰色(10GY6/1)粘土	10～15			水成	110～113・115・116・121
NG7A	19層	オリーブ黒色(5Y3/1)粘土	15～25	▲踏込み ▼踏込み	須恵器・土師器・埴輪・動物骨		114・117・119・122
NG7Bi	20層	黒色(5Y2/1)シルト	10～20		須恵器・土師器・動物骨・サヌカイト		118・120・123
NG7Bii～8B	21層	灰色(5Y4/1)シルト質細粒砂	≦20		サヌカイト		
NG9	22層	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細粒砂	≦10	土器群1・2,石器群	縄文土器・石器	火山ガラス	124～137
NG9～13C	23層	灰色(7.5Y6/1)極細粒砂	≦10		縄文土器・石器	火山ガラス	
13C以下	24層	明緑灰色(5G7/1)極細粒砂	≧30				

2）各層出土の遺物(図24、図版32)

遺物は包含層から出土したものが多く、その時期は古代～中世を中心とする。以下では図示した遺物について述べたい。なお、縄文時代の土器・石器については、包含層からの出土ではあるが、一括性が高いため、別途記載したい。各遺物の出土層準については図24および表5に記した。

96は産地不明の陶器で、盞と思われる。内外面には茶褐色～黒褐色の釉を施す。胎土には砂粒を多く含む。口径は14.2cmである。97は瓦質土器の羽釜である。体部外面には横方向のヘラケズリ、内面には細かいハケ調整を施す。15世紀であろう。98～105は瓦器である。98～101は小皿で、98の内面には平行線状のヘラミガキが見られる。他の内面のヘラミガキは圏線状である。102～105は椀である。103の内面のヘラミガキは密で、底部内面

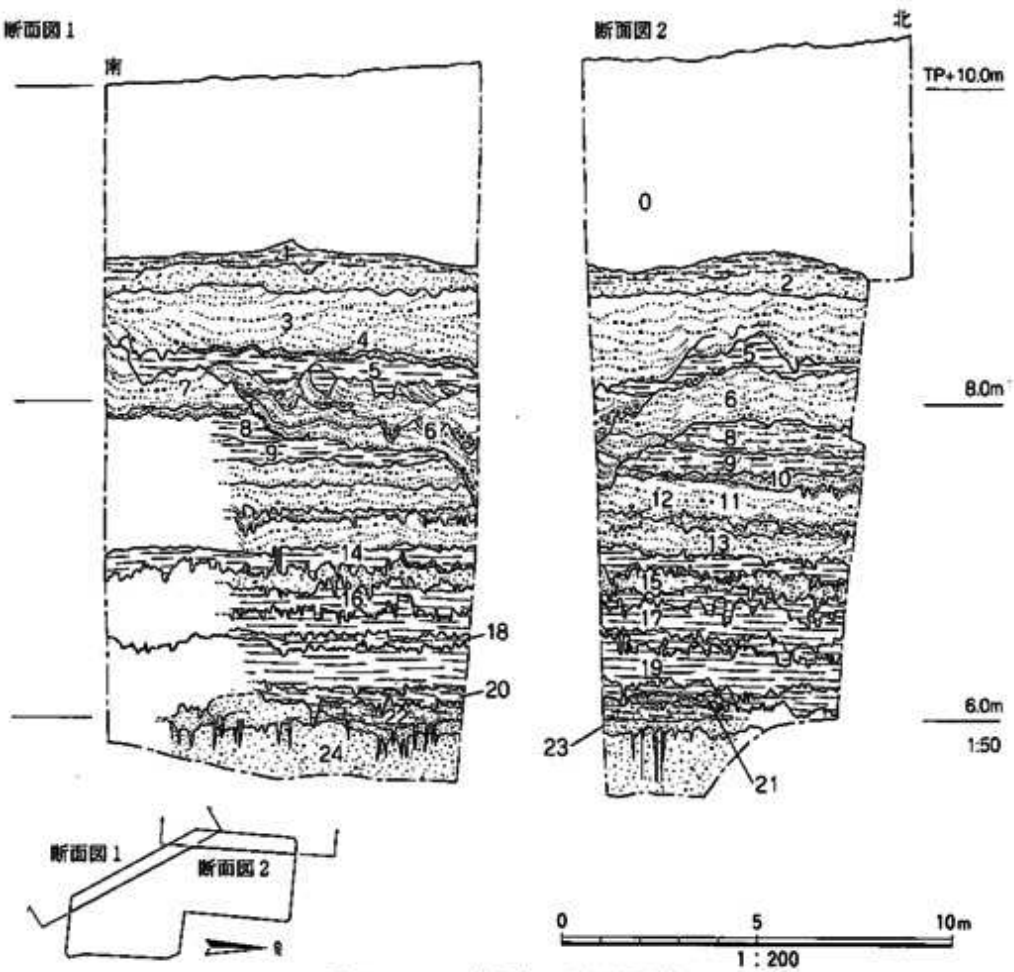


図23　94－63次調査の西壁地層断面

には斜格子状のヘラミガキを施すと思われる。外面にもヘラミガキがある。104・105は底部の破片で、104の内面には平行線状、105の内面は斜格子状のヘラミガキを施す。100・103・105がⅡ期、98・99・101・104がⅢ期、102がⅣ期に属すると思われる。

106～114は土師器である。106～109は皿である。106は小皿で、底部内面が凹む。108の底部外面には板ナデを施しており、平城宮Ⅵであろう。110～113は杯である。110は口径12.6cmで、口縁端部内面に段をもつ。内面と口縁部外面をヨコナデし、底部の調整はユ

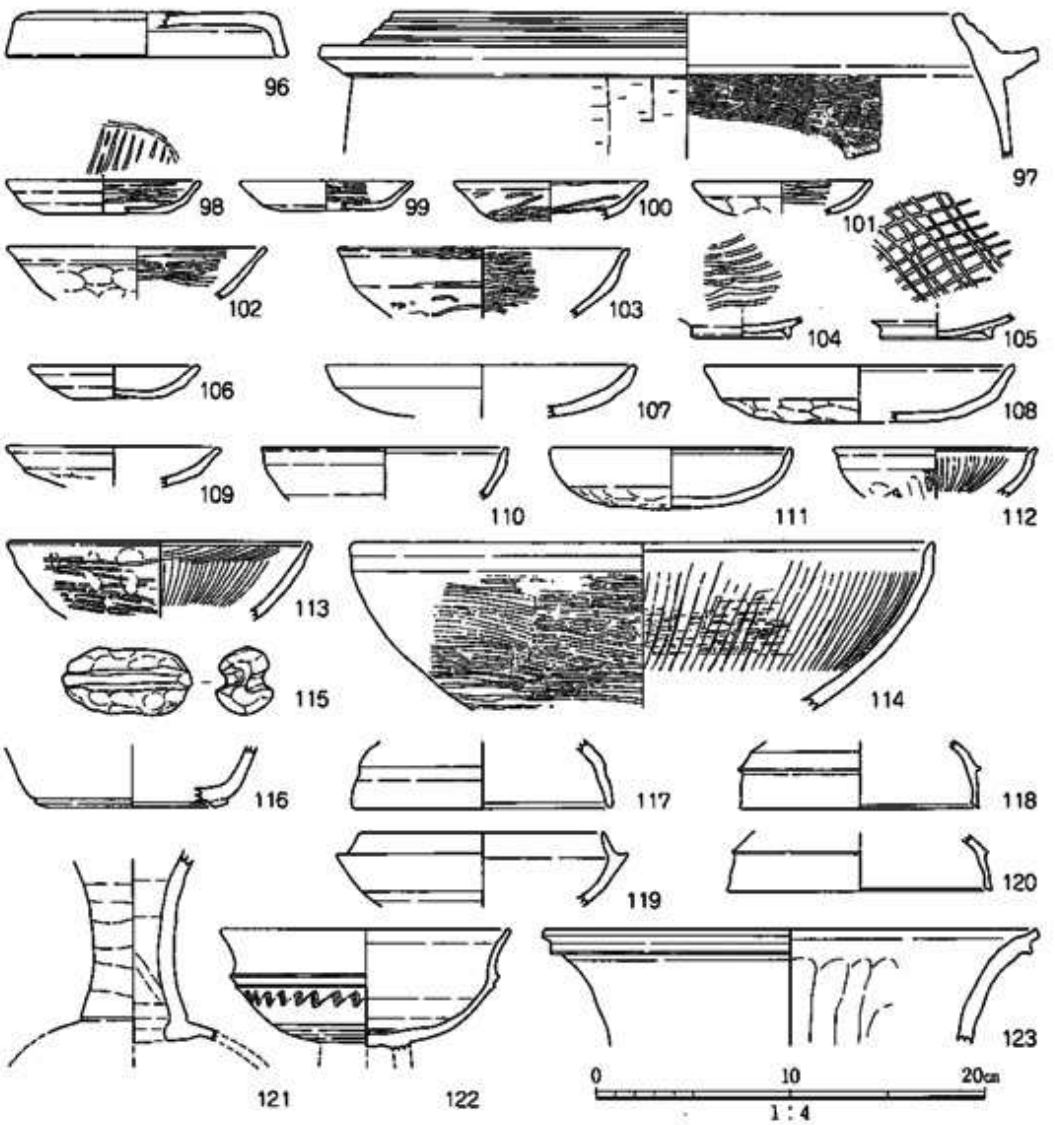


図24　各層出土の遺物

(第3層：102、第5層：98～100・103～108、第6～7層：96・97・101、第9層：109、第18層：110～113・115・116・121、第19層：114・117・119・122、第20層：118・120・123)

ビオサエと思われる。111の調整は110と同様で、口縁端部内面の段はこれよりやや明瞭である。口径は12.3cm、器高3.0cmである。112は口径10.3cmで、外面の一部にハケ調整を行う。内面には放射状暗文をもつ。113の口径は15.4cmである。口縁部外面にはユビオサエののち雑なヘラミガキを施し、内面には2段の放射状暗文をもつ。これらの杯は飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。114は鉢で、口縁部内面に段をもち、内面には放射状暗文を1段施す。底部内面にはススが付着しており、この部分の調整や文様は不明である。外面には板ナデののちヘラミガキを行う。飛鳥Ⅱであろう。

115は土製の魚網錘である。手づくねで作ったもので、外表面の長軸方向に一対の溝を巡らせている。重量は58.6ｇで、色調は暗灰色を呈する。

116～123は須恵器である。116は杯Ｂである。117・118・120は杯蓋、119は杯身である。口径は117が13.2cm、119は12.6cmで、ともに陶邑編年のTK10型式である。118・120は口径を復元するとそれぞれ13.5cm、12.2cmで、118は天井部の回転ヘラケズリの範囲が広く、TK208型式に属する。121は壺の口縁部で、飛鳥Ⅲに属する。122は無蓋高杯である。つくりはシャープで、口縁部は強く外反する。杯底部内面に同心円の当て具痕が残り、TK208型式である。123は甕の口縁部で、118と同時期であろう。

3)遺構と遺物

ⅰ)平安時代(図25、図版7)

長原4Biii層に相当する第8層上面で水田面を検出した。長原3層段階の洪水層である第6層によって、調査区北半の水田面が洗い流されている。特に、調査区の中央には第6層を埋土とする南東から北西方向の自然流路が走っており、ここに流れの中心があったことが予想される。畦畔は調査区の南半で南北方向のものが一部残存していた。SR401は下端の幅0.4m、高さ0.1mで、北隣のNG93－68次調査で確認された同一面の畦畔とは方向を若干異にする[大阪市文化財協会1999b]。また、第8層下面では、調査区の北半で東西方向の耕作溝を検出した。

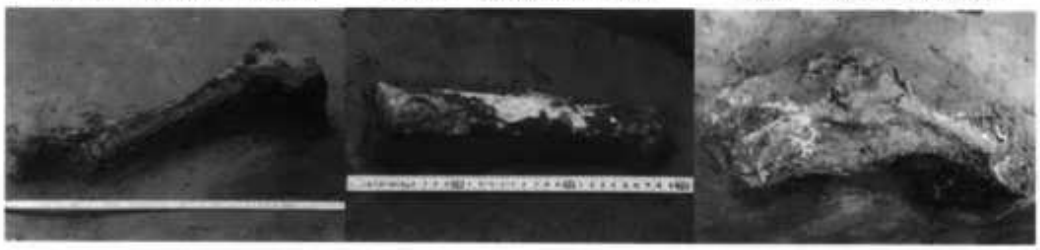
ⅱ)飛鳥～奈良時代(図25、図版8)

TP+6.2～7.0mにかけて、植物起源のフミン酸により暗色化した土層である第14・17・19(長原6Ai・6Bi・7A)層と、緑灰色土の水成層である第15・16・18(長原6Aii・6Bii)層が交互に堆積していた。第14層下面および、第17・19層の上下面では、ヒトあるいは偶蹄類の踏込み跡が顕著であった。しかし、これらの層の上面では、明確な畦畔は存在しなかっ

た。北に接するNG93－68次調査地と合わせて、南北45mの範囲でも畦畔は確認されていない。地層の状態や顕著な踏込み跡から、谷の底にヒトやウシなどが頻繁に入込んでいたことは明らかであるが、明確な水田遺構を見つけることができなかった。

また、長原6Bi層に当る第17層の下部を中心に、飛鳥Ⅲの須恵器・土師器の破片とともにウマ・ウシの骨が数多く出土した(図25、写真５～７)。これらは、まとまることなく散在していたが、各部位が完全な状態で出土したものも多く認められた。なお、これらの動

写真５　資料28の出土状況　　写真６　資料33の出土状況　　写真７　資料34の出土状況



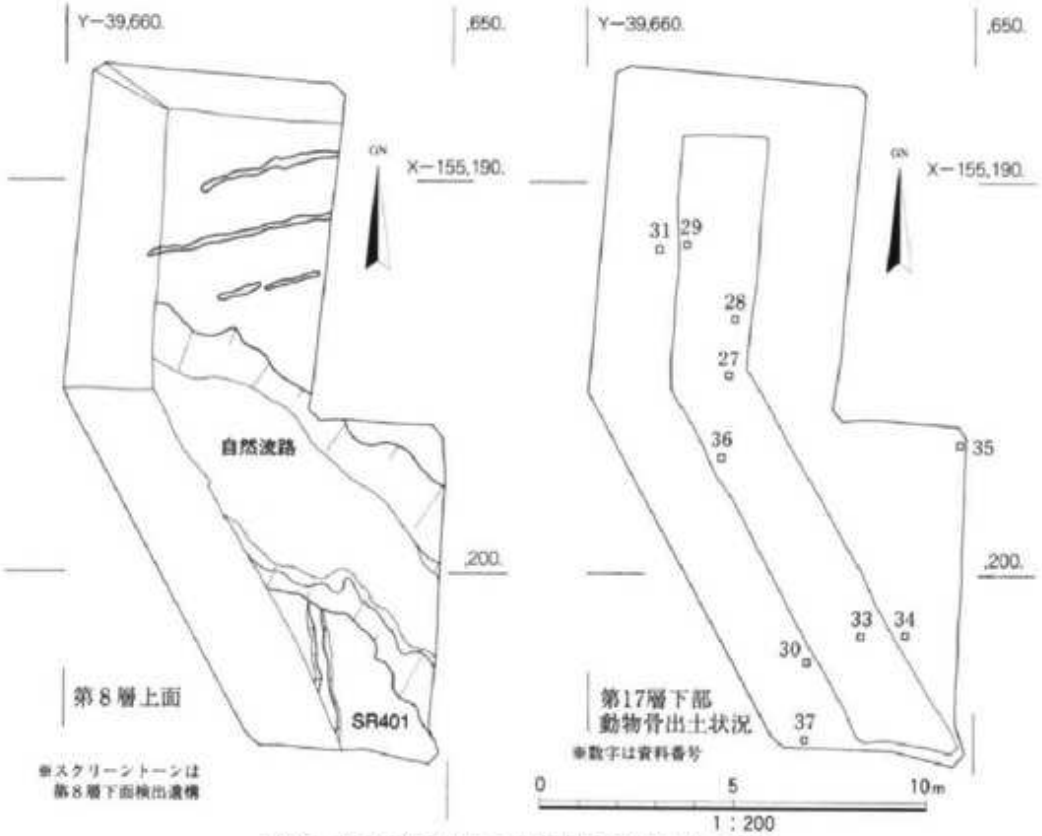


図25　平安時代の遺構と飛鳥時代動物骨の出土状況

物遺体については本章第5節で述べることにする。

iii)縄文時代(図26・27、図版8・32・33)

第22・23層からは、縄文時代後期の土器や石器が数多く出土した。ほとんどが第22層からの出土で、第23層のものは少ない。なかでも南端では石器遺物が1m四方の狭い範囲に集中して認められ、それを含む広い範囲に土器が分布していた。石器群と土器群は、分布範囲を一部共有しながら同一レベルで出土しており、両者は同時期のものととらえることができる。また、調査区の中央でも、数は少ないが土器の集中する個所が認められた。

土器群1は中央で直径約1mの範囲にわたって認められたもので、黄褐色の色調をもつ土器が多いという特徴をもつ。**127**は小型の鉢の肩部で、口縁部へ向って外反する屈曲部に沈線を巡らし、その下に施文方向を違えて羽状に見せる。内面はミガキ風のナデ調整である。色調は暗茶褐色で、角閃石を多量に含む生駒西麓産の胎土である。縄文時代後期の北

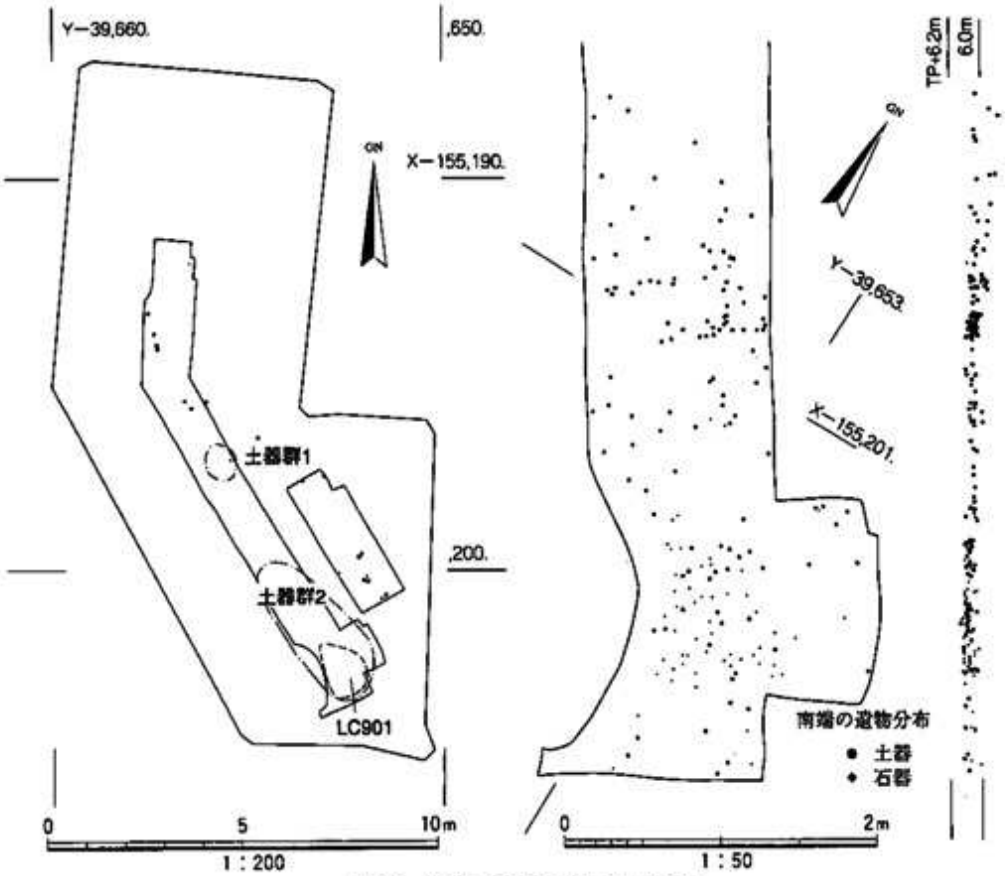


図26　第22・23層の遺物出土状況

白川上層式である。

土器群2は、調査区の南で4m×2mの範囲で認められた。出土した破片は100点以上で、生駒西麓産の胎土をもつものがほとんどを占める。124は深鉢の口縁部で、口縁端部外面に粘土帯を貼付けた縁帯文土器である。外面はミガキ風のナデ調整である。125は深鉢の体部で、124と同一個体の可能性がある。一方の面には、原体不明の条痕文状の調整が見られる。126は深鉢の底部破片で、平底の底部外面には網代圧痕を有する。124～126の胎土

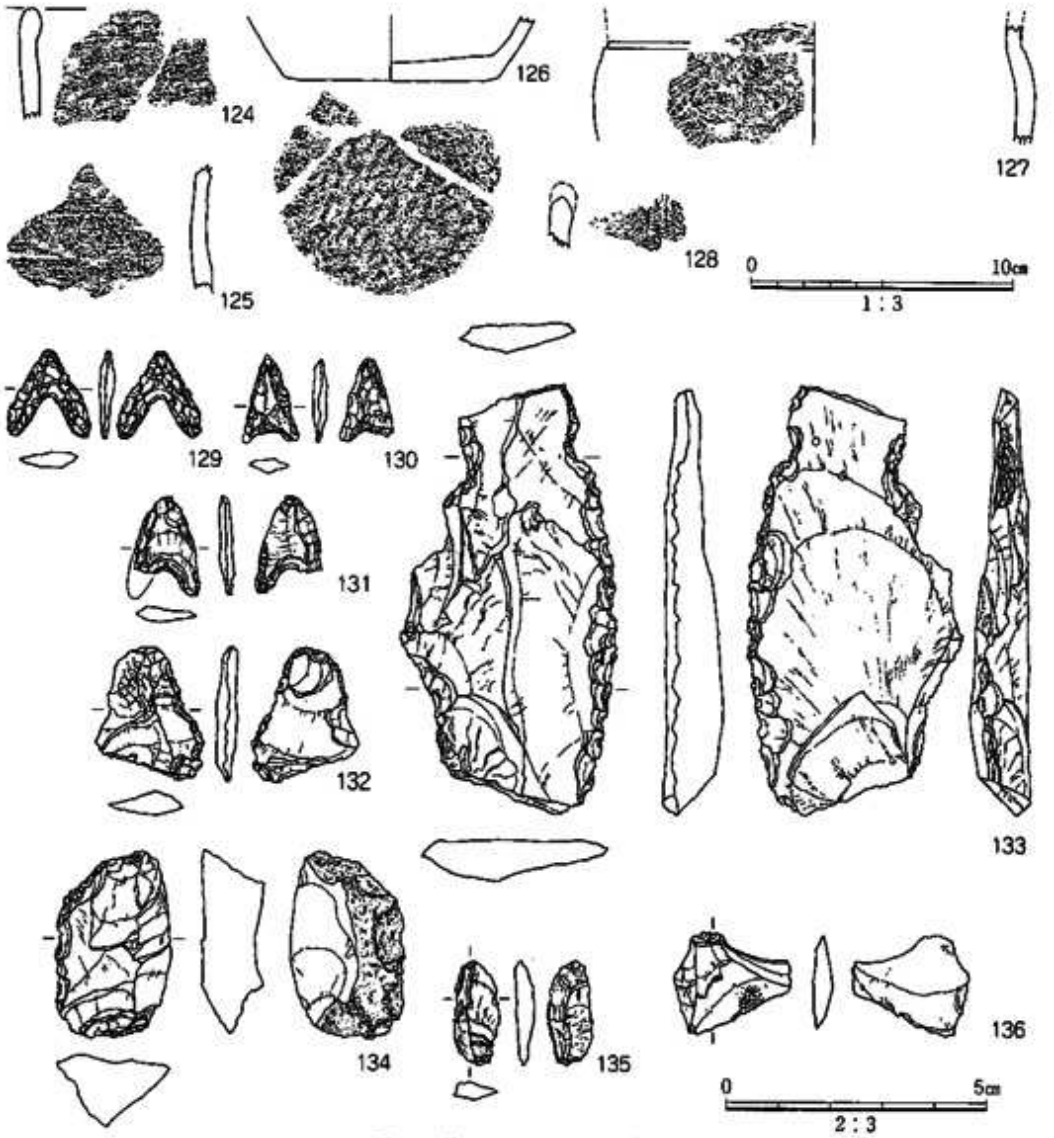


図27　第22・23層の出土遺物
（土器群1：127、土器群2：124～126・128、LC901：129～132・134～136、第23層基底：133）

には角閃石を多く含み、生駒西麓産と思われる。128は深鉢の口縁部近くに当ると思われ、外面には巻貝による擬似縄文がある。胎土にはチャートや長石を含み、非生駒西麓産と思われる。以上は縄文時代後期の北白川上層式に相当する。

LC901は南端の土器群2と重なる位置で検出された。石器遺物は現地で約50点を確認し、洗浄した土壌から約1,200点を補集した。これらはすべてサヌカイト製で、内訳は石鏃3点、同未製品1点、クサビに関連するもの2点のほか、剥片では最大長2cm以上が8点、1～2cmが34点、0.5～1.0cmは156点、0.5cm未満のものが1,018点で、ほとんどを最大長0.5cm以内の砕片が占める。また剥片の総重量は18.41gで、20gにも満たない。このことから、接合関係はないものの、石鏃などの小型品を作るために、素材となるさほど大きくない剥片を持ち込んで、ここで押圧剥離による石器製作を行ったのち、製品のみを持ち去ったと推定される。出土遺物のうち7点を図示した。

129～131は凹基無茎式石鏃である。なお、129・130はその形態から縄文時代前半と考えられ、LC901が土器群と同時期とすれば、これに伴うものではないであろう。131～136はLC901に伴う遺物と考えられる。131は素材の面を両面に残し、その周囲に粗い剥離を加えて側辺を作っている。抉りは浅く、一方の脚は折れている。折れの後で加えた剥離はない。先端付近には自然面が残る。加工途中に折れたため廃棄したとも考えられる。132は石鏃未製品である。縦に長い厚さ約0.4cmの剥片の周囲に剥離を加えているが、左図右側辺の剥離が末端でステップとなり、この部分にさらに調整を加えることを困難にしている。このため廃棄したのであろう。なお、左図左上の剥離面の周辺には縦横に細かいひび割れが入っている。134はクサビ本体である。図の上方を打縁、下方を刃縁として使用しているが、打撃の回数は少ないと思われる。135はクサビ本体から剥落した剥片と思われ、背面下方には、細かな剥離が見られる。主剥離面は多方向から加わった力で割れている。136は剥片で、背面側に細かいひび割れが入っている。図版32－137は第23層から出土した石英斑岩製の用途不明品である。平面形は三角形に近く、断面形は下に向って広がっている。最大長8.5cm、最大幅6.0cm、最大厚5.6cm、重量201.8gである。

なおこのほかに、調査区の北では第23層の基底からスクレイパーが出土した。133は縦長の剥片の末端部分に左右から抉りを入れて、つまみとして使用している。左図の右側辺を刃部としたと思われるが、もう一方にも細部調整が見られる。

第５節　動物遺体の調査結果

１）1994年度出土資料の概要

動物遺体は表６に示す42件が出土した。うち40件は長原遺跡西地区で、残り１件ずつが同中央・東南地区で、現場作業中に発掘したもので、水洗選別によるものはない。出土状況は遺構内でまとまっていたもの(資料22～24)、地層中である程度まとまっていたもの(資料１～６、７～15、16～20、27～37)のほかは、単独かそれに近い状況で見つかった。これらは古墳時代中期～室町時代に属し、なかでも飛鳥時代と鎌倉・室町時代のものが多い。

資料の取上げ・保存処理・同定・分析は、[久保和士1996]と同様な方法で行った。同定の結果、遺存状態がよいものは下記の２綱４種に属することが判明した。

二枚貝綱　Bivalvia
　イシガイ科　Unionidae
　　属種不明　gen. et sp. indet.
哺乳綱　Mammalia
　ウマ科　Equidae
　　ウマ　*Equus caballus* Linnaeus
　ウシ科　Bovidae
　　ウシ　*Bos taurus domesticus* Gmelin
　シカ科　Cervidae
　　シカ　*Cervus nippon* Temminck

２）西地区出土資料の記載

各資料の同定結果は表６に、ウマの歯および頭蓋骨の計測値は表７に記した。[Driesch, A. von den. 1976]に基づく肢骨の計測値は文中で述べる。以下、西地区から出土した比較的良好な資料について述べる。

資料１～６　94－３次調査地の室町時代に属する作土第5b(長原3B)層から出土した。資料１は調査区北半部から、３・４は南部から出土している。種が判明した４件はすべてウマで、ほかにウマあるいはウシの肢骨と臼歯の破片が各１件見られた。ウマの出土部位は上顎第３後臼歯M^3および下顎M_2が各１点、臼歯破片が１件、中足骨の破片が１点である。M^3およびM_2は歯根の形成初期に当り、全歯高から計算して６才前後に年齢推定された。

資料７～15　94－３次調査地の鎌倉時代に属する作土第7b(長原4Bi)層から出土した。資料８・13は北部、９・14が中央、ほかは南部から出土している。イシガイ科の一種を含む二枚貝綱は殻皮だけが遺存していた。左右の殻が合わさったままのものが１点見られたので、当層準形成時に生息していたものが自然死した可能性が高い。奈良時代末～平安時代初めに属する資料21も同様な成因が推測される。哺乳類のうち種が判明した４件はすべ

表6　動物遺体一覧表

資料番号	地区区分	調査次数	層位	遺構	時期	大分類	小分類	部位	左右	部分	備考	出土位置	File No.
1	西地区	NG94-3	第5b(NG3)層		室町	哺乳類	ウマ	下顎歯	左	M_2	歯根形成初期	北半部	940010
2	西地区	NG94-3	第5b(NG3)層		室町	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨幹,破片3点	中手骨or中足骨か？,破面磨滅		940011
3	西地区	NG94-3	第5c(NG3)層		室町	哺乳類	ウマ	上顎歯	右	M^3	歯根形成初期	南部	940013
4	西地区	NG94-3	第5c(NG3)層		室町	哺乳類	ウマ	臼歯	?	破片9点		南部	940013
5	西地区	NG94-3	第5c(NG3)層		室町	哺乳類	ウマ	中足骨	?	骨幹,後側			940012
6	西地区	NG94-3	第5c(NG3)層		室町	哺乳類	ウマorウシ	臼歯	?	破片1点			940012
7	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	二枚貝類	イシガイ科	殻皮	?	破片4点	合殻1点あり	南端	940017
8	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	二枚貝類	不明	殻皮	?	破片5点		北部	940014
9	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	哺乳類	ウマ	上顎歯	右	M^2	歯根形成初期	中央1/3部分	940015
10	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	哺乳類	ウマ	下顎骨	右	[P_3]	歯根発達	南1/3部分	940016
11	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	哺乳類	ウマ	下顎骨	右	下顎枝,破片		南1/3部分	940016
12	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	哺乳類	ウマ	肩甲骨	右	背側欠,関節窩後縁欠		南端	940018
13	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨幹,破片20点		北部	940014
14	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨幹,破片1点		中央1/3部分	940015
15	西地区	NG94-3	第7b(NG4Bi)層		鎌倉	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨幹,破片2点		南端	940017
16	西地区	NG94-3	第8(NG4Bii)層		鎌倉	哺乳類	ウマ	切歯骨	左+右	L I1(I2I1)/I1~C I R	♂,8才	南部	940009
17	西地区	NG94-3	第8(NG4Bii)層		鎌倉	哺乳類	ウマ	上顎歯	左	M^1	歯根形成	南部	940009
18	西地区	NG94-3	第8(NG4Bii)層		鎌倉	哺乳類	ウマ	上顎歯	右	P^4		南部	940009
19	西地区	NG94-3	第8(NG4Bii)層		鎌倉	哺乳類	ウマ	脛骨	右	骨幹		北1/3部分	940019
20	西地区	NG94-3	第8(NG4Bii)層		鎌倉	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨幹破片		南部	940009
21	西地区	NG94-3	第9(NG5)層		奈良末~平安初	二枚貝類	不明	殻皮	?	破片1点	合殻		940020
22	西地区	NG94-5	第4層基底面	SD401	14世紀後半	哺乳類	ウマ	頭蓋骨	左+右	L顎[M^3~C/I^3~M^3]R,頭頂骨・後頭骨・側頭骨・鼻骨・左切歯骨欠	♂,8~9才		940008
23	西地区	NG94-5	第4層基底面	SD401	14世紀後半	哺乳類	ウマ	上顎骨	左	[C]	♂,22より若い		940008
24	西地区	NG94-5	第4層基底面	SD401	14世紀後半	哺乳類	ウマ	寛骨	左	寛骨臼付近	外側に前後方向の切痕多数		940008
25	西地区	NG94-46	第15(NG4cii)-16(NG5)層		奈良末~平安	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨幹,破片5点			940593
26	西地区	NG94-46	第18b(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウシ	下顎骨	右	[M_1~M_3],下顎枝欠	9才前後		940022
27	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマ	上顎歯	右	I^2	9~10才	骨2	940027
28	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマ	橈骨+尺骨	右	ほぼ完形		骨4	940034
29	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマ	中手骨	右	近位端欠		骨6	940029
30	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマ	坐骨	右	寛臼から体	破片多数から	骨7 寛骨と推定	940023
31	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマ	大腿骨	左	遠位端	未癒合の骨端と推定	骨10	940025
32	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマ	脛骨	左	近位端	未癒合	骨4	940034
33	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマ	中足骨	左	ほぼ完形		骨1	940026
34	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウシ	寛骨	左	ほぼ完形,坐骨枝欠	左右未癒合	骨5	940035
35	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウシ	中節骨(外側)	?	ほぼ完形		骨9	940032
36	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨端,破片1点		骨3	940028
37	西地区	NG94-63	第17(NG6B)層		飛鳥	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨端,破片4点		骨8	940030
38	西地区	NG94-63	第19(NG7A)層		飛鳥	哺乳類	ウマ	上腕骨	左	骨幹,遠位外後側		骨A	940024
39	西地区	NG94-63	第19(NG7A)層		飛鳥	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨幹,破片1点			940031
40	西地区	NG94-63	第20(NG7B)層		古墳中後期	哺乳類	ウマ	脛骨	右	遠位端,内側		骨B	940033
41	中央地区	NG94-20		SX401	鎌倉~室町	哺乳類	シカ	仙骨+左寛骨		仙骨は右1/5欠	交連状態で切断		940021
42	西南地区	NG94-4	第4(NG4A・B)層		鎌倉~室町	哺乳類	ウマorウシ	肢骨	?	骨幹,破片3点			940591

Iは切歯、Cは犬歯、Pは前臼歯、Mは後臼歯を示す。
[]は相当する範囲の顎骨があること、()は相当する歯が脱落していることを示す。

てウマで、ほかにウマあるいはウシの肢骨片が３件見られた。ウマの出土部位は上顎M^2、第３前臼歯P_3を含む右下顎骨２件、右肩甲骨である。M^2は歯根形成初期に当り、全歯高から計算して６才前後に、P_3は歯根がよく発達し、11~12才に年齢推定された。肩甲骨はSLCが62㎜と計測でき、これより体高を計算すると約135㎝となる。

資料16~20　94－３次調査地の鎌倉時代に属する水成層第８(長原4Bii)層から出土した。資料19は調査区北部から、ほかは南部から出土している。種が判明した４件はすべてウマで、ほかにウマあるいはウシのものと思われる肢骨片が１件見られた。ウマの出土部位は

表7　ウマ臼歯計測値一覧表

No.	計測値名	1	3	9	10	17	18	22♂	森の宮128♀	城山♀	トカラ馬♂	御崎馬♂	木曽馬♂
Cr.21	歯槽間縁の長さ							82.0	85.2	83.4	80.6	89.6	102
Cr.22	臼歯列長							167.0	166.0	159.9	151.7	163.8	160.1
Cr.22a	同上(咬合面)							164.0	159.9	156.4			
Cr.23	後臼歯列長							77.6	77.9	75.8	70.5	77.2	74.2
Cr.23a	同上(咬合面)								71.9	71.8			
Cr.24	前臼歯列長							93.0	90.3	86.2	82.6	90.0	86.7
Cr.24a	同上(咬合面)								89.5	86.8			
Cr.25	P2							35.3×24.7	35.3×26.6	33.7×23.0			
Cr.26	P3							28.0×25.2	28.1×27.4	26.7×25.7			
Cr.27	P4						− ×32.0	27.7×25.0	26.8×25.7	25.8×26.9			
Cr.28	M1					29.8×29.9		24.7×24.5	24.0×26.8	21.0×25.8			
Cr.29	M2			28.4×30.3				25.2×23.7	24.6×25.5	22.1×24.7			
Cr.30	M3		30.0×25.8					25.6×20.3	21.3×18.2	31.6×22.8			
Cr.48	上顎最大幅							124	120	112.4	116.6	121.0	131.7
Ma.10	P3				29.3×18.3								
Ma.13	M2	26.7×15.3											
	全歯高	57	53	52	31	51		P2:32					
	出典							久保 1996	松井 1986		西中川・松元 1991		

単位 mm。No. は［Driesch1976］の計測項目番号
1～22 の P2～M3 は咬合面エナメル質における近遠心長×頬舌幅
全歯高は［西中川・松元 1991］の Total Height cent. p.

切歯骨、上顎P^4・M^1、脛骨である。切歯骨には切歯4点と右犬歯Cが植立し、切歯の咬耗度からみて年齢は8才、犬歯の大きさからみて性別は牡と推定される。一方、M^1は全歯高から計算して5～6才と年齢推定され、切歯骨とは別個体のものと考えられる。脛骨は骨端が欠損し、骨幹ほぼ中央での幅は36.2㎜で、これより体高を計算すると約126㎝となる。

資料22～24　94－5次調査地の室町時代に属する南北溝SD401の底部から出土した(図11)。すべてウマと同定され、比較的遺存状態のよい頭蓋骨と、上顎骨・腸骨の破片である。頭蓋骨22は左右がずれた状態で出土したが、破片を一旦ばらして保存処理した後、組み立てた。その結果、口蓋部の左右の連結部分や、歯と歯槽の間に歪みが残ったが、ほぼ旧状をうかがえるようになった。欠損部分は、冠状縫合から前頭骨の頬骨突起・側頭骨の頬骨突起にかけての部分から後位のすべて、右側の一部を除く切歯骨である。欠損部付近には人為的な傷は認められなかったが、特に後部の欠損の仕方は不自然に思え、人為的な破壊による可能性も考えられる。歯は右側が第3切歯I^3～M^3、左側がC～M^3が植立する。犬歯の大きさから性別は牡といえる。年齢はI^3の咬耗の程度やP^2の全歯高からみて8～9才と推定される。計測は歪みがあるためさほど多くの個所で行えなかったが、表7で大阪市森の宮遺跡(7世紀)・八尾市城山遺跡(8世紀中頃)出土の牝馬、在来馬であるトカラ馬・御崎馬・木曽馬の牡馬と比較してみると、臼歯列の計測値では森の宮遺跡例や御崎馬に近いが、歯槽間縁の長さはこれらよりも短い。

上顎骨23はCが植立し、22とは別個体の牡のものである。犬歯の状況からみて22よりも若い個体と思われる。腸骨24は寛骨臼と腸骨体外側の破片で、寛骨臼から延びる稜線付近にこれと直交方向の切痕が多数認められる。これらの切痕は寛骨と大腿骨の連結を外した

際に付けられたものと推測される。

資料26　94－46次調査地の飛鳥時代に属する水成層第18b(長原6Bii)層から出土したウシ右下顎骨である。後臼歯が植立し、歯槽での後臼歯列長は91㎜である。この値は口之島牛牡や見島牛牝に近い[西中川駿・松元光春1991]。各歯の[Grant, A. 1982]による咬耗段階(TWS)はM_1がl、M_2がk、M_1がjで、これらをスコアで表示したMWSは45である。このMWSを[Chaix, L. & Méniel, P. 1996　p.27]のグラフに当てはめると年齢は8～9才と推定される。ただし、気候・風土が異なる欧米のデータに基づく方法による推定値なので、大まかな範囲内のものとしかいえない。

資料27～37　94－63次調査地の飛鳥時代に属する第17(長原6Bi)層から出土した。ウマは7点あり、I^2は咬耗の程度からみて9～10才と年齢推定される。前肢では癒合した橈骨と尺骨、中手骨がある。前者の橈骨最大骨長は335㎜で、体高は137cmと計算される。後者の遠位端最大幅は48.5㎜で、最大骨長は22.6cm、体高は138cmと計算される。後肢では寛骨・大腿骨遠位端・脛骨近位端・中足骨があり、大腿骨と脛骨は未癒合の骨端と思われる。[Sisson, S. 1953]によれば両骨端とも3.5才で骨幹と癒合するとされ、これらの資料はそれよりも若い個体のものと考えられる。中足骨は最大骨長が257.5㎜で、体高は128cmと計算される。以上から、ウマ遺体は部位の重複がないものの、2個体以上のものであることがわかる。ウシは2点同定され、ほぼ完形の寛骨と中節骨がある。

以上のほか、94－46次調査地では、古墳時代中期～飛鳥時代に属する下位層準からもウマ遺体が見つかっている(資料38・40)。

3)小結

西地区出土の動物遺体はすべて「馬池谷」周辺から見つかったものであった。しかも、散漫に分布するのではなく、飛鳥時代の94－63次調査地、鎌倉・室町時代の94－3次調査地といったように、時期によって継続的に捨てられる場所が決まっていた傾向がうかがわれる。特に、前者は南接する95－14次調査地で出土した牛馬骨群と連続する可能性があり、かなり広域に分布すると思われる。また、動物利用の性格を考える上で、いずれの時期のものも複数個体からなっていたことは重要で、飛鳥時代の資料中に若齢個体が、中世の資料中に解体痕が認められたことも貴重な例となろう。そして、時期を通して動物種をみた場合、古墳時代中期にはウマ、飛鳥時代にはウマ・ウシ、中世にはウマという組成であり、その意味を考えるには、長原遺跡全体の資料中に位置づけてみる作業が必要となろう。

第6節　小結

西地区では今年度、馬池谷に当る地点の調査が中心となった。このうち、94－3・17次調査と94－63次調査が谷の中心部、94－5・46次調査が東肩部分に当る。この谷地形については、94－46次調査では東側斜面が東に向って緩やかに上がることが判明し、谷の肩を確認することはできなかった。これは南で行われたNG93－34次調査で確認されているのと同様の状況で、馬池谷が東側により拡がる谷地形をもつことを示している[大阪市文化財協会1999b]。また、94－63次調査では谷底までを初めて平面で調査することができ、谷中心部の埋没以前の状況をほぼつかむことができた。しかし、これ以外の調査では掘削深度の関係から谷底の完掘はできなかった。以下では時代順に当地区の土地利用状況について述べる。

まず、江戸時代は各調査で作土層が確認され、水田として多くが利用されていたようである。作土下面は、94－5次調査でTP+10.0～10.1m、94－46次調査でTP+9.3～9.5m、94－3・17次調査でTP+9.8～9.9m、94－63次調査でTP+8.7mであり、この時期にも谷地形が特に北で深くなる窪地となって残っていたことがわかる。

室町時代でも各調査で畦畔が確認された。当地域の周辺では、94－46次調査に西接する93年度の各調査でも畦畔・溝などが検出されており、耕作地はかなり広範囲に拡がっていたと推定される[大阪市文化財協会1999b]。ただし、長原3層段階の水成堆積物はこれらの調査の多くで確認されており、この時期にも洪水による谷の埋積は続いていたといえよう。

平安～鎌倉時代では、水田遺構や流路が検出された。これらの遺構は最終的に長原4A層の水成層によって埋積あるいは流失している。94－3・17および94－46次調査でも水田面が確認されたが、作土は淘汰が不良でそれぞれの上に薄い水成層が認められる。谷の内部ではこの時代にもまだ、不安定な状態だったといえよう。なお、94－5次調査では調査区の全体が長原4A層で埋る溝SD402に重なっており、底は段丘構成層まで削られていた。溝はNG86－41次調査で検出されたSD18につながると考えられ[大阪市文化財協会1993b]、流れの方向は近代の生活道路に形を変えて踏襲されたようである。

飛鳥～奈良時代では馬池谷の東斜面に位置する94－46次調査で水田遺構が確認されている。当調査地で耕作が認められるのは、長原6A層の段階からである。長原5層の段階でかなり谷は埋積して地形が平坦になり、その後時期を追って水田が営まれている。ここで、

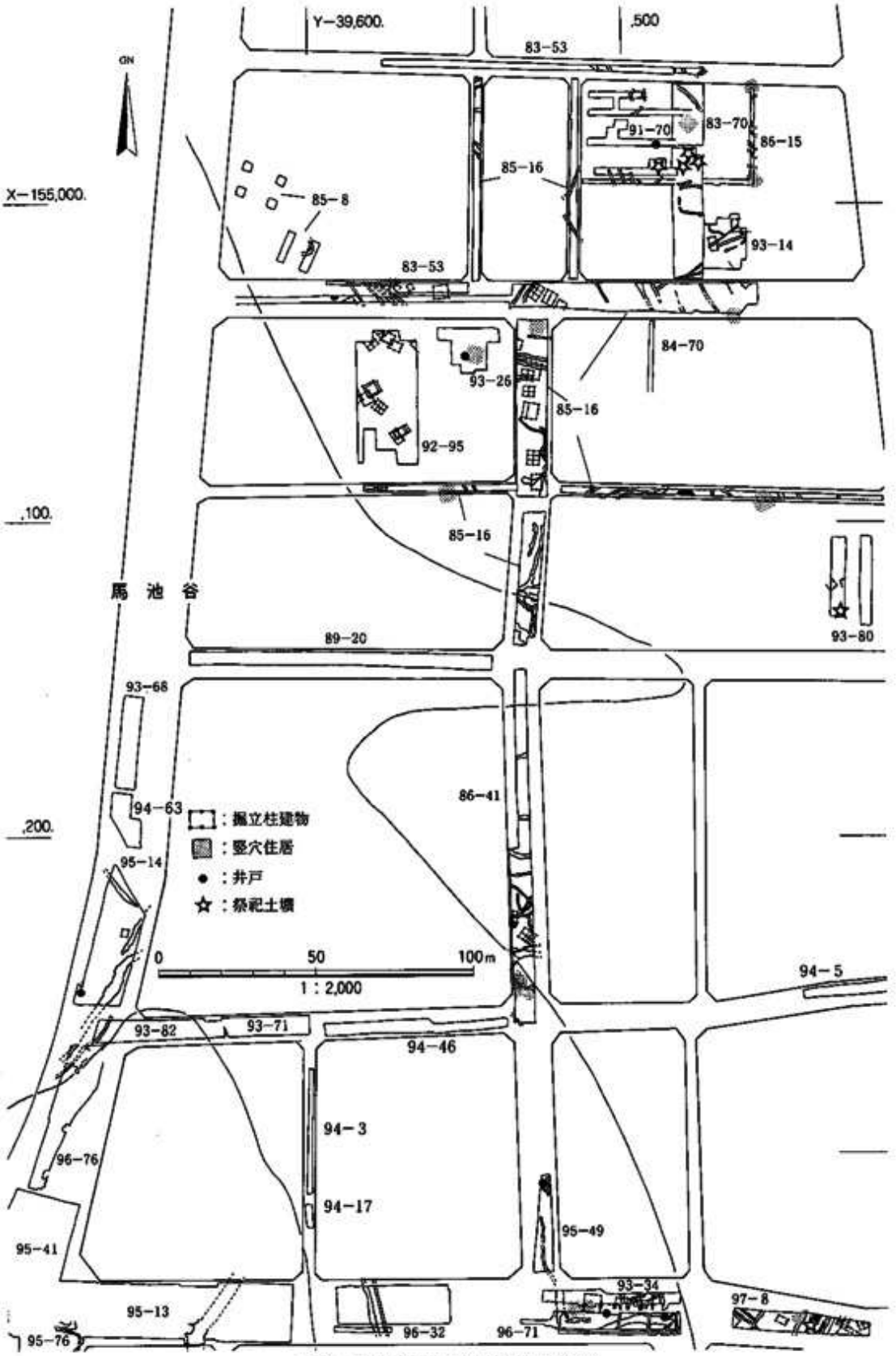


図28　西地区における古墳時代の遺構

長原6A層に相当する水田面と長原４層段階の水田面では畦畔や溝状遺構がほぼ同じ位置に検出されており(図22)、奈良～平安時代にかけては土地区画がある程度継承されていたようである。また、谷の中心に近い部分では畦畔の方位で、正南北・正東西をとらずにずれたものがあることが指摘できる。地形に対応したためなどの理由が考えられるが、当時の水田の一筆の形状を考える資料といえよう。一方、谷の中心部となる94－63次調査では作土層の可能性のある地層(長原6A～7A層)が確認され、ヒトやウシなどが頻繁に入込んでいたことが判明した。しかし、水田として利用されていたという積極的な証拠を見つけることはできなかった。たとえ利用されていたとしても、微高地での水田景観とは異なっていたことが予想される。今後、谷内部での微細な水田遺構の存在に留意する必要があろう。同じく谷の中心部に位置する94－３・17次調査では馬池谷に流れ込んでいたと考えられる溝が検出されたが、水田面は確認されなかった。

古墳時代においては、今年度の調査地内で遺構を確認することはできなかった。しかし、周囲では馬池谷の東斜面を中心に集落遺構が検出されている(図28)。東斜面は西斜面に比べて傾斜が緩やかなことが知られており、住居はこの斜面から谷の内部にかけても立地している。今年度の調査でも東斜面に立地する94－46次調査では、古墳時代の土器や滑石製品・埴輪などが比較的多く出土しており、居住地が近いことを示唆している。ここで、これまで検出されている竪穴住居や掘立柱建物の分布について見ると、いくつかのまとまりはあるようだが規則的に配置されているとはいえず、このなかで特に突出する建物もない。なお、住居の周辺には土器や炭・焼土・滑石製品などが大量に出土する遺構が点在している。これらは祭祀に伴う廃棄土壙と考えられ、今後、その出土遺物や分布状況などを詳細に検討することによって、集落での祭祀の内容を明らかにすることができるだろう。

このほか、今年度は西地区で初めて縄文時代後期の遺物がまとまって検出されたことが特筆される。94－63次調査では長原９層の遺物包含層が残存し、縄文時代後期の土器・石器が数多く出土した。出土した地点は、馬池谷の中でも底から西側斜面へ移行する途中の若干高い場所に当る。これまで長原遺跡の北東部では後期の土器が若干出土しているが、西部での出土は初めてである。なお、調査区の南東に位置するNG93－71次調査地では晩期の土器片が出土しており[大阪市文化財協会1999b]、今後、谷の西側斜面では縄文時代後～晩期の遺構の確認が期待されよう。

第Ⅲ章　長原遺跡西南地区の調査結果

第１節　94－18次調査

１)層序と各層出土の遺物

ｉ)層序(図29、表８)

第Ⅰ章第２節で述べたように、調査区の中央は大きく攪乱を受けていた(図30)。これより西では現代盛土の直下が長原13層となり、上位の層は遺存していなかった。東半では一ケ塚古墳の周濠内に長原１～７層までの地層が良好に堆積しているのが認められた。各層についての詳しい記載は表８で述べ、以下ではその特徴について略記する。

第１～12層は中央よりも東で確認された層である。第１層は近世の陶磁器を包含し、長原１～２層に相当する。本層の下面では東端で浅い落込み状の遺構を検出した。

第２層は２枚に細分され、瓦質土器・瓦器・土師器を含み、長原３層に相当する。

第３層はマンガンを含む作土層で、瓦器や土師器を含み、長原4Bi層に相当する。

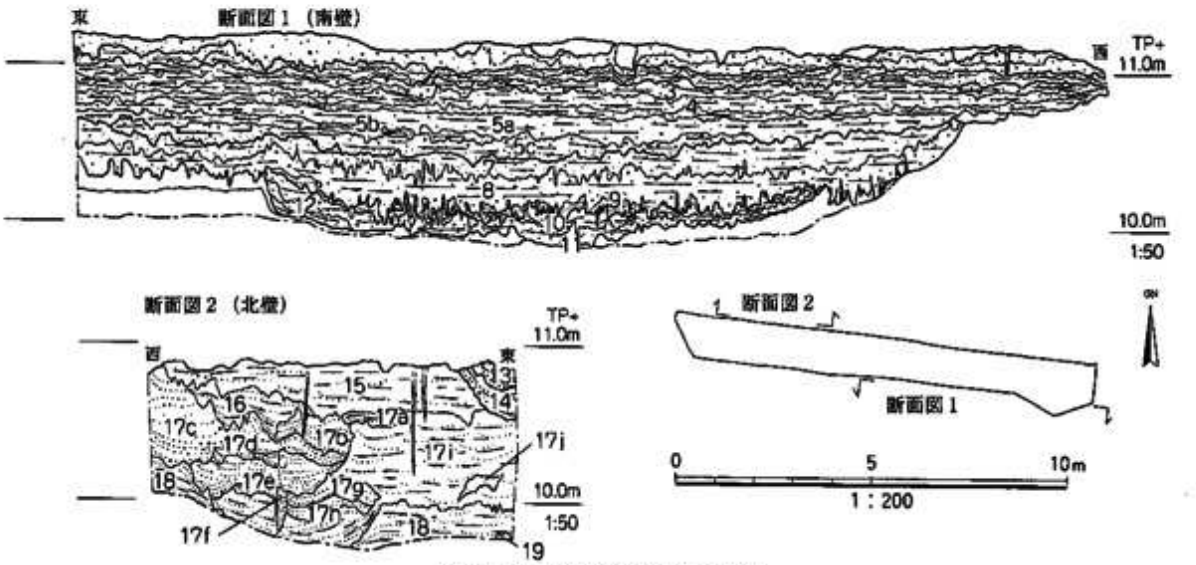


図29　94－18次調査の地層断面

表8　94－18次調査の層序

標準層序	層序	層　相	層厚(cm)	遺　構	遺　物	特徴	掲載遺物
NG1	0層	現代作土		▼土壙			
NG1～2	1層	含礫黄褐色(2.5Y5/4)粗～中粒砂	10～20		近世陶磁器		
NG3	2a層	含礫～中粒砂質黄褐色(2.5Y5/4)シルト質極細粒砂	≒10		瓦質土器・土師器・瓦器		138～142
	2b層	含礫～粗粒砂質黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルト	≒10		瓦質土器・土師器・瓦器		
NG4Bi	3層	含礫にぶい黄褐色(10YR5/4)粗～細粒砂混り粘土質シルト	5～12		瓦器・土師器	作土	143～145
NG4Bii	4a層	含礫黄褐色(10YR5/6)細粒砂質シルト～極細粒砂	≒10		白磁・瓦器・土師器	作土	146～152
	4b層	含礫～粗粒砂オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト	≒10		白磁・瓦器・土師器	作土	
	4c層	含礫～粗粒砂にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト	≒10	▼SD401～403,SK401	白磁・瓦器・土師器	作土	
NG4Biii～4C	5a層	含礫～粗粒砂オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土質シルト	8～16		黒色土器・土師器	作土	153～155・157
	5b層	含シルトにぶい黄橙色(10YR6/4)粗～中粒砂	≒8		黒色土器・土師器	作土	
	5c層	含礫～粗粒砂灰黄褐色(10YR5/2)極細粒砂混り粘土質シルト	5～16		黒色土器・土師器	作土	
NG5	6層	褐色(7.5YR4/6)礫～極粗粒砂～細粒砂				水成	
NG6	7層	含粘土にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト	10～20	▲陥込み	須恵器・埴輪	作土	156
	8層	含礫黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト	20～30	▼SR601、陥込み	須恵器・埴輪	作土	
	9層	暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルト			須恵器・埴輪	水成	
NG7	10層	黒色(5Y2/1)粘土～粘土質シルト	5～20				
	11層	含細粒砂暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト	10～20	一ケ塚古墳	埴輪	腐植質土	
	12層	含礫～細粒砂灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルト	15～30			堆丘流土	
NG13B	13層	含礫にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト～極細粒砂	≒10	▲SD601	須恵器・埴輪	火山灰	
NG14	14層	含礫にぶい黄橙色(10YR7/3)シルト	≒20				
	15層	含礫明黄褐色(10YR6/8)細～中粒砂混りシルト	10～40				
	16層	含礫灰黄色(2.5Y7/2)シルト質細粒砂	10～30				
	17a層	含シルト褐色(10YR4/6)細粒砂	≒10				
	17b層	含礫明黄褐色(10YR7/6)中～細粒砂	12～24				
	17c層	含礫浅黄色(2.5Y7/4)極粗～細粒砂	10～60			水成	
	17d層	にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒砂混り細粒砂	≒10				
	17e層	含礫灰黄色(2.5Y7/2)粗～中粒砂	5～30			水成	
	17f層	灰黄褐色(10YR6/2)粗～中粒砂					
	17g層	含シルト褐色(10YR6/4)粗～極細粒砂	≒10			水成	
	17h層	含礫黄褐色(10YR5/6)粗～中粒砂	≒10			水成	
	17i層	含細粒砂褐色(10YR4/6)シルト					
	17j層	含中粒砂明褐色(7.5YR5/8)シルト				水成	
	18層	含細粒砂にぶい黄色(2.5Y6/3)極細粒砂質シルト	5～30			水成	
	19層	灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂				水成	

第4層は3枚に細分される作土層である。4a層にはマンガン、4b層は鉄分を含み、4c層は暗色帯である。調査区東半の全域に分布するのは4c層だけで、この下面では溝が検出された。本層は白磁・瓦器・土師器などを含み、長原4Bii層に相当する。

第5層は3枚に細分される作土層で、5a層にはマンガンを含む。本層は黒色土器や土師器を含み、長原4Biii層～4C層に相当する。

第6層は長原5層に相当する水成層で、北西～南東方向に分布し、東壁で確認できる。

第7～9層は埴輪以外に7世紀前半～8世紀末葉の須恵器を含み、長原6層に相当する。7・8層は鉄分を含む作土層で、7層の上面と8層の下面で踏込みを検出した。9層は一ケ塚古墳の周濠内だけに薄く分布する水成層である。なお、8・9層は平面的に判別が困難であったため同時に掘削し、第8層の下面で墳丘裾から北西に延びる畦畔を検出した。

第10層の上面は上層からの踏込みの影響で凹凸が激しく、またラミナは植物による擾乱をうけている。また、本層は炭化木やその破片を含む。長原7層に相当する。

第11層は周濠基底堆積物である。一ケ塚古墳のものと考えられる埴輪は、本層からもっとも多く出土した。第12層は墳丘裾にだけ分布し、墳丘上から崩落した流土と思われる。

以下の第13～28層は調査区の西半でのみ検出された地層で、長原13層以下に対応する。

第13層は中央に近い部分にのみ分布し、透明扁平ガラスを含むことから、長原13B層下部の平安神宮火山灰層準に相当すると考えられる。第14層の分布範囲は13層とほぼ同じで、長原14層に相当する。NG93－6・7・18次調査で、同一層準と考えられる第12層の下面はTP+10.7mであった[大阪市文化財協会1999b]。本層は調査区の東端にしか見られないが、下面はTP+10.8mであった。その下位の第15層に見られる乾痕は地層内の中央で止まるものと、下部から下の層へ突き抜けるものが見られる。第17層は粒子の違いによって、

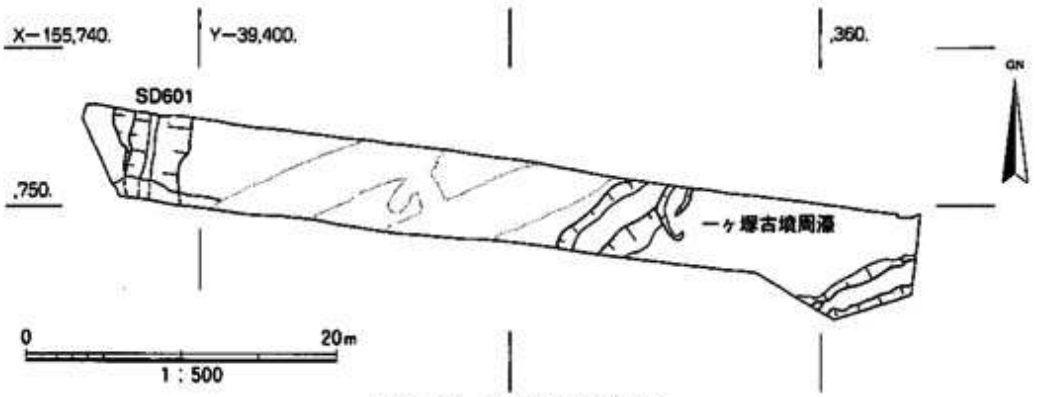


図30　94－18次調査地全体図

a～jに細分したが、同時異相と思われる。

ii)各層出土の遺物

a．土器・石器(図31、図版33・39)

138～142は第2層から出土した。138は瓦器椀で、高台は退化しており底部内面には平行線状のヘラミガキを施す。139は瓦器皿で、内外面ともヘラミガキの有無は不明である。140～142は土師器小皿である。3点とも口縁部は内湾した後に端部を内上方につまみ上げぎみにする。胎土には黒雲母を含む。140は他に比べ薄手である。14世紀前～中葉のものである。143～145は第3層出土遺物である。143は瓦器小皿で、内外面ともナデで調整し、ヘラミガキは見られない。144・145は土師器小皿で、ヨコナデで調整している。胎土は精良で黒雲母を含む。13世紀後葉～14世紀前葉であろう。146～152は第4層出土遺物である。146は白磁碗で、分厚い玉縁状口縁をもつ。12世紀中葉～13世紀前葉のものである。147～149は瓦器椀である。147の内面にはヘラミガキを施す。底部内面のミガキは文様として分化していると思われる。外面はユビオサエで調整している。148は内外面ともヘラミガキの痕跡が認められる。149は底部で、内面に平行線状のヘラミガキが見られる。150～152は土師器皿である。150・151は小皿で、上層出土の小皿よりも口径がやや大きい。152は中皿で、外面には2段のヨコナデを施す。153～155は第5層から出土した。153は黒色土器椀で、内面にはヘラミガキを施す。154は土師器高台付杯である。高台端部は面をもち、高

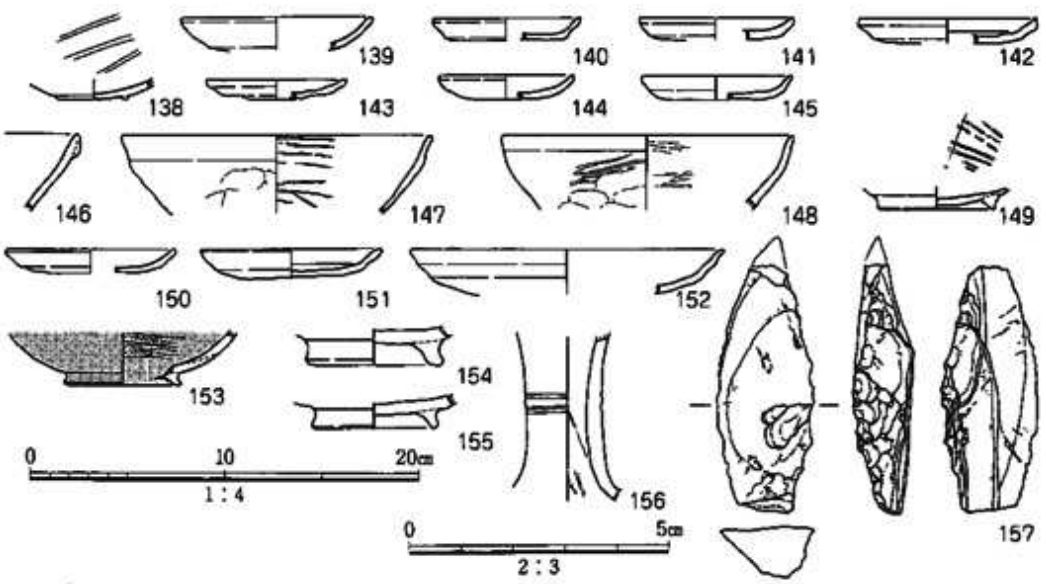


図31　各層出土の遺物

(第2層：138～142、第3層：143～145、第4層：146～152、第5層：153～155・157、第7層：156、縮尺は157：2／3、他：1／4)

さも1.3cmと高い。器壁は分厚く、胎土には砂礫が混り、焼成は良好である。155は土師器椀である。胎土・焼成ともに154とよく似ているが、高台は断面三角形で全体的に154よりも小ぶりである。これらは10世紀末葉～12世紀前葉のものである。156は第7層から出土した須恵器長頸壺で、頸部の中央に凹線が2条巡る。口縁部は緩やかに外反し、TK48型式のものと似る。ただし調整は粗雑で、平城宮Ⅵで見られる壺に属する可能性もあり、7世紀後葉～8世紀末葉と思われる。

このほかに調査区の東半では、遊離資料ではあるがナイフ形石器が出土している。157は第5層から出土した国府型ナイフ形石器で、一側縁を加工している。基部と先端は折れている。素材とした剥片の背面側では横長の剥片を2枚剥離している。

b．埴輪(図34・35、図版34・37)

各層からは多くの埴輪が出土している。これらの中には一ケ塚古墳のものと考えられる埴輪と、それより新しく、別の古墳に属すると思われるものとがある。一ケ塚古墳に属する埴輪については後にまとめて記載し、ここではそれ以外の埴輪について述べる。なお、ここで述べる埴輪の多くは、後述するSD601から出土した埴輪とよく似た特徴をもつ。

161は円筒埴輪の口縁部で、口径は21.4cmである。162は円筒埴輪の胴部で、円形のスカシ孔を有する。163は朝顔形埴輪の口縁部である。突帯は低く、内外面の調整はハケである。3点とも外面の調整は一次調整のタテハケのみで、Ⅴ期に属する。166は破片の上部に2つ、下部に1つのスカシ孔があり、また、中央に隆起した部分が残っていることから人物埴輪の顔の部分と判定した。2つ並んだスカシ孔が目、下部の長楕円形のスカシ孔が口、中央の隆起部が鼻である。鼻の両側と顔の周囲には線刻を施しており、黥面を表現している。窖窯焼成である。167は動物埴輪の足と思われる。おそらく鹿または馬形埴輪であろう。168は衣蓋形埴輪の立飾りの部分で、両側の器面をヘラ状工具で整え、その後、直線と曲線を混えた線刻を施している。窖窯焼成を行っており、時期はSD601で多数出土している埴輪と同じくⅤ期であろう。170は衣蓋形埴輪の基部で、笠部との接合部分に当る。接合部分には粘土を貼り足して、外面からユビオサエを行っている。

2)遺構と遺物

i)平安～江戸時代(図32)

第1(長原1～2)層下面では、東部で江戸時代以降と思われる不定形の土壙が検出された。これらはいずれも浅く、遺物は出土しなかった。

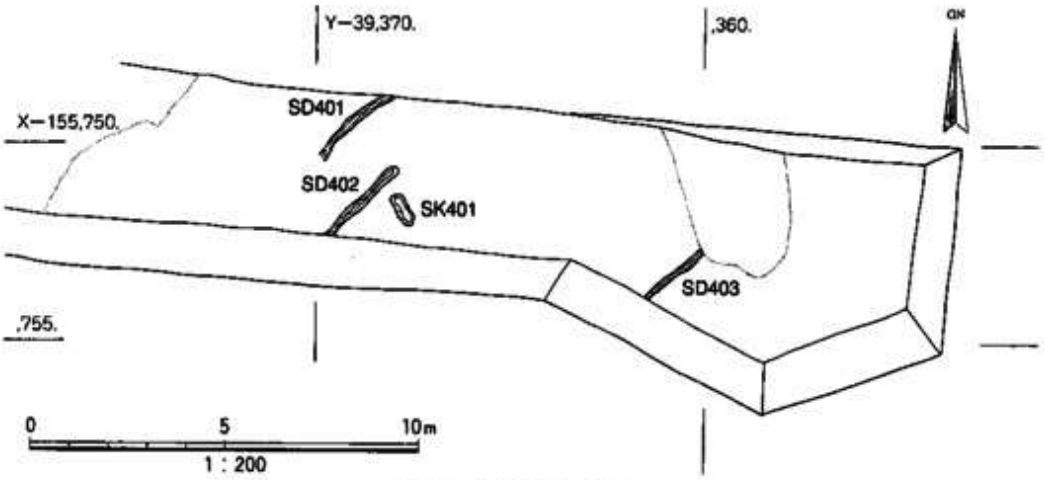


図32　平安時代の遺構

第4c(長原4Bii)層下面では、東半で平安時代の溝と土壙を検出した(図32)。

SK401は幅0.4m、深さ0.1m未満の浅い土壙で、遺物は出土しなかった。SD401は幅0.2m、深さ0.1m未満の浅い溝である。北東から南西方向を示し、本来は南西へも続くものであったと思われる。土師器の細片が出土した。また、SD402は幅0.25m、深さ0.1m未満の溝で、SD401と同様に浅く、北東から南西方向に延びる可能性がある。土師器の細片が出土した。SD403は幅0.2m、深さ0.1m未満の溝である。北東は攪乱に切られているが、北東から南西方向に続くものと思われる。これらの溝は3条とも同じ方向を示しており、同時期の耕作に係わると考えられる。

ii)古墳～奈良時代(図33～35、図版9・10・34・37)

第8・9層下面では東部で墳丘裾から北西に延びる畦畔状の高まりを検出した(図33、図版10)。SR601は幅0.3m、現存高は0.1mである。第8層段階で作られたが、第7層の段階で耕作に伴い削平されたと考えられる。このほか図示しなかったが、第7(長原6)層上面では東端で踏込みが多数検出された(図版9)。

SD601(図33～35、図版9・34・37)

調査区の西端(図30)で検出された幅約3m、深さ約2mの南北方向の溝で、西側の肩にはテラス状の平坦部がある。底は南側でTP+8.6m、北側でTP+8.9mで検出され、北へ流れていたと推定される。この溝はNG93－6次調査で検出されたSD601の北側の延長に当る[大阪市文化財協会1999b]。なお、北で行われた調査では溝の続きが検出されていないことから、溝は東西のいずれかに曲って流れていることがわかる。

溝内の堆積層は複数の水成層と大型のブロックで構成され、大きく6層に分けられた。

1層は粗粒砂質シルトのブロックからなる埋戻し土で、V期の埴輪を多数含んでいた。おそらく古墳を破壊した土で埋めたために、同時期の埴輪が混っているのであろう。2層は水成の粘土で、1層の埋戻し土によってラミナが変形している。本層の土壌を水洗したところ、窖窯焼成された埴輪のタガ片が見つかった。3層は段丘構成層とマンガンが沈着した地層のブロックからなり、西側から流れ込んでいる。これらのブロックには第13(長原13B)層以下が自然崩落したものもあると思われるが、人為的な埋戻しによるものも多数含むと考えられる。4層は東から流れ込んだ段丘構成層のブロックが混る層で、上部と下部

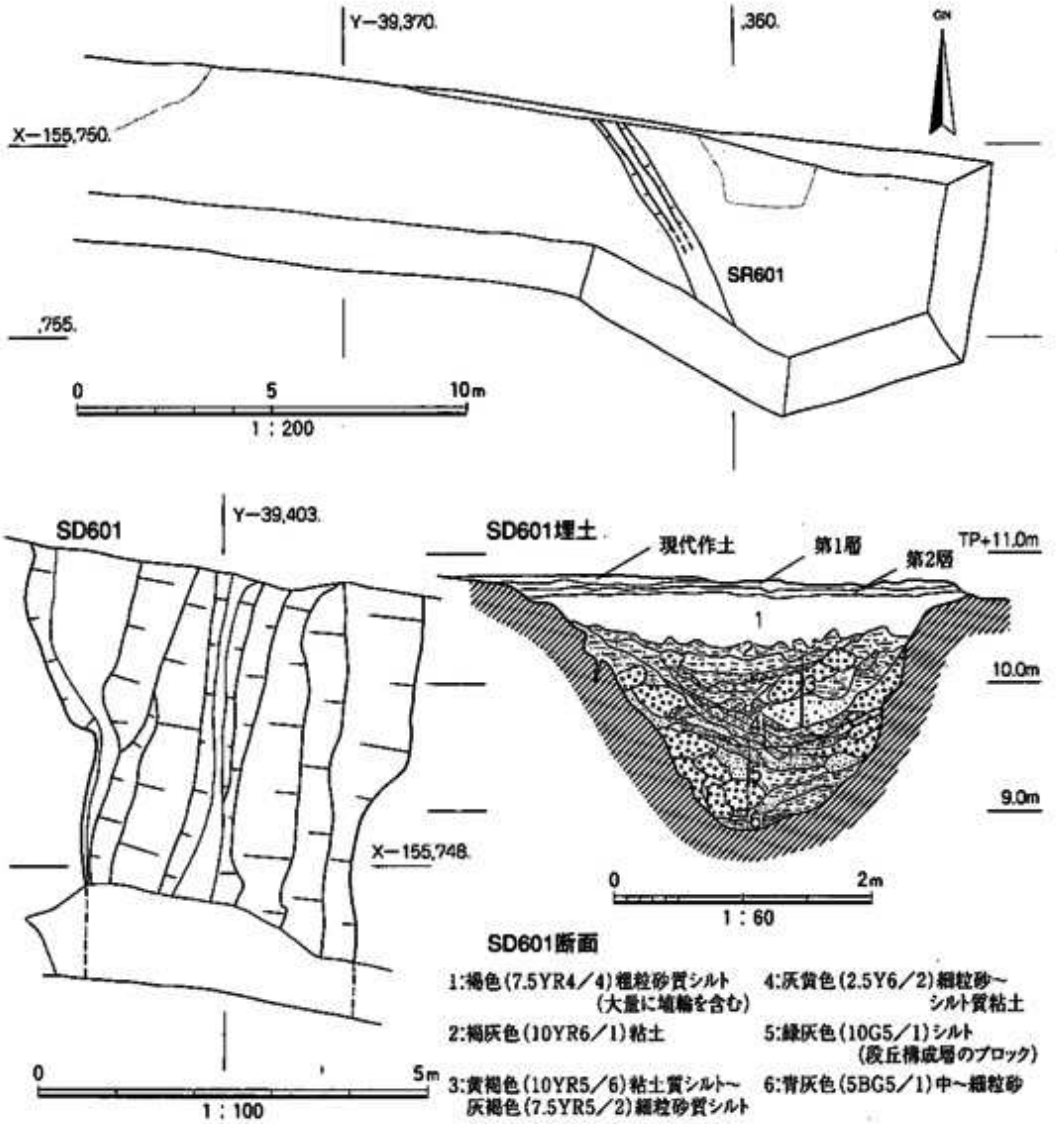


図33　SR601・SD601実測図

にラミナが見られる。5層も東から流れ込んだ段丘構成層のブロックで構成される。堆積状況から短期間のうちに形成された層と思われ、その要因として人為的な埋戻しが十分考えられる。6層は溝の最下部に薄く堆積する中～細粒砂の水成層である。なお、溝が埋った後に堆積した地層から出土した遺物の中でもっとも古いものは、8世紀末葉と思われる須恵器壺片で、埋戻した時期の上限を示す。また、3・4・6層からは遺物が出土せず、5層の最下部の土壌を水洗したところ、時期不明の埴輪片が検出された。

以上のように、SD601は5層最下部の遺物からみて、少なくとも古墳時代中期以降に掘削されたが、その後、短期間のうちに古墳の盛土などを利用して埋戻されたと考えられる。この溝のすぐ西側には馬池谷が南から北へ延びており、また、調査区の東には長原6B層段階の水路が南北にいくつも流れている[大阪市文化財協会1990a]。同時期の遺物がまったく出土しなかったため検証は困難であるが、SD601はこれら東側の水路群と同様の性格をもつ可能性が考えられる。

SD601からは古墳時代後期の埴輪が多く出土している。これらは本来、調査地付近に存在した古墳に伴っていたと考えられるが、古墳自体は未発掘である。そこで、以下ではこれらの埴輪について一括して記述したい。

158～160・164・165は円筒埴輪である。158・160は両者ともに復元口径22cmで、口縁部は直立する。円形のスカシ孔が同一段の対向する位置に存在したと思われる。粗いタテ

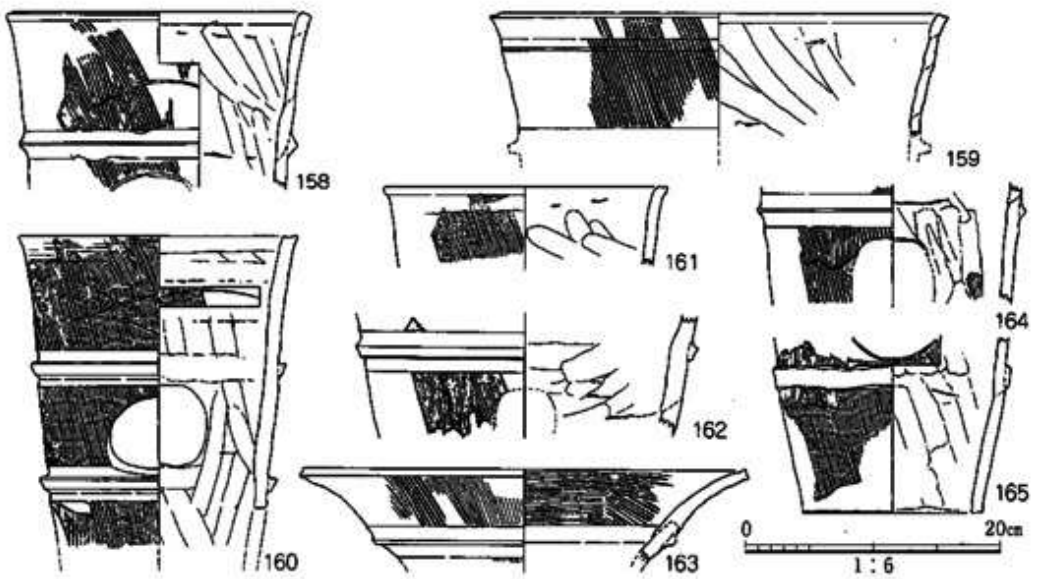


図34　SD601および包含層出土の埴輪(円筒・朝顔形)
(SD601：158～160・164・165、包含層：161～163)

ハケの一次調整を施し、二次調整は行っていない。両者ともスカシ孔の上に線刻が見られるが、158の方が鮮明である。内面の調整は胴部が下から上へのユビナデ、口縁部はヨコナデで、160のタガの内面部分にはヨコナデが見られる。159は復元口径が33.4cmで、ほかよりもやや大きいが、焼成の際に歪んだ可能性がある。調整の特徴は前二者と同じである。タガの形は158が断面三角形、160が台形で、貼付ける際にその上下を強くヨコナデしている。そのため一部タテハケが消されている。これらはすべてV期に属するものである。

169・171は衣蓋形埴輪である。169は立飾りの受け部である。笠本体に挿入する軸部は欠失しているがその口の部分に皿状の受け部を付加し、それを分割して飾り板を作っている。飾り板には細かなハケの後に線刻を施す。受け部外側は、粗いのハケで調整している。

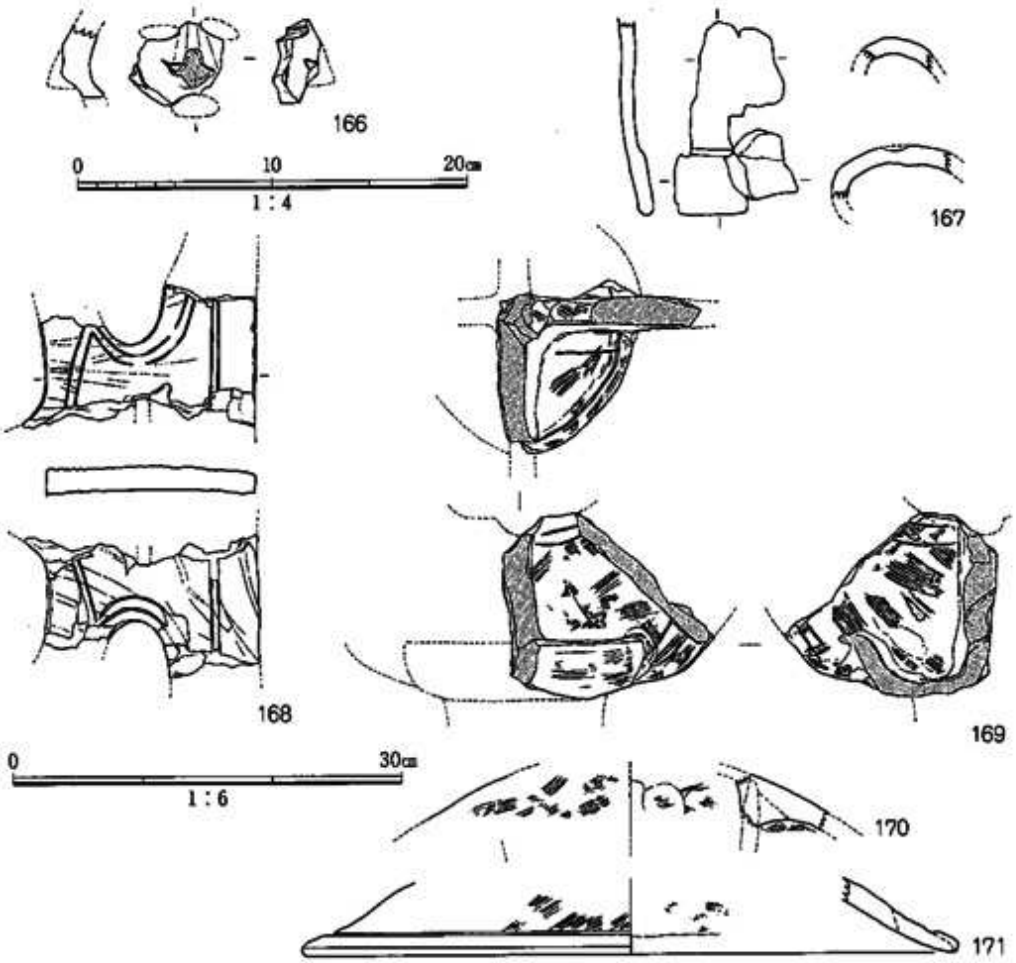


図35　SD601および包含層出土の形象埴輪
(SD601：169・171、包含層：166～168・170、縮尺は166・167：1／4、168～171：1／6)

受け部の復元径は18cmで、小型の衣蓋形埴輪である。黒斑は見られないが、焼成は酸化焔焼成で、ややあまい。171は笠先端部である。復元径は46.8cmで、線刻は施さず、外面はハケの後、ナデで調整しているようである。黒斑はなく窖窯焼成と思われる。

iii)一ケ塚古墳(長原85号墳)(図36～39、表９、図版10・35～38)

a．墳丘(図36、図版10)

一ケ塚古墳は過去の調査で、墳丘直径46.5m、周濠を含めた全長は約70mで、東側に幅10m、長さ７mの方形の造出しをもつ円墳ということが明らかにされている。今回の調査では、東半部で古墳北側の墳丘裾と周濠の一部を確認できた。飛鳥～奈良時代の水田化に伴って、墳丘は削平を受けているが、墳丘裾の下端には墳丘上から崩落したと思われる第12層が部分的に堆積しているので、下端部は本来の墳丘裾の形状を残していると考えられる。また、第11層は周濠基底堆積物で、この層の基底面が本来の周濠の底面であろう。この部分で計測した周濠の幅は約14m、深さは約0.8mで、過去の調査結果とも矛盾しない。

b．埴輪(図37～39、表９、図版35～38)

一ケ塚古墳に伴う埴輪は、周濠埋土である第７～11(長原６～７)層から多数出土している。今回の調査では原位置を留めているものはなかった。このほかに、周辺からも本古墳のものと思われる埴輪が出土しており、これらについて以下で説明する。なお、色調や胎土の特徴などは表９に別途記載する。

172～182は円筒埴輪である。172の口縁部は外反し、端部には特に加工は見られない。口径は20.4cmである。表面の剥離が著しいが外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを行う。173は口縁端部を外側に折り曲げ、上下に少し肥厚させている。口径は26.0cmで、172よりもやや大きい。外面は一次調整のタテハケの後、二次調整のナデを行っている。内面調整はヨコハケである。174～177は胴部である。174のスカシ孔は長方形で、タガの突出度は高い。175のスカシ孔は逆三角形である。176のタガはほかに比べてやや丸みがあり、スカシ孔は円形である。直径は40cm近くあり、大型品である。177のスカシ孔も円形である。外面の調整は174～176がタテハケののちヨコハケで、177はタテハケののちナデを行っている。内面の調整は174・175がヨコハケののちナデで、特に177では横方向のナデをていねいに行う。178～182は底部である。180・182はそれぞれ最下段に円形のスカシ孔を穿ち、181は下から２段目にスカシ孔を有する。外面の調整は178～181がタテハケののちナデを施し、181はタガの上位にのみヨコハケが見られる。内面はタテハケののちナデを行っているが、特にタガ部分の内面に指頭圧痕が残る。182は外面に断続的なヨコハケが見られ、

ほかとは調整が異なる。スカシ孔は楕円型に近く、円筒埴輪以外の底部かもしれない。

183は朝顔形または壺形埴輪の口縁部と思われるが、付近では周辺の調査を含めて、壺形埴輪と思われる破片が出土していないことから、朝顔形埴輪の可能性が高い。内外面にはヨコハケを施す。

184～203は形象埴輪である。184～188は衣蓋形埴輪である。184～186は立飾りの破片である。184は立飾りの先端部である。外形に沿うように1条の線刻を施したのち、上部には横方向の2条の平行線を引く。中央付近には縦方向の線刻が片面にのみ1条見られる。185は内側の鰭である。186は立飾りの中央部分に当り、内・外側ともに鰭が残っている。中央の縦方向の線刻は、左図では3条一組で、右図では2条一組となる。184・186は胎土、色調、焼成が類似しているので同一個体の可能性が考えられる。185は色調・胎土および線刻の様相が前者とは若干異なり、別個体の可能性がある。187は笠の先端部である。ハケメののち、線刻を施している。焼成・残存状態ともに良好である。188は笠部で復元径は71.6cmになる。焼成や色調・胎土の特徴は184・186と類似している。189～194は家形埴輪である。189は入母屋造の屋根部分で、破風板と棟頂部付近に当る。破風板に沿って幅約3cmの薄い粘土帯を貼付け、押縁の表現をしている。屋根内面には棟木の剥離痕が見られる。190はかなり大きな入母屋造の屋根部分であろう。押縁から破風板へと続くカーブは緩い。なお、189・190はNG93－6・7次調査で家形埴輪5として報告された高床式建物の屋根に当る可能性が高い[大阪市文化財協会1999b]。191は高床式建物の柱部分に当る。内面に

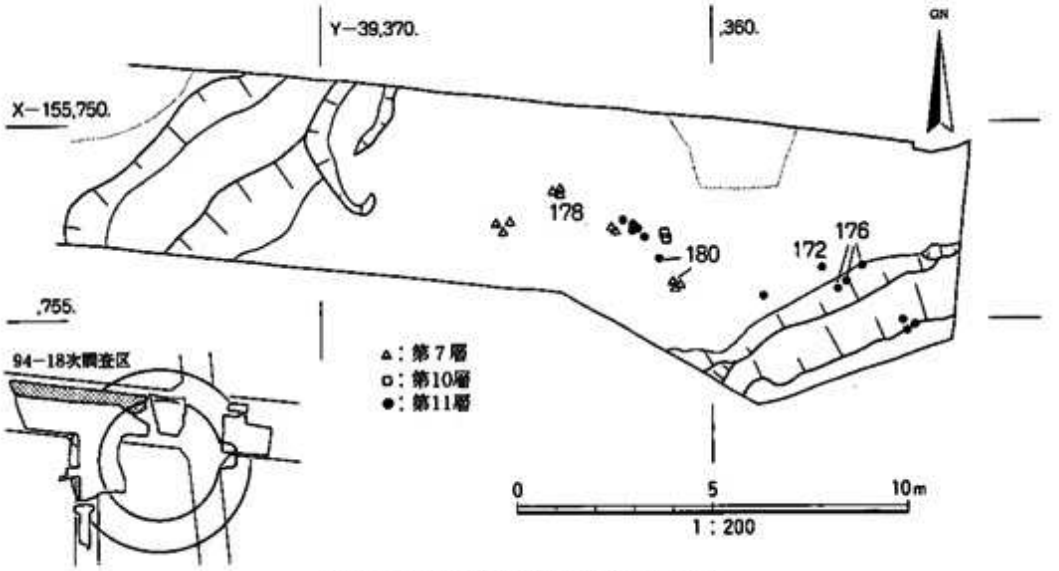


図36　一ケ塚古墳周濠内の埴輪出土状況

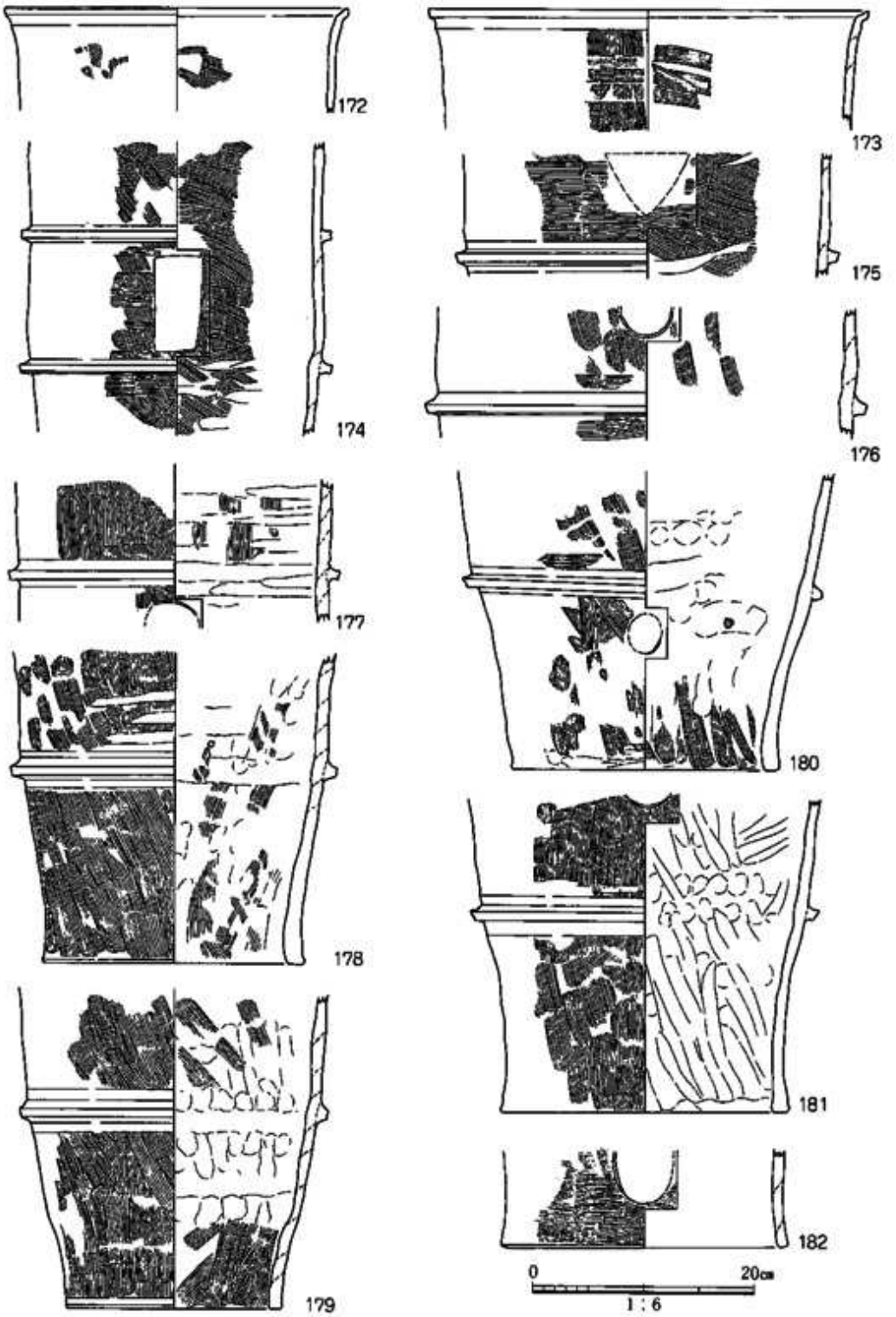


図37　一ケ塚古墳の埴輪1（円筒埴輪）

はユビナデを行っている。192は高床式建物の隅柱の一部で、柱の角の角度は直角よりも少し開きぎみである。分厚くしっかりとした作りで、ハケメなどの調整は見られない。193は高床式建物の側廻り突帯で、隅の部分に当る。外面には線刻を施している。194は基部で、切妻壁根をもつ建物の側廻りと思われる。壁面は2面認められ、両面とも接地部分には半円形のスカシ孔を有し、コーナーからスカシ孔までの距離から、左図が平側、右図が妻側と推定される。なお、開口部の目印となる線刻が両壁面に見られる。195は盾形埴輪で、外縁部の綾杉状の文様帯に当る。196は縦断面が直線的であるが、同様の破片が過去の調査で出土していることから盾形埴輪と思われる[大阪市文化財協会1999b]。表面には「忍岡系対称文」を施し、195とは盾面の構成が異なる。197は靭形埴輪の飾り板部分の後ろにある、半円筒部との接合部分を補強するための粘土板で、左図が上になると思われる。調整は上下がユビオサエのみで、側面に当る右図のほうにはハケを施している。198・199は短甲形

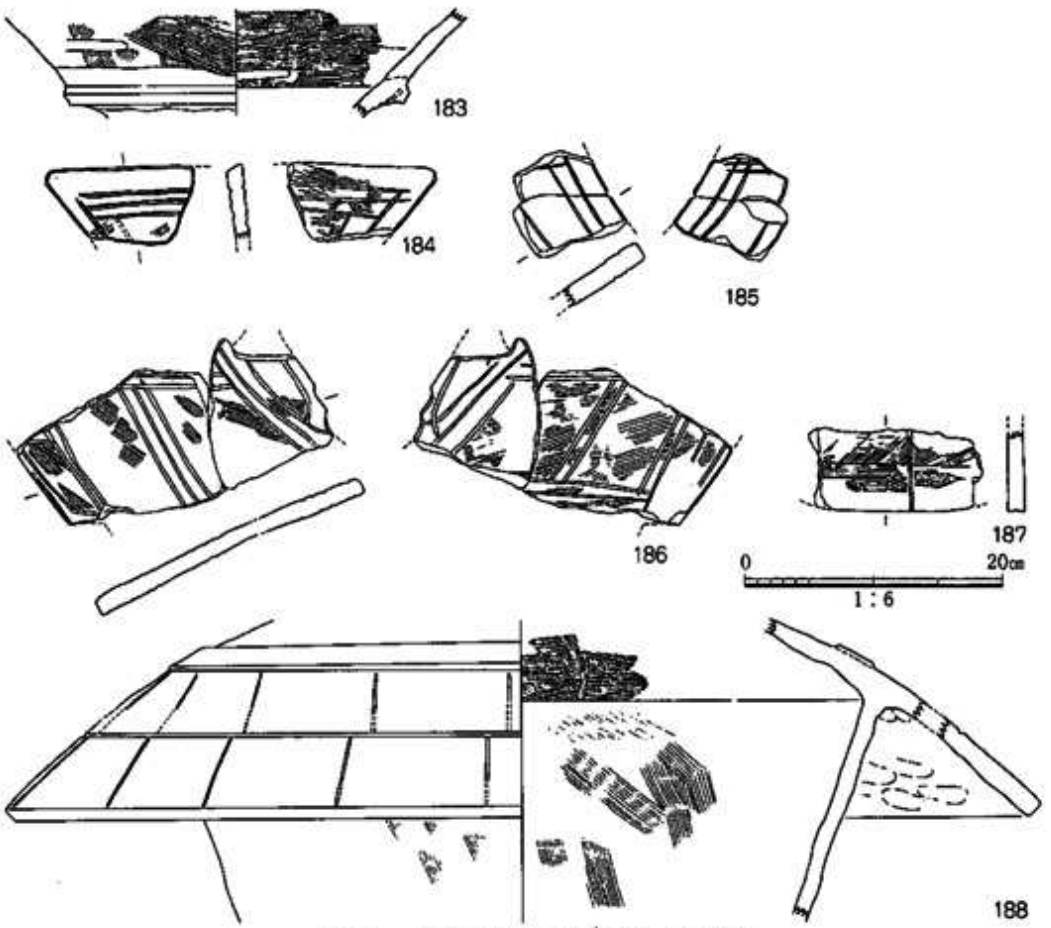


図38　一ケ塚古墳の埴輪2（朝顔・衣蓋形）

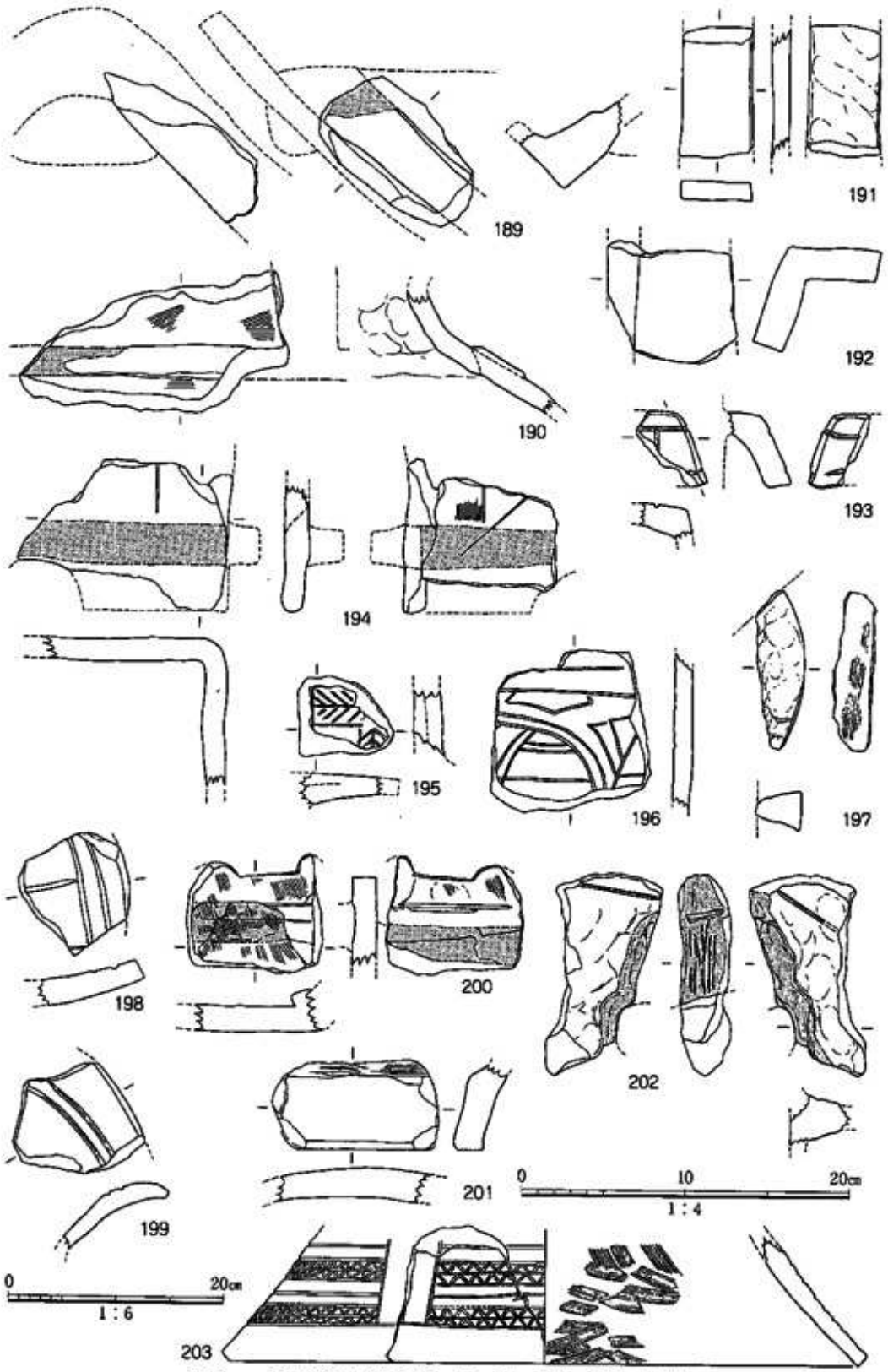


図39　一ケ塚古墳の埴輪３(家・盾・靱・短甲・草摺・不明)
(縮尺は203：1／6、他：1／4)

表9　一ケ塚古墳の埴輪観察表

番号	種類	色調	胎土	備考	番号	種類	色調	胎土	備考
172	円筒	橙色	1～3㎜の長石多量	赤色顔料	188	衣蓋形	橙～にぶい黄橙色	1～4㎜の長石・石英多量	赤色顔料
173	円筒	灰白～灰黄色	1㎝内外の砂粒多量		189	家形	灰白～明黄褐色	砂粒多量、長石・雲母	
174	円筒	浅黄橙～浅黄色	1～4㎜の長石・石英多量	赤色顔料	190	家形	浅黄橙～明褐色	1～2㎜の長石	
175	円筒	淡黄～黄灰色	0.5～4㎜の長石・石英・雲母・ジャモット・チャート・角閃石		191	家形	灰白色	長石・雲母、3㎜の砂粒	
176	円筒	茶褐～黒褐色（有黒斑）	1～3㎜の長石・石英多量		192	家形	淡橙～灰白色	長石・白色砂粒	
177	円筒	灰白～灰黄色	4㎜の石？・長石・石英・雲母・ジャモット・角閃石	赤色顔料	193	家形	灰白色	長石・赤色粒	
178	円筒	茶褐～黒褐色（有黒斑）	1～3㎜の長石・石英多量	赤色顔料	194	家形	黄橙～灰白色	長石・雲母、3㎜の砂粒	
179	円筒	にぶい黄橙～灰黄色	1～3㎜の長石・石英・チャート、1㎜以下の雲母	赤色顔料	195	盾形	にぶい黄橙色	長石・石英	赤色顔料
180	円筒	灰黄～黄灰色	1㎜のチャート、1㎜以下の雲母	赤色顔料	196	盾形	明褐色	長石・石英・チャート	
181	円筒	黄灰～灰黄色	1～3㎜の長石・石英・チャート、1㎜のジャモット、2㎜以下の雲母	赤色顔料	197	翳形	灰白色	3㎜の長石、石英	
182	円筒	灰白色	長石、3㎜の砂粒		198	帽甲形	明褐～明黄褐色	3～10㎜の長石・砂粒	
183	朝顔または器形	橙黄褐色	1～3㎜の長石・石英・チャート多量		199	帽甲形	橙～橙色	2～3㎜の長石、白色砂粒・雲母？多量	
184	衣蓋形	灰白～淡黄色	砂粒、2～3㎜の長石多量		200	不明	灰白色	1～2㎜の長石・白色砂粒	赤色顔料
185	衣蓋形	にぶい黄色	1～3㎜の長石・石英		201	不明	灰白～灰黄色	長石・石英	
186	衣蓋形	にぶい黄橙～にぶい黄褐色	1～3㎜の長石多量		202	不明	にぶい黄橙色	3㎜の砂粒、長石	
187	衣蓋形	灰白～灰黄色	2～3㎜の長石多量	赤色顔料	203	草摺形	浅黄橙～橙色	1～3㎜の長石、赤色砂粒・雲	

埴輪である。198は前胴の一部分と思われる。横方向に2条の線刻を幅4㎝で施す。縦方向には縁に沿うように2条の線刻を施している。199は後胴で、外形に沿うように引かれた2条の線刻は肩の部分の覆輪を表現していると思われる。203は草摺形埴輪の裾部である。文様は2段が一組となる鋸歯文と、横方向の線刻とを交互に繰返すと思われる。鋸歯文帯を分割する縦線は残存部では2条見られる。これらの線刻は鋭く、先端の鋭利な工具で刻まれたようである。外面調整は明らかでないが、内面は粗いハケののちに細かいハケでていねいに調整している。裾部には黒斑が見られる。なお、203はNG91－54次調査の出土品として報告されているものと同一個体の可能性が高い[大阪市文化財協会1997b]。200～202は不明形象埴輪である。200で埴輪本来の形を残しているのは、実測図の上部の四角い凹部と突帯の一部だけである。裏表の両面にそれぞれ2条の線刻を施し、その上下に帯状の黒斑が残る。突帯の剥がれた痕跡であり、線刻は突帯を付ける際の目印であろう。線刻と黒斑は左図の突帯の上にも残る。左図の面には赤色顔料が残り、この面の調整がていねいであることからこちらが表と思われる。ハケメは表面にのみ見られる。201は図の上方に向って屈曲しており、下端部には幅約5㎝の突帯が巡ると思われる。横断面形は弧を描き、下

端での直径は約60cmとなる。この形態の埴輪はNG93－6・7次調査の出土品に類例がある[大阪市文化財協会1999b]。202は分厚い板状の破片で、両面ともに線刻を有する。中央に示した面は他の部分との接合部に当ると思われ、細かい刻みを入れて接合しやすくしている。また、図の下方には孔があった可能性があり、この部分は本来の埴輪の形状を留めている。

以上のように、今回の調査で出土した埴輪は前年度報告分よりも点数はかなり少ないものの、種類はほぼ同様であった。また、今回はこれまでの調査で認められていた短甲および草摺形埴輪と同一個体と思われる破片が出土している。このことから、これらの埴輪は原位置からかなり動いており、今後墳丘の南西部分の調査が進めば、さらに多くの埴輪が出土することが期待される。

第2節　94－33次調査

1)層序と各層出土の遺物(図40・41、表10、図版11・38・39)

調査区の北壁および東壁について近世の作土以下について説明する。なお、第1～3層は重機で掘削したため、断面観察のみを行った。

第1～3層は長原2層に相当する作土層で、2層は南へいくほど1層との区別がつかなくなる。3層は部分的にマンガンが沈着したシルトのブロックが混る。

表10　94－33次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴	掲載遺物
NG2	1層	赤褐色(5YR4/6)シルト質極細粒砂～極細粒砂	＜5			作土	
	2層	黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂～細粒砂	10～15			作土	
	3層	にぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂	≒20			作土	
NG2～3	4層	オリーブ褐色(2.5Y5/4)～にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂質シルト	≒20				
NG3	5a層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)中～細粒砂	≒10			水成	
	5b層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂				水成	
	5c層	やや暗い黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂～細粒砂				水成	216
	6層	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質極細粒砂	≒20	▲SD301・SR301・SX301	瓦器		209
	7層	オリーブ褐色(2.5YR4/3)～にぶい黄褐色(10YR4/2)シルト	≒30		白磁・瓦器・土師器・埴輪		205～208・210～215
NG6A	8層	褐色(7.5YR4/6)～にぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒砂質シルト～シルト	＜20		埴輪		
	9a層	含細礫黄褐色(2.5Y5/4)粘土質シルト～シルト質粘土	＜20		埴輪		
	9b層	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土	＜20				
NG6B	10層	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土～シルト質粘土	≒20				
NG7A	11層	褐灰色(10YR4/1)粘土	＜20			静水状態	
	12層	灰黄褐色(10YR5/2)粘土	≒10	一ケ塚古墳周溝			
NG15	13a層	オリーブ灰色(10YR6/2)シルト					
	13b層	明オリーブ(2.5GY7/1)極粒砂					
	13c層	オリーブ灰色(2.5GY6/1)細粒砂					

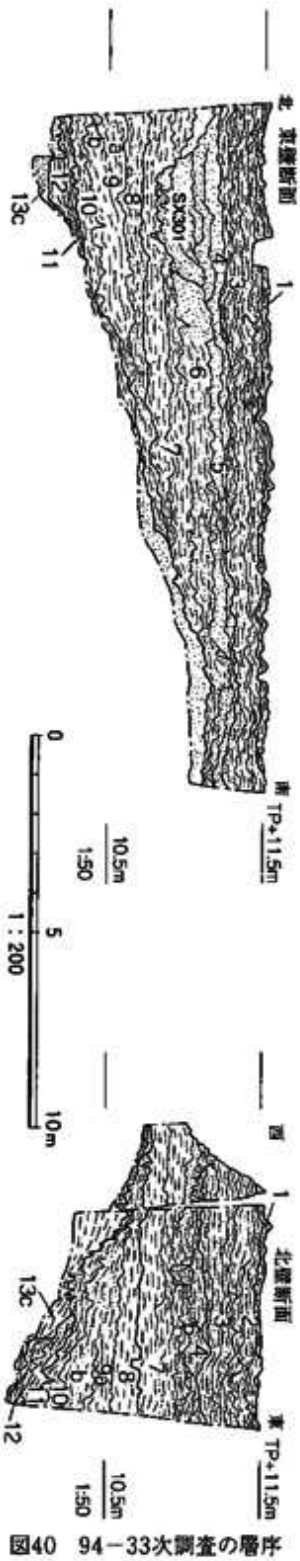


図40　94－33次調査の層序

第４層は第５層が攪拌されて形成された地層で、遺物はほとんど出土しなかったが、長原２～３層に相当すると思われる。

第５～７層は長原３層に相当すると思われる。５層は中～細粒砂および粗粒砂が互層になった水成層で、調査区の南半分に分布する。砂粒の違いによって以下の３層に細分された。5a層は中央から南に分布し、顕著なラミナは見られない。5b層はとくに南でラミナが明瞭である。5c層は5b層に削込まれ、部分的にしか残っていない。６層は南にいくほどシルトの割合が多くなる。Ⅳ－２期の瓦器が出土した。７層は下部に細礫を少量含む。上部ではⅣ－２期の瓦器が出土しているが、下部でⅢ期の瓦器の細片が認められたことから、細分できる可能性がある。

209は６層、205～208・210～215は７層から出土した。209は瓦器椀で、退化した高台をもち、底部外面に指頭圧痕が見られる。Ⅳ－２期である。205～208は土師器である。205・206は小皿で、復元口径はそれぞれ10.0cm、9.0cmである。207は皿の高台部分で、先端は残っていない。底径に比較して高台が高いのを特徴とする。焼成は良好で、器壁も緻密である。平安時代Ⅲ期新～Ⅳ期古段階の土師器皿Ｅに類例がある。208は中皿の口縁部である。210～212は瓦器椀で、210・211は内面に斜格子状のヘラミガキを施し、外面にはヘラミガキを有さない。212は底部で、高台の先端部には面をもつ。213は瓦器三足釜の脚部で、ヘラ状工具で面取り調整を行なう。214は白磁碗の底部である。215は凹基無茎式石鏃で遊離資料である。抉りは浅く、縄文時代後半であろう。

第８層以下は一ケ塚古墳周濠内のみに堆積していた。第８・９層からは、特に時期決定できるような遺物は出土しなかったが、周辺の調査から考えて長原6A層に当るものと思われる。第９層は周濠のもっとも深い部分では２層に細分できたが、周濠の外縁に近づくほど区別しにくくなり、層厚も薄くなる。

第10層からの出土遺物は非常に少なかったが、長原6B層に

当ると思われる。

第11層は静水状態で形成された地層で、本層形成時の周濠内の環境を反映する低湿地性の植物種子が多数検出された。長原7A層に当ると思われる。第12層には炭化物のラミナが見られ、第11層と同様に静水状態で形成された地層である。古墳が造られてそれほど時間をおかずに形成されたものと思われる。

第13層は3層に細分される。これらは長原15層に相当すると思われる。

2)遺構と遺物

i)室町時代(図42、図版38)

第6層の上面で土壙状の落込みと溝・畦畔を検出した。

SX301は北で検出した落込みで、南北約5.5m、東西2.5m以上の不整楕円型を呈する。深さは0.3mで、埋土は5枚に細分された。最上層はにぶい黄褐色含細礫シルトとその下位の含細礫黄褐色極細粒砂質シルト～シルト質極細粒砂からなり、おもに北半に堆積する。中層は黄褐色中～細粒砂で、中央に見られた。下層は暗灰黄色粗粒砂～礫を多く含む粗粒砂で、南半に堆積する。これらにはラミナは見られない。埋土からは瓦器・須恵器・土師器・埴輪が出土している。204は底部がやや上げ底状の土師器小皿で14世紀後半であろう。

SD301は北で東に約15°振れる幅0.5m、深さ0.2mの溝で、南から北に向って流れていたと思われる。北はSX301に切られていた。溝の立上がりはほぼ垂直ではっきりとした肩をもつ。埋土は水成層で、上下に細分された。上層は黄褐色中粒砂、下層は灰黄褐色極細粒

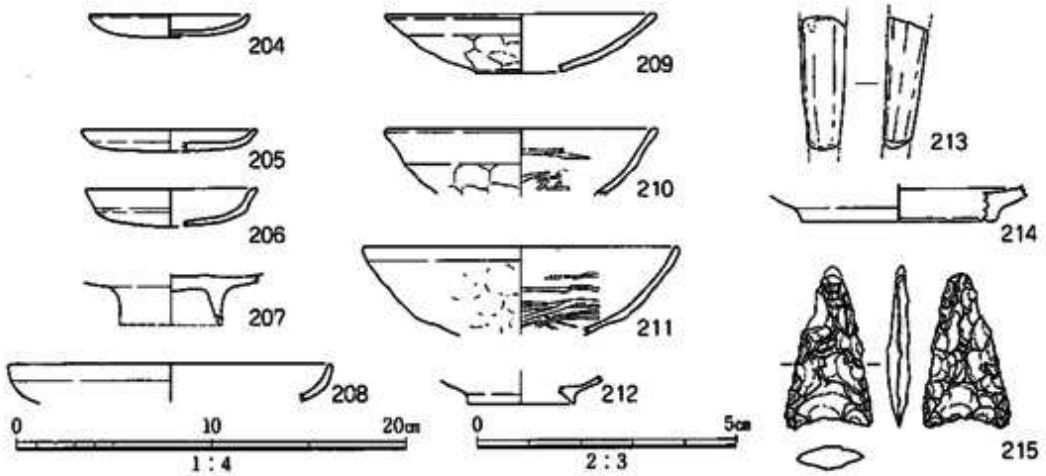


図41　各層およびSX301出土の遺物

(SX301：204、第6層：209、第7層：205～208・210～215、縮尺は204～214：1／4、215：2／3)

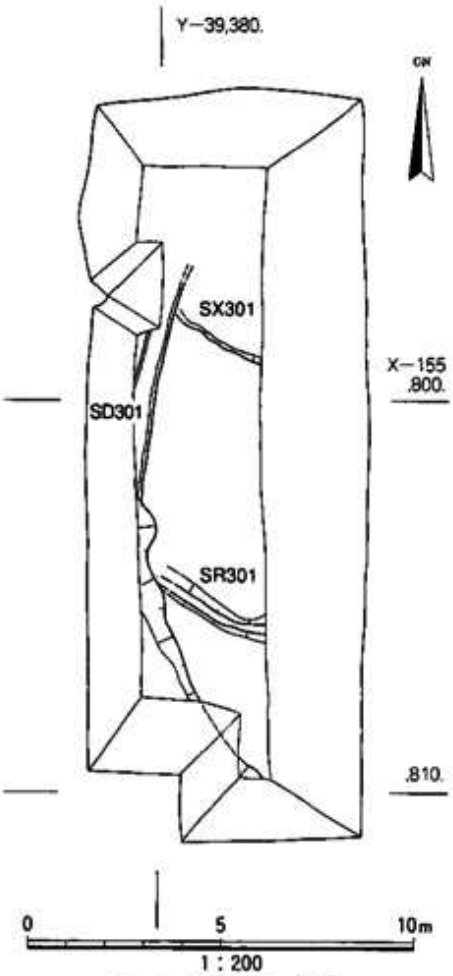


図42　室町時代の遺構

砂である。Ⅳ期の瓦器や土師器が出土している。

SR301は一ケ塚古墳の周濠の外で検出された畦畔で、南東から北西に延びる。下端の幅は0.5～0.7m、高さは0.1mで、堅く締まっていた。

ii)一ケ塚古墳(長原85号墳)(図43・44、図版11・38)

今回の調査では周濠南西の外縁部が対象となった。このため墳丘側は検出されていないが、北で行われた調査の結果から周濠の幅は約13mと推定でき、ほかの調査での推定とも矛盾しない。なお、調査区北東隅では周濠内に土壙状の落込みが検出された。このような落込みはNG93－6・7・18次調査や[大阪市文化財協会1999b]、94－18次調査(本章前節)でも検出されており、周濠掘削時のものであろう。

周濠内に堆積した第11・12層および周濠基底面からは遺物はまったく出土しなかった。図44に示した埴輪はすべてこれよりも上位の地層で認められたもので、216以外は一ケ塚古墳に伴うものと思われる。216は無黒斑の円筒埴輪で、断面台形のタガの上に楕円形のスカシ孔が入る。外面の調整はタテハケを施した後、タガの上に粗いB種ヨコハケを施している。内面は縦方向のユビナデである。タガの上下にはベンガラが残っている。Ⅳ期に当ると思われ、本古墳築造以後のものである。217は円筒埴輪の底部である。器面が荒れて調整は観察できない。218・219は壺形埴輪もしくは朝顔形埴輪と思われる。218は頸部で、断面三角形の突帯を付ける。219は口縁の屈曲部で、断面台形の突帯を付ける。220は家形埴輪の壁廻りである。両側に段をもつことから柱を表現した部分であろう。器壁は厚く、かなり大型となろう。221・222は靭形埴輪である。221は飾り板部分である。222は笥部の鰭を表現した部分に当る。鰭は柳葉形で、左の2本は先端に裏側から切込みを入れて尖らせている。右端の鰭には裏側だけでなく正面からも切込みを施し、より立体的に表現する工夫がなされている。この部分は笥部の側面への屈曲部に当ること

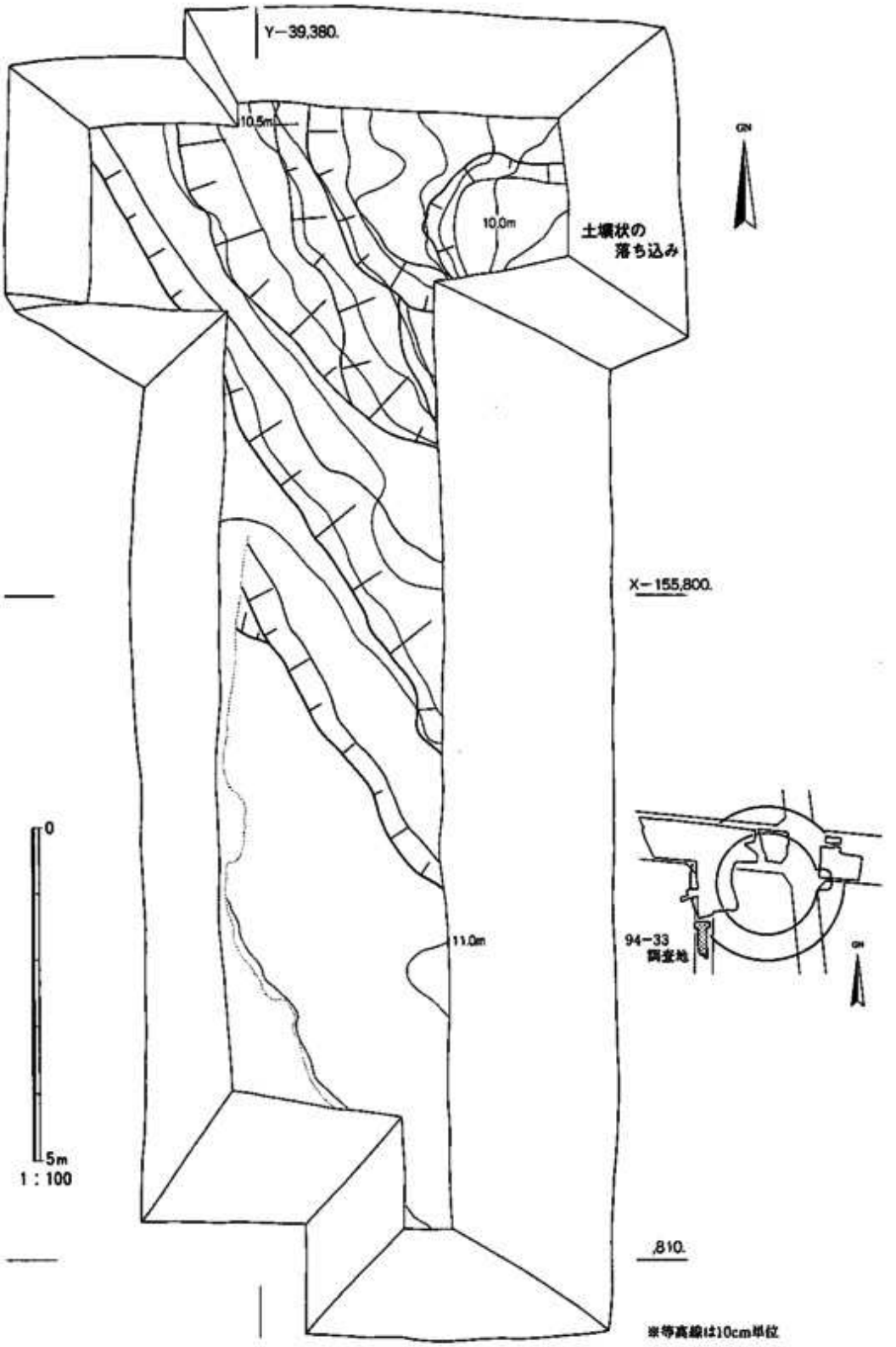


図43　一ケ塚古墳周濠の検出状況

から、斜めから見た場合も立体的に見える効果を期待したのであろう。表面には鏃の輪郭を表現した線刻があるが、裏側からの切込みが深く、先端の線刻は失われている。

ここで靭形埴輪222の鏃表現について簡単に検討してみたい。柳葉形の銅鏃を模した表現の例は、高廻り２号墳[大阪市文化財協会1991]や京都府宇治市の庵寺山古墳[京都大学文学部1968]にあり、高橋克寿氏による靭形埴輪の分類の１類１式に当ると思われる[高橋克寿1988]。１類１式のものは、柳葉形で篦被のある銅鏃が表現されていると考えられている[松木武彦1988]。一ケ塚古墳のものは基部が欠損しているが、先端部の類似性から本来は篦被も表現されていたと推定できる。続く１類２式の例として奈良県御所市の宮山古墳のものがあり、鏃表現のわかるものが３個体分出土している。一つは逆刺が発達し腸抉が深いもの、その他の二つは身の長い柳葉形のもので、いずれも中期古墳に副葬された鉄鏃を表現していると考えられる[松木武彦1988]。以上のように、柳葉形銅鏃の表現が靭形埴輪でも出現期のものに限られることは明らかで、前期古墳に副葬されていた柳葉形銅鏃が消滅する直前に、儀器的な意味が埴輪によって継承されたことを表わしているのであろう。

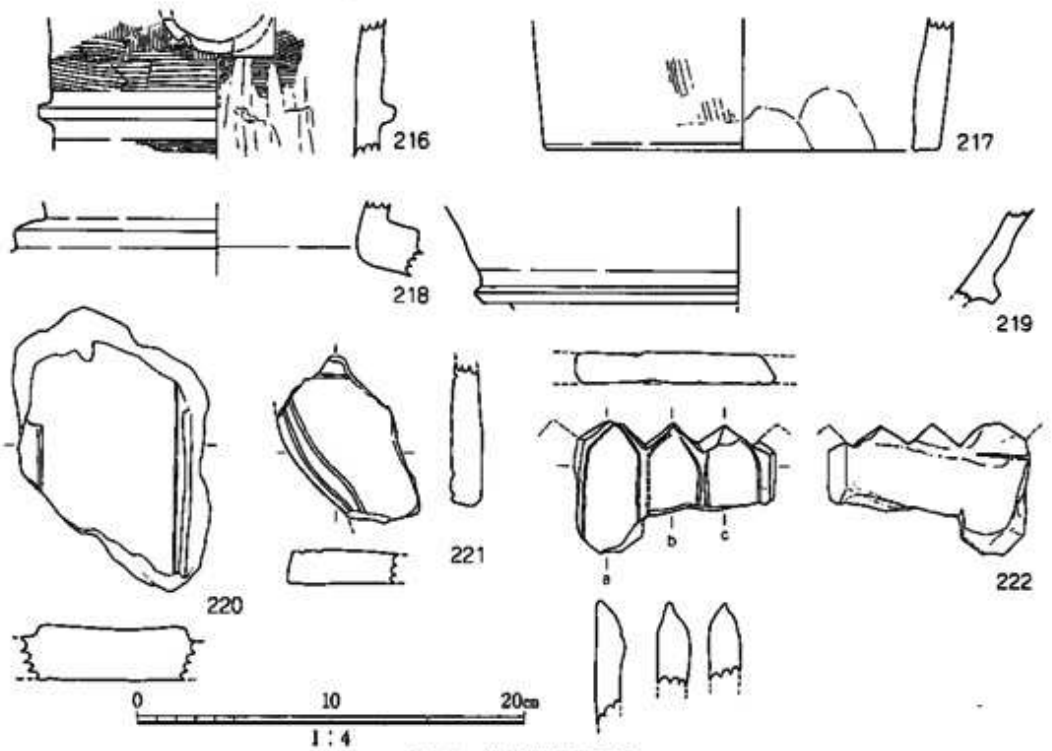


図44　出土埴輪実測図
（第5c層：216、一ケ塚古墳：217～222）

第３節　94－52次調査

１)層序(図45、表11、図版12・13)

北壁、南壁および東壁で地層を観察した。各層についての詳しい記載は表11で行い、分布状況や特徴について以下で述べる。

第２・３層は長原２層に対応する。２層は作土層で、調査区の南半部のみに分布していた。３層は客土層で、後述する第７層や９層に由来するシルト質粘土のブロックを多量に含む。瓦用の粘土を取った後の埋戻し土である。

第４層は南部で認められた水成層で長原15層に対比される。上半部はシルトが優勢で、下半部は部分的にシルトの薄層を挟む砂からなる。本層はNR1601の埋土で、第６～８層を削込んでいる。本層のいくつかのラミナ面で動物の足跡化石が多数検出された。

第５～７層は長原16B層に対比される。５層は南に分布し、上面では乾痕が多数見られた。また、本層上面から第８層の途中にかけて幅0.05m程度の地割れがあった。地割れ内は砂で構成され、この砂が上からのものか、噴砂によるものかは確定できなかった。６層は火山灰層で、南に分布していた。本層を水洗したところ、磁鉄鉱・斜方輝石・褐色角閃石などの重鉱物が検出された。この特徴から、本層は長原16Bi層に挟まれる吾彦火山灰層に対比されよう。なお、降灰した時期は8.7万年前と考えられている[吉川ほか1991]。ま

表11　94－52次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴
NG1	1層	現代作土				
NG2	2層	オリーブ褐色(2.5YR4/6)シルト質極細粒砂	≦2			作土
	3層	灰白色(5Y8/3)シルト質極細粒砂		粘土採掘痕 SK01～12	陶磁器・須恵器・土師器	埋戻し土
NG15	4層	黄褐色(10YR5/6)もしくは明黄褐色(2.5YR6/8)シルト～極細粒砂～極粗粒砂	≒40	▲足跡化石		水成 NR1601埋土
NG16B	5層	明黄褐色(2.5Y7/3)シルト質粘土	≒15	▲NR1601、足跡化石		
	6層	灰白色(N-8)粘土質火山灰	≦2			吾彦火山灰層
	7層	浅黄色(5Y7/3)シルト質粘土	≒50			
未命名層	8層	浅黄色(5Y7/3)極粗粒砂～細粒砂	20～60			
	9層	浅黄色(2.5Y7/3)砂礫	≧170			

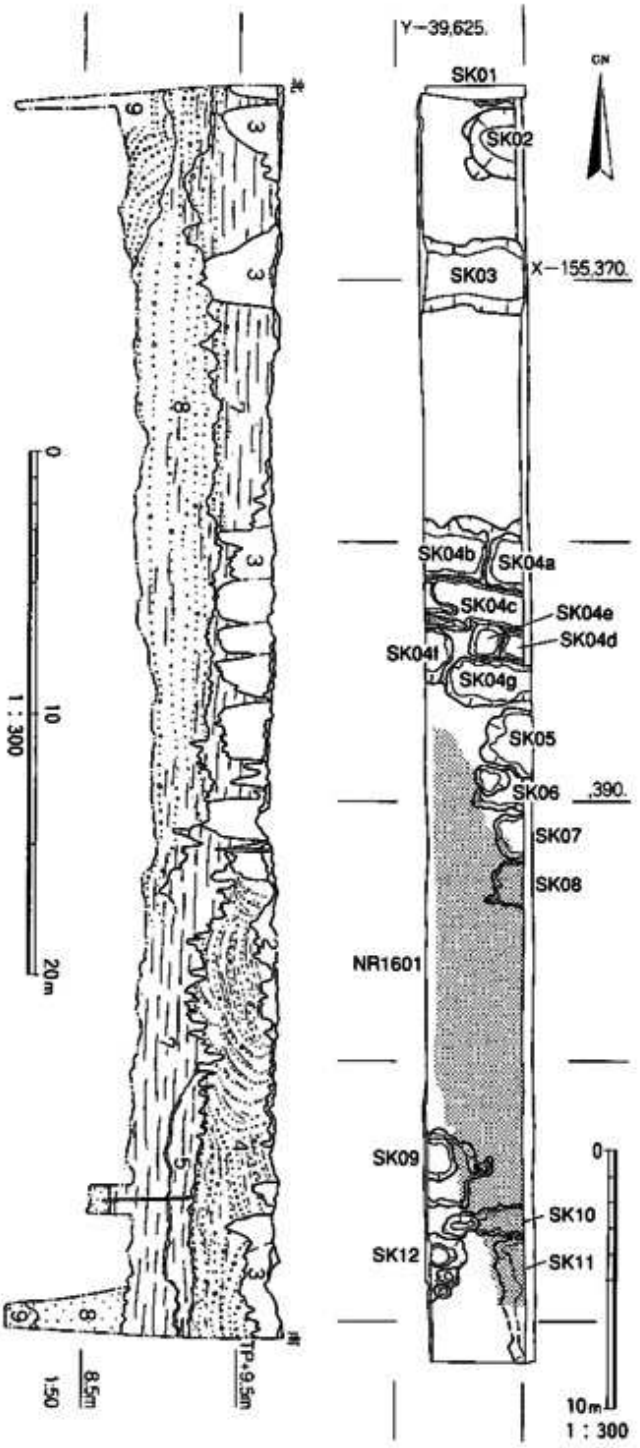


図45　94−52次調査の東壁地層断面と検出遺構

た、7層は調査区全域に分布し、北端は下半部で極細粒砂を少量含む。特に、北半では本層が現代作土の下で露出し、瓦用の粘土取りの対象となっていた。

第8・9層は長原遺跡の基本層序の未命名層に対比される。8層は調査区全域で確認できた地層で、南へ向うに従い厚く堆積する。9層では中礫からなる斜行ラミナが明瞭に見られた。一部に粗粒砂質シルトの薄層を挟み、下半部では極細粒砂が主体であった。

2）遺構と遺物

i）近世～近代（図45、表12）

粘土採掘壙と思われる土壙が合計12基検出された。なお、これらの規模などについては表12にまとめた。

SK01～03は調査区の北で検出された。SK01はほとんどが調査区外にかかっており、全体の形状は不明である。また、中央ではSK04～08が近接して認められ、南部ではSK09～12を検出した。

これらのうち、SK02～07はいずれも底の高さが第8層上面にほぼ一致し、第7層のシルト質粘土を目的とした採掘壙であることが

わかる。その他の土壙もシルト質粘土が第2層下面に分布するところに位置していたことから、同様の性格のものと考えられる。また、埋土内に陶磁器を含むことから、これらは近世から近代にかけて採掘されたものであるといえる。なお、SK04は検出時には幅7m前後の土壙と思われたが、精査の結果、底面で幅0.3m程度の畦畔状の高まりが確認された。さらに断面観察の結果、SK04はあわせて7つの粘土採掘壙が重なったものであるということが明らかになった。(SK04a~g)。これらの底はいずれも第8層上面にほぼ一致しており、切合い関係から採掘は北から行われたことがわかった。

表12　粘土採掘壙の一覧

番号	平面形態	南北長	深さ	出土遺物	備　考
SK01	不明				
SK02	楕円形	2.5	0.5	陶磁器・須恵器・土師器	
SK03	溝状	2.8	0.5	陶磁器・須恵器・土師器	
SK04a	長方形	1.8	0.5	陶磁器・土師器・瓦	粘土採掘壙が密集したもの
b	方形	1.8	0.5		
c	長方形	1.8	0.5		
d	方形	1.8	0.5		
e	方形	1.8	0.5		
f	不整円形	1.8	0.5		
g	方形	1.8	0.5		
SK05	不整楕円形	2.5	0.4	陶磁器・須恵器・土師器・埴輪	
SK06	不整形	1.0	0.3	陶磁器・須恵器・土師器・埴輪	
SK07	不整楕円形	1.8	0.5	陶磁器・須恵器・土師器	
SK08	不整楕円形	1.8	0.25		
SK09	不整円形	3.0	0.25		二段堀り
SK10	不整形	1.0	0.4		
SK11	長方形		0.2		SK10を切る
SK12	不整円形		0.5		二段堀り

＊単位：m

ii)中期旧石器時代(図45~48、図版12・13)

a．NR1601

調査区南部の第5(長原16B)層上面で検出された幅約6m、検出面からの深さが0.4m程度の、第4(長原15)層を埋土とする自然流路である。第5~7層を削込み、南南東から北北西の方向に流れていた。この流路の埋土である第4層内のいくつかのラミナ面や流路の肩では、足跡化石やその可能性の高い窪みが多数検出された。

b．足跡化石

足印、および足印の可能性の高いものは全部で100を越えるが、それらはNR1601のもっとも深い部分を除くほぼ全域、および両肩で検出された。断面の観察により、NR1601の最下層に堆積する極細粒砂層の上面で重みが加わったことによるラミナ構造の変形がはっきり見られたことから、この面を集中的に調査することにした。なお、これらの足跡化石の年代は、8.7万年前に噴出した吾彦火山灰層を含む第6層の上位で検出されたことと、第4(長原15)層を埋土としていることから7~8万年前と推定された。

残存状況は両肩および流路内でも浅い部分のものが良好で、足印の深さも15cm程度残っており、足印底には指印の残っていたものもある。しかし、流路の深い部分では足印は5cm弱の深さしか残っておらず、足印底もシルト質粘土が巻上がって乱れていたため、指印

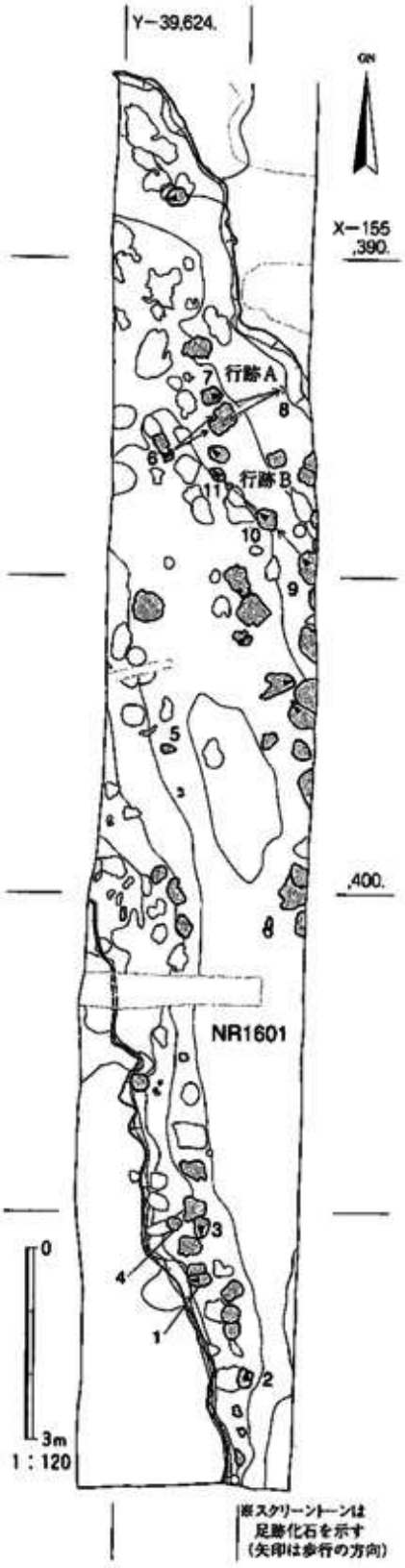


図46　NR1601と足跡化石の分布状態

を検出するのがほとんど不可能であった。

今回の報告では残存状況の比較的良いものについて、その特徴を述べていきたい。現場での調査時には観察に加えて、写真の活用と石膏模型の観察を行っており、記載はこれを基にして行う。また、用いる用語は[野尻湖発掘調査団足跡古環境班1992]・[「ゾウの足跡化石調査法」編集委員会1994]での定義および用例を参考にした(註１)。

足印1は調査区の南端近くで検出された。平面形は東西に長い楕円形である。精査の結果、これは指先を西へ、つまり流路の肩側に向けるナウマンゾウの左後足の足印であることが明らかとなった。足印口は前内側がやや窪んだ平面形で、長径36.4cm、短径24.2cmである。足印壁は足印底からほぼ垂直に立上がり、内側と前外側ではオーバーハングしている。足印底は後側から前側に向って傾斜している。支持痕における足印長は30.5cm、足印幅は19.0cmである。この大きさはこれまで知られているナウマンゾウの足印の中では小型といえよう。足印壁および足印底では第１指から第５指の指印を確認できた。第１指印は足印壁の後内側のオーバーハングした部分にやや窪んで残る。第２指印は足印壁の前内側～足印底にあり、足印底でもっとも深い部分を形成している。指印幅は5.5cmで先端が尖りぎみである。第３指印は足印底の前縁中央にあり、指印幅7.0cmで、先端がやや尖る。なお、第３指の左前方に見えるテラス状に張出す部分は、左前足の足印底の一部かもしれない。第４指印は足印壁の前外側～足印底にあり、指印幅5.0cmで、先端が丸みを帯びている。第５指印は足印壁の外側中央に離脱痕が残る。なお、第５指後方の

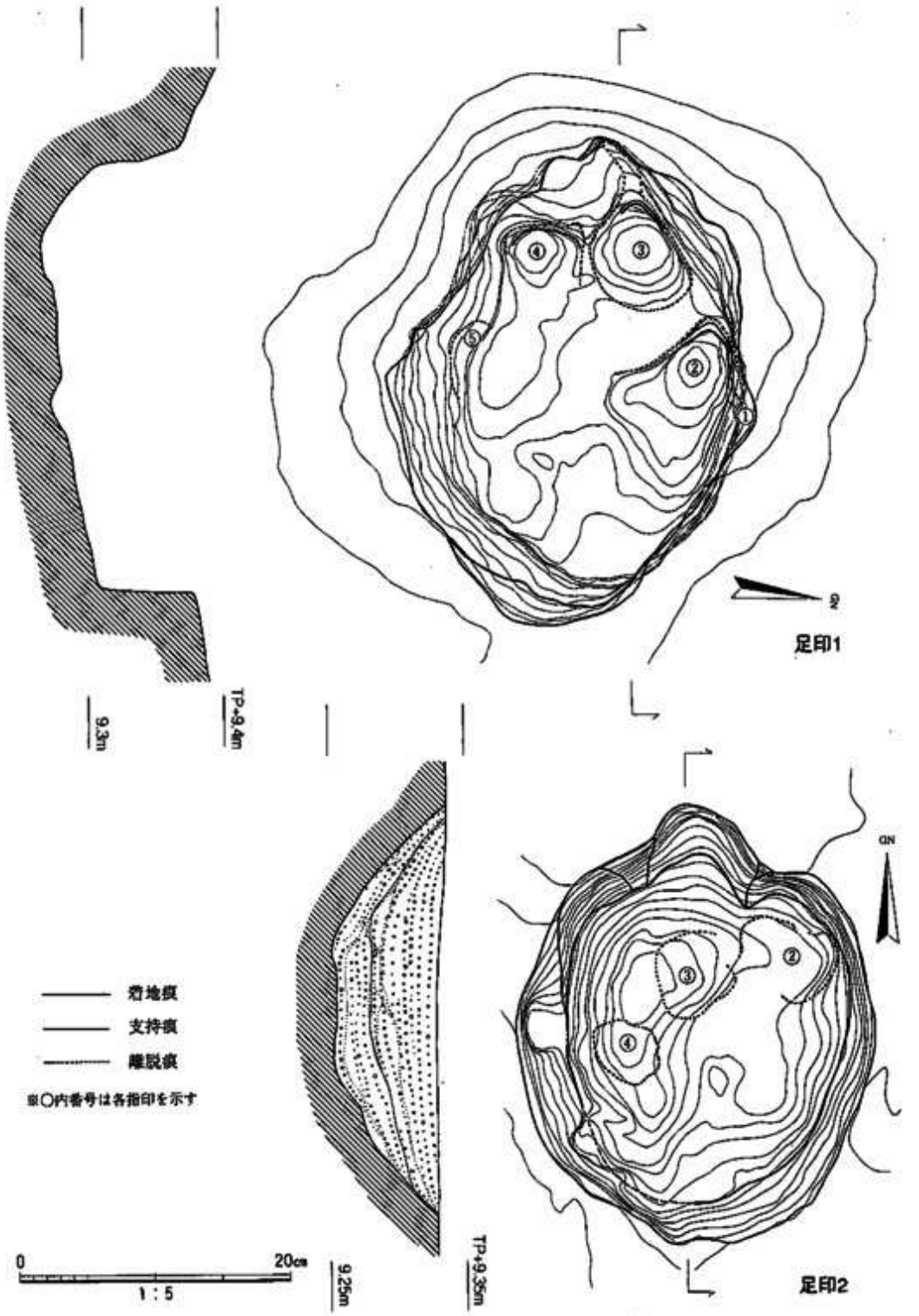


図47　足跡化石実測図1（等深線は5㎜単位）

足印壁は傾斜が特に緩やかで、左方への荷重が斜めにかかったことを示す。また第３指の離脱痕が左前方に突出していることから、この足印を残したゾウは足を左前方に蹴り上げて、左へ旋回したものと思われる。

足印2は足印1の約２ｍ南で検出された。断面を観察した結果、埋土の上部には粒径の粗い砂層が堆積し、この下層には粒径の細かな砂層が認められた。下層のラミナ構造は上層のそれとは異なり、荷重による変形を受けたと考えられることから、この足印は下層に溜まった砂の上から踏込んだアンダープリントで、ナウマンゾウの左足印と思われる。なお、着地痕とした西側の緩傾斜面は、後足に踏みつぶされて残った前足の着地痕の可能性もある。指先の先端が北西を向く第２～４指の指印を確認できたが、アンダープリントのため各指印は着地痕・支持痕ともに不明である。足印口の長径は33.5cm、短径は26.4cmである。

足印3と足印4は、足印1の北で２つが東西に並ぶかたちで検出された。

足印3はナウマンゾウと偶蹄類の足印が重なったものと考えられる。すなわち、断面図では堆積構造の違う上下２層の砂礫があり、下層の砂礫がこの足印底の北東隅に存在していた偶蹄類の足印を埋めたのちナウマンゾウが歩行し、さらにその上に砂礫が堆積したと考

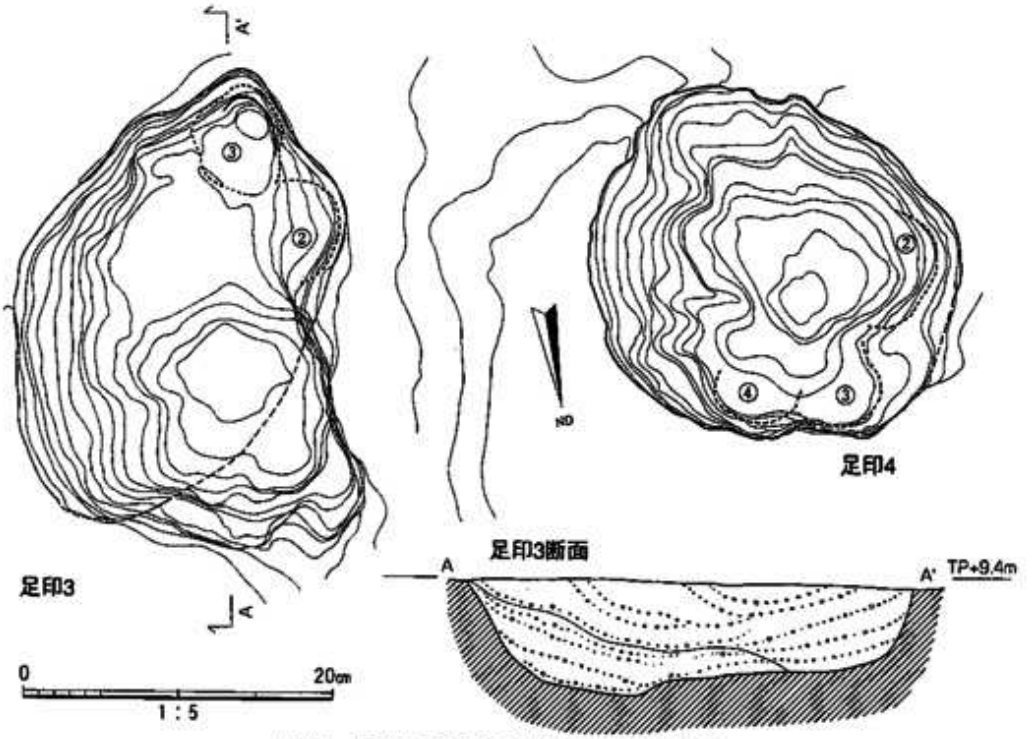


図48　足跡化石実測図２（等深線は５mm単位）

えられる。また、上層のラミナ構造を見ると下部のラミナが下層の上面に沿っているのに対し、上部のラミナはこれとは異なる構造である。このことから下層のラミナは荷重による変形を受けたと考えられ、**足印3**は下層の堆積と一連の作用でたまった砂礫の上から踏込んだ、アンダープリントである可能性が高い。各指印の形が不明瞭であることもこの推察を裏付けている。以下にアンダープリントであることを前提として記述すると、**足印3**は左足印で、第２・３指印が残存しており、指先は南を向いていた。足印口の長径は30.5cm、短径は19.2cmである。離脱痕と支持痕が推定できたのは第３指印のみであった。

写真８　ムカシニホンジカの足跡化石(足印５)

足印4は足印底の南側や北東部分の等深線が乱れており、**足印3**と同様にナウマンゾウの足印に複数の偶蹄類の足印が重なったものと考えられる。なお、この足印も各指印の形が不明瞭であることから、**足印3**と同じくアンダープリントの可能性が高い。足印口の長径は25.2cm、短径は22.3cmで、ナウマンゾウとしてはかなり小型であるが、上部を削剥されているためであろう。この足印底の北に第２～第４指印の離脱痕が見られ、これによって指先を北西に向けた右足印と推定される。

足印5は前足と後足が前後に重なった偶蹄類の足印である(写真８)。前足は足印長7.5cm、足印幅8.2cmで、後足の歩行の際に踏みつぶされて歪んでいる。後足は足印長が6.5cm、足印幅6.8cmで、左右の蹄印がハイペックス印のなす稜線によって明瞭に分かれる。足印幅が通常よりも広いことから、この足印もアンダープリントの可能性が高い。[亀井節夫1991]によると、この時代日本に生息していた代表的な偶蹄類としてはオオツノジカとムカシニホンジカが考えられており、この足印はその大きさからムカシニホンジカのものである可能性が高い。

c．行跡の復元

今回の調査で指先の方向まで判定できた足印はごくわずかであったため、行跡を確定するのは非常に困難であった。以下に挙げるのは現場で取った記録の整理作業の中で、足印の向きと配置などからナウマンゾウの行跡の可能性があると考えたものである。

行跡A（足印6－7－8）：6と8は指印で、7は後足の足印と思われる。6と7の距離が1.2m、7と8の距離が1.1mである。いずれの足印も左右の特定までは困難であったが、ナウマンゾウの歩幅としては妥当な距離であり、指印の先もほぼ同じ方向に向いていることから行跡の可能性が高いと考えた。

行跡B（足印9－10－11）：9と10の距離が1.0m、10と11の距離が1.0mで歩幅としてはやや短いが、指先が同じ方向を向いていることから行跡と推定した。

このほか近接する足印1と2がほぼ同型同大の同一個体と考えられる左後足の足印であり、これらの周辺で一連の行跡となるべく足印の検出を試みたが、見つからなかった。

なお、流路の肩や浅い部分では足印の残りが良く、底では残りが悪かった。この原因には次のような理由が考えられる。まず、流路の両肩および浅い部分はシルト質粘土の含水率が塑性を保つのに適度であったため、足印が崩れずに残ったのであろう。一方、流路の深い部分は、流水で削られやすい上に、常に水に浸され、極細粒砂の下のシルト質粘土が多量の水分を含んでいるために、踏込んだ足を抜いたのち、極細粒砂およびシルト質粘土が吸い上げられ、変形を起したのであろう。

註）

1）[「ゾウの足跡化石調査法」編集委員会1994]による各用語の定義は以下のとおりである。

足跡：ヒトや動物がつけた足の痕の一般的な呼び名。ひとつの足跡と足跡の並びの両方の意味に使われるので、厳密に表現するときは足印、行跡を用いる。足印（そくいん）：動物の足がつけたひとつひとつの痕。行跡：動物の移動を示すひと連なりの痕。足印口：足跡が検出された地層面における足印の縁、開口部。足印底：足印の底全体。足印壁：足印口と足印底の間の、相対的に傾斜の急な部分。支持基体：足跡がつけられる物質。足跡化石の場合は堆積物（地層）。着地痕：足が支持基体についたときの痕。支持痕：足の裏全体で体重を支持したときの痕。離脱痕：足が支持基体を後方に蹴ったときに残された痕で、支持基体を蹴り、あるいはめくりあげた痕が見られることもある。指印：足印のなかで識別された指の痕。ハイペックス印：足印に残された、動物の指と指の間の最も切れ込んでいる部分の痕。

なお、記載に用いた解剖学用語は以下の通りである。外側（がいそく）：体の中心軸から外方位あるいはそれに対応する表面。内側（ないそく）：体の中心軸の方位あるいはそれに対応する表面。前側（ぜんそく）：頭の方位あるいはそれに対応する表面。後側（こうそく）：尾の方位あるいはそれに対応する表面。第1～5指：ヒトの手の親指（第1指）から小指（第5指）に当る足の指。

第4節　小結

1)長原遺跡西南地区の調査成果

今年度の調査成果は、**一ケ塚古墳**の調査が中心となった94－18・33次調査と、中期旧石器時代の足跡化石の調査が中心である94－52次調査とに大きく分かれる。一ケ塚古墳の調査成果は過去の調査分も含めて次項で述べ、ここではそれ以外の成果について時代を追って述べたい。

まず、中～近世にかけては今年度の調査地周辺のほとんどが耕作地として利用されており、94－18・33次調査地では室町時代の畦畔が検出されている。なお、当地区の北西に位置する94－52次調査地では、江戸時代～近代にかけて、長原15層を目的とした粘土採掘が盛んに行われ、これ以前の遺構が失われる結果となった。

飛鳥時代～鎌倉時代にも当地のほとんどは耕地として利用されていたようで、94－18・33次調査では一ケ塚古墳の周濠内で、作土や畦畔が検出されている。また、94－18次調査で確認されたSD601は、NG93－6次調査で検出されたSD601の延長である[大阪市文化財協会1999b]。作られた時期や意図の検証は困難であるが、周辺に多く見られる灌漑水路との係わりが推定された。また、94－52次調査区は先に述べたように削平されていたが、現代作土および粘土採掘土壙内の埋戻し土に、古墳時代の須恵器や土師器が多数含まれており、周囲にはNG95－13次調査で確認されたような遺構が本来は存在したのであろう。

古墳時代では後述する一ケ塚古墳以外に、古墳は検出されなかったが、94－18次調査で確認されたSD601からは、長原古墳群3期の埴輪が大量に出土しており、当該期の古墳が付近に存在する可能性が高い。

弥生時代以前では遺物が少量出土するのみである。

後期旧石器時代では、94－18次調査でナイフ形石器1点が遊離して出土したのみで、遺構は認められない。しかし、これまでの調査では周辺で旧石器遺物が多く確認されている。このことから付近には、石器製作址等が存在した可能性も否定できない。

なお、94－52次調査では7～8万年前の中期旧石器時代にさかのぼる自然流路と、その両肩で密にナウマンゾウやムカシニホンジカなどの多数の足跡化石が検出された。旧石器時代における足跡化石の検出は、長原遺跡では3例目である。なお、大阪市内ではほかに山之内遺跡で2個所、喜連東遺跡で1個所などの調査例があり、山之内遺跡ではナウマン

ゾウとヤベオオツノシカの調査例が報告されている[大阪市文化財協会1998]。今回の調査では人類の痕跡は検出することができなかったが、中期旧石器時代にこの地域に狩猟対象動物がいたことを再度確認したという成果は大きく、機会が恵まれれば、今後ともこの時期の人類の痕跡を追求してゆくべきであろう。

2)長原一ケ塚古墳と出土遺物(図49～52、表13)

i)はじめに

一ケ塚古墳は1982年に発見されて以来、おもに土地区画整理事業を調査原因として合計8度にわたって発掘調査が行われてきた(表13)。今年度はその最終調査年度に当る。そのため、これまでの報告と重複する部分が大きいが、以下では過去の調査成果を簡単にまとめておきたい。

古墳の形状は造出しを持つ円墳で、その時期は古墳時代中期前半に比定される。[大阪市文化財協会1999b]によれば、復元された古墳の規模は墳丘裾の直径47.4m、造出しの南北幅12.3m、東西の長さ7.0mで、造出しを含めた墳丘の最大長は53.6mである。周濠の幅は約14m、深さ1.3～1.5mで、周濠を含む直径は71.2mになる。なお、西側の周濠内には部分的に土壙状の落込みがあることが知られており、古墳築造当時のものと推定されている。墳丘は本来は段築成であった可能性が高く、周堤は確認されていない。

過去の調査は造出し周辺と、北から西南にかけての周濠と墳丘裾で行われており、南側の周濠と墳頂部は未発掘である。これらのうちで調査面積が最大であるのは1993年度の調査で、これに伴う遺物の出土量はもっとも多い。図49にはこれまでの調査で復元された、当古墳と調査地を示した。

表13　一ケ塚古墳の調査一覧

次数	調査原因	調査面積	調査位置	出土埴輪	その他の遺物	参考文献
NG82－27	土地区画整理事業	188㎡	北東造出し部・周濠	円筒・朝顔・壺・家・囲・衣蓋・盾・靫・短甲・草摺・鶏・不明	土師器壺	大阪市文化財協会1990
NG91－54	土地区画整理事業	200㎡	北端墳丘	円筒・朝顔・家・盾・衣蓋・靫・短甲・草摺・鶏・動物・不明	加工板材	大阪市文化財協会1997
NG91－81	土地区画整理事業	35㎡	周濠・196号墳(一ケ塚古墳の付属施設か)	円筒・朝顔・壺 蓋		大阪市文化財協会1997
NG93－6	土地区画整理事業	590㎡	西側墳丘・周濠	円筒・朝顔・家・盾・衣蓋・靫・草摺・不明	土師器壺 木製鋤・柄	大阪市文化財協会1995c 大阪市文化財協会1999b
NG93－7	土地区画整理事業	197㎡				
NG93－18	国庫補助事業	168㎡				
NG94－18	土地区画整理事業	334㎡	北側周濠・墳丘	円筒・朝顔？・家・盾・衣蓋・靫・短甲・草摺・不明		本書
NG94－33	土地区画整理事業	140㎡	西側周濠	円筒・朝顔？・家・靫		本書

ii)一ケ塚古墳の埴輪

当古墳の出土遺物は円筒埴輪と形象埴輪がほとんどであるが、土師器の二重口縁壺や甕のほか、木製の鍬や加工木材も認められている(表13)。これらの土器や木製品は、当墳になんらかの関係があると思われる。出土遺物のうち、1982年度の調査で出土した円筒埴輪や朝顔・壺形埴輪についてはすでに編年を含めた検討が行われている[積山洋1990]。その後、出土遺物の増加によって、形象埴輪には追加される資料がでてきた。このため、以下では形象埴輪についてその概略をまとめておきたい。

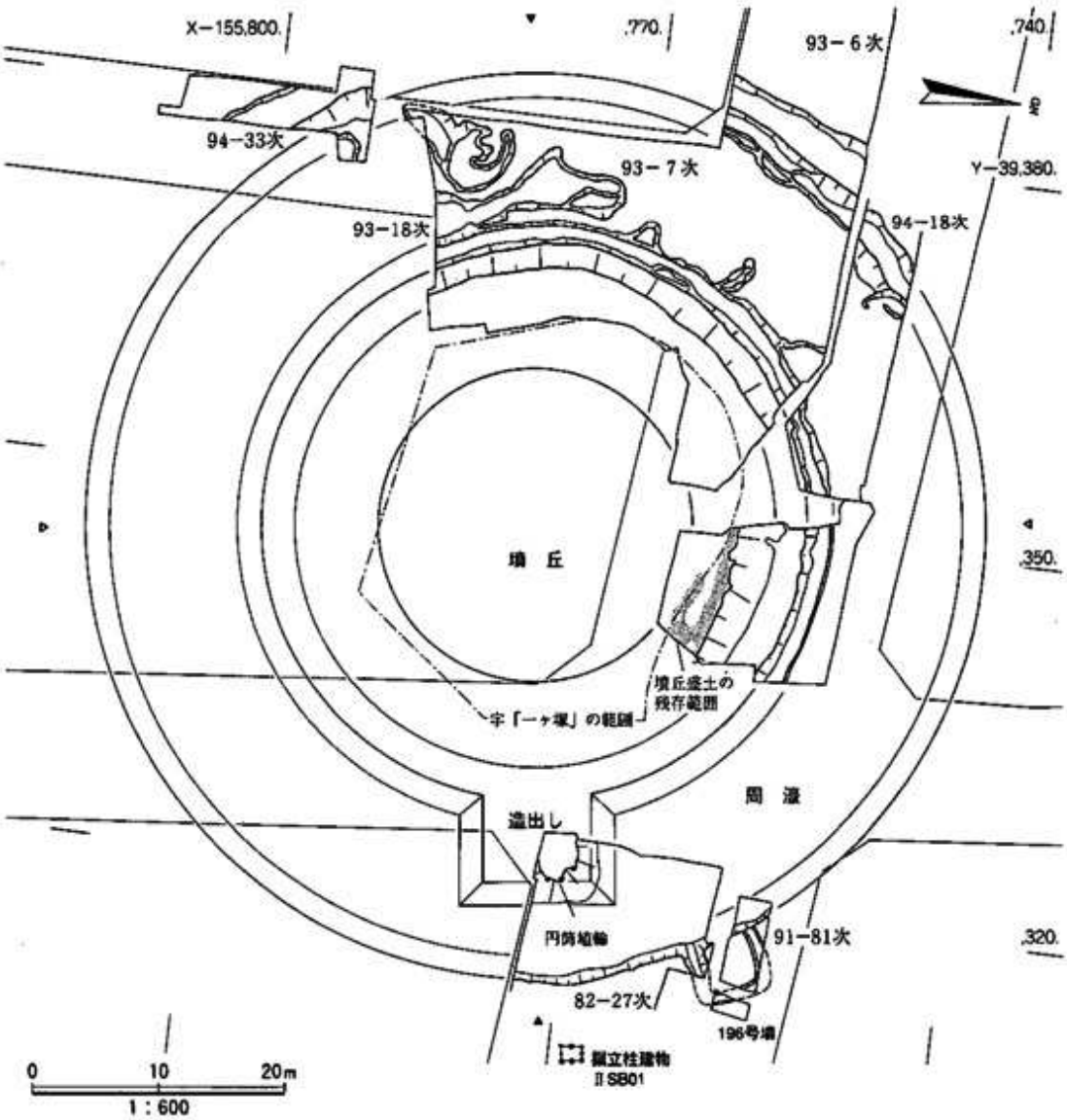


図49　一ケ塚古墳全体図([大阪市文化財協会1999b]より一部改変)

当古墳で出土している形象埴輪については家ならびに囲形埴輪を中心としてその概略が述べられている[櫻井久之1990]。その種類には家形埴輪と囲形埴輪のほか、衣蓋・靫・鞆・盾・短甲・草摺形の器財埴輪があり、動物埴輪としては鶏と偶蹄類が認められる。図51～53にはこれまでの調査で出土した形象埴輪のうち、おもなものを集成して掲載した。

ここで、図50～52にあるローマ数字は『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』シリーズの番号を、()内の数字は各報告書での報告番号を示している。なお、家形埴輪については各報告書での分類別に掲載した。

家形埴輪(図50・51)：出土した形象埴輪の中でもっとも個体数が多く、十数個体が存在したと思われる。形態としては切妻造の平地式・高床式建物と、入母屋造の高床式建物、寄棟造の高床式建物がある。切妻造では平地式建物３棟(Ⅱ－家形埴輪Ａ・Ⅻ－家形埴輪１・２)と高床式建物１棟(Ⅱ－家形埴輪Ｂ)に加えて、屋根部分や側廻り(Ⅱ－家形埴輪Ｃ・Ⅻ－家形埴輪３・４)が出土している。中でも平地式がもっとも多く３個体以上あり、これらは規模が類似するのが特徴である。入母屋造の高床式建物は１棟(Ⅻ－家形埴輪５)が復元されている。なお、94－18次調査でもこれと同一個体と思われる破片が見られる(本章第１節)。寄棟造の高床式建物は１棟(Ⅱ－家形埴輪Ｄ)のみが知られる。このほか1982年度の調査では、家形埴輪Ｅとされた切妻屋根の一部(Ⅱ－296)、家形埴輪Ｆとされた屋根の軒先部分(Ⅱ－297)、家形埴輪Ｇとされた高床式建物の一部(Ⅱ－300・302・307)が出土している。また、1993年度の調査でこれらとは別個体と思われる側廻り(Ⅻ－家形埴輪６・７)が報告されている。

囲形埴輪(図51)：現在のところ1982年度の調査で出土した１個体のみが知られている(Ⅱ－288)。これについては[櫻井1990]で他地域の出土例を含めた検討がなされている。

衣蓋形埴輪(図53)：1991年度の調査で笠部が１点、笠部の下位に当る円筒部が３点出土している。また、1993・1994年度の調査ではこれとは別個体の笠部が複数の個体分認められており、少なくとも３個体以上は存在したと思われる。なお、1991年度の調査で出土した笠部は、下半の線刻を１段として復元しているが、その後の出土資料を含めてこの部分が１段となる破片は認められなかったことから、本来は２段であったと推定される。立飾り部は線刻や色調・胎土の違いからみて、造出し部分で出土したものと、西側の周濠の調査で認められたものは別個体で、周濠内のものはさらに数個体に分類できよう。なお、衣蓋形埴輪については立飾り部の形態をもとに、長原古墳群や他地域の古墳の資料を含めて比較・検討がなされている[櫻井久之1991]。

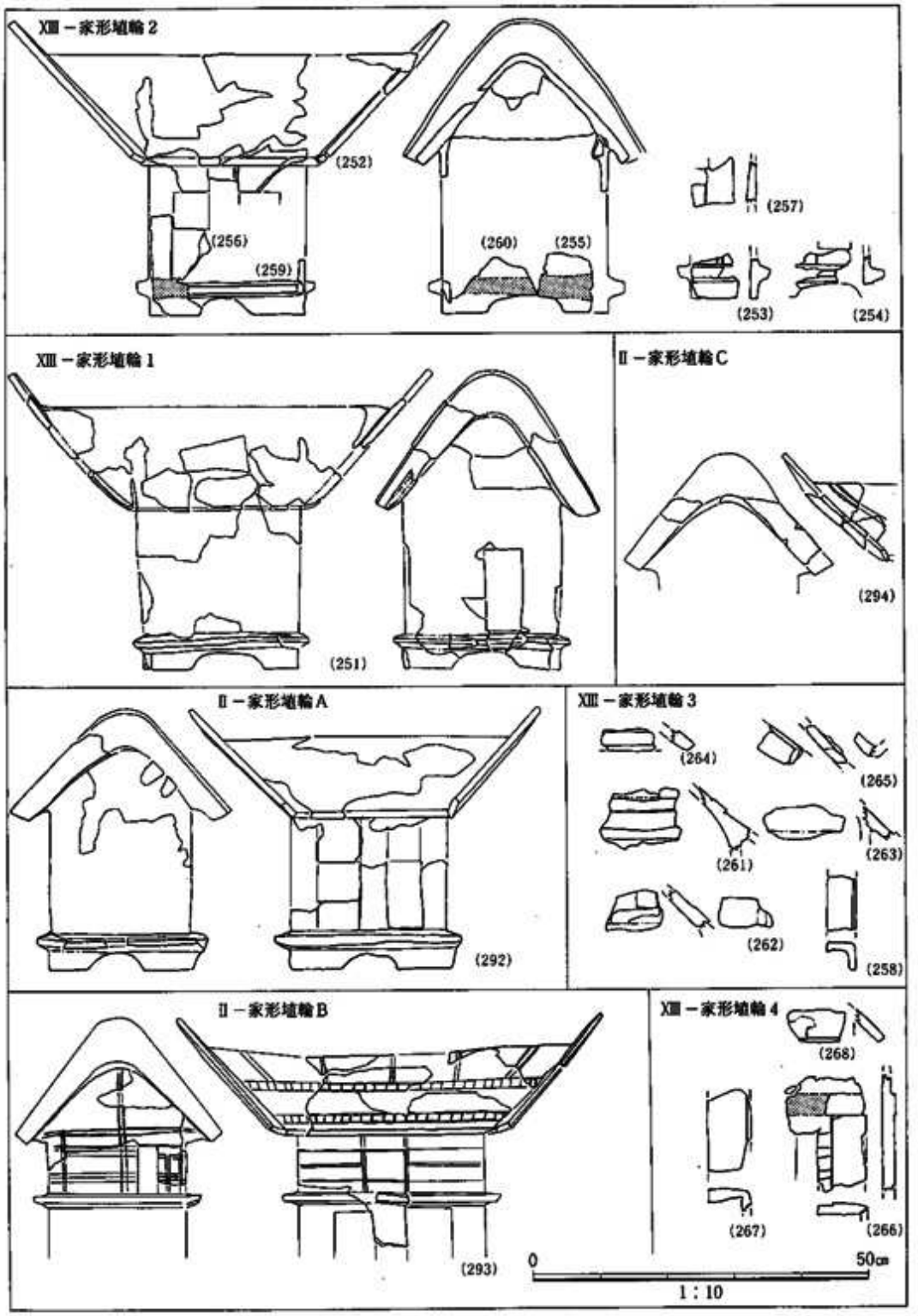


図50　一ケ塚古墳の形象埴輪(家)

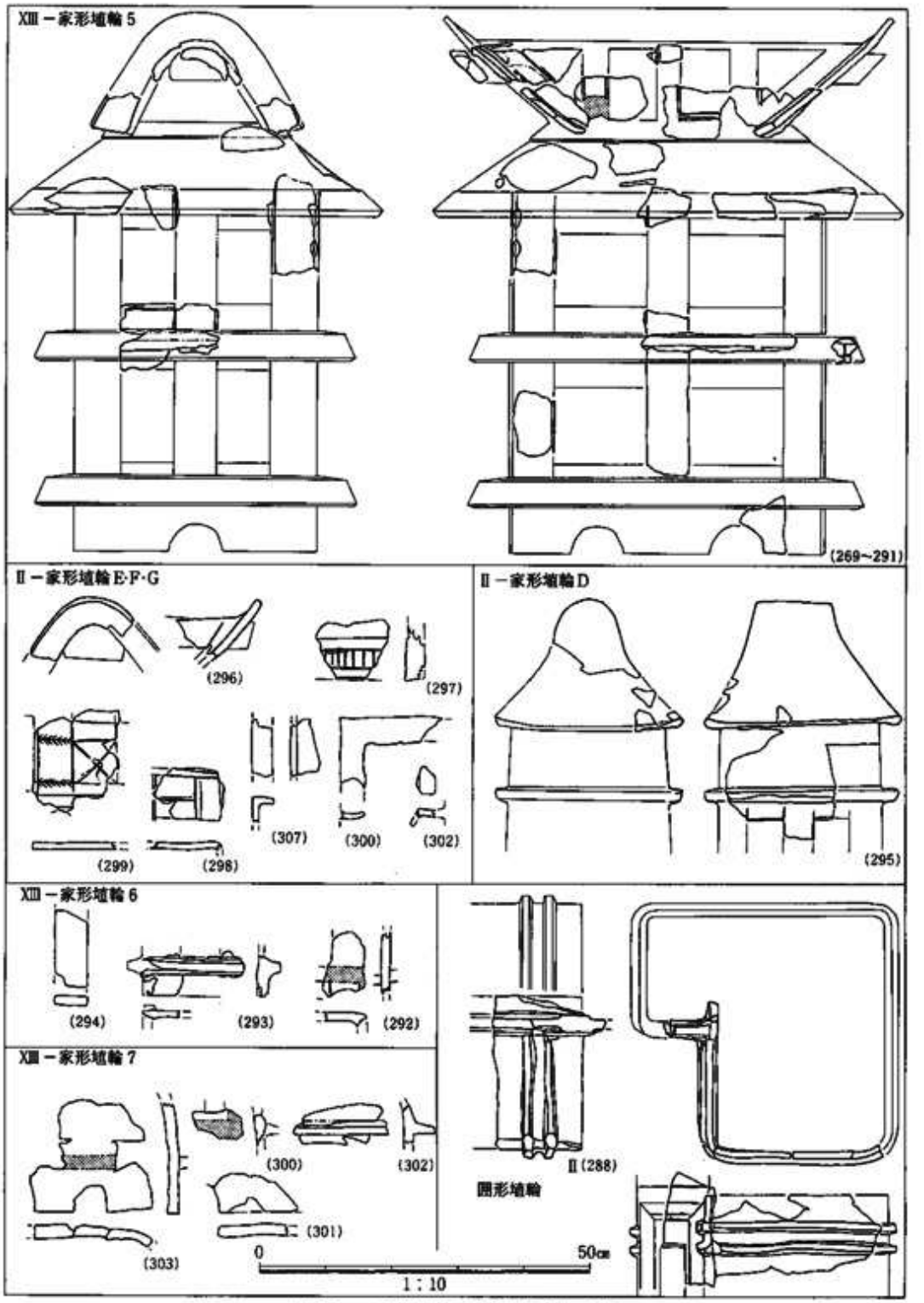


図51　一ケ塚古墳の形象埴輪(家・囲)

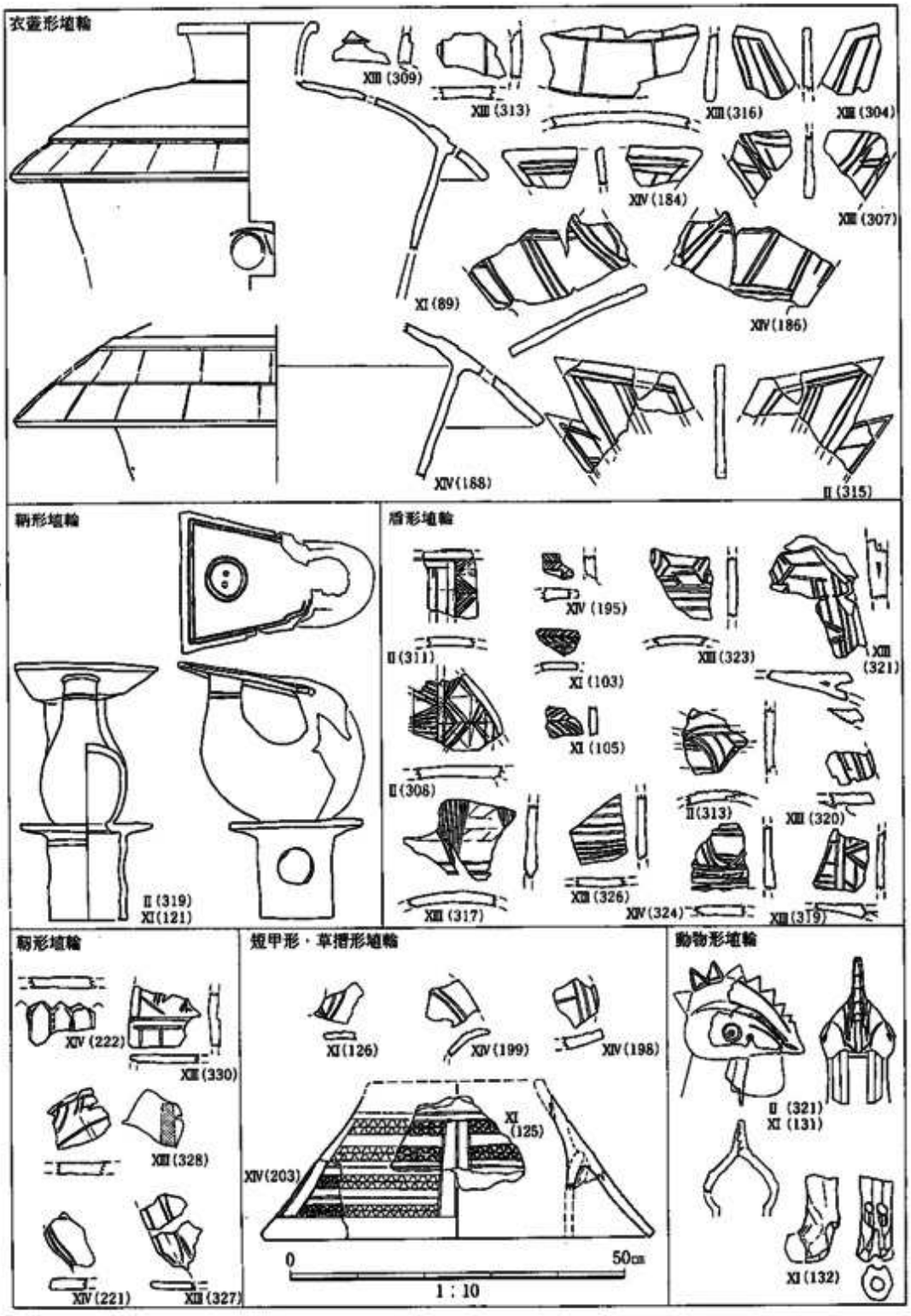


図52　一ケ塚古墳の形象埴輪(衣蓋・鞆・盾・靭・短甲・草摺・動物)

靭形埴輪(図52)：飾り板部と筒部の破片が1993・1994年度の調査で出土しており、94－33次調査では筒部の上端に当る鐓表現の部分が確認されている。いずれも細片で全体の形状は明らかではないが、飾り板部には円形の文様帯を有し、筒部は上端ですぼまる形態で、突帯や線刻で文様帯を分割しているようである。

鞆形埴輪(図52)：1982年度と1991年度の調査で出土したものが接合した1個体のみが認められており、詳細な検討がなされている[松本百合子1997]。

盾形埴輪(図52)：二つの形態が認められる。一つは[高橋克壽1988]での分類において一類とされた、盾面を目字形に分割するものである。1993年度の資料には盾面の上部(XIII－320・321)と、直弧文と平行線の文様帯で構成される部分(323)などがあり、これらは同一個体の可能性がある。もう一つは同分類で二類とされた盾面をII字形に分割するもので、当古墳では複数の個体がある。外区と内区を充填する文様帯はそれぞれ鋸歯文と斜格子文で、外区と内区は綾杉文で分割するものと、数条の線刻で分割するものの2種がある。

短甲・草摺形埴輪(図52)：短甲形埴輪は出土数が少なく、全体の形状は不明であるが、少なくとも1個体がある。図示した3点はいずれも赤褐色系の色調を呈する破片で、胎土の特徴も類似しており、同一個体と思われる。

草摺形埴輪は1991年度と1994年度の調査で出土しており、同一個体と思われることから図上で復元している。裾での直径は約60cmで、2段を一組とする鋸歯文を施した文様帯を4条持ち、その間には無文の部分を有する。なお、無文の部分にはその中ほどを線刻で区切る部分と、区切らない部分とがある。この形態の草摺形埴輪は、高橋工氏による甲冑形埴輪における草摺部の分類ではB類に属し、高廻り2号墳の出土品などに類例がある[高橋工1991]、(註1)。

動物形埴輪(図52)：鶏形埴輪と偶蹄類が1点ずつ認められており、これらは1982年度と1991年度の調査で、造出部分から出土している。

以上、これまでの調査で出土した形象埴輪の概略を述べてきたが、これらの個体識別など詳細な検討は行えなかった。今後、未発掘部分の調査が進んだ際にはその出土資料も含めた考察が必要になろう。

註)

(1)短甲形埴輪は草摺形埴輪とセットとなり、甲冑形埴輪として用いられたと考えられており、本来甲冑形埴輪の短甲部・草摺部と呼称するのが適当であろう[高橋克壽1988]。しかし、今回は複数の調査で、短甲部と草摺部とが別々に出土しているため、あえて甲冑形埴輪の名称は用いないこととした。

第Ⅳ章　長原遺跡南地区の調査結果

第１節　94－39次調査

１)層序(図53、表14)

第Ⅰ章第２節でふれたように、今回の調査区は1979年に行ったNG18次調査地の一部とほぼ重なっており、長原６層までは調査済みであったため、これより上の層序については断面観察のみを行った。詳しい記載は表14にゆずり、以下で各層の特徴について述べる。

第２層は北部に分布する。出土遺物からは時期を断定できないが、その上面の高さを周辺の調査と比較した結果、長原6Ai層に比定しえた。上面で平安時代の井戸を検出した。

調査区の中央から北に分布する第３～５層は水成層で、長原6Aii層に相当すると思われる。３層の上部には踏込みが見られる。調査区の南では本層を埋土とする溝を検出した。

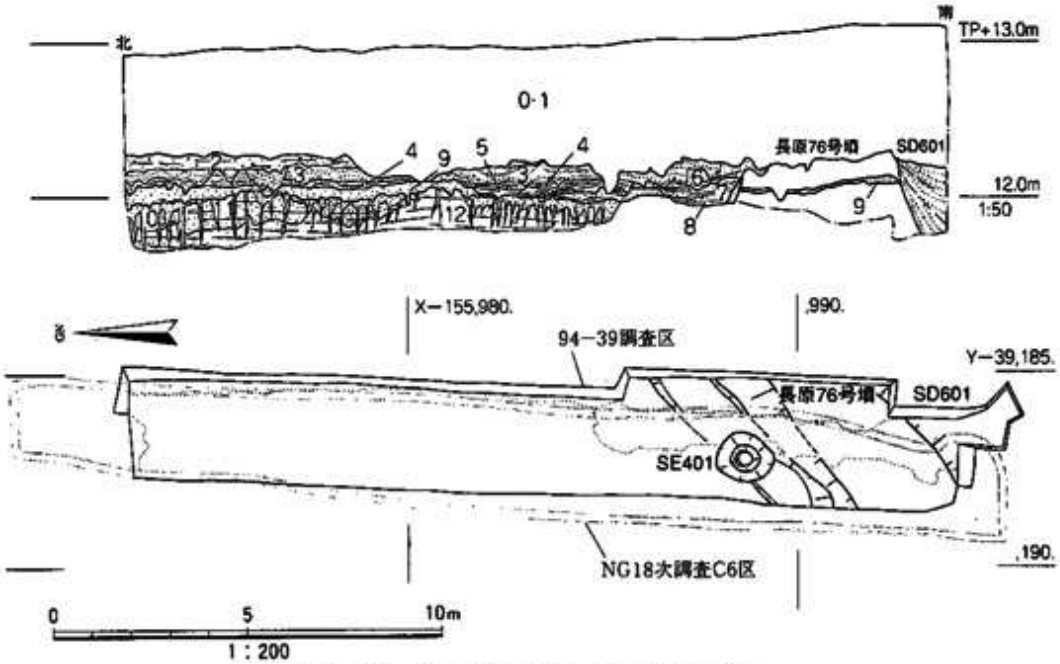


図53　94－39次調査の東壁地層断面と検出遺構

表14　94－39次調査の層序

標準層序	層序	層　相	層厚(cm)	遺　構	遺　物	特　徴	掲載遺物
NG0	1層	現代盛土					
NG6Ai	2層	オリーブ灰色(2.5GY5/1)含礫シルト質中粒砂	≦10	▲SE401		作土	
NG6Aii	3層	灰オリーブ色(5Y6/2)細粒砂～礫				水成	
	4層	褐灰色(10YR4/1)極細粒砂～シルト	10～15			水成	
	5層	灰黄色(10YR4/2)シルト				水成	
	6層	オリーブ褐色(2.5Y4/3.5)粘土+黒褐色(7.5YR3/1)極細粒砂	≦10	▲SD601	埴輪	76号墳盛土	
NG7A	7層	黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒砂	5～10		韓式系土器・土師器・埴輪	76号墳周溝埋土	257・258
	8層	灰オリーブ色(5Y6/2)粘土～極細粒砂	≦10			76号墳周溝埋土水成	
NG7B	9層	黒褐色(7.5YR3/1)極細粒砂	≦10	▲76号墳	土師器		
NG9～12?	10層	灰黄色(2.5Y7/2)極細粒砂	≦10				
NG13a-b	11層	黄灰色(2.5Y6/1)粘土～極細粒砂	≦20				
NG13C以下	12層	明緑灰色(10GY7/1)～灰オリーブ色(5Y5/3)粘土	≧30				

第６層は第12層と15層のブロック土からなり、長原76号墳の墳丘からの流土である。

第７・８層は長原76号墳北側の周溝内で確認した層で、長原7A層に相当すると考えられる。７層は第11層との区別がむずかしいが、これとの間に長原76号墳の墳丘流土が部分的に存在することや、11層と比べてシルト質が強いことから区別した。軟質の韓式系土器や埴輪の小片をわずかに含む。８層は最下層に堆積した水成層で、遺物は出土しなかった。

第９層は長原7B層に相当すると考えられる暗色帯で、長原76号墳のベースとなる地層である。なお、墳丘盛土下では色調が淡い。本層からは土師器甕が出土した。

第10層は長原９～12層に当ると思われるが、遺物は出土しなかった。

第11層は長原13層の上部に当ると思われ、12層との境界は不明瞭である。また、12層は火山ガラスを含まず、長原13C層以下に相当すると考えられる。

２)遺構と遺物

ｉ)平安時代(図53・54、図版14・39)

第２層の上面ではNG18次調査の際に井戸１基を検出した。

SE401は調査区の南で認められた素掘りの井戸である。直径は1.05～1.25m、深さ1.5m

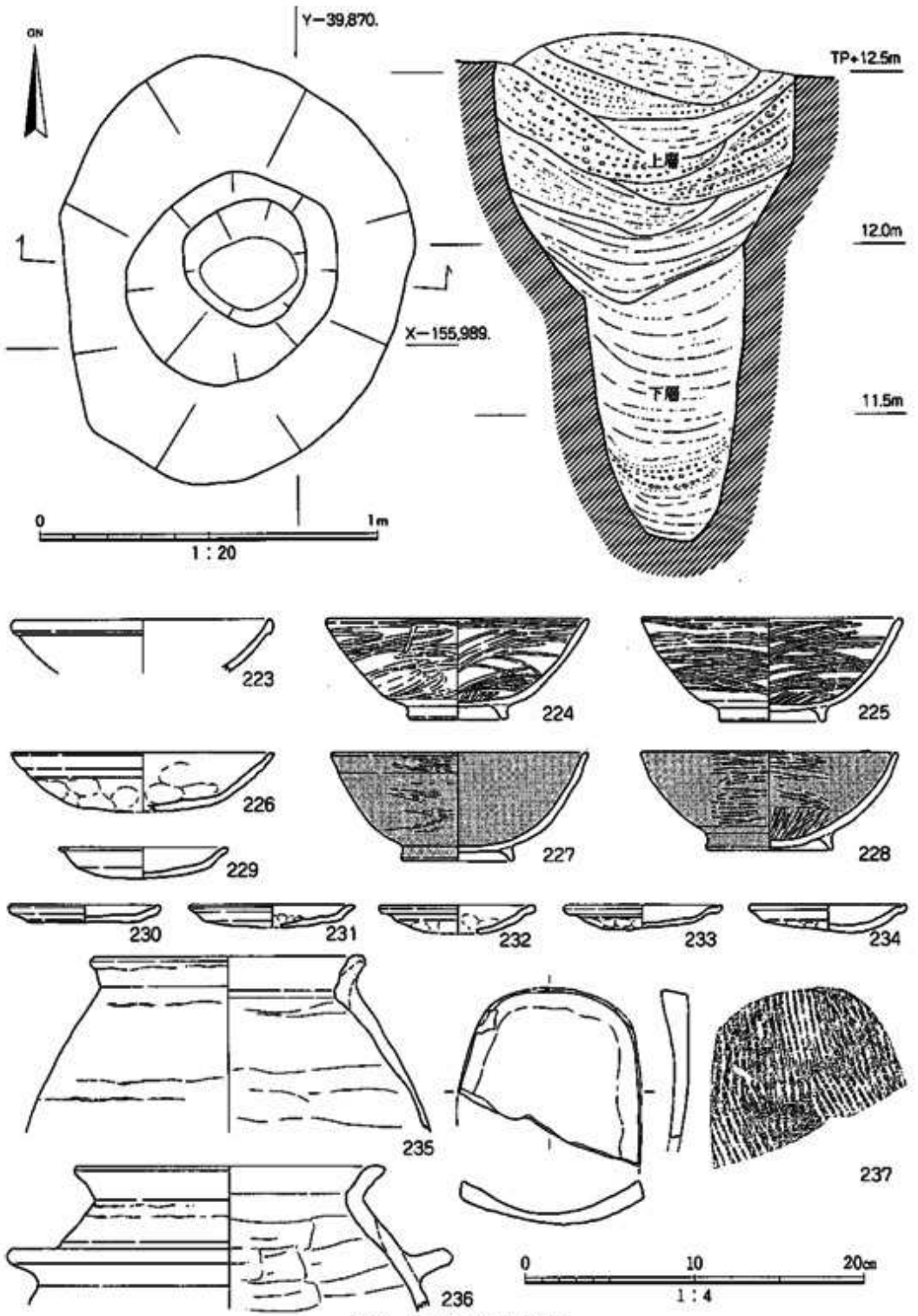


図54　SE401と出土遺物

で、深さ0.7mよりも下位部分では径が小さく、2段掘りになっていることから、曲物などの井戸側が存在した可能性もある。埋土の上層は灰黄褐色砂礫とシルトの互層で、下層は間に水成の砂礫層をはさむ暗褐色粘土層であった。ここからは223～237をはじめとする多くの遺物が出土した。

223は白磁碗で、口縁端部は玉縁状をなす。224・225は瓦器椀で高台が高く、内外面のヘラミガキはていねいである。225は底部外面にもヘラミガキを有する。227・228は黒色土器椀である。227は器表の磨滅が著しいが、ていねいにヘラミガキを施すようである。228は227よりも器高が低く、瓦器に近い焼成である。内外面にはヘラミガキが密に見られる。226・229～236は土師器である。226は中皿で、口縁部外面には2段のヨコナデを施す。229～234は小皿で、口径は9～10cm程度である。229は器高がほかよりもやや高い。229・231は口縁部を外反させ、230は軽く内側につまむ。232～234は「て」字状口縁をもつ。235は甕で、口縁部は短く分厚いが、体部は薄く作っている。236は羽釜で、口縁端部の上に面をもつ。鍔は分厚く、上向きに付けられている。外面には粘土紐の接合痕跡が見られる。体部の内面はヘラケズリで仕上げている。これらは平安時代Ⅳ期古段階で、11世紀末～12世紀初頭であろう。237は風字硯である。外面に平行タタキを施した、須恵器甕の体部片を転用しており、側面には製作時の擦痕が残る。なお、内面には墨の痕跡が認められる。

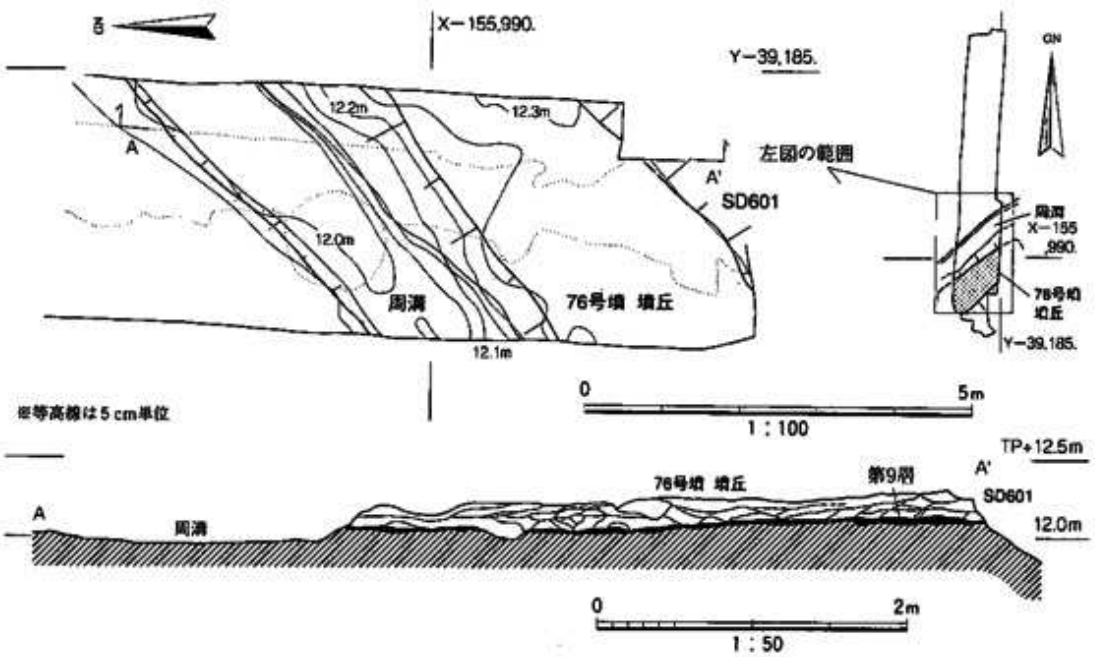


図55　長原76号墳平・断面図

ii)飛鳥～奈良時代(図53・55)

調査区の南端で溝を検出した。SD601は北東から南西方向へ流れる溝で、少なくとも幅は2.5m以上、深さは1m以上あり、長原76号墳の墳丘を切っている。溝は長原6Aii層に相当する粗い砂礫で埋っており、遺物は出土しなかった。調査区内では北肩を検出したのみであったため、規模を確認するために調査区を南へ拡張した。しかし、溝は予想以上の規模があり、南肩は確認できなかった。

iii)長原76号墳(図55・56、表15、図版14・39～41)

調査区の南で墳丘北半および北側周溝の一部を検出した。墳丘の盛土は約0.2m残存していた。周溝は幅約1.5m、深さ約0.1mと小規模で、北側の肩ははっきりしない。墳丘断面の観察から、盛土は長原7B層と考えられる古墳築造以前の旧地表土の上に細かい単位で行っていたことがわかった。盛土作業の工程は、まず墳丘外縁部分で完結する堤状の高まりを作り、それより内の墳丘側に南から北へと土を盛っていた。この方法は、長原古墳群の中で比較的小型の古墳に見られる、墳丘外縁を堤状に盛り上げ、その内部を埋めていく工法と類似している。なお、周溝上層には削平された墳丘の盛土と考えられる、埴輪を大量に含む第6層が堆積しており、この下からは埴輪はほとんど出土しなかった。6層をSD601掘削による古墳の破壊に伴うものと考えると、SD601の掘削直前まで古墳は形を留めており、周溝内に墳丘上の埴輪が転落するような状態ではなかったことが予想される。

長原76号墳に伴う遺物のほとんどは、第6層から出土した円筒埴輪と朝顔形埴輪である。埴輪はその多くがNG18次調査で出土した破片と接合するため、これらを一括して報告する。これらはすべて原位置をとどめておらず、第6層やこれより上位の地層から出土したものであるため、すべてが確実に当古墳に伴うとはいえない。図示したものの中で238～243は円筒埴輪、244・245は朝顔形埴輪である。246～256は胴部から底部に当り、口縁部の形状は不明である。埴輪の法量や調整、焼成については表15に述べている。

238はほぼ完形に復元しうる。器高36.4cmと小型で、一方のスカシ孔の上に1条の線刻が見られる。239・240は同一個体で、平面形が楕円形に歪んでいるため、外形は長径の部分を実測した。外面調整はタテハケののち、最下段タガより上は細かく断続するヨコハケを施し、この下位に工具が器表を一気に全周するヨコハケを施している。241は外面のごく一部にのみ二次調整のヨコハケが見られる。242は器表の磨滅が著しく、調整は不明瞭である。最上段のタガの上には2条の線刻を斜め方向に施している。243は小型品で、外面の調整は比較的目の細かなタテハケである。244は朝顔形埴輪の口縁部で、内外面は目の粗いハ

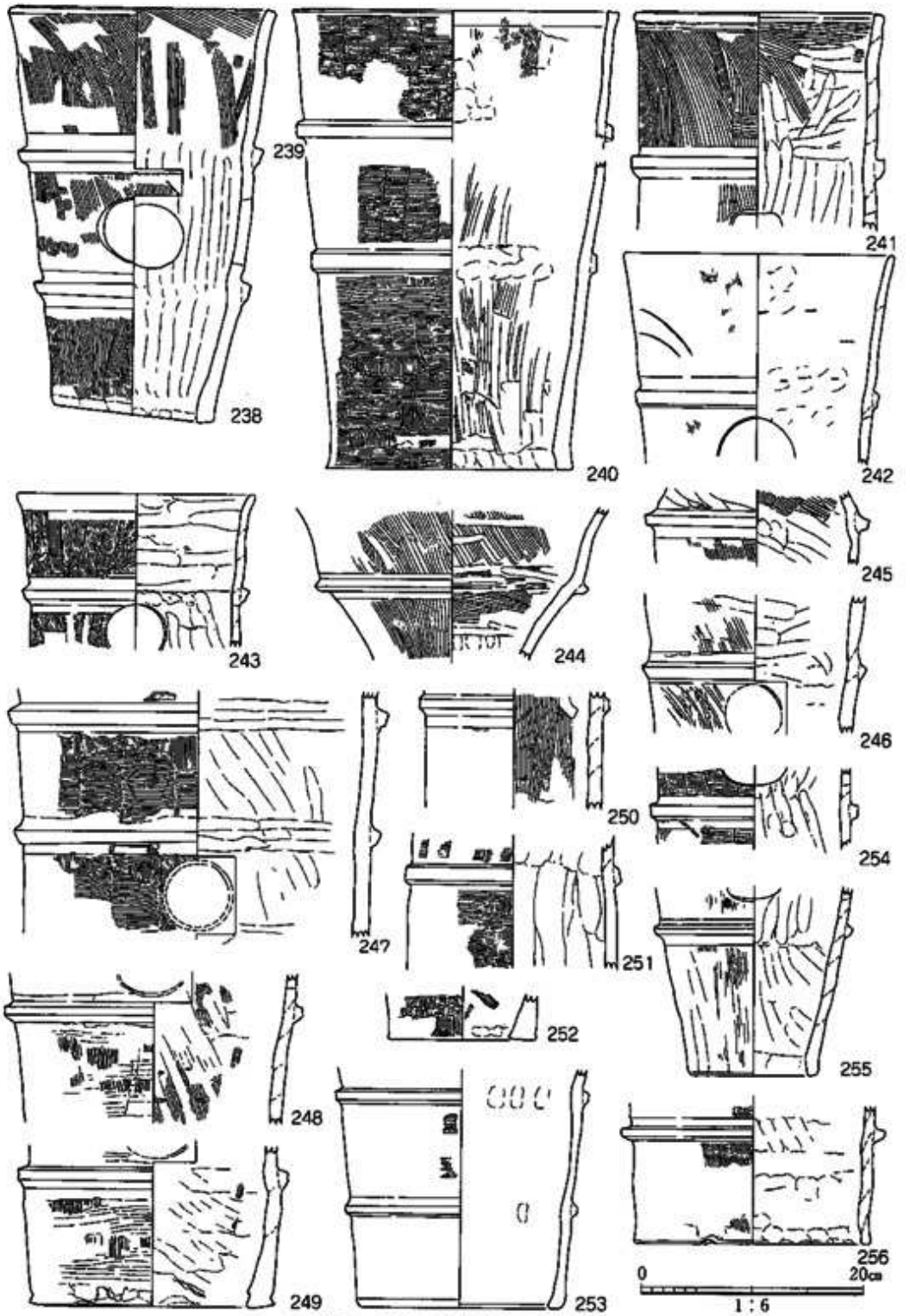


図56　長原76号墳出土の埴輪

表15　長原76号墳の埴輪

番号	部位	口径	胴径	底径	外面調整（一次／二次）		内面調整	タガ	焼成状態	備考
238	完形	23.4	20.0	14.3	タテハケ		ハケ→ヨコナデ		酸化焔／硬質	底部調整有？線刻有
239	口縁部	29.6	27.0		タテハケ	ヨコハケ	ハケ		還元焔／硬質	同一個体
240	底部	24.2	22.1		タテハケ	ヨコハケ	ハケ		還元焔／硬質	
241	口縁部	22.4	21.0		タテハケ	ヨコハケ	ハケ→ヨコナデ		酸化焔／硬質	
242	口縁部	24.2	20.8		タテハケ？		ヨコナデ？		酸化焔／軟質	線刻有
243	口縁部	21.2	18.6		タテハケ		ヨコナデ		還元焔／硬質	
244	口縁部				タテハケ		ハケ→ヨコナデ		還元焔／硬質	朝顔形埴輪
245	肩部		18.3		タテハケ	板ナデ	ヨコナデ		還元焔／硬質	朝顔形埴輪
246	胴部		18.8		タテハケ	板ナデ	ヨコナデ		還元焔／硬質	同一個体か
247	胴部		32.5		タテハケ	ヨコハケ	ヨコナデ		酸化焔／硬質	
248	胴部		24.4		タテハケ	ヨコハケ	ハケ→ヨコナデ		酸化焔／硬質	同一個体
249	底部		22.9	22.0	タテハケ	ヨコハケ	ハケ→ヨコナデ		酸化焔／硬質	
250	胴部		15.4		タテハケ		ハケ		酸化焔／硬質	
251	胴部		18.2		タテハケ	ヨコハケ	ヨコナデ		酸化焔／硬質	
252	底部			13.2	タテハケ	ヨコハケ	ハケ→ヨコナデ		還元焔／硬質	
253	底部		21.6	18.7	ヨコハケ		ヨコナデ		酸化焔／軟質	
254	胴部		17.2		タテハケ	ヨコハケ	ヨコナデ		酸化焔／硬質	
255	底部		16.2	11.6	タテハケ？		ヨコナデ		酸化焔／軟質	底部調整有？
256	底部		21.3	21.2	タテハケ	ヨコハケ？	ヨコナデ		酸化焔／軟質	

＊単位はcm、口径および底径は外縁で、胴径はタガ（２段以上ある場合は上段）で測定した

ケで調整している。245は朝顔形埴輪の肩部と思われ、タガの上位部分の外面調整は板ナデである。246のタガは断面三角形で、突出度が低い。外面の調整や焼成・胎土が245と似ており、同一個体の可能性もある。247は大型で、外面の二次調整は断続的なヨコハケである。248・249は同一個体で中型である。外面にはタテハケののち、目の粗い連続的なヨコハケを施しており、内外面とも底部端には器面調整が及ばない。250～252はいずれも径が小さく、粗雑な作りである。253は器面の風化がひどく、一部にヨコハケが残るのみである。254の外面調整は断続的なヨコハケである。255の外面にはタテハケを施し、底部は二次的に調整するようであるが、磨滅が激しく断定できない。256の外面調整はタテハケのみであるが、タガの突出度は比較的高い。

以下で、長原76号墳の埴輪の特徴についてまとめると、まず、法量には大別して３種類

が認められた。すなわち、タガの下位部分の直径では30cm以上の大型品、25cm程度の中型品、20cm未満の小型品に分類しえた。このほかに平面形が楕円形のものも存在した(註１)。次に、外面の調整は、一次調整のタテハケのみのものと、二次調整としてヨコハケや板ナデ(細かなヨコハケ)を施すものがあり、ヨコハケには断続的(Ｂ種)・連続的(Ｃ種)の両方が見られた。内面の調整は、ハケや板ナデとユビナデによるものと、ユビナデのみのものが認められたが、全体に粗雑で、粘土紐の接合痕を残すものが多かった。なお、底部調整を施した可能性を有するものは238・255であるが、いずれも器表の磨滅が激しく、断定できなかった。スカシ孔はすべて円形で、タガの形態は台形や低い「M」字形のものに加えて三角形のものなどがある。また、焼成はすべて窖窯焼成で、酸化焔と還元焔焼成のものがあり、酸化焔焼成の埴輪の中に、橙色を呈するやや軟質のものが存在するのが特徴である。これらの埴輪は、238・243・250・255の外面調整が一次調整のタテハケのみであることからＶ期に当り、他はⅣ期に属すると思われる。ただし、Ｖ期としたものの中には、タガの作りがていねいで底部調整を施さないものがあることから、Ⅳ期にさかのぼる可能性も否定できない。

このほかに、周溝内の第７層から軟質の韓式系土器片がまとまって出土した(図版39)。257・258は同一個体と考えられる。外面には縦方向の粗いタタキののち、横方向に沈線を施す。厚さ５㎜程度と薄手であり、壺の体部と推定される。

以上、現時点では確実にすべての遺物が当古墳に伴うかどうかは不明であるが、出土した埴輪と韓式系土器の年代観から、長原76号墳の築造年代は長原古墳群の２期としておきたい。

註)

(１)楕円型の埴輪は長原131号墳などでも出土しており、検討がなされている[大阪市文化財協会1993a]。

第2節　94－47次調査

1)層序と各層出土の遺物(図57・58、表16、図版42)

今回の調査地は水田と畑に利用されている二つの敷地にまたがっており、東の畑地部分は西の水田部分より0.6m高い。これは後述するように、西の水田部分は、近世の粘土採掘により、長原6層以上の堆積土が除去され、地下げされたものと思われる。以下に地層の遺存状況が良かった東半部の地層を中心に記述する(表16)。

第2層は長原3層に相当するものと思われる。

第3層は水成層で、出土遺物はほとんどない。また、第4層はラミナの不明瞭な水成層で、第5層上面の水田面を被覆する。上面で踏込みが少数見られた。4層の上面に踏込みがあり、上位に粗粒砂が堆積していることから、3層を長原5A層、4層を長原5B層と推測できる。

第5層は長原6A層に相当する淘汰不良の作土層で、上面で水田畦畔や踏込みを検出した。

第6層は東半部の一部に分布する水成層である。

第7層は作土層と思われ、東半部のごく一部に分布する。埴輪の細片や土師器が出土した。273は把手付鉢の把手で、飛鳥Ⅰ以降であろう。これを重視すれば、本層は長原7A層に対比されよう。

表16　94－47次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴	掲載遺物
NG1	1層	現代作土					
NG3	2層	含砂礫黄褐色(2.5Y5/3)シルト	20～30	Ⅰ SD401,溝状遺構			
NG5A	3層	黄褐色(10YR5/6)粗粒砂ないしは砂礫	10～20	▼SD501		水成	
NG5B	4層	灰白色(5Y7/2)細粒～極細粒砂	10～15	▲踏込み		水成	
NG6Ai	5層	灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト	10	▲踏込み,SR601～604,SD601･602		作土	
NG6Aii	6層	灰黄色(2.5Y7/2)細粒～極細砂ないしはシルト	≦20			水成	
NG7A?	7層	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	≦10		土師器･埴輪	作土	273
NG7B	8層	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	≦10		須恵器･土師器･埴輪		
	9層	黄灰色(2.5Y6/1)シルト					
NG13以下	10層	灰白色(7.5Y7/1)シルト					

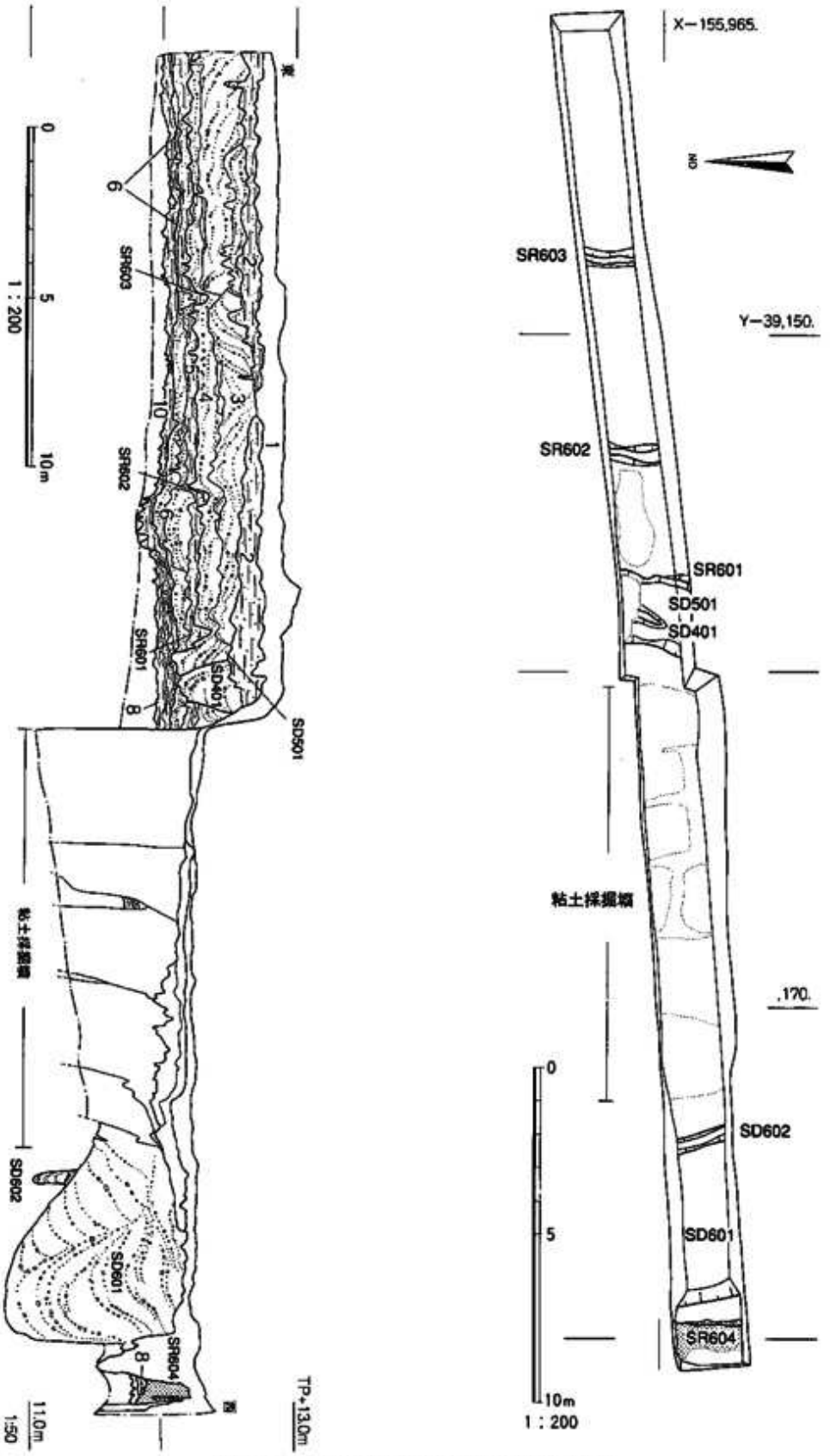


図57　94−47次調査の南壁地層断面と検出遺構

第8層は東半部の一部と西端の堤下に遺存する。須恵器・土師器・埴輪の細片が出土した。長原7B層に相当すると思われる。

第9層は東半部の一部に遺存する。また、第10層は長原13層以下に相当する。

2)遺構と遺物

i)江戸時代(図57)

調査区の西半部では8基の方形を呈すると推測される土壙が、切合って、あるいは接するように検出された。一辺の長さは2.5mほどと思われ、西から東に次々と掘削されていったことが断面観察からわかる。砂やシルトを主体とする軟弱な埋土で、壁面が崩壊する危険があったため、底まで掘削できなかった。調査区の西半部には第10層より下に粘性の強い粘土層があり、これを対象とする粘土採掘壙と考えられる。出土遺物は少なく時期は特定できないが、江戸時代の染付磁器片が出土しており、江戸時代末期以後と思われる。

ii)平安～鎌倉時代(図57・58、図版42)

第2(長原3)層基底面では、東半部の北壁に沿って浅い落込みがあり、掘削後の断面観察により溝状遺構であることが判明した。ここからは瓦器椀や土師器羽釜が出土した。259～261は土師器皿である。259は「て」字状口縁の系譜を引く小皿である。262・263は瓦器椀で、外面にはヘラミガキは見られず、内面のヘラミガキは圏線状である。Ⅳ期に当り、13世紀後半～14世紀であろう。

このほか東半部の西端で幅1.6m、深さ0.4mの南北溝SD401が検出された。埋土はシルトの混る砂礫層である。瓦器・土師器・鞴羽口が出土した。264は瓦器椀で器壁は厚く、内外面のヘラミガキはていねいである。12世紀代であろう。266は鞴羽口である。

また、調査区の東半ではSD401に切られるかたちで、第3(長原5A)層を埋土とする南北方向の溝SD501が検出された。幅1.4m以上、深さ0.3mで、第4層の砂層を切っており、第5層上面の水田畦畔を壊している。第3層堆積時の自然流路かもしれない。

iii)飛鳥～奈良時代(図57・58、図版15・42)

東半部の第5(長原6A)層上面で、南北方向の畦畔を3本検出した。SR601～603は下端の幅0.5m、高さ0.2mの小規模な畦畔で、SR601はSD501にそのほとんどを切られており、南端部分のみ残存する。畦畔の間隔は西から4mと6mである。水田面は西からTP+12.23m、TP+12.24m、TP+12.19mで、西2筆が高く、東へ低くなっている。

また、西端では幅6m以上の南北溝SD601を検出した。溝の東肩部は粘土採掘壙により

壊されているが、東壁は、ほぼ垂直に近い西壁より傾斜が緩やかである。溝の西壁は土砂を伴う強い水流により侵食されたものと思われるが、東壁は洪水時の溢流により肩部が押し流された可能性がある。この溝はNG18次調査のC5区北東端で検出されたSD06や[大阪市文化財協会1979]、94−39次調査(前節)のSD601と一連と考えられる。SD601内には粗粒砂および細礫が堆積しており、須恵器・土師器・円筒埴輪・弥生土器などが出土した。265は須恵器杯身で、飛鳥Ⅱの時期と思われる。267〜272は土師器である。267は皿で、外面の一部にヘラミガキ調整を行い、内面には1段の放射状暗文を施す。268〜270は杯で、外面にはユビオサエ痕を残し、内面には1段の放射状暗文を施す。271は甕で、口縁部は緩やかに内湾し、体部は下膨れの球形である。272は小型の甕で、内外面を板ナデ調整している。これらの土師器は飛鳥Ⅳに属し、溝を埋めた砂礫層は長原6Aii層と思われる。

なお、SD601の西肩部には第8〜10層を主体とする盛り土で堤SR604が築かれていた。SR604の現状の高さは0.4mで、堤の上端から溝の底までは約1.4mである。

SD602はSD601の東斜面で検出された、これに切られる溝である。検出時の幅は0.4m、深さは0.35mで、本来の深さは0.8mほどあったと推定される。埋土は砂の混る粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。

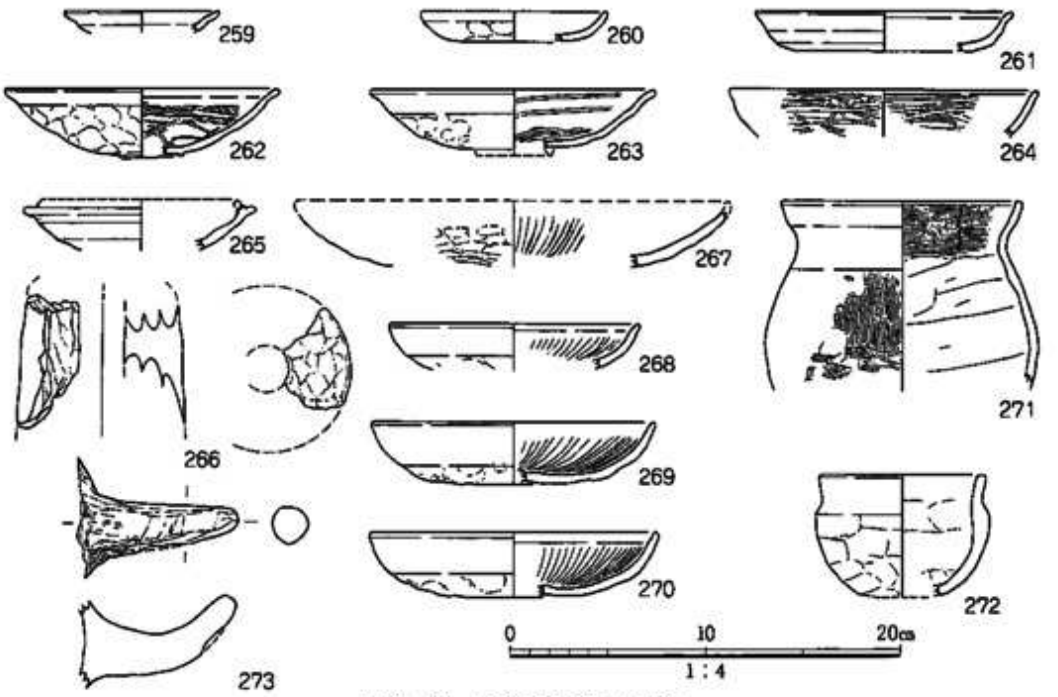


図58　94−47次調査の出土遺物
(溝状遺構：259〜263、SD401：264・266、SD601：265・267〜272、第7層：273)

第3節　94－56次調査

1)層序と各層出土の遺物

i)層序(図59、表17、図版16)

今回の調査では東除川の河道内に堆積した砂礫層および長原0～7・14層を確認することができた。なお、第Ⅰ章第1節で述べたように、調査区は東西に分かれているため、便宜上これらを東区・西区と呼称する。第2・3・10・14層は東区で検出され、第14層は西区でも確認された。これら以外はすべて西区でのみ確認された地層である。詳しい記載は表17に述べているため、以下では各層の特徴について略述する。

第2～8層は長原2層に相当する。2・3層は作土で、3層は2枚に細分することができる。西区で認められた4～8層のうち、7層は作土層、8層は水成層である。

第9層は2枚に細分することができ、長原2・3層に相当する。

第10～13層は長原3層に相当する。10層からは瓦質土器・瓦器・瓦・土師器が出土した。11層は2枚に細分することができ、瓦質土器・瓦器・瓦・土師器を大量に包含していた。また、12層は水成層、13層は作土層である。

第14層は水成層で、東除川河道内の堆積層である。長原4層に相当し、出土遺物は瓦器・瓦・土師器・須恵器である。

第15層は長原5A層に相当する水成層で、2枚に細分することができる。上部は酸化が強く、第11層下面の踏込みによるラミナの変形が著しい。北側は中世の溝に削平され分布していない。下部は上部に比べ砂礫の粒子が小さく、第17層の作土上面を覆う。また、長原5B層に相当する第16層も水成層で、4枚に細分しうる。出土遺物は埴輪の細片のみである。

第17層は作土で、長原6Ai層に相当する。長原6Aii層に相当する第18層は2枚に細分しうる水成層で、第19層は長原6Bii層に相当する水成層である。

長原7A層に相当する第20層は、西側に向うほど薄くなる。上面で踏込みを多数検出した。同じく長原7A層に相当する第21層は水成層で、古墳周溝の埋土になる可能性がある。

第22層は長原14層に相当し、東に向って低くなる。

ii)各層出土の遺物(図60、図版42～44)

図示したものは第9層と11層から出土した。274～277は瓦器である。274・275は小皿で、275の口径はやや大きい。276・277は椀である。いずれも外面はユビオサエとナデで

表17　94－56次調査の層序

標準層序	層序	層　相	層厚(cm)	遺　構	遺　物	特　徴	掲載遺物
NG0・1	1層	現代盛土および作土					
NG2	2層	含礫オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト	≦20			作土	
	3a層	含礫オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細～中粒砂	≦10	▲SD201,SK201 ▼SD202		作土	
	3b層	含礫にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒砂質シルト	≒20			作土	
	4層	含礫にぶい黄橙色(10YR6/4)中～粗粒砂	≦5				
	5層	含礫灰黄褐色(10YR6/2)極粗粒砂	≦15				
	6層	にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒砂	≦5				
	7層	含礫にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細～中粒砂	10～30	▼SX201		作土	
	8層	黄褐色(10YR5/6)粗粒砂	≦5			水成	
NG2・3	9a層	含礫オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂質シルト	≦20				278
	9b層	黄褐色(10YR5/6)シルト質細～中粒砂	≦15				
NG3	10層	含礫にぶい黄橙色(10YR6/3)細～中粒砂質シルト	≦15	▲SD301・302	瓦質土器・瓦器・土師器・瓦		
	11a層	含礫にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質細～中粒砂	≦25	▼SD303・304	瓦質土器・瓦器・土師器・瓦		274～277 279～284
	11b層	含礫にぶい黄橙色(10YR6/4)極細砂質シルト	≦15				
	12層	にぶい黄色(2.5Y6/3)極粗粒砂・細礫混り極細粒砂	＜5			水成	
	13層	含礫灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂質シルト	＜50	↓SD305・306,SK301,東除川,SD401・402	瓦質土器・瓦器・土師器	作土	
NG4	14層	にぶい黄褐色(10YR7/3)砂礫～浅黄色(2.5Y7/3)砂礫～シルト	70≦		瓦器・須恵器・土師器・瓦	東除川埋土 水成	
NG5A	15層	にぶい黄橙色(10YR6/4)～黄褐色(2.5Y5/4)砂礫	≦15			水成	
NG5B	16層	含礫灰白色(5Y7/2)極細粒砂質シルト～極細粒砂	≦30		埴輪	水成	
NG6Ai	17層	灰黄色(2.5Y7/2)極細粒砂質シルト～粘土	≦15	▲SR601		作土	
NG6Aii	18層	黄褐色(10YR5/6)極粒砂～シルト～極細粒砂～粘土	≦15			水成	
NG6Bii	19層	浅黄色(5Y7/3)粘土～極細粒砂	＜5			水成	
NG7A	20層	灰黄褐色(10YR5/2)シルト	＜5	▲階込み,高まり,↓落込み			
	21層	灰黄褐色(10YR4/2)粘土	≦5			水成	
NG14	22層	褐色(7.5Y4/3)シルト質粘土	15≦				

仕上げる。内面のヘラミガキは粗雑で、底部内面には平行線状のヘラミガキを施す。Ⅲ期後半と思われる。278・279は瓦質土器の三足釜の脚部である。280は手づくねで作った断面円形の土製品である。中央に比べて両端の径が太くなっており、端面は平らである。瓦質に焼成されている。草戸千軒町遺跡から出土している木製品で、むしろを編むための錘「つちのこ」と形が非常によく似ていることから材質に違いはあるが、同じように使用されていたものと思われる[広島県教育委員会1995]。長さは5.0cmで、重さは55.6gである。281～283は土師器である。281は皿で、口縁端部は丸くおさめる。282・283は羽釜で、口縁部は短く、端部を丸く仕上げる。これらは13世紀後半であろう。284は流紋岩製の太型蛤刃石斧である。現存長は10.6cm、最大幅5.1cmで、重さは285.3gである。

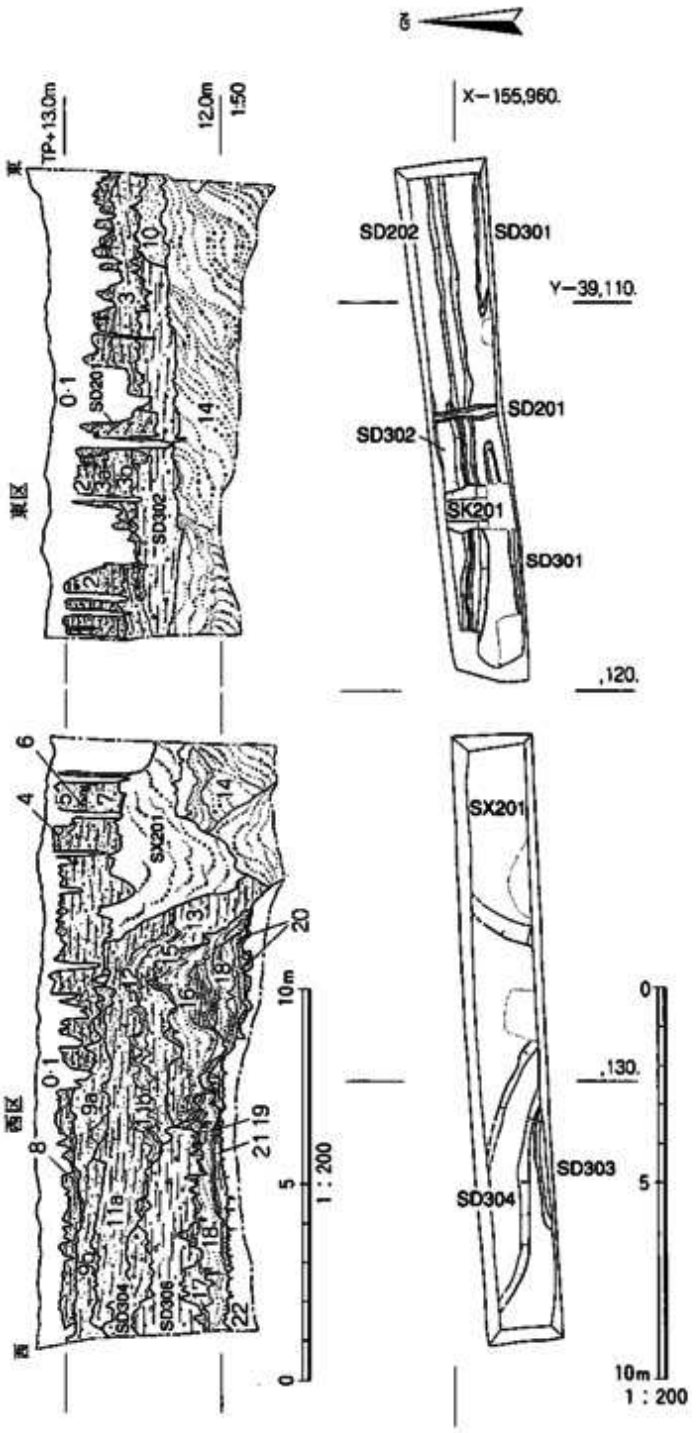


図59　94－56次調査の北壁地層断面と室町～江戸時代の遺構

2）遺構と遺物

東区では長原２・３層の下位は、東除川を埋積する砂礫層が全面を覆っており、堆積の厚さを確認するため、中央部で幅0.4m、深さ0.7mでトレンチ掘削を行ったが、河底の検出にはいたらなかった。調査の安全をはかるため砂礫層の全面掘削は行わず、土層断面の観察のみに留めた。また、西区ではこの川の西岸が検出された。以下では時代順に遺構と遺物の様相を記述する。

ｉ）江戸時代(図59・61、図版43・44)

東区では第３(長原２)層上面で検出した溝１条と、遺構の切合い関係からこれとほぼ同時期と考えられる土壙１基があり、第３層下面では溝１条が認められた。なお、東除川を

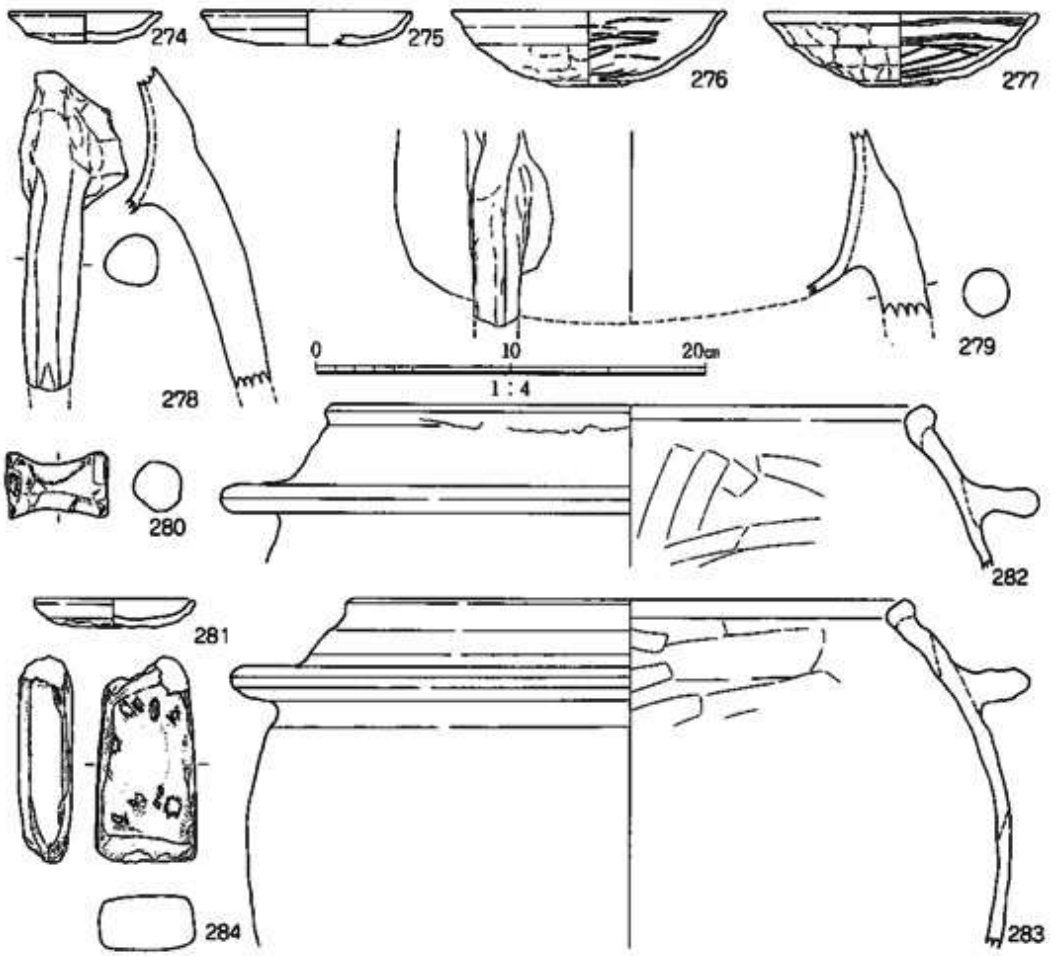


図60　各層出土の遺物
(第９層：278、第11層：274～277・279～284)

埋積する砂礫層上面までを重機で除去したため、掘込み面の観察は断面で行った。したがって、図示した遺構の輪郭は検出面でのものである。

SK201は中央で検出した東西1.2m、南北1.1m以上の土壙で、南側は削平されている。出土遺物は瓦質土器・瓦器・瓦・須恵器である。288は瓦質に焼成されており、280と同様のものである。長さ5.0cm、重さ37.65ｇで、両端は円形で平坦である。軸部分はユビオサエと不定方向のナデで成形している。

SD201は南北方向の溝で、幅0.2m、深さ0.2mである。この溝底の中央部に木樋を埋設していた痕跡が残っており、排水用と思われる。出土遺物は時期不明の磁器片である。

SD202は中央で検出した東西方向の溝で、幅0.5m、深さ0.3mである。出土遺物は肥前磁器・瓦質土器・瓦器・瓦・須恵器である。289・290は瓦質土器である。289は羽釜で口縁上端部はほぼ平坦である。頸部外面は強いヨコナデによる段が3段あり、体部の内面にはハケを施している。290は甕である。口縁部は短く外反している。体部外面はタタキののち軽くナデており、内面はヨコハケである。15世紀頃のものである。

西区では、第7(長原2)層基底面で落込みを検出した。

SX201は東側で検出した東西5m以上の落込みである。埋土は作土層と砂礫層のブロックからなり、人為的に埋戻されていた。東除川と関連する可能性がある。出土遺物は陶磁器・瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・瓦である。285は唐津焼皿である。釉は灰白色を呈する藁灰釉で、外面は部分的に施釉している。胎土目で、17世紀前半頃であろう。286は高台を有する白磁皿の底部である。287は瓦器皿で、内面に斜格子状のヘラミガキを施す。

ii)室町時代(図59・61、図版42・43)

東区では第10(長原3)層上面で溝2条を検出した。

SD301は南端で北肩を検出した。出土遺物は瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・瓦である。291は土師器小皿で、口縁部が分厚く、底部から屈曲して広がっている。底部は凹む形態になると思われる。292は瓦器皿である。内面には雑なヘラミガキが見られ、焼成は悪い。Ⅳ期後半であろう。内面はヨコナデを施している。293は瓦質土器の練り鉢で、口縁部内外面には火を受けた痕跡がある。体部外面はヘラケズリを行う。このほかに瓦質土器の羽釜片が出土している。これらの遺物は14世紀前半を中心とする時期のものである。

SD302は北で検出した東西方向の溝で、幅0.6m以上、深さ0.2mである。出土遺物は瓦質土器・瓦器・須恵器・瓦である。

西区では第11(長原3)層下面で溝を、第13(長原3)層基底面で溝と土壙を検出した。

SD303は西半部の南端でわずかに北肩を検出した溝で、蛇行しながら南側に延びており、規模は不明である。検出状況から後述するSD304から派生する溝と思われる。埋土はにぶい黄褐色含礫細粒砂質シルトである。

SD304は幅約1.2m、深さ0.2mの溝である。埋土はにぶい黄褐色含礫細粒質シルトである。後述するSD306とほぼ同じ場所に位置していた。出土遺物は瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・瓦・埴輪である。294～300は瓦器である。294～297は小皿で、器高は1.5cm前後と比較的浅く、295・297の内面にはミガキを施す。298～300は椀である。298・299の外面にはヘラミガキが無く、内面のヘラミガキも圏線状であるが、300の内外面のヘラミガキはていねいで、口径も大きく、器高が高い。298・299はⅣ期、300はⅡ期であろう。301は土師器小皿で、底部外面にユビオサエが残る。302は須恵器壺の底部で、東播系と思われる。内外面はヨコナデで仕上げている。

SD305は幅2.0～3.0m、深さ0.6mの南北方向の溝である。埋土は灰オリーブ色含礫砂質シルトと黄色～暗灰黄色砂礫層で、SX201との区別がむずかしく、第16層上面まで掘削を行って遺構と認識した。出土遺物は瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・瓦である。306は瓦質土器の羽釜で、口縁部外面にはナデによる凹線が見られる。内面はハケで調整している。15世紀であろう。303～305は瓦器で、303は椀である。外面には雑なヘラミガキが見られ、底部内面には斜格子状のヘラミガキを施す。Ⅲ期であろう。304・305は小皿である。304の内面には連結輪状のヘラミガキが見られる。305の口縁部外面は強いヨコナデを施して外反させている。内面にはヘラミガキを施すが磨滅のため不明瞭である。307は土師器の羽釜で、口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。13世紀前～中葉であろう。

SD306は幅0.5m、深さ0.2mの溝である。埋土は黄褐色礫混り細粒砂質シルトである。出土遺物は瓦質土器と土師器である。なお、この溝は先述したSD304と同じ場所に位置しており、遺物に接合関係があることから、２つの溝は同一の可能性がある。308は瓦器椀で、内面には雑なミガキを施している。SD304の出土品と接合した。309は瓦質土器鍋で、体部から頸部にかけて段をもたせながら口縁部を外反させている。これらは14世紀のものであろう。

SK301は幅0.4m、深さ0.3mで、南東で検出した。埋土は暗灰黄色極細粒砂質シルトで、出土遺物は瓦器・土師器である。

iii)平安～鎌倉時代(図61・62、図版17・42・43)

西区の第13(長原３)層基底面では溝と東除川の西岸を検出した。これらの遺構は長原４

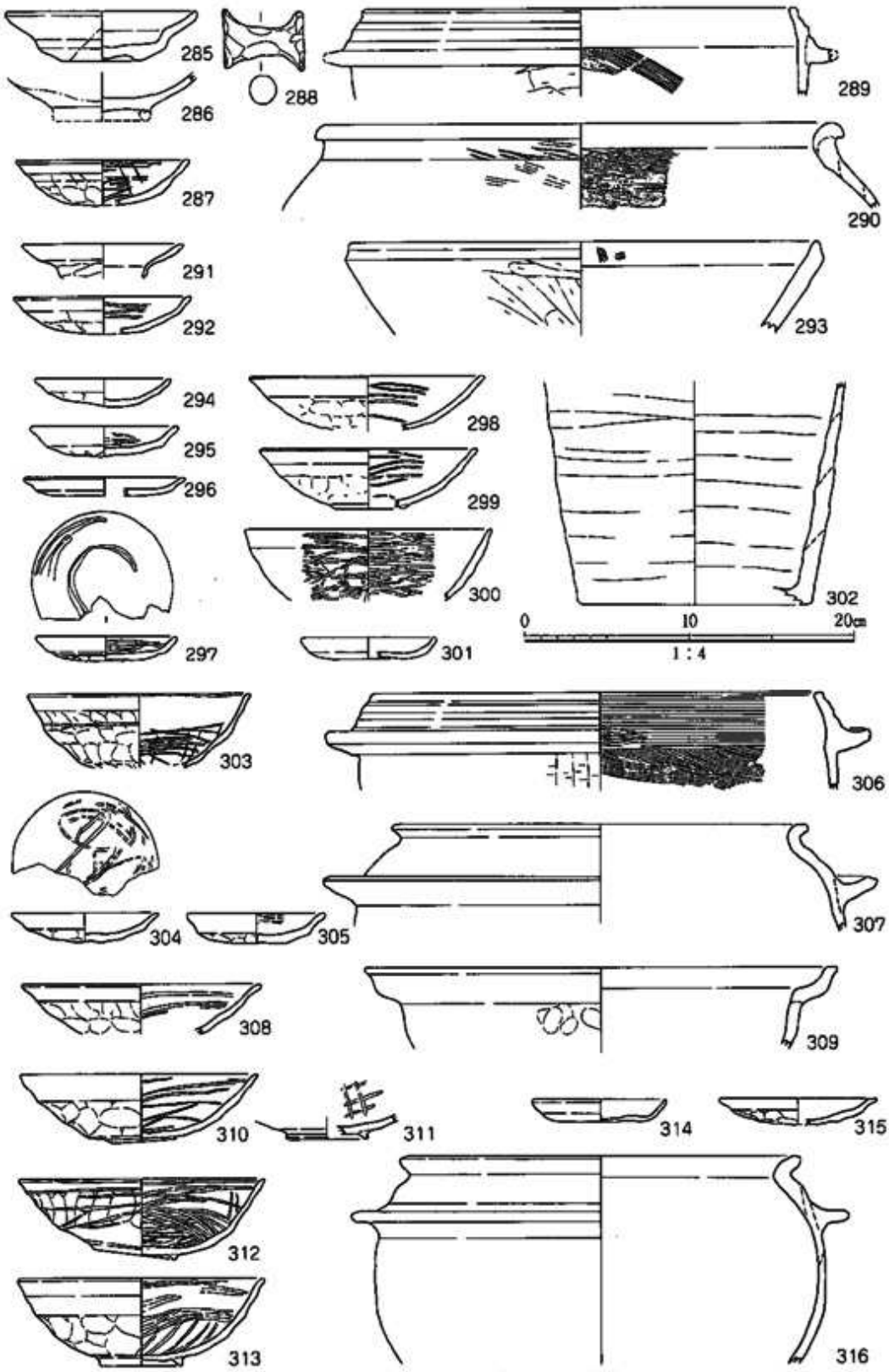


図61　平安～江戸時代の遺構出土の遺物

(SX201：285～287、SK201：288、SD202：289・290、SD301：291～293、SD304：294～302、SD305：303～307、SD306：308・309、SD401：310、SD402：311、東除川：312～316)

層段階と考えられる。なお、東区はすべてが東除川の中に入っていた。

SD401は北西で南肩を検出した溝で、SD304に上部を削平されている。深さ0.4mで、埋土は上下に分れる。下部は第17(長原6)層のブロックを大量に含む砂礫層で、溝底の凹凸が激しいことから、流水の勢いが激しかったと思われる。出土遺物は瓦器・黒色土器・土師器・瓦である。310は瓦器椀で、高台はやや退化している。体部外面はユビオサエ、内面は雑なヘラミガキを施す。Ⅲ期後半～Ⅳ期である。

SD402はSD401の南東で検出した溝で、2方向に枝別れしていた。幅0.4m、深さ0.04mである。埋土はにぶい黄褐色含礫細粒砂質シルトで、瓦器が1点のみ出土した。311は瓦器椀の底部で、内面には斜格子状のヘラミガキを施す。Ⅱ期後半～Ⅲ期であろう。

東除川は東区全体と西区の東半で検出され、西区では西岸部分が認められた。西区では埋土となる砂礫層を幅0.4m、深さ0.6mの範囲で掘削したが、底は確認できなかった。出土遺物は瓦器・須恵器・土師器である。312・313は瓦器椀で、312の外面には雑なヘラミ

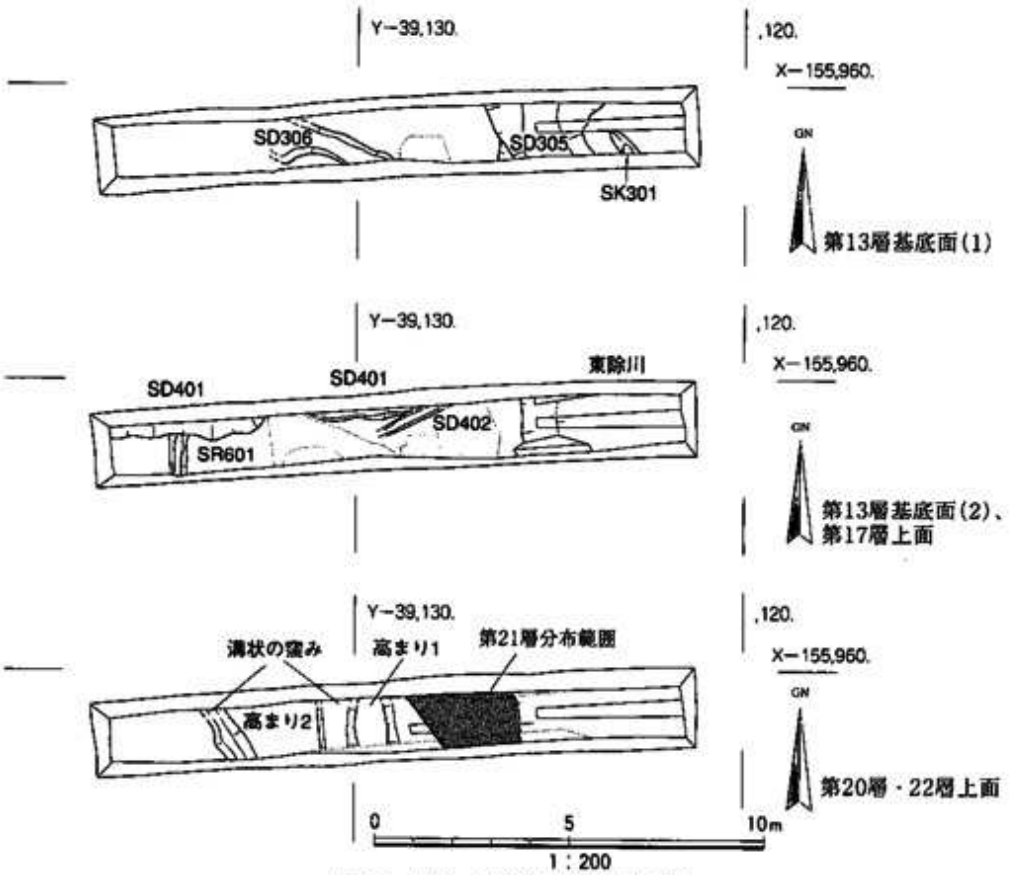


図62　古墳～鎌倉時代の遺構(西区)

ガキが見られるが、313には認められない。底部内面のヘラミガキは312が斜格子状で、313は平行線状である。314・315は土師器小皿である。314の底部外面にはユビオサエによる凹みがある。315は口縁部の上端を凹ませている。316は土師器羽釜である。頸部は「く」字状に外反しており、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともに炭化物が付着している。312・313はⅡ－3期で12世紀後半と思われ、316はこれらと同時期と考えられる。

iv)古墳～奈良時代(図62、図版17)

奈良時代の遺構は西区の第17(長原6Ai)層上面で畦畔1条を検出しただけである。

SR601は上端幅0.2m、下端幅0.45m、高さ0.2mである。SD401に北側を削平されているが、条里方向より北で東に振っていた。水田上面では踏込みが多数見られた。出土遺物は埴輪の細片のみで、この水田の時期を決めるものではなかった。ただし、西接する94－47次調査(本章前節)において長原6A層段階の畦畔が2条検出されていることから、ほぼこれと同時期であると考えられる。

飛鳥時代では、西区の第20(長原7A)層上面で南北方向の高まりを検出した。

高まり1は上端幅0.8m、下端幅1.4m、高さ0.2mで、西に沿って幅1.0m、深さ0.1mの溝状の窪みが認められた。このすぐ西に位置する高まり2は上端幅1.7～2.3mで、下端幅2.1～2.6m、高さ0.1m未満である。高まり1と同様に、この西では幅0.8m、深さ0.1mの溝状の窪みが南東から北西方向に認められ、さらにこの西側に踏込みが多数見られた。

このほかに、西区の中央では第20(長原7A)層の下で、南東から北西方向に水成の黒色粘土層である第21層が溝状に落ち込んだ部分を検出した。落込みの幅は約2m、肩からの深さは0.3mで、南壁断面では確認されなかった。ところで、調査地の南に位置する94－39次調査地(本章第1節)で検出された長原76号墳周溝内の堆積層はこれとよく似ていた。調査区内において墳丘と思われる盛土は検出されなかったが、周辺における古墳の分布状況などから、この黒色粘土層が古墳の周溝内に堆積した水成層の可能性は強い。墳丘は調査区の北東方向に存在するか、または東除川によって大部分が流失したものと思われる。

第4節　小結

今年度は当地区内の3個所で調査を行った。発掘面積は矮小であったが、ここでは周辺の調査成果を含めて、当地区の変遷について時代順に述べていきたい。

江戸時代では、当地区の中央に飛鳥時代に開削されたと推定される東除川が位置する。当河川は宝永元(1704)年に大和川が現在の位置に付替えられたため、灌漑用水としての機能を失い、それ以降に埋め立てられている。埋め立て後は水田・宅地として利用されたことが地籍図からも明らかである。94－56次調査地では埋め立てののちに堆積した作土層が検出された。なお、94－47次調査地では、NG18次調査の東部でも多く検出されている粘土採掘壙が調査区内にも及んでいることが判明し、約半分の面積がこれによって失われていた。

鎌倉から室町時代にかけては94－56次調査で溝を数条検出した。建物は検出されていないが、ほぼ完形の瓦器椀・皿や土師質・瓦質の羽釜などの日常雑器を大量に包含する層が存在していることから、調査区の北側に拡がる現在の集落とほぼ同じ場所に中世の集落が存在するのではないかと思われる。さらに、94－56次調査地では長原4層段階頃の東除川の西岸を検出したが、現在、地籍図でみられる近世の流域よりも河道はかなり西側にあったようである。このことから、中～近世にかけて、川は流れを東に変えたと思われる。なお、その開削時期については、調査区内における掘削深度に制限があったため明らかにすることはできなかった。周辺の調査では、NG91－30・93－31次の両調査で東除川の河道を検出しているが、いずれも開削時期を明らかにするには至っていない(図63)。

平安時代では94－39次調査で検出されたSE401から、平安時代Ⅲ期の遺物が一括して出土し、中には須恵器を転用した硯も認められた。周辺では当該期の集落に伴う遺構はあまり知られておらず、貴重な資料となった。

飛鳥～奈良時代では94－39次調査区の南端で古墳を切る溝SD601を検出した。この北東で行われた94－47次調査では、これにつながる溝SD601が検出されており、幅6ｍ以上の大溝で、長原6Aii層の砂で埋没していることが判明した。このことと周辺の調査知見をあわせると、SD601は北側に拡がる飛鳥・奈良時代の水田に灌漑するための南北水路の一つである可能性が高い(図63)。しかし、周辺でこれまで確認された飛鳥・奈良時代の灌漑用水路はどれも、それまで存在していた古墳の墳丘を避けるように走っており、古墳を大き

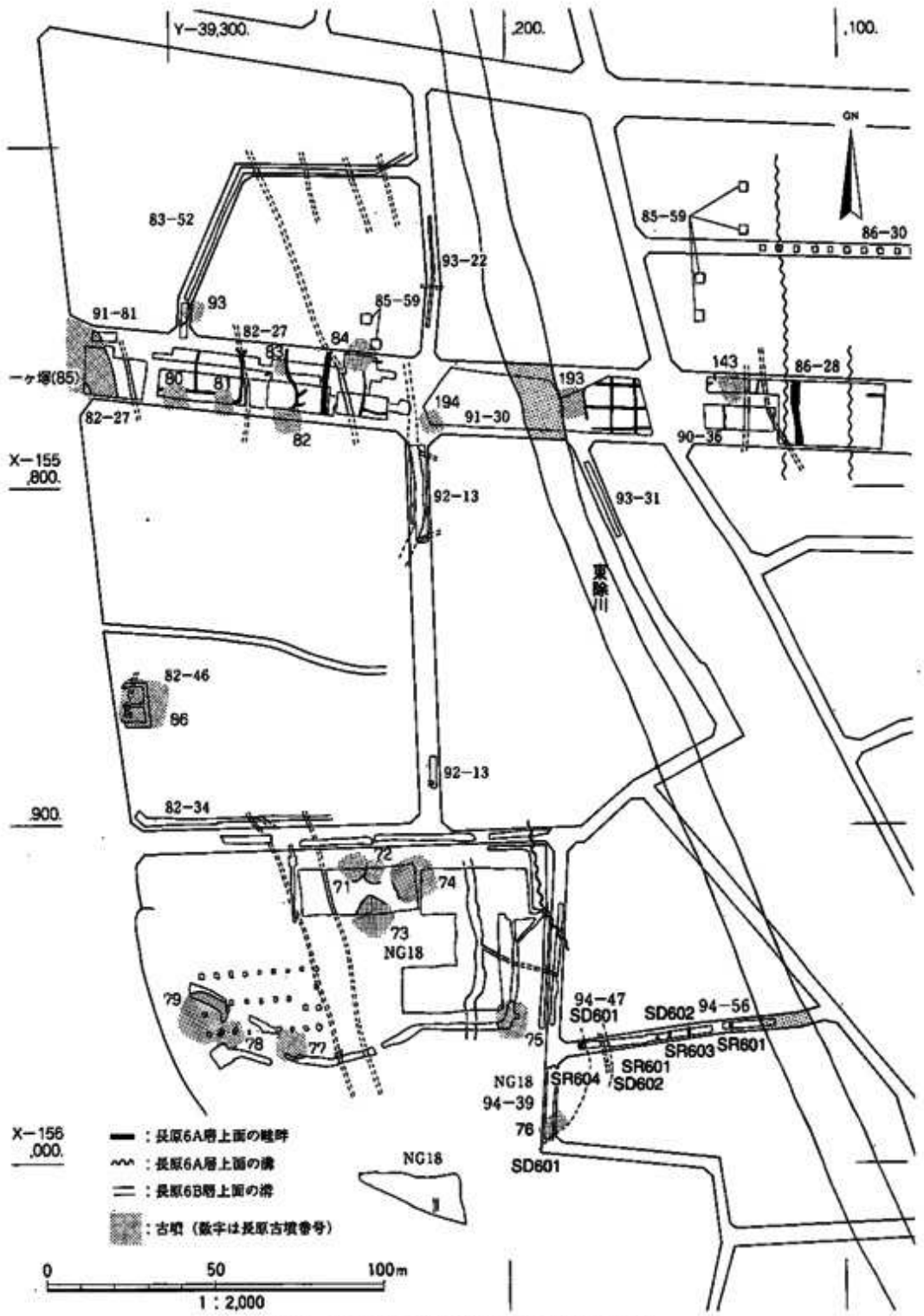


図63　南地区における古墳～奈良時代の遺構

く破壊して作られたものは例をみない。溝の規模と合わせて考えると、SD601は古墳を破壊してまでも通す必要のあった幹線的な水路であった可能性が高い。さらに、94－47次調査では周辺で確認されていなかった長原６層段階の水田遺構が検出されるなど、新たな知見を加えることができた。また94－56次調査地でもこれとほぼ同時期と思われる水田面を１面検出した。畦畔は条里方向より北で東に振っていたことから、地形に沿っているものと思われる。

古墳時代では94－39次調査で長原76号墳を検出した。古墳の時期は長原２期とすることができ、埴輪の特徴として、口径・製作技法・焼成の具合や色調が個体によって極端に異なることが挙げられる。また、Ⅳ期とⅤ期に編年されるものが共存している。このことが当古墳の特徴であるかは今後の検討課題である。なお、94－56次調査区では地山上に堆積した黒色粘土層が存在していた。これを長原76号墳周溝内の堆積層と比較したところ、非常によく似ていたため、同様に古墳の周溝内に堆積した層と考えられる。墳丘については調査面積が狭かったため確認にいたらなかったが、当地区内では古墳が数多く検出されており、多くの遺物が出土している(図63)。周辺の古墳の分布状況から、94－56次調査地の北側に墳丘が存在する可能性は強いと思われる。

旧石器～弥生時代については、94－56次調査で弥生時代の石斧が遊離資料として認められたのみで、遺構は検出されなかった。

第Ⅴ章　長原遺跡中央・東南地区の調査結果

第1節　94－19次調査

1)層序と各層出土の遺物(図64・65、表18、図版18・44)

調査区内では、厚さ約1.5mの現代作土と現代盛土を取り除くと、長原2層以下が比較的良好に堆積していた。詳しい内容については表18に述べ、以下で各層の特徴について記す。

第2層は長原2層に相当する作土層で、江戸時代の陶磁器などが出土した。317～327・334は本層から出土した。317～319は肥前磁器碗で、317・318の外面には鋸歯状の文様と「井」字状の文様が見られる。319は底部で、内面は蛇の目状に釉を掻き取っている。320は唐津焼碗で高台部内外面に鉄錆を塗布する。321は産地不明の白磁の小碗で、口縁部は端反りである。322は産地不明陶器の瓶で、外面には茶褐色釉を施し、カキメ状の痕跡を残す。323・325は丹波焼擂鉢で、兵庫県下相野遺跡での編年によると323は18世紀中葉、325は17世紀後葉と思われる[兵庫県教育委員会1992]。324は備前焼擂鉢である。326は緑釉陶器皿の底部で、高台は削出している。平安時代であろう。327は土師器炮烙で、外面にタタキの痕跡が残る。334は軒平瓦である。文様は単純化した唐草文で、室町時代以降であろう。

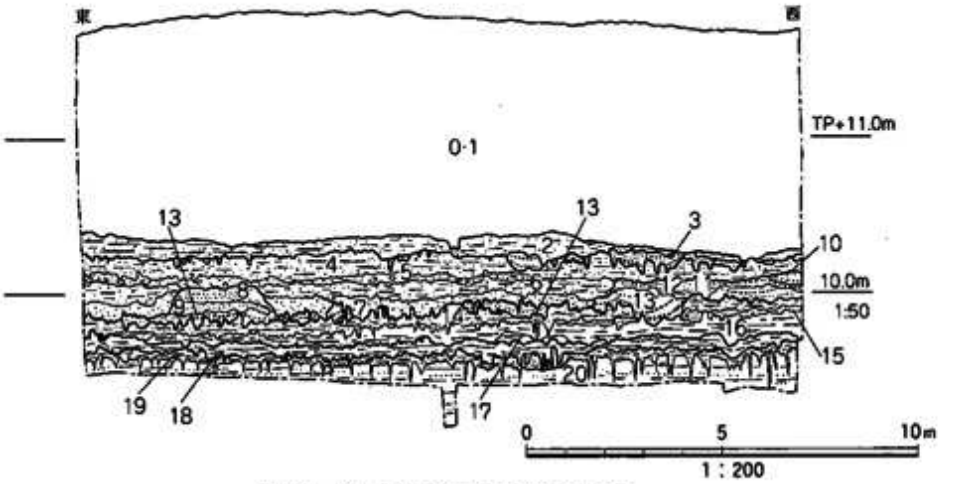


図64　94－19次調査の南壁地層断面

表18　94−19次調査の層序

標準層序	層序	層　相	層厚(cm)	遺　構	遺　物	特　徴	掲載遺物
NG0	0層	現代盛土					
NG1	1層	現代作土		↓SD201,SK201,小溝	肥前磁器・陶磁器・瓦		
NG2	2層	にぶい黄色(2.5Y6/3)含礫砂質シルト	≦20		肥前磁器・土師器・瓦器		317～327・334
NG4	3層	黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂～礫	≦10		須恵器・土師器	水成	328・329・331・332
	4層	明黄褐色(10YR6/6)シルト質砂～礫	≦20			作土	
	5層	黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂～巨礫	≦80		須恵器・土師器	水成	
	6層	緑灰色(5G6/1)含礫粘土質粗粒砂	≦15		須恵器・土師器		
	7層	明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂～礫、黄褐色(10YR5/6)細粒砂～中粒砂	≦15	▼動溝	須恵器・土師器	作土	
NG5	8層	明黄褐色(2.5Y6/6)粗粒砂～礫	≦10			水成	
	9層	灰オリーブ色(7.5Y5/2)中～細粒砂	≦30			水成	
	10層	オリーブ黄色(7.5Y6/3)礫	≦20			水成	
	11層	黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂	≦10			水成	
	12層	にぶい黄色(2.5Y6/4)粗～中粒砂	≦15			水成	
	13層	浅黄色(2.5Y7/4)粗粒砂～礫	≦80			水成	
NG6Ai	14層	オリーブ黄色(5Y6/4)含砂礫粘土質シルト	5～10	▲NR501	須恵器・土師器	作土	330
NG6Aii	15層	明黄褐色(2.5Y7/6)礫～黄褐色(10YR5/6)細粒砂	≦5			水成	
NG6Bi	16層	暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土	5～20	▲畦畔,SR601～603	須恵器・土師器	作土	
NG6Bii	17層	オリーブ黄色(7.5Y6/3)粘土	≦5			水成	
NG7A	18層	オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土	10～15	▼畦畔状高まり	須恵器・土師器・石鏃	作土	333・335
NG9～12	19層	灰白色(7.5Y7/1)シルト	≦10		石鏃・剥片		336
NG15	20層	灰白色(2.5GY8/1)含礫粘土	≧40				

第３～７層は長原４層に相当すると思われる。３層は本来、水成層であるが、上部の耕作によって著しく撹拌されている。４層は５層を耕土化することによって生じた作土層であるが、淘汰は不十分で、下部には礫を多く含む。第５層は水成層で、調査区の東に向って厚く堆積する。７層は８～14層を耕起したもので、これらがブロック状に混り合っている。本層の下面では数多くの鋤跡、鋤溝を検出した。

328・329・331・332は第3～7層から出土した。328は東播系の須恵器甕の体部で、内外面ともに平行タタキが見られる。329は古墳時代の須恵器壺で、肩部に波状文を巡らせる。底部は手持ちによるヘラケズリを行う。331・332は土師器甕である。

次に述べる第8～13層は、長原5層に相当すると思われる一連の水成層である。

第8層の大部分は攪拌され、7層となっているが、9層とともに調査区の東半で島状に残存している。10・11層は西半にのみ存在し、10層は北西で検出した自然流路の埋土となる。13層は14層の水田面を覆う水成層で、14層のブロックを多く含み、全域に堆積する。

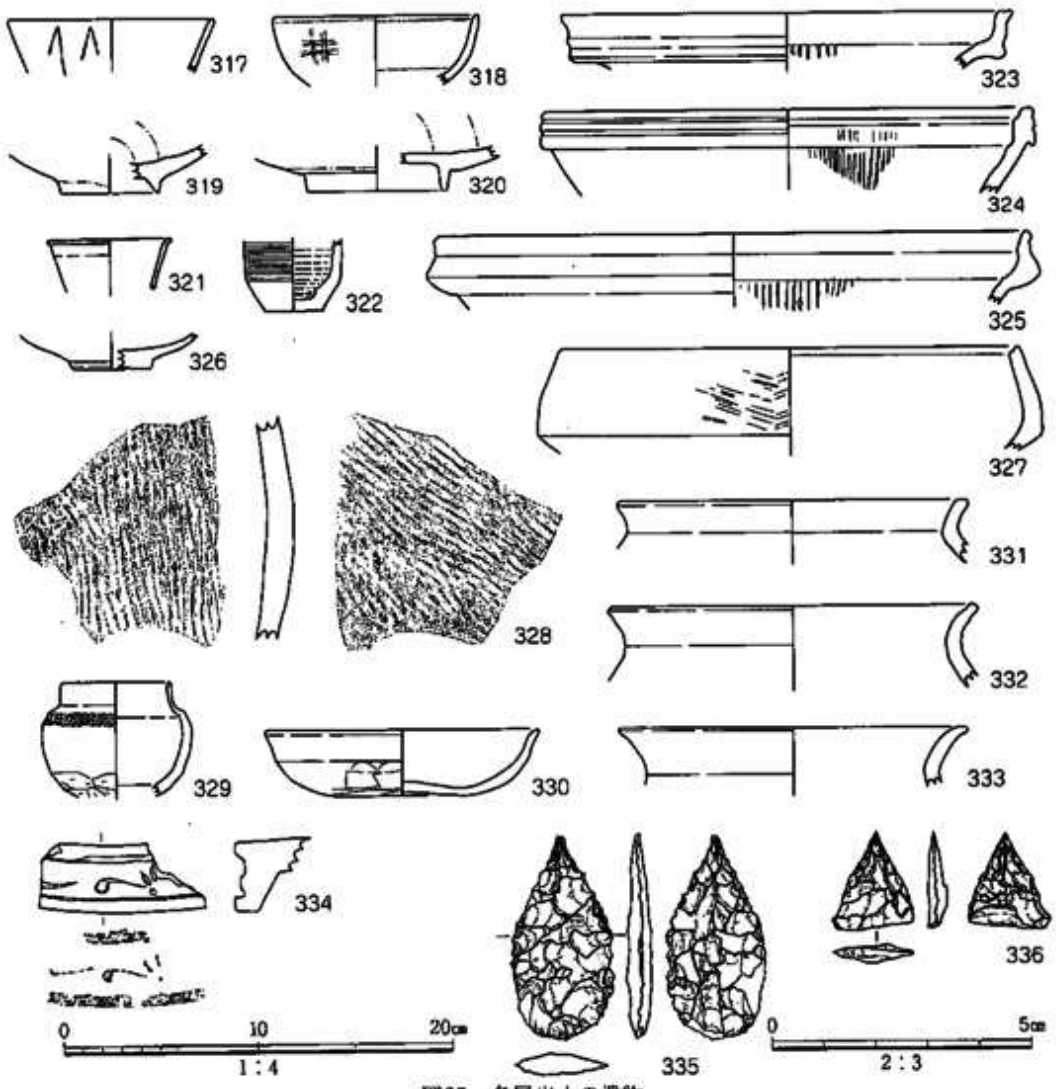


図65　各層出土の遺物

（第2層：317～327・334、第3～7層：328・329・331・332、第14層：330、第18層：333・335、第19層：336、縮尺は317～334：1／4、335・336：2／3）

第14～17層は長原６層に相当する。14層は淘汰不良の作土層で、長原6Ai層に相当すると思われるが、上部を７層によって削平されているため、畦畔などは検出できなかった。15層は長原6Aii層に相当すると思われる水成層で、16層上面で検出した足跡などの埋土となるが、西半にはほとんど残存していない。16層は長原6Bi層に相当すると思われる水田作土層で、上面では畦畔を検出した。17層は長原6Bii層に相当すると思われる水成層で、一部に薄く堆積している。330は第14層で出土した土師器杯で、口径は14.0cm、器高3.3cmである。底部には板ナデ調整を施す。平城宮Ⅱ～Ⅲであろう。

第18層は長原7A層に相当すると思われる水田作土である。本層の下面では、多数の踏込み痕跡のほか、畦畔状の高まりを検出した。333・335は本層から出土した。333は土師器甕の口縁部で、端部は外方に軽くつまんでいる。335は本来の地層から遊離したと思われる凸基無茎式石鏃である。サヌカイト製で、作りは粗雑である。弥生時代のものであろう。

第19層は長原９～12層に相当すると思われ、縄文時代の石鏃・剥片が出土した。336は凹基無茎式石鏃の先端部と思われ、下半は折れている。サヌカイト製である。

第20層は長原15層の上部に相当すると思われ、遺物は出土していない。

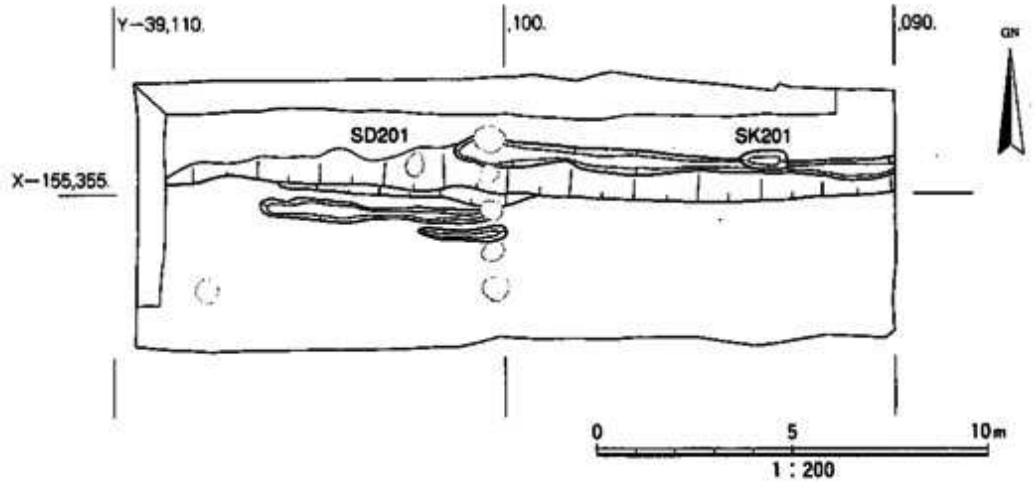
２）遺構と遺物

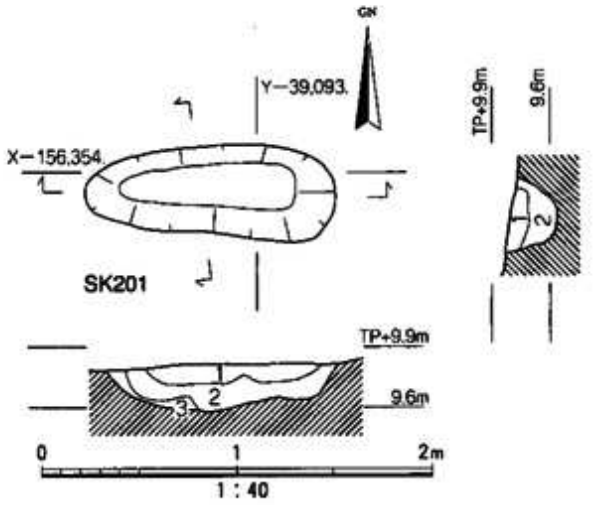
ｉ）江戸時代（図66、図版19）

第１（長原１）層の基底面で東西方向の溝SD201と、同じく東西方向の耕作溝を検出した。

SD201は、調査区の北で検出した幅2.7m以上、深さ0.2m以上の溝で、北肩は調査区外にあると思われる。南肩に沿って、幅0.6m、深さ0.1mの溝が掘削されている。出土遺物は江戸時代の陶磁器・瓦・須恵器・土師器である。

337～348はSD201から出土した。337～339・341は肥前磁器である。337は蓋で、外面には菊花文と格子文が見られる。338・339は碗で、338の口縁部は外反し、内面には一重の圏線を巡らせる。339は底部で、内面には半円形の花文を施文する。341は瓶の底部と思われる。342は京焼系陶器で、小杯と思われる。340・343・344は唐津焼である。340は碗で見込み内を蛇の目状に釉剥ぎしている。343は碗で高台内に砂目の痕跡が残る。344は皿で、内面の３個所に砂目の痕跡が残る。345・346は丹波焼である。345は擂鉢で、17世紀後半であろう。346は甕である。347は緑釉陶器碗で、口縁端部を外反させ、体部内面には稜をもつ。平安時代前半であろう。348は土師器皿である。出土した陶磁器は江戸時代前半のものを含むが、焼きつぎを施すものも存在し、遺構の時期は19世紀後半といえよう。





SK201埋土

1：灰色（5Y5／1）粘土質粗粒砂～礫（炭含む）
2：灰色（10Y5／1）粘土質中粒砂～小礫（炭含む）
3：明緑灰色（7.5GY7／1）粘土質粗粒砂

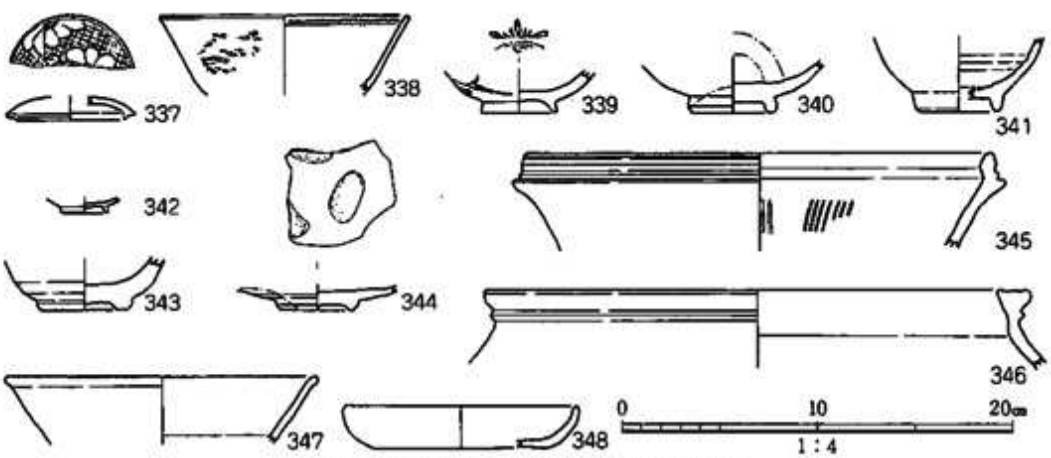


図66　江戸時代の遺構とSD201の出土遺物

SK201はSD201の底で検出した、長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.3mの長方形を呈する土壙である。埋土は炭を含む人為的な埋戻し土である。埋土を持ち帰って洗浄した結果、陶磁器・土師器・石・木炭・種子・貝・骨片・スラッグなどを捕集した。

ii)奈良～平安時代(図67)

第2(長原2)・3(長原4)層基底面では、直径0.3m未満、深さ0.15m未満のピット数基が認められた。柱痕跡は確認できなかったが、今後周囲で建物跡が検出されれば、この一部を構成する可能性があるだろう。

第7(長原4)層下面では東西・南北方向の鋤痕跡を多く検出し、中央から北東部分では東西方向の溝状となって見られた。これらは第8～13層すなわち長原5層の堆積後、さほど時間をおかずに掘削されたと思われる。また、7層自体も、8～13層を攪拌しただけのものと考えられ、調査区全域には分布していない。そのため、7層を作土としても、耕作

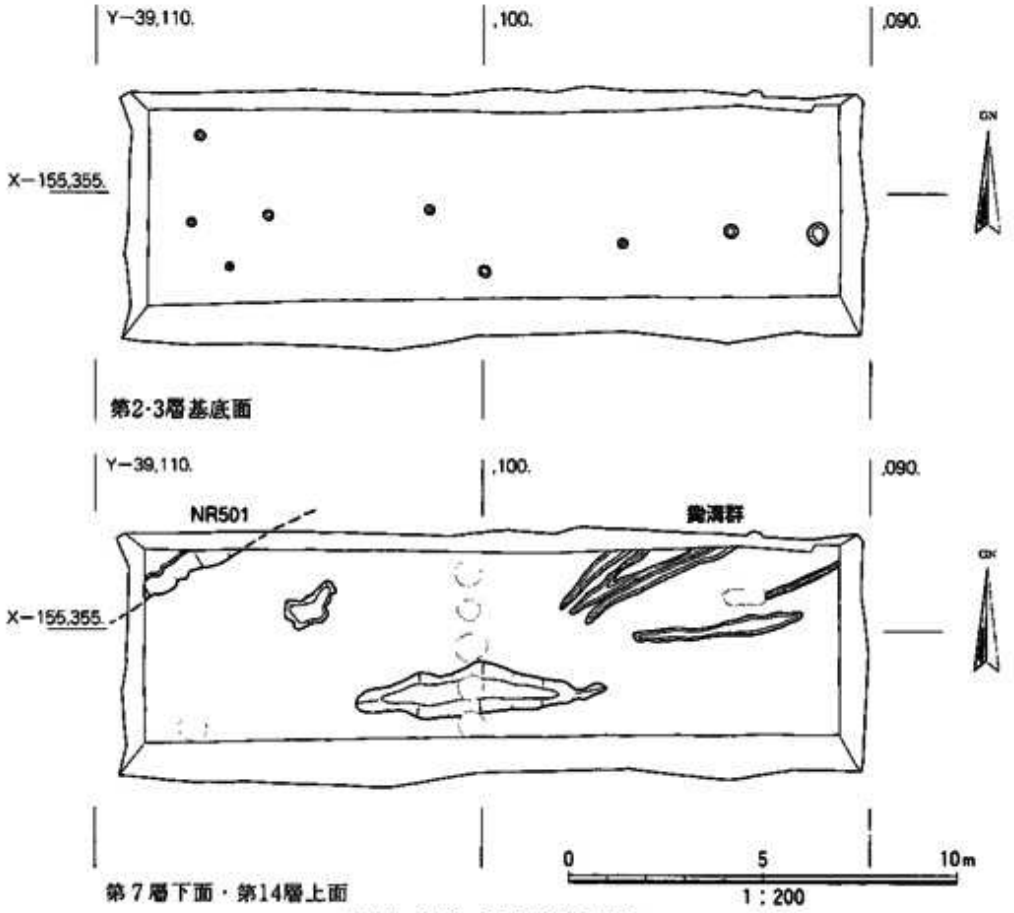


図67　奈良～平安時代の遺構

期間はきわめて短いと思われる。なお、この鋤痕跡の方向は、条里方向とは異なっている。

第14(長原6Ai)層上面では、第10(長原5)層で埋る自然流路を検出した。NR501は調査区の南西から北東に流れており、隣接して行われた94－20次調査(次節)で確認された流路NR501と同一のものであろう。遺物は出土しなかった。なお14層は水田作土層と思われるが、上部を削られており、畦畔は検出できなかった。

iii)飛鳥時代(図68、図版19)

第16(長原6Bi)層上面では、西で3条の水田畦畔を検出した。SR601～603は幅0.7m、高さ0.1m未満で、条里方向よりもかなり東に振れている。東では幅0.9～1.4m、高さ0.15mの畦畔の痕跡を留めるのみで、規模や方向は確実にはできなかった。

また第18(長原7A)層下面では、畦畔の痕跡と考えられる高まりを検出した。上層の畦畔と同じく、これらも北で東に振る方位をもつ。

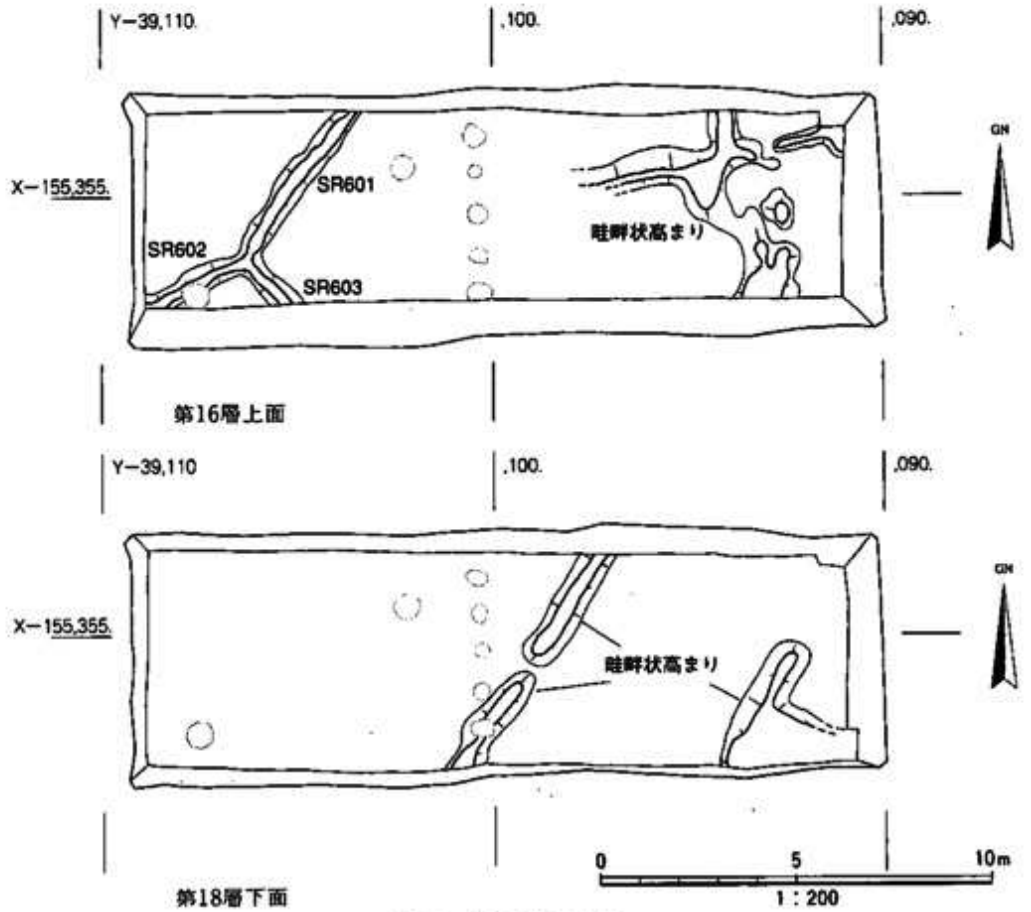


図68　飛鳥時代の遺構

第2節　94－20次調査

1)層序と各層出土の遺物(図69・70、表19、図版44・45)

調査区内では長原1～7層が特に良好に堆積していた。詳しい記載は表19に行い、各層の特徴について以下に略述する。

第2層は2枚に細分しうる作土層で、上面では耕作溝、下面では高まり、基底面では土壙を検出した。出土遺物は近世の陶磁器などで、長原2層に相当する。349は肥前磁器の碗で、外面には一重の網目文が見られる。350は唐津焼の皿で、内面には文様を描く。これらは江戸時代前半のものであろう。

第3・4層は長原3層に相当する。3層は上・中・下に細分でき、上部は水成である。上・下面では溝を検出した。4層はおもにSD302内に堆積する水成層である。なお、東部の5層上面の踏込み内に堆積する砂層は、本層の上部と同一の可能性がある。

第5～7層は長原4層に相当する。5層は2層に細分しうる作土層で、下位部分は東部に分布し、下にいくほど粗粒で撹拌の度合も低い。上面では溝および踏込み痕跡を検出した。また、6層は7層上面の踏込み痕跡内に堆積する水成層である。7層は下位層の8～9層がブロック状に混りあった作土層である。中央より東側は、西側に比べよく撹拌されている。上面では踏込み痕跡、下面では落込みを検出した。351～358・361は第7層から出土した。351～356は土師器である。351は小皿で、口縁部外面に強いヨコナデを施す。

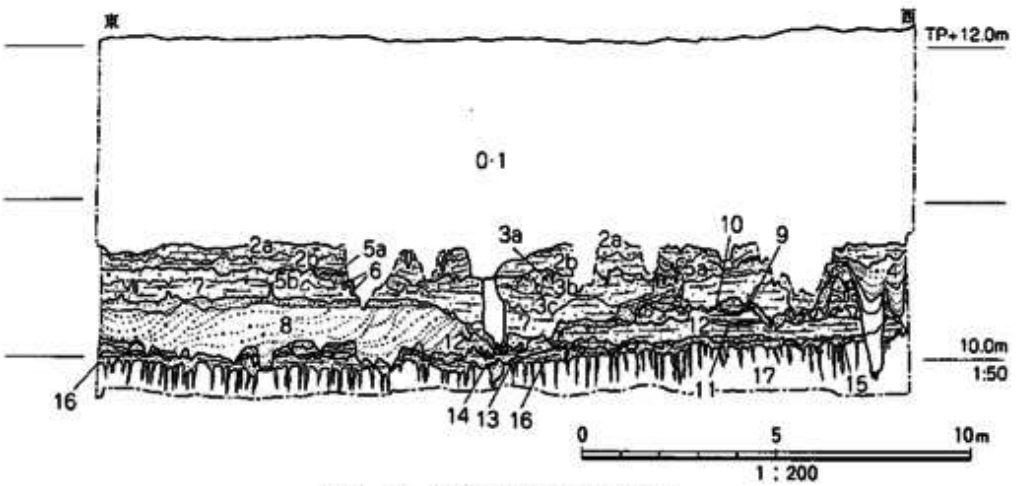


図69　94－20次調査の南壁地層断面

表19　94－20次調査の層序

標準層序	層序	層　相	層厚(cm)	遺　構	遺　物	特　徴	掲載遺物
NG0	0層	含礫オリーブ灰色(10Y4/2)シルト質粘土					
NG1	1層	含礫暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質細粒砂		1耕作溝	瓦質土器・土師器・瓦		
NG2	2a層	含礫灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルト	10			作土	349・350
	2b層	暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂混りシルト質細粒砂	10	▼SR201 ↓SK301		作土	
NG3	3a層	黄色(2.5Y7/8)砂礫	10～20		瓦質土器・黒色土器・土師器	水成	
	3b層	緑灰色(10G5/1)極細粒砂質シルト	10～20	▲SD301			
	3c層	暗緑灰色(10G4/1)シルト～細粒砂	10～20	▼鳥曲溝			
	4層	にぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫・ 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト～細粒砂	10～40		瓦器・黒色土器・須恵器・土師器・瓦	水成	
NG4	5a層	含礫灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂質シルト～粗粒砂を多く含む細～極細粒砂	10	▲SD302,SX401		作土	
	5b層	暗灰黄色(2.5Y4/2)～黄褐色(2.5Y5/4)砂礫	10			作土	
	6層	灰オリーブ色(5Y6/2)粗～極粗粒砂	≦5			水成	
	7層	オリーブ灰色(5GY5/1)砂質シルト～シルト質細粒砂と緑灰色(7.5GY5/1)細～粗粒砂	10～20	▲難込み	黒色土器・須恵器・土師器・埴輪	作土	351～358・361
NG5	8層	灰オリーブ色(5Y5/4)砂礫	≦40		須恵器・土師器	水成	
NG6Ai	9層	含礫オリーブ褐色(2.5Y4/3)～灰白色(5Y7/2)中粒砂質シルト～粘土質シルト	≦10	▲NR501,SR601・602,SX601	須恵器・土師器	作土	359・360
NG6Aii?	10層	灰オリーブ色(5Y5/3)細粒砂	2		土師器	水成	
	11層	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト～細粒砂	1	▲SR603～605,SD601,SX602～604		水成	
NG6Bi	12層	含砂暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土～黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粘土	15～20	▲SR606,SD602	須恵器・土師器・埴輪	作土	
NG6Bii	13層	暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂～シルト	≦10			水成	
NG7Ai	14層	含砂オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト	0～10	▲SR701・702,▼SD701～703,SX701,SP701	須恵器・土師器・ｻﾇｶｲﾄ	作土	
NG7B～11	15層	灰黄色(10YR4/2)シルト	≦5		石器	火山ガラス	362
NG12	16層	灰白色(10YR7/1)極細粒砂質シルト	≦10	▲SK1202	石器	火山ガラス	363
NG15	17層	含風化礫緑灰色(5G5/1)シルト質粘土	≧50				

352は椀で、内外面ともナデを施す。353は皿で、口縁端部をつまみ上げている。354は甕の口縁部である。355・356は高杯で、355は手づくねの小型品である。357・358は須恵器である。357は高台を有する杯で、体部中位に稜線がある。358は杯蓋で、口縁部と天井部の境に明瞭な稜線をもつ。361は武人埴輪の左前胴に相当し、短甲裾部と脚台部との接合部

分に当る。前胴正面の２条の縦線は引合板、横線２条で長側板を線刻で表現する。外面は縦および斜め方向のハケ、内面はヨコナデののち、横方向のハケを施す。358・361は古墳時代後期前半、351～353・357は平安時代Ⅰ～Ⅲ期に属する。

第８層は長原５層に相当する水成層で、顕著な斜行葉理が認められる。上部では８層下面の踏込みによるラミナの変形が認められる。

第９～13層は長原６層に相当する。９層は長原6Ai層に相当する水田作土層で、６～８層段階の遺構による削平が著しく、南壁断面の西半分にしか現われていないが、調査区北東部にも分布している。上面では畦畔および踏込み痕跡、下面では段を検出した。10層は水成層である。９層同様、上位からの削平が著しく、南壁断面の西半分にしか現われないが、調査区の北東部にも分布している。長原6Aii層に相当する。11層は12層上面の踏込み痕跡内に堆積する水成層で、長原6Aii層に相当すると思われる。12層は長原6Bi層に相当する水田作土層で、上面では畦畔・溝を検出した。出土遺物は須恵器・土師器・埴輪である。13層は15層上面の踏込み痕跡内に堆積する水成層で、長原6Bii層に相当する。

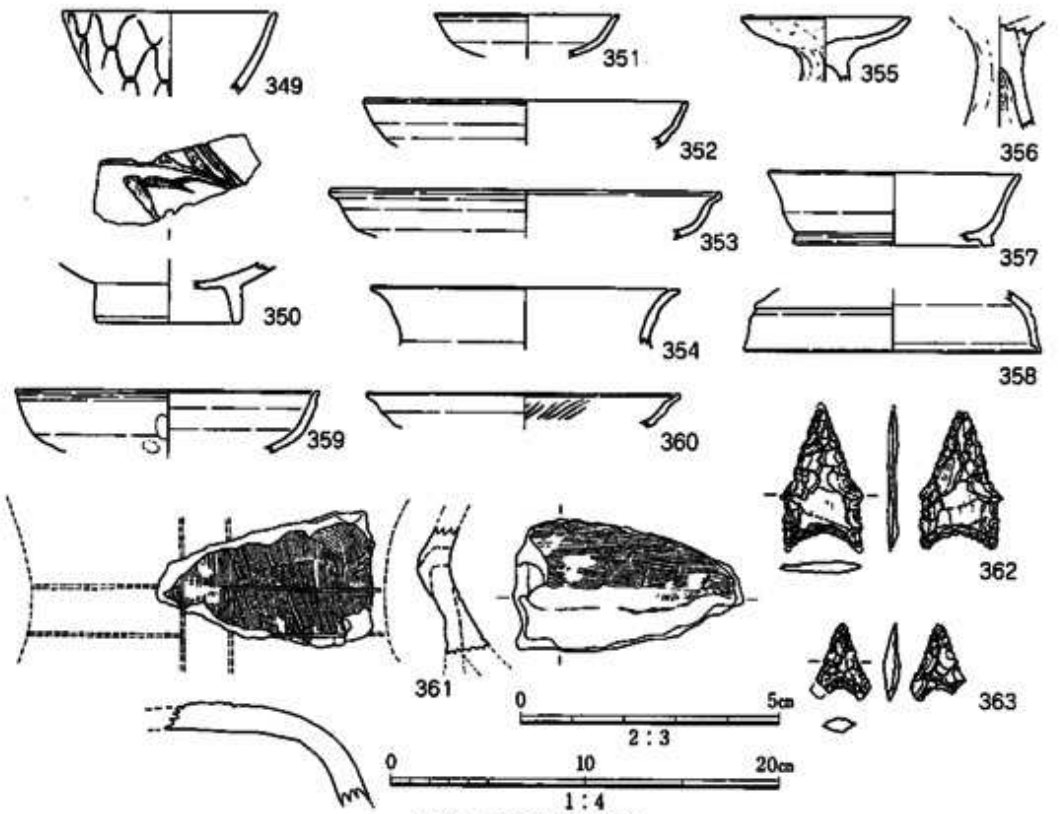


図70　各層出土の遺物

(第２層：349・350、第７層：351～358・361、第９層：359・360、第15層：362、第16層：363、縮尺は349～361：1／4、362・363：2／3)

359・360は第9層から出土した土師器である。359は椀で、外面はユビオサエ、内面はヨコナデである。360は皿で、口縁端部をつまみ上げている。内面は1段の放射状暗文を施している。これらは平城宮Ⅰ～Ⅲに属する。

第14層は長原7A層に相当する水田作土層で、東に向って層厚を増す。上・下面では畦畔や踏込み痕跡を検出した。出土遺物は須恵器・土師器のほか、サヌカイト剥片1点である。

第15層は火山ガラスを含み、西に向うほど薄くなる。本層は長原7B～11層に相当すると思われ、出土遺物は石鏃1点のみである。362はサヌカイト製の凹基無茎式石鏃で、抉りは浅く、両側辺に鋭く突出する部分がある。平面形は五角形に近いといえよう。両面ともに中央には素材剥片の剥離面が残る。縄文時代後～晩期であろう。

第16層は火山ガラスを多く含み、上面では植物の根跡や土壙を検出した。出土遺物は石鏃1点である。長原12層に相当する。363は本層から出土したサヌカイト製の凹基無茎式石鏃で、脚の端部は直線的である。縄文時代前半であろう。

第17層は下部にいくほど風化礫を多く含み、長原15層に相当する。

2)遺構と遺物

i)室町～江戸時代(図71・72、図版20・44)

江戸時代では第1(長原1)層基底面で耕作溝、第2(長原2)層下面で畦畔状遺構を検出した。第1層基底面の耕作溝は調査区の西に位置し、7条すべてが東西方向であった。幅0.2～0.4m、深さ0.1m以下である。出土遺物は近世の陶磁器のほか、瓦質土器などである。364は耕作溝のうちの一つから出土した肥前磁器の紅皿で、江戸時代後半であろう。

また、第2(長原2)層下面で検出した東西方向の畦畔状の高まりSR201は、上端幅0.4m、下端幅0.8m、高さ0.15mである。

室町時代の遺構は、第2層基底面で土壙を検出し、第3(長原3)層上・下面でそれぞれ溝を確認したほか、第5(長原4)層の上面で溝と落込みを検出した。

SK301は第2層基底面で検出した楕円形の土壙で、調査区の中央に位置する。長さ1.3m以上、幅1.0m、深さ0.3mである。埋土は灰色シルト・細粒砂・粘土ブロックを含む砂礫で、人為的に埋戻されている。出土遺物は瓦器・須恵器・土師器・瓦である。372～374はSK301から出土した。372は黒色土器A類の椀で、器壁はやや薄い。373は瓦器椀である。口縁端部までていねいなミガキを施す。374は土師器羽釜である。口縁上端面はほぼ平らで、頸部は「く」字状に緩やかに外反している。平安時代Ⅳ期古段階に属する。

SD301は第３層上面で検出した南北方向の溝で、調査区の中央に位置する。幅0.3～0.6m、深さ0.1m以下である。埋土は水成層で瓦器・瓦・黒色土器・須恵器・土師器が出土した。369は「て」字状口縁の土師器小皿で、平安時代Ⅳ期古～中段階に属する。370・371は器形不明の瓦質土器である。

第３層下面では、南壁で地層断面観察を行ったところ、幅3.0m、深さ0.2～0.3mの溝を確認した。この溝は、島畠に伴うものと考えられる。

第５層上面で検出したSD302は南北方向の溝で、調査区の西端に位置する。幅1.2m、深さ0.45mである。溝底は２条の溝に分かれ、埋土は長原３層に相当する水成層である。出土遺物は白磁・瓦質土器・瓦器・瓦・須恵器・土師器である。365は白磁碗で、口縁部は外反し、高台断面は三角形で、内面に砂目が残る。366は土師器皿と思われる。367は土師器鍋で、口縁部は緩やかに外反し、内面に段をもつ。体部外面にはハケメが残る。14世紀であろう。368は瓦質土器鉢で、口縁上端面はほぼ平らで、端部内面をわずかに肥厚させている。内外面ともナデを施すが、体部内面にわずかにハケメが残る。

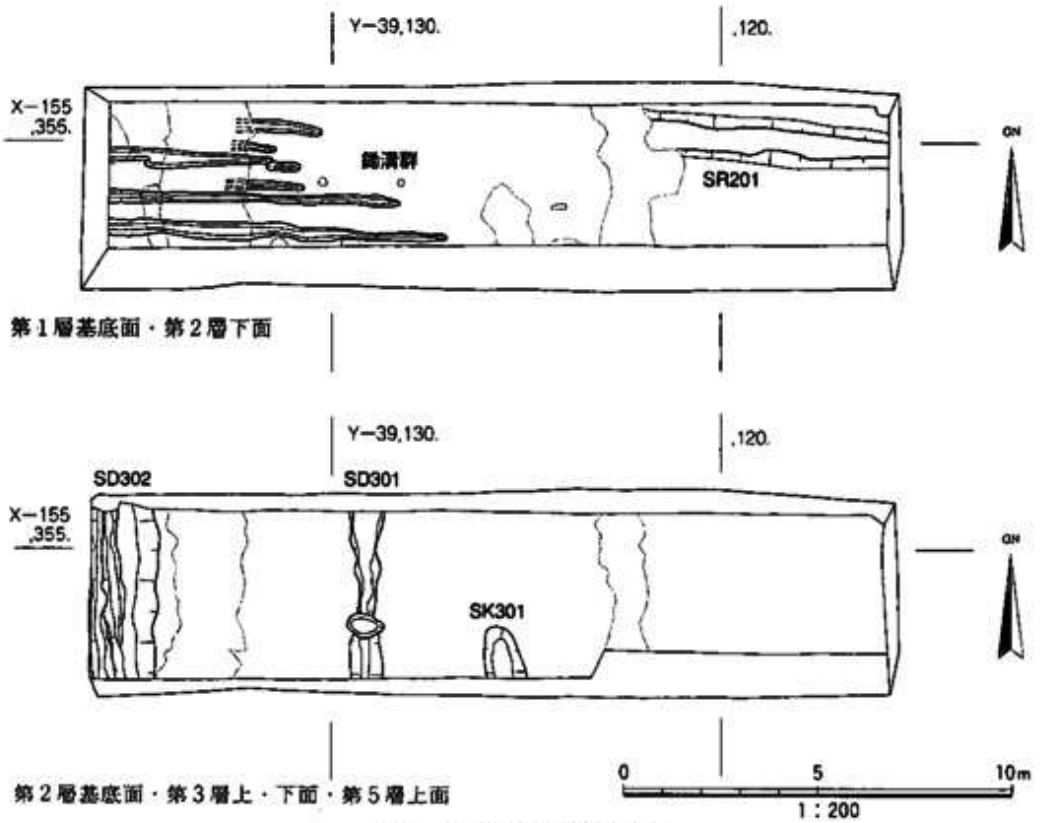


図71　室町～江戸時代の遺構

ii)奈良～鎌倉時代(図73・74、図版44・45)

鎌倉時代と思われる遺構には、西端で検出したSX401がある。SX401は南北方向の落込みで、SD302の下位にある。幅1.1m、長さ3.95m、深さ0.4～0.6mで、断面U字形に掘削されており、貯水のための施設と思われる。第5層との切合い関係は不明であるが、第7(長原4)層を切っており、SD302と関連した遺構で、長原3層段階に属する可能性もある。埋土は3層に細分しうる水成層で、土師器・瓦のほか、動物遺体としてシカ仙骨と左寛骨(表5、41頁)が底部から出土した(図73、図版50)。両部位は交連した状態を保っており、腹側面が上を向いた状態であった。寛骨はほぼ完形で、腸骨体の最小幅は11.9㎜である。仙骨は椎体の右1／5より右側を欠いており、その破面は平面的なものである。おそらく鋸や鉈状の刃物で切断されたと思われるが、切断痕が観察できなかったため、刃物の種類の特定にはいたらなかった。切断方向を頭側から見ると、背側で内側に傾いている。腰部に付く肉を分配する一単位と推測され、中世の分割方法を知る貴重な資料と考えられる。

奈良時代の遺構は第9(長原6Ai)層上面で畦畔2条と、自然流路を検出した。また、第11層上面では盛土遺構と溝を検出した。なお、この面は9層段階の耕作により、調査区の東半が約0.1m低くなっている。

NR501は幅2.8mで、調査区の南西から北東に向って流れる自然流路である。埋土は長原5層に相当する水成層で、流路の底および側壁は凹凸が激しく、一部は長原15層までを深く抉りとっている。出土遺物は須恵器・土師器・埴輪である。375・376は土師器である。

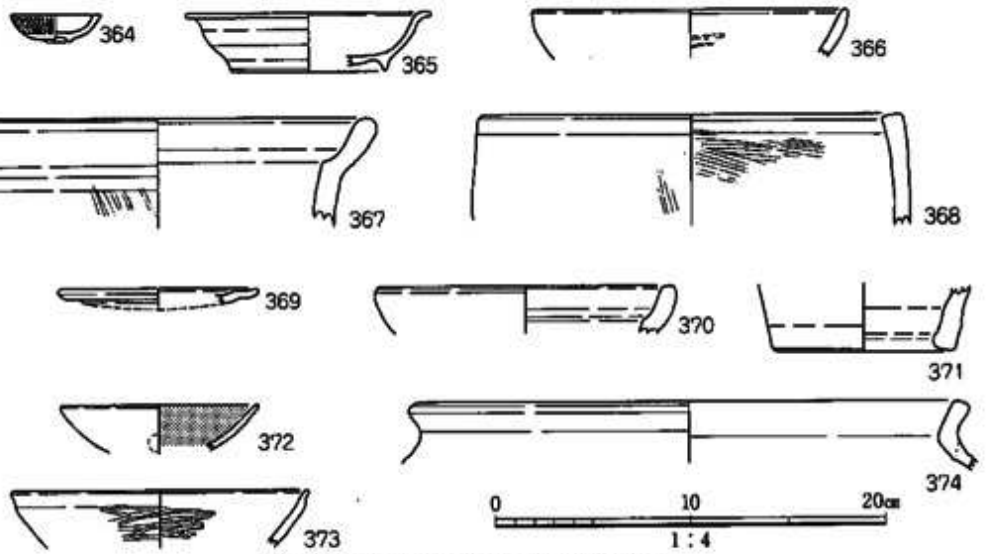


図72　室町～江戸時代の遺構出土の遺物
(第1層基底面撹乱：364、SD301：369～371、SD302：365～368、SK301：372～374)

375は小型壺で、頸部外面には強いヨコナデ、体部外面はユビオサエを施す。376は把手である。377は須恵器杯で、底部外面にヘラ切り痕が残る。375～377は平城宮Ⅴに属する。378はⅣ期に属する円筒埴輪で、堅く焼き締まっており、内面は明瞭な粘土紐痕が残る。

SR601は調査区の西端で検出された南北方向の盛土遺構である。ほとんどを上位の遺構によって切られており、現状では東端の部分のみが残存している。幅は本来1.3m以上あったと思われ、現存する高さは0.25mである。また、SR602はSR601の東で認められた南北方向の畦畔で、上端幅0.25m、下端幅0.25～0.55m、高さ0.1mである。SX601はSR602・601の間で認められた、幅1.0m、深さ0.05mの凹みである。第8(長原5)層の水成層が薄く底に堆積しており、溝として利用されていた可能性がある。

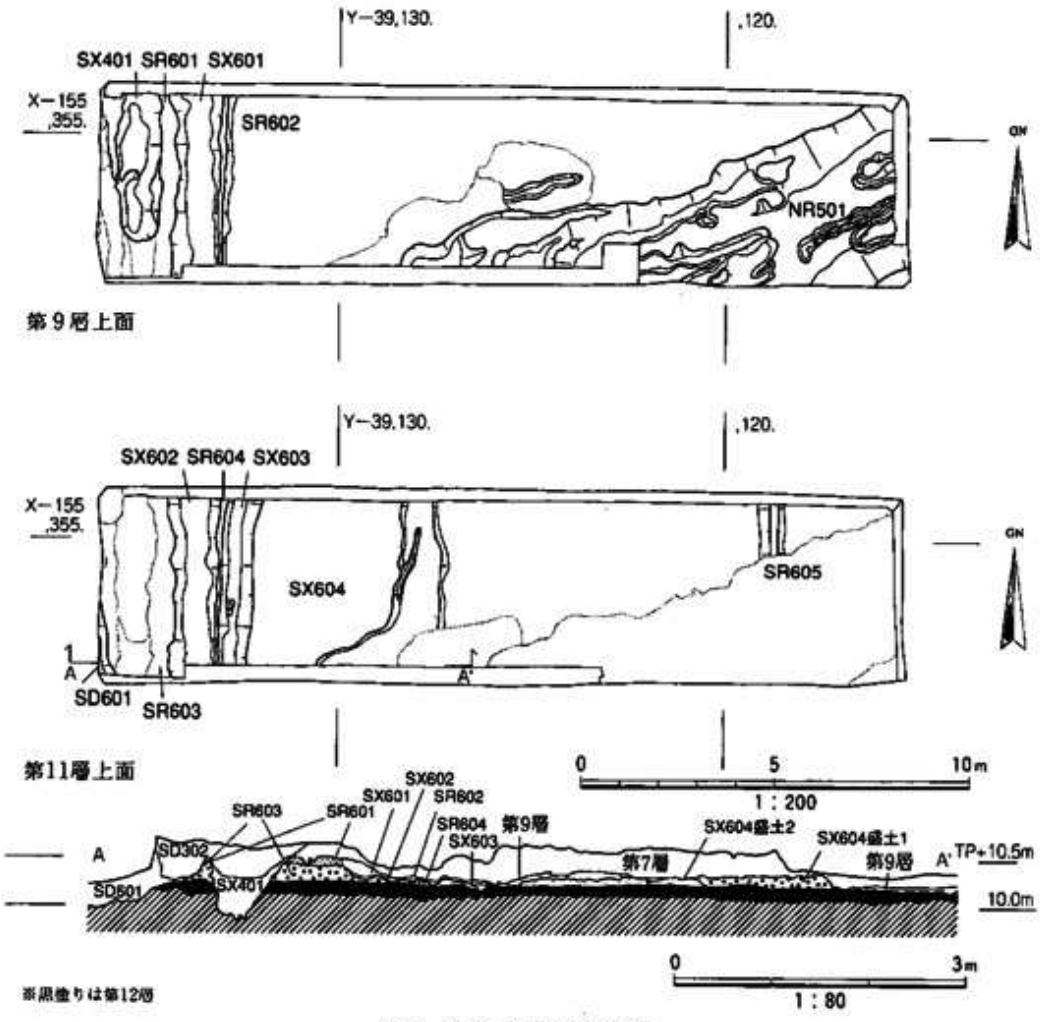


図73　奈良～鎌倉時代の遺構

これらの畦畔や溝の下には、同じ位置に同様の遺構が認められることから、前段階から引き続いて遺構が利用されていたと思われる。

第11(長原6Aii?)層の上面では、南北方向の畦畔3本と溝のほか、盛土遺構を検出した。

SR603は調査区の西端で検出した南北方向の畦畔で、北側は後世の遺構に切られており、一部残存しない。盛土の幅は2.3m、高さ0.2mで、偽礫混りの灰色粘土質シルトで築いていた。須恵器・土師器の細片が出土している。またSR604は、この東で認められた上端幅0.35m、下端幅0.5m、高さ0.1m未満の南北方向の畦畔状の高まりで、SR602と重複していた。SR605は調査区東部の第16層の上で認められたが、盛土の質がSR603・604と同じであることから、これらと同時期と考えた。畦畔は南北方向で、南側はNR501に削平されている。上端幅0.25m、下端幅0.65m、高さ0.15mで、後述するSR606と同じ位置にある。

SD601はSR601の東肩に沿って検出された南北方向の溝で、西肩は調査区外にあると思われる。埋土は水成層で、暗オリーブ灰色粘土質シルト～極細粒砂(上層)、灰オリーブ色極細～細粒砂(中層)、オリーブ黒色の段丘構成層・細粒砂ブロックおよび炭化物を含むシルト質粘土(下層)である。出土遺物は須恵器・土師器の細片である。方向および位置が条里にほぼ一致することから、坪境の溝と考えられる。

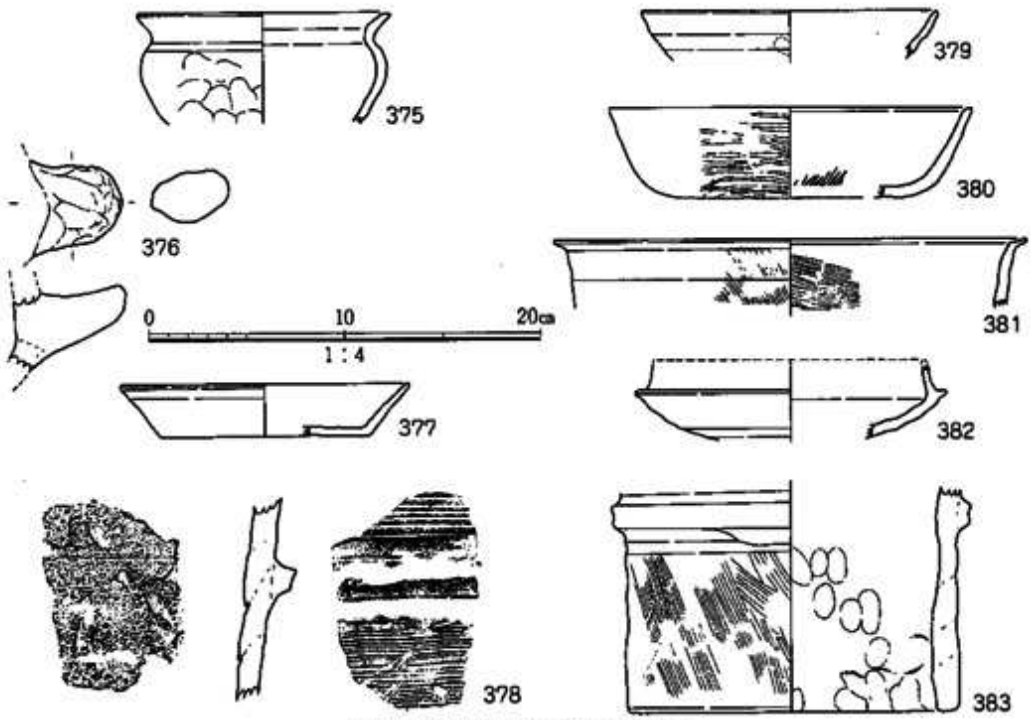


図74　奈良時代の遺構出土の遺物
(NR501：375～378、SX604：379～383)

SX602・603はSR604の両側にある窪みで、底に薄く水成層が堆積していたので、溝として利用されていた可能性がある。SX604は調査区の中央部で検出した、南北方向の盛土遺構である。この高まりは、全幅3.4m、高さ0.1mで、断面は台形を呈する。断面の観察から、まず西側に、幅2.0m、厚さ0.1mの黒色粘土質シルトを盛土し(盛土1)、その後、この東に幅1.4m、厚さ0.1mにわたって、SR603の盛土に類似した灰色偽礫混り粘土質シ

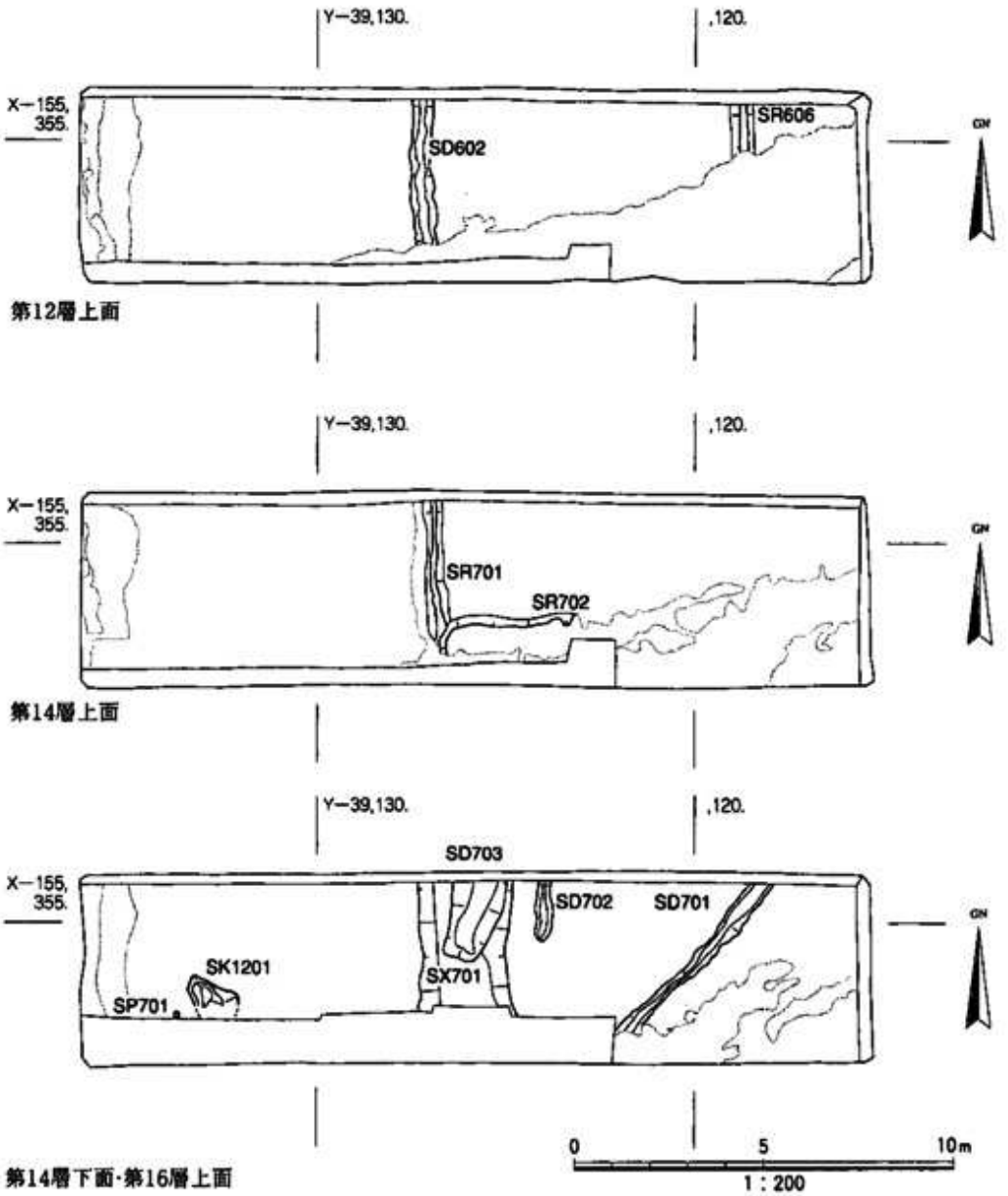


図75　縄文～飛鳥時代の遺構

ルト(盛土2)を盛ったことがわかった。盛土内からはV期に属する円筒埴輪が出土しており、古墳を破壊した土を盛った可能性がある。

379～383はSX604から出土した。379～381は土師器である。379は椀で、外面にユビオサエ痕が残る。380は杯で口縁端部の内面に段をもつ。内面に放射状暗文を施し、外面にはていねいなヘラミガキを行う。平城宮Ⅱ～Ⅲであろう。381は甑と思われる。口縁部はほぼヨコ方向に短く外反し、器壁は薄い。外面の調整は斜めから縦方向のハケ、内面はヨコハケである。382は須恵器杯身でTK10型式に属する。383はV期に属する円筒埴輪の底部で、タガ断面は低い「M」字形である。外面は不定方向のハケ、内面はユビオサエで調整する。

iii)飛鳥時代(図75、図版21)

第12(長原6Bi)層上面では畦畔と溝を検出した。

SR606は調査区の東部で検出した南北方向の水田畦畔である。上端幅0.25mで、下端幅0.5m、高さ0.1mである。SD602は調査区の中央で検出した南北方向の溝である。幅0.05m、深さ0.15mである。埋土は水成層で、黄褐色細粒砂である。

第14(長原7Ai)層上面では中央で南北方向と東西方向の畦畔を検出した。

SR701は上端幅0.1～0.25m、下端幅0.4～0.6m、高さ0.1未満mで、SR702はSR701に直交し、上端幅0.2m、下端幅0.4m、高さ0.15mである。

第14層下面では溝と落込みのほか、ピットを検出した。

SD701は調査区東側で検出された北東から南西方向の溝で、幅0.4～0.5m、深さ0.06m未満である。埋土の上層は黒褐色粘土質シルト、下層は黒褐色粘土で、底は凸凹していた。SD702は幅0.5m、深さ0.1～0.3mで、灰黄褐色粘土質シルトを埋土とし、北側に延びる。SX701は幅2.5m、深さ0.05mの落込みで、その底ではSD703を検出した。幅1.2m、深さ0.2mで、溝底は掘削の踏込みによる凹凸が激しかった。埋土の上層は黒褐色粘土質シルト、下層は黒褐色シルト質粘土のブロックを含む粘土で、出土遺物は須恵器・土師器である。SP701は直径0.15m、深さ0.05mで、埋土の上層は黒褐色含砂粘土質シルト、下層は褐灰色粘土質シルトである。出土遺物は土師器細片である。

iv)縄文時代(図75)

第15～17(長原7B～15)層上面ではおもに石器遺物の確認を目的とした調査を行い、先述した縄文時代の石鏃2点が出土した。遺構は第16層上面で土壙SK1201を検出した。

SK1201は幅2.4m、深さ0.4mの楕円形の土壙である。埋土の上層は灰色粘土質シルトで、下層は炭化物を多く含む黄灰色極細粒砂～粘土質シルトである。

第3節　94－4次調査

1)層序と各層出土の遺物(図76・77、表20、図版45・47・48)

調査区内では長原1層以下の各層が良好な状態で検出されたが、遺跡の中央から西に分布の中心がある長原5層は認められず、その下位の長原6Aii層が厚く堆積していた。なお、調査の都合上、断面図の作成は調査区の西と東に分けて行った。各層についての詳しい記載は表20に示し、以下では堆積状況と出土遺物について略述したい。

長原2層に相当する第1層は、調査区の東で検出された南北方向の溝の埋土である。

長原4A～4B層に当る第2層は作土層で、白磁・瓦器・須恵器・黒色土器・土師器・瓦などを含み、西半に分布する。

第3～5層は東側に拡がる落込み内に堆積する。長原4A～4B層に相当する3・4層は、瓦器・黒色土器・土師器などを含む作土層で、4層は西側にいくほど砂質が強い。5層は落込みの最下層に堆積した層である。土師器および黒色土器・瓦などを含み、瓦器がほとんど見られないことから、長原4C層に相当すると考えられる。

次に述べる第6・7層は、調査区の西半で検出された。層厚は合わせて0.1～0.2mと薄く、境界は漸移的である。両者はともに下位層の第8層をベースにしている。

384～389は6層から出土した。384～388は土師器である。384は椀で、外面にはユビオサエの痕跡が明瞭である。385～387は杯である。385の口径は12.8cmで、口縁部内面は凹ませている。内面には放射状暗文を1段もち、外面は横方向のヘラミガキを施す。386は口径15.2cmで、底部外面を板ナデで仕上げている。387は口縁端部をわずかに外反させ、内面にはゆるい段をもつ。388は皿で、口縁部内面には段を有し、内面には1段の放射状暗文が見られる。389は須恵器杯で高台を有する。これらの遺物は384が平安時代Ⅱ期、389が平安時代Ⅰ期、385～388が平城宮Ⅱ～Ⅳで8世紀前半～9世紀後半の年代を示す。ただし、図示しえなかったが、6層からはこのほかに「て」字状口縁をもつ皿や、黒色土器B類も出土している。上下で検出した遺構の時期を併せて考慮すると、6層の形成期間は9世紀後半～11世紀初頭で、長原4C層に相当するであろう。

390～400は第7層から出土した。390～396は土師器である。390～392は杯で、いずれも内面は無文である。390・391は口縁部内面を肥厚させ、392は口縁部内面にわずかに稜をもつ。なお、392は皿の可能性もある。393・394は甕で、外面にはユビオサエ痕が顕著

表20　94－4次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴	掲載遺物
NG2	1層	含礫オリーブ灰色(10Y4/2)シルト質粘土	≦30	SD201	肥前磁器・国産陶磁器	後の盛土	
NG4A～4B	2層	含礫暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質細粒砂	20	↓SK401,SP401～404,SD401～403,SE401,柱穴群	白磁・瓦巻・黒色土器・須恵器・土師器・瓦	作土	
	3層	暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土	≦30		瓦器・黒色土器・土師器・瓦	作土	
	4層	含礫灰色(5Y5/1)極細粒砂質粘土	≦20		瓦器・須恵器・土師器・動物骨	作土	
NG4C	5層	黄灰色(2.5Y4/1)シルト質礫～極細粒砂	≦10		緑釉陶器・黒色土器・須恵器・土師器・瓦		
	6層	含細礫灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂～含細礫灰オリーブ色(7.5Y4/2)細粒砂	≦10	▲落込み ▼SD404	緑釉陶器・白磁・黒色土器・須恵器・土師器・瓦		384～389
NG4C～6Ai	7層	含細礫オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂～緑灰色(7.5GY6/1)細粒砂	≦10	▼SK601,SD601	緑釉陶器・須恵器・土師器		390～400
NG6Aii	8層	明緑灰色(7.5GY7/1)シルト～中礫	60～70	▼落込み	須恵器・土師器・土馬・瓦・紙石	水成	401～404
NG6Bi	9層	灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト～オリーブ灰色(10Y4/2)細粒砂質シルト	20～30	▲水田面,SR601～603,足跡	土師器・木・石器	作土	451
	10層	オリーブ黒色(10Y3/2)極粗粒砂	≦5		石器	水成	452
	11層	灰色(5Y4/1)シルト質中粒砂	≦20	▲水田面		作土	
NG6Bii	12層	灰色(10Y5/1)粗粒砂～緑灰色(7.5GY5/1)極細粒砂～暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質粘土	≦15			水成	
NG7Ai	13層	オリーブ黒色(7.5Y3/2)極細粒砂質シルト	≦20	▲水田面,SR701～706 ▼SR701'～706'		作土	
NG7Aii	14層	オリーブ黒色(7.5Y2/2)シルト質粘土	10～30		須恵器・土師器・弥生土器・石器	作土	
NG7B	15層	オリーブ黒色(5Y3/1)粘土～粘土質シルト	≦10	↓SD801～805	須恵器・土師器・弥生土器・サヌカイト剥片		
NG8A	16層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土	≦5				
NG8B～9	17層	オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質極細粒砂	≦10				
NG9？	18層	オリーブ灰色(2.5Y5/1)シルト質細粒砂	≦10				
NG10	19層	暗オリーブ灰色(2.5Y4/1)粘土質細礫	≦10			水成	
NG11	20層	暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土	≦15			一部水成	
NG9～11	21層	暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粘土	≦10				
NG12	22層	暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土	≦20	▲乾痕	土器・石器・剥片		453～458
NG12/13漸移帯	23層	オリーブ黒色(10Y3/1)極細粒砂質シルト	≦10		石器・剥片	火山ガラス	
NG13	24層	含細粒砂灰色(10Y5/1)粘土	10～30				
NG15	25層	オリーブ灰色(10Y4/2)粘土	≧10				

に見られる。395は鍋である。外面にはヘラミガキを施し、内面にはていねいなナデ調整が見られる。396は小型の高杯である。397～399は須恵器蓋である。397・398は杯蓋で、つまみは偏平である。399は皿の蓋で、宝珠形のつまみが付くと思われる。400は緑釉陶器椀で、高台は貼付けており施釉は高台部分にも見られる。内面には沈線が認められる。これらは390～392が平城宮Ⅳ～Ⅴ、397・398が平城宮Ⅴ、399が平安時代Ⅰ期に属し、上下で

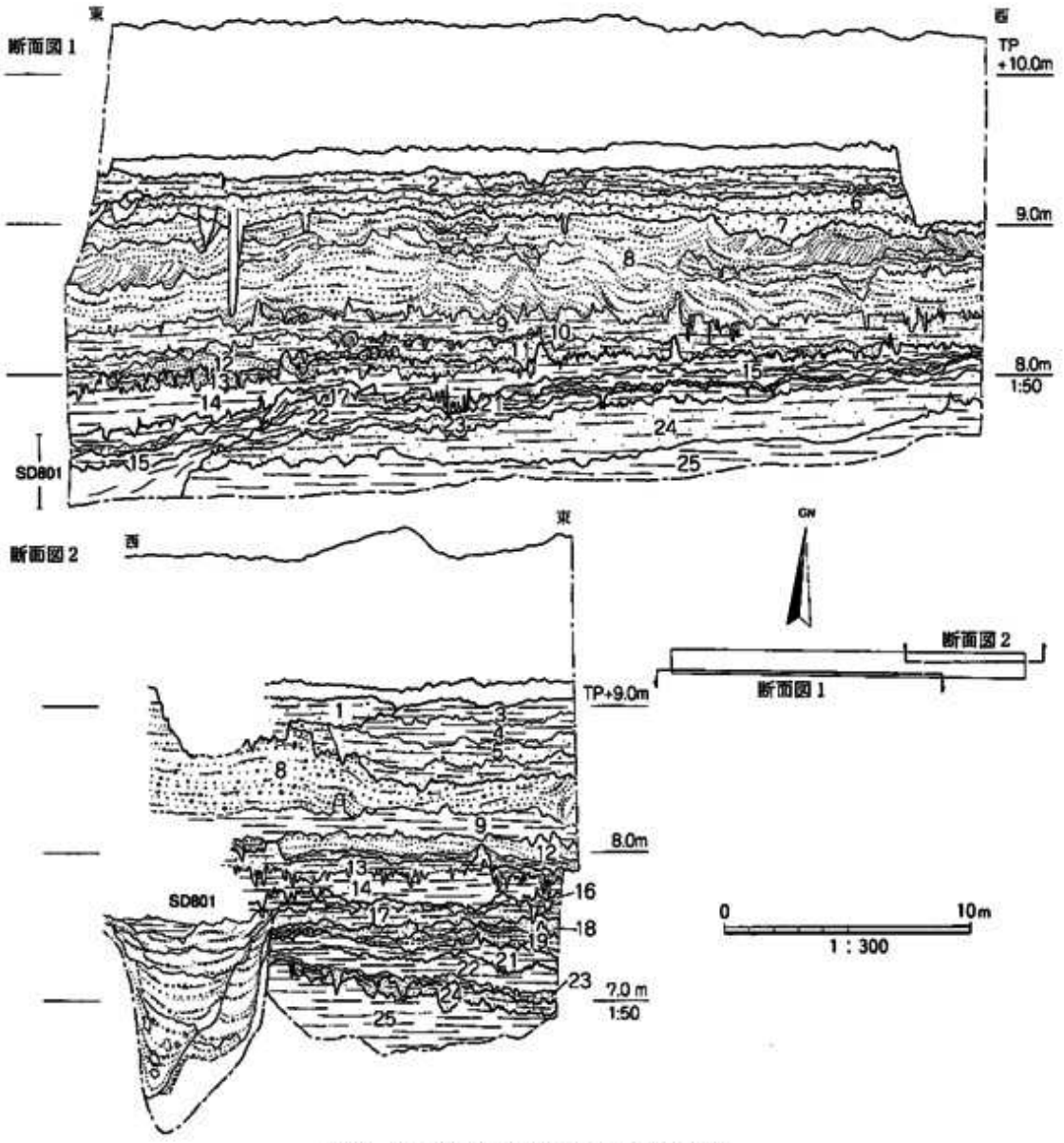


図76　94－4次調査区の南・北壁地層断面

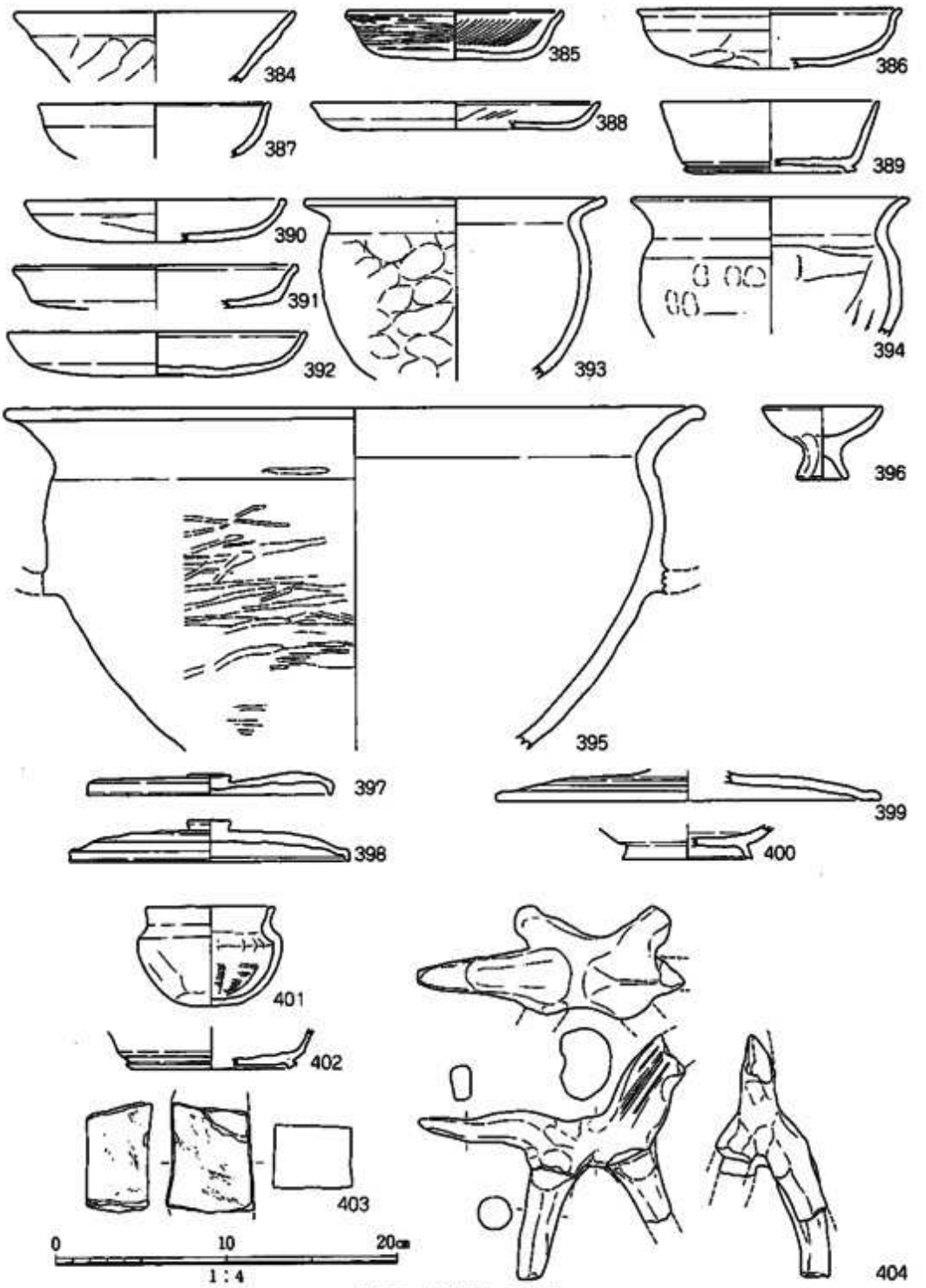


図77　各層出土の遺物

（第6層：384～389、第7層：390～400、第8層：401～404）

検出した遺構の時期関係を合わせてみると７層の形成期間は８世紀中葉～９世紀後半で、長原4C～6Ai層に相当する。

第８層は全面に分布する層厚約0.7mの水成層で、上半には斜行葉理が見られる。調査区の西では、本層下面のほか中位のシルト層上面でも踏込みが見られた。本層からは須恵器・土師器などが出土しており、長原6Aii層に相当すると考えられる。

401～**404**は第８層から出土した。**401**は口径7.5cm、器高5.8cmの小型の土師器壺である。**402**は須恵器杯で、高台が底部と体部との屈曲部分より内側に付き、シャープなつくりである。**404**はやや大型の土馬で、足を上に向けた状態で出土した(写真９)。現存長14.0cm、現存高15.4cmである。頭と足先が欠損していた。非写実的なもので、ハケメ調整によってたてがみを表現している。これらの遺物は飛鳥Ⅲ～Ⅳに属し、７世紀後半であろう。**403**は砂岩製の砥石で、上下は折れている。

第９～11層は長原6Bi層に相当する。９層は全面に分布する作土層で、上面では畦畔および人間・偶蹄類の足跡群が検出された。10層は中央で部分的に確認された水成層で、踏込みによるラミナの変形が激しい。11層は中央に分布する作土層である。また、第12層は東半に分布し、上下に分れる水成層である。下層の上面では偶蹄類の踏込みが顕著に見られた。長原6Bii層に相当する。

図86－**451**・**452**は第９・10層からそれぞれ出土した石鏃で、遊離資料である。**451**は凸基有茎式で、弥生時代中期のものであろう。**452**は凹基無茎式で、縄文時代であろう。

第13・14層は全面に分布する作土層で、長原7Ai層・長原7Aii層にそれぞれ相当する。13層は下位層の偽礫を含み、全般的に淘汰が不良である。上面からは畦畔が検出された。14層と13層との間には水成層は存在しないが、識別は可能であった。

写真９　第８層土馬404の出土状況

第15層は須恵器や弥生時代後期の土器を含み長原7B層に相当する暗色帯であろう。

第16層は東側に分布し、14層と21層の間に部分的に存在する層である。長原8A層に相当すると考えられる。

第17層は東側および中央に部分的に分布する。東側では上面に乾痕が認められた。当層は長原8B～９層に相当する暗色帯であ

る。また、17層と18層との境界は漸移的である。

第19・20層は東側に分布する。19層全体と20層の一部は水成層で、長原10・11層にそれぞれ相当する。

第21層は西半の高い部分に形成された層で、15層と22層との間に存在する。長原９～11層に当ると考えられる。

第22層は全面に分布し、上面では乾痕が顕著に認められた。上面からは時期不明の土器片１点、上部からは全域にわたってサヌカイト製石鏃と剥片が検出された。長原12層に相当する。

第23層は東側に分布する。火山ガラスを多く含み、長原12／13層の漸移帯に相当する。

第24層は長原13層、第25層は長原15層に相当する。

2)遺構と遺物

i)鎌倉～江戸時代(図78)

江戸時代の遺構は、調査区の東で検出された溝である。

SD201は南北方向の溝である。幅1.85m、深さ0.4mで、溝の西壁は杭と板材によって護岸されていた。肥前磁器などの陶磁器が出土した。

鎌倉時代の遺構は、第２層下面で南北方向に走る小溝を多数検出した。これらは幅0.1～0.2m、深さ0.05～0.10mといずれも浅く、耕作に伴う溝と考えられる。

ii)奈良～平安時代

遺構の多くが第２層基底面で確認されたが、輪郭が不明瞭であったため、第６層上・下および第７層下面の３面で順次遺構検出を行った。第６・７層中および各遺構には、８世紀中葉から11世紀初頭にかけての遺物が含まれている。

a．第２層基底面検出遺構(図79、図版22)

平安時代末の遺構と思われるものには土壙墓１基があり、平安時代中頃の遺構には、調査区の中央で検出された掘立柱建物の柱穴群・井戸・溝・土器埋納遺構がある。

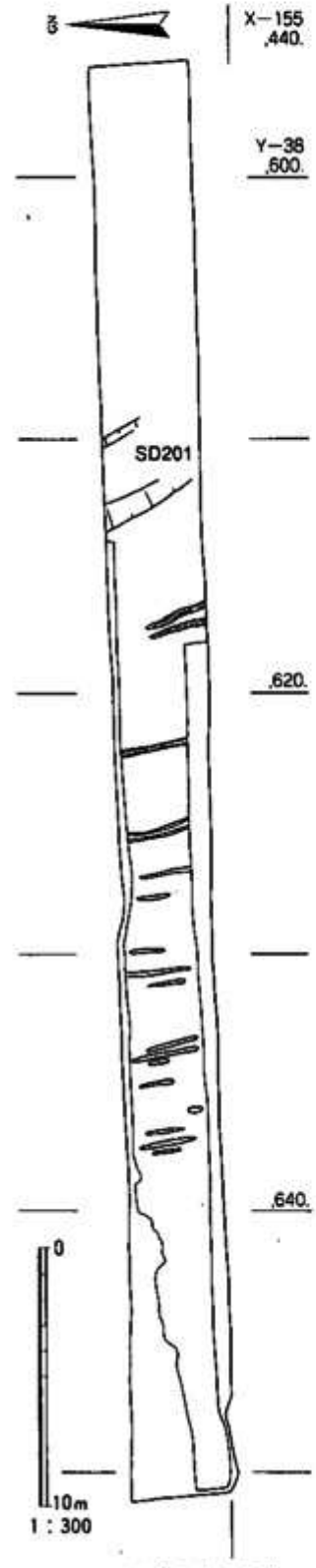


図78　鎌倉時代の遺構

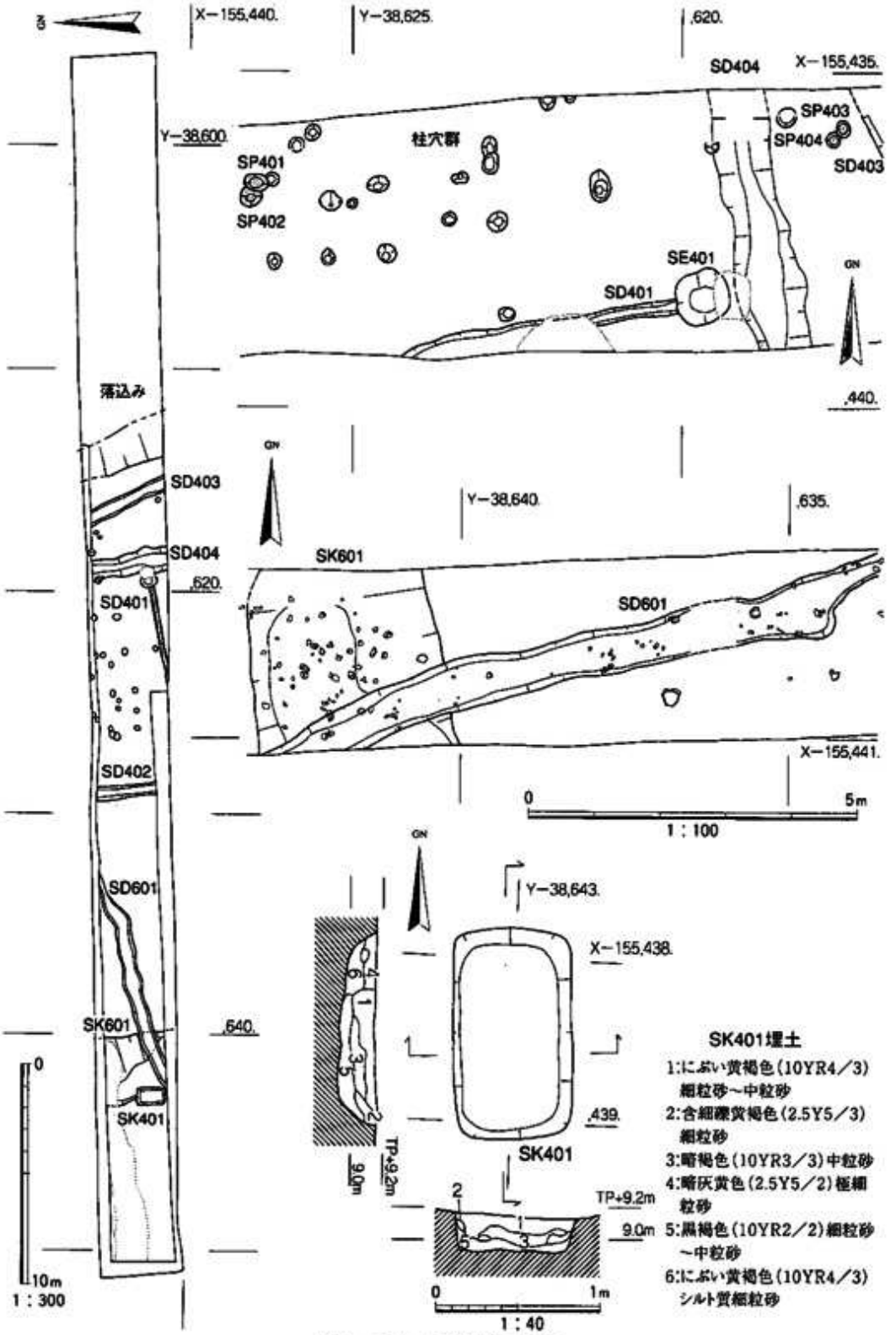


図79　奈良〜平安時代の遺構

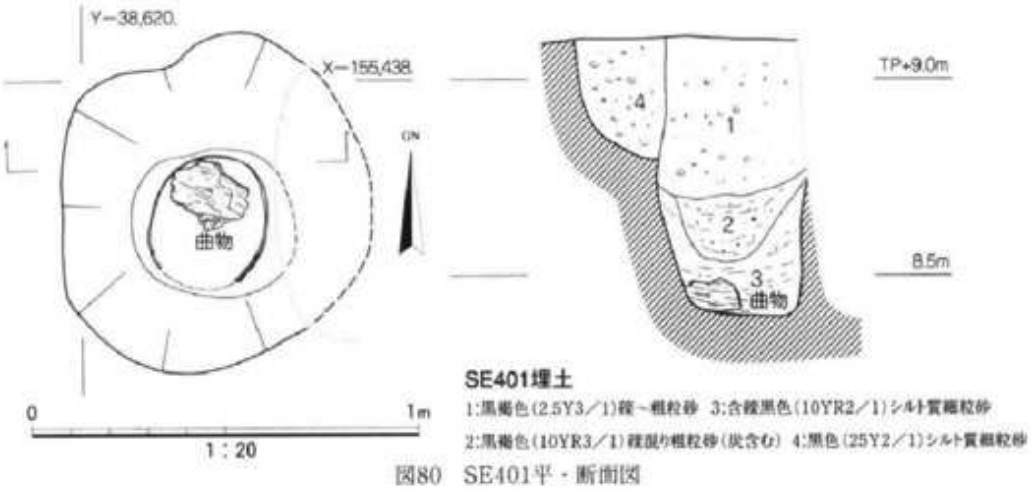


図80　SE401平・断面図

土壙(図79)：**SK401**は西側で検出した土壙で、平面形は南北幅1.35m、東西幅0.75mの隅丸方形を呈し、深さは0.2mである。埋土はブロックを多く含んだ土で、人為的に埋戻されている。埋土を持ち帰りふるいにかけた結果、骨片が見つかった。このため、**SK401**は土壙墓の可能性がある。埋土からは黒色土器・土師器のほかに瓦器の細片が出土しており、上位層中から掘込まれたものであろう。

井戸(図80)：**SE401**は直径0.35m、深さ0.7mであり、底には曲物が1段分のみ残存していた。**SE401**内からは須恵器・土師器や黒色土器の細片が出土しただけで、時期決定の根拠に乏しいが、土器埋納遺構との位置関係からこれらと同時並存していたと推定される。

土器埋納遺構(図81、図版24・45・46)：中央から西寄りで**SP401・402**が認められ、これより東に約9m離れたところで**SP403・404**を検出した。いずれも2基のピットは正方位にではなく、1基の北東に接するようにもう1基が掘られていた。これらは素掘りであるが、**SP401**は掘形が直径0.35mでやや大きく、ほかは直径0.15～0.20mであった。また、すべてのピット中には小型の甕が正置され、中型の皿で蓋をされていた。さらに、甕の中には小皿が口縁を上にした状態で入っていた。写真10はこの状況を復元したものである。これらの土壙は後述する柱穴群の東と西の端に位置しており、ここに存在したと思われる建物となんらかの関係があるのだろう。

写真10　土器埋納状況

405～416は**SP401～404**から出土した土師器であ

る。405～408は「て」字状口縁の小皿で、口径は10cm前後である。色調は灰白色で、底部外面にはユビオサエの痕跡を明瞭に残し、器壁の凹凸が大きい。409～412は口径が13.5～14.0cmの中型の皿で、409・411は、口縁部を横ナデで外反させ、端部は肥厚させない形態のものである。なお、409の器高は411より高い。一方、410・412は口縁端部を肥厚させて、「て」字状としたものである。410の器高は412よりもやや高い。414・416は口径約13cmの丸底の甕である。口縁部は「く」字状に外反させ、端部は丸い。体部の外面はユビオサ

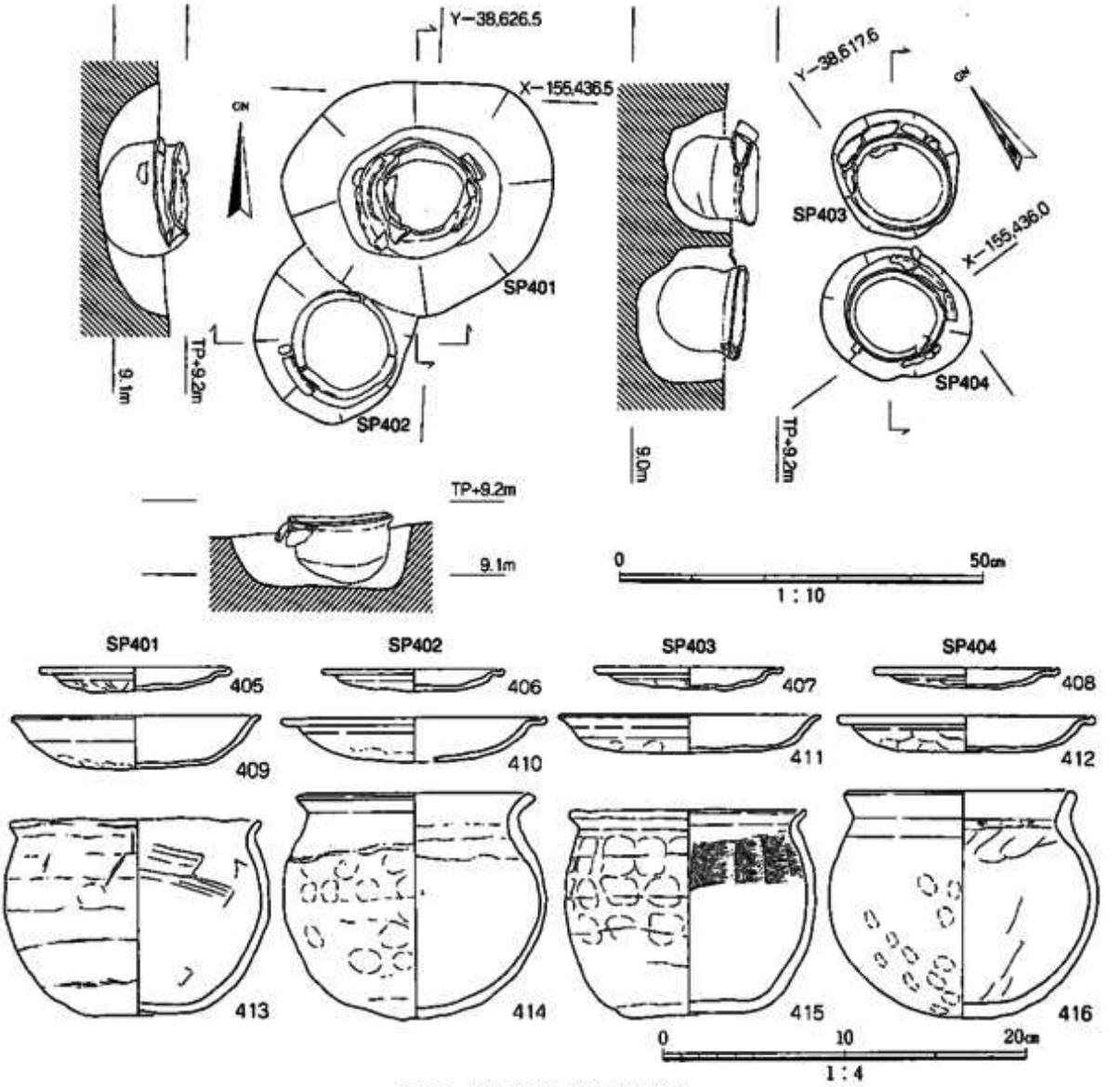


図81　土器埋納遺構と出土遺物
(SP401：405・409・413、SP402：406・410・414、SP403：407・411・415、SP404：408・412・416)

工痕を残し、内面はナデで仕上げる。内面の一部には粘土紐の接合痕跡を残す。413・415は口径13～14cmの平底の甕で、口縁部は短く屈曲し端部をわずかに内側につまむ。円板状の底部と体部を別々に作っており、底部と体部の境には接合した際の段が残るほか、体部外面も粘土紐の継ぎ目が見られ、粗雑なつくりである。器壁は薄く、体部の内面はハケメで調整している。以上は平安時代Ⅲ期古段階に属し、10世紀末～11世紀初頭のものである。

このようにSP401～404では、中に入れる小皿の形態は4基とも同じで、北に位置するピットでは平底の甕と口縁部を外反させる皿が対になり、この南西に接するピットでは丸底の甕と「て」字状口縁の皿が組合わされている点では、東と西の地点で共通していた。すなわち、建物の東西に同じ並べ方で2種類の皿(蓋)と甕(身)のセットが埋置されたと考えられる。なお、甕の中の土は持ち帰り洗浄したが、遺物は検出できなかった。

溝(図79)：SD401はSE401の西で検出した東西方向の溝で、幅は0.2～0.25m、深さ0.1mである。SE401の排水などに係わるものであろう。SD402・403は南北方向に走る幅0.6m、深さ0.1～0.15mの浅い溝である。SD402の下層はシルト質細粒砂の水成層で埋っていた。これらからは遺物があまり出土せず、時期は断定できないが、柱穴群の東西で確認されたことから、建物の区画に係る可能性がある。

柱穴群(図79・82、図版47)：掘立柱建物の柱穴群は土器埋納遺構SP401・402とSP403・404の間に集中していた。土器埋納遺構との位置関係からこれらと同時並存していた可能性が高い。直径は0.15～0.4m、深さは0.15～0.3mで、柱痕跡の直径は0.1mであった。建物

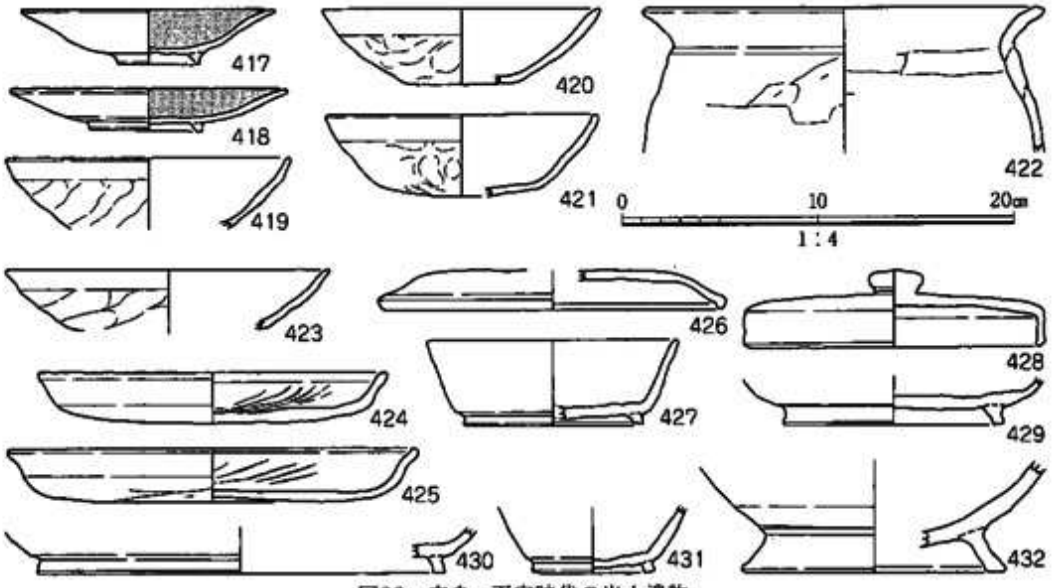


図82　奈良～平安時代の出土遺物
(SD404：417～422、柱穴群：423、SD601：424～432)

の数やその構造は不明であるが、柱穴が北半に集中することから、建物は調査区の北側に拡がると考えられる。出土遺物は黒色土器・須恵器・土師器であるが、細片が多く、図示したのは1点のみである。423は土師器の椀と思われ、外面にはユビオサエ痕を残す。平安時代Ⅰ～Ⅱ期であろう。ただしこの遺物が建物の時期を示すとは言い切れない。

なお、東端は第8層が大きく掘削されており、最深約0.7mの大きな落込みとなっている。ここには第3～5層が堆積していたが、第5層から出土した遺物の年代観から、落込みは中央で検出された遺構群と共存していた可能性が高い。調査地の南で行われたNG86-58次調査や、NG87-27次調査でも同様の落込みが確認されており、南北方向に走る幅の広い溝を想定することができる[大阪市文化財協会1993b]・[大阪市文化財協会1994]。

b．第6層下面検出遺構(図79・82、図版22・45・47)

SD404は南北方向の溝である。幅は0.65～0.9m、深さ0.35mで、断面は「V」字状を呈する。埋土からは黒色土器・土師器が出土した。417・418は黒色土器A類の皿である。口径は417が13.0cm、418が14.2cmで、ともに器壁は薄い。417は高台が断面三角形で粗雑なつくりであるのに対し、418は断面が台形でシャープなつくりである。419～422は土師器椀である。口径は14cm前後で、口縁部外面をヨコナデし、この下はユビオサエ痕を顕著に残す。421は土師器甕で、外面には粗いヘラケズリを施す。これらは平安時代Ⅱ期古段階に属し、9世紀後半のものであろう。

c．第7層下面検出遺構(図79・82・83、図版23・45・47)

溝と土壙が調査区の西で認められ、奈良時代中頃の須恵器・土師器が大量に出土した。

SD601は東西方向に走る幅0.3～0.7m、深さ0.15mの浅い溝で、SK601を切っている。

埋土からは須恵器・土師器が出土した。424・425は土師器皿である。424は口径17.8cmで、内面には1段の螺旋状および放射状暗文をもつ。425は424よりも口径がやや大きく、内面に1段の放射状暗文を施す。426～432は須恵器で、426は杯蓋としたが、皿の可能性もある。427は杯で、高台は短く外傾する。428は壺の蓋である。430は皿で、高台を有する。429・431・432は調整手法から壺の底部と思われる。これらは平城宮Ⅲ～Ⅳに属する。

SK601は東西2.9m、南北2.8m以上、深さ0.1mの浅い凹地状の遺構である。土器片の混った炭層によって埋積されていた。

埋土からは須恵器・土師器のほか、焼けた平瓦や焼土塊が出土した。433～443は土師器である。433～436は杯で、口径は14cm前後である。それぞれ内面に1段の放射状暗文をもち、435はとくに文様の間隔が狭い。加えて434・435は内底面に螺旋状の暗文をもつ。436

は口縁部を外反させたのち端部を内側へつまんでいる。437は椀で、外面にはていねいなヘラミガキを施す。438～440は皿で、口径は22cm前後である。すべて内面には1段の放射状暗文を施し、439はこれに加えて底部内面に螺旋状の暗文をもつ。441は鉢で、口縁部を内湾させ、端面に稜をもつ。442はミニチュアの壺である。443は鍋で、口縁端部内面を肥厚させる。体部外面はヘラケズリののちヘラミガキを施すが、一部にユビオサエ痕が残る。内面は細かなヨコハケで調整している。444～448は須恵器である。444は金属器を模倣した杯の蓋で、高台状のつまみをもつ。445・446は高台を有する杯である。446は金属製の

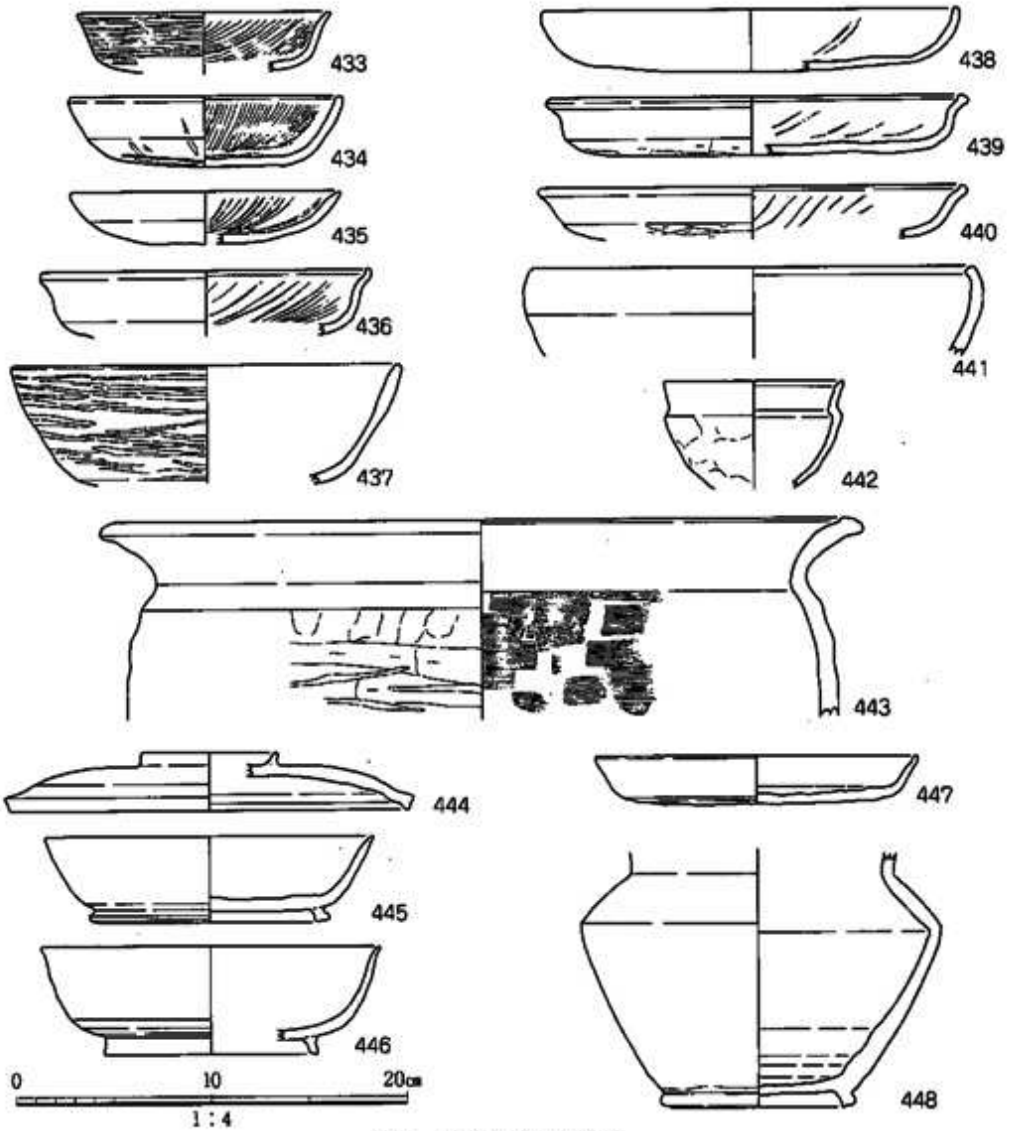


図83　SK601の出土遺物

椀を模倣した形態で、器壁は薄い。447は皿、448は壺で、肩の屈曲が強い。これらは平城宮Ⅲに属する。

iii)飛鳥時代(図84、図版25)

長原6Bi～7A層段階にかけての水田面が3面確認された。上から水田面1(第9層上面)、水田面2(第11層上面)、水田面3(第13層上面)と呼称する。さらに、13層の下面では上面とは異なる方向の畦畔状の高まりが認められた。なお、13層の下には14層を作土とする水田(水田面4)が存在するが、上層との間に水成層が残存せず、上面で畦畔は検出できなかった。また、水田面2は上位の作土層との間に水成層が部分的に残存していたため確認しえたが、ほとんどが水田面1の段階の耕作によって削平されており、詳細は不明である。

第9層上面(水田面1)では南北方向の畦畔が3本検出され、ほぼ正方位をとっている。これらはいずれも下端の幅が0.3～0.4mで、高さは0.15～0.2mである。畦畔間の距離は約13mと17mで、大畦畔は認められなかった。東西方向の畦畔はSR602と604の2本である。なお、調査区の東と西での水田面のレベル差はほとんどなく、水平である。

第13層上面(水田面3)では南北方向の畦畔が6本検出された。畦畔の規模は上層とほぼ同じであった。南北方向の畦畔は正方位をとらず、様々な方向に作られている。東西方向の畦畔はSR706が上位水田と同じ位置に作られている。各畦畔の規模は下端の幅が、0.3～0.4mで、高さは0.15～0.2mである。畦畔間の距離はSR704と705の間が5mで、他は10mであった。水田面3の畦畔は一部を除き、第13層下面(水田面3´)で見られた畦畔状高まりSR701´～706´の位置をそのまま踏襲している。なお、水田面3を形成する作土層は淘汰が不良であることから、存続時期は短かったと考えられる。また、調査区内では西から東へ低くなる傾斜が認められる。

以上をまとめると、調査区内では第13層(水田面3)の段階では傾斜が強く、水平面を確保する目的で地形に沿った方向に南北方向の畦畔を細かく設け、各畦畔を境に段差を作り出していた。これが第9層(水田面1)の段階になると、水田一筆の面積が大形化し、条里方向に合った水田が形成された。この段階の大形化の要因の一つとして、地形の水平化に伴い畦畔を細かく設けて水平面を確保する必要がなくなったことがあげられよう。畦畔の多くは新たな位置に作り替えられており、それまでの畦畔を踏襲するものは西側の南北・東西方向の畦畔1本ずつのみである。

iv)弥生～古墳時代(図85・86、図版23・48)

東側では第15(長原7B)層基底面で溝を1条検出した。

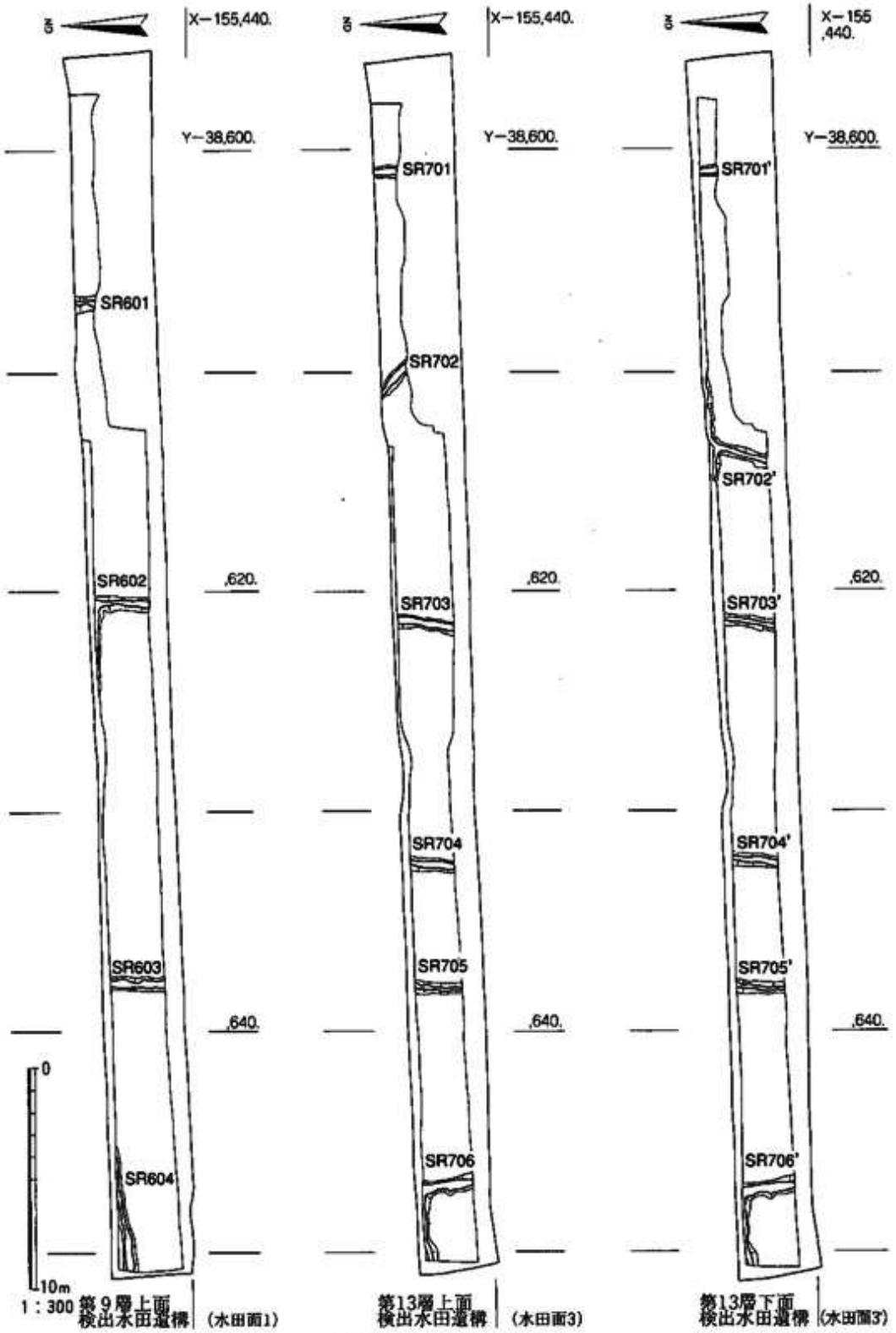


図84　飛鳥時代の水田遺構

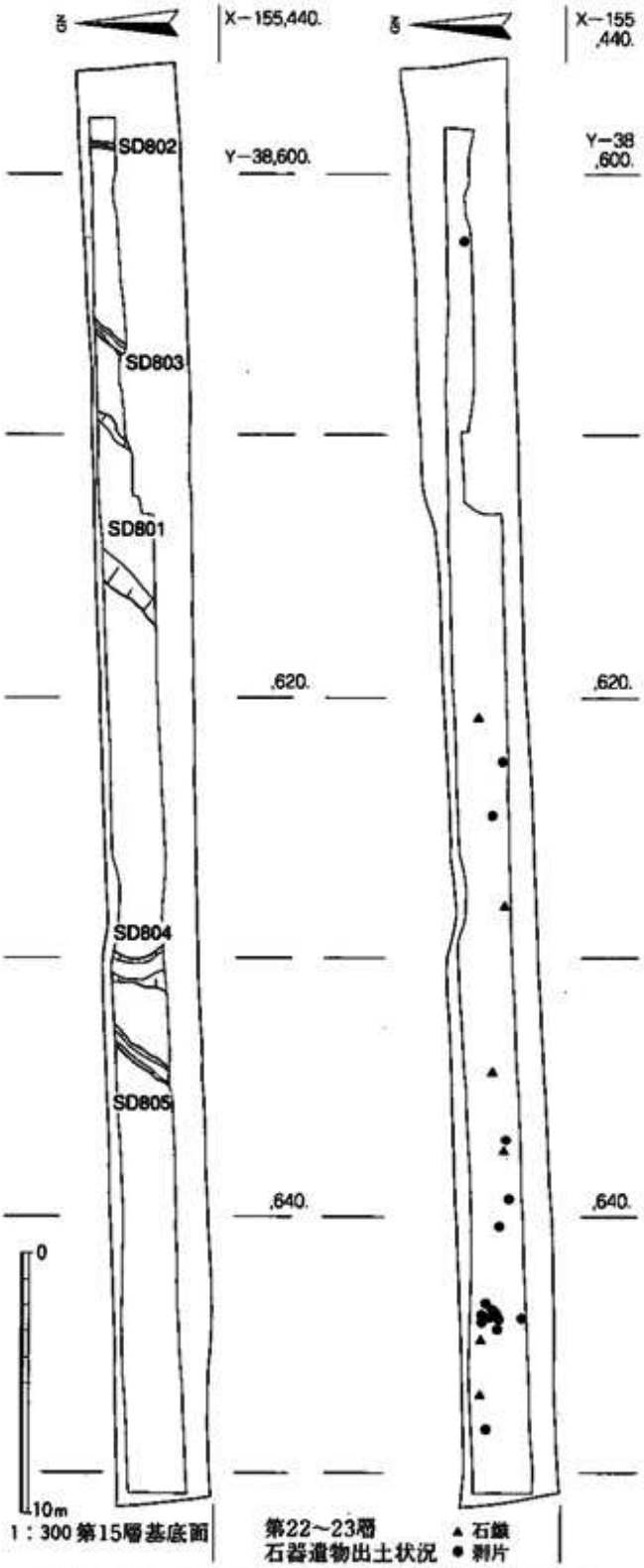


図85　弥生～古墳時代の遺構と縄文時代の遺物出土状況

SD801は幅約５m、深さ約1.4mの南西－北東方向に走る溝である。埋土は上・下２層に大別され、上層が下層を切っていることから、一度埋没した溝が再掘削されたと考えられる。下層はこの溝を最初に埋積する粒径の粗い水成層で、溝の東肩には第21層が垂れ込んでいる。上層の上部は溝を最終的に埋積する水成層である。この上部から弥生時代後期の甕449が出土した。なお、上層の最下部は粘土質で偽礫や炭化物を多く含む。溝が埋没した後の浅い凹地には２枚の水成層が堆積していた。SD801は本調査地の南西約100mで検出されている大溝とつながり、南西－北東方向に蛇行しながら流れていたと考えられる[大阪市文化財協会1994]。449は甕で、外面には平行タタキが見られる。底部は平坦である。弥生時代後期であろう。450は断面が半月形の篦状になる用途不明の木製品で、長さ23.9cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmである。

その他、SD801と同一方向の溝が第15層基底面で数条検出された。これらの溝SD802～805

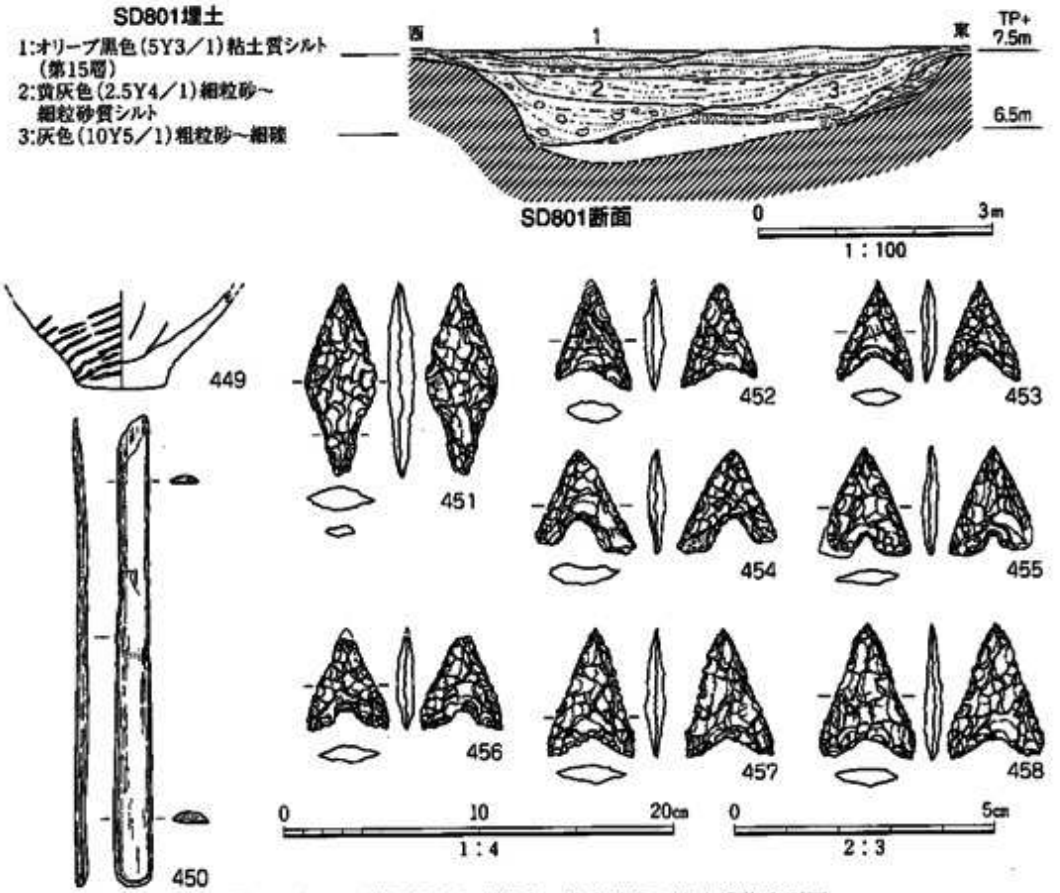


図86　SD801断面図および縄文～弥生時代の出土遺物実測図
(SD801：449・450、第9層：451、第10層：452、第22層：453～458、縮尺は449・450：1/4、他：2/3)

は幅0.2～0.4m、深さ0.05～0.2mと、いずれも浅いもので、出土遺物はない。人為的に掘削したものかどうかは不明である。

v)縄文時代(図86、図版48)

第22(長原12)層の上部から石鏃7点が出土したほか、下位層の第23層にかけて西側の高い部分で剥片の集中する個所が認められた。このため、付近の土を持ち帰って洗浄し、多くのチップを捕集した。捕集品を含めた剥片の内訳は、最大長4.2cmのもの1点、1～2cmが7点、1cm未満は90点であり、ここに石鏃など小型の製品の素材となる剥片を持ち込み、加工した可能性がある。453～458は第22層から出土した凹基無茎式石鏃である。453・454の抉りは比較的深い。453は両面とも中央に素材の剥離面を残し、454は右図の左に自然面を残す。455～458は抉りの浅いもので、457・458の平面形は類似している。これらはすべてサヌカイト製である。

第4節　小結

1)長原遺跡中央地区の調査成果

今年度の調査では、当初期待したような、古墳～平安時代の建物に関連する遺構は検出できなかったが、以下で時代を追って調査の結果をまとめてみたい。

鎌倉～江戸時代は耕作地として利用されていたと考えられ、これに伴う溝や耕作痕跡が多数確認された。なお、94－20次調査地の西端で検出された溝はその位置から坪境に当る可能性がある。

平安時代については、調査面積が狭かったこともあり、今年度は作土層を数枚確認したのみで建物は検出できなかった。しかし、当該期の出土遺物の量は比較的多く、94－19次調査地で組み合うものはないが柱穴と考えられるピットが検出されたことから、周辺には建物が存在していたことが推定できよう。

次に、飛鳥～奈良時代では、94－19次調査地で3枚の水田作土層が認められた。このうち長原6Ai層上面では畦畔を確認できなかったが、長原6Bi層上面では畦畔の方向が条里と合致しないことが明らかとなった。また、長原7A層下面で検出した高まりを畦畔の痕跡とすれば、上層と同じ方向の地割がこの時期にまでさかのぼる可能性があろう。94－20次調査地では、長原6Bi層以降の畦畔・溝などの遺構は、すべて条里方向と一致していた。ただし、長原7A層下面については条里方向と異なり、地形の傾斜に左右されている。このことから両調査地の周辺においては、長原6層段階に条里地割が採用されたようである。これを図87で周辺の調査知見と合わせて見ると、長原6B層段階にはNG88－20・NG90－37次調査地で認められた核となるような規模の畦畔や、中央地区の北東部で行われたNG86－109・NG87－35次調査地で検出された畦畔の中に条里方向と合致するものも存在する。しかし、他の多くの畦畔は地形に沿っており、水路と考えられる溝の方向も様々である。なお、94－20次調査地では掘削時期は明確ではないが、長原6層段階の堤を備えた溝SD601を検出した。この溝は坪境に位置し、なおかつ条里方向に沿うもので、幹線水路的なものと考えられる。

古墳時代については遺物も少なく、遺構はまったく認められなかった。周辺の調査では、当該期の居住域は調査地の東と西とで確認されており、今年度の調査地はその間に位置し

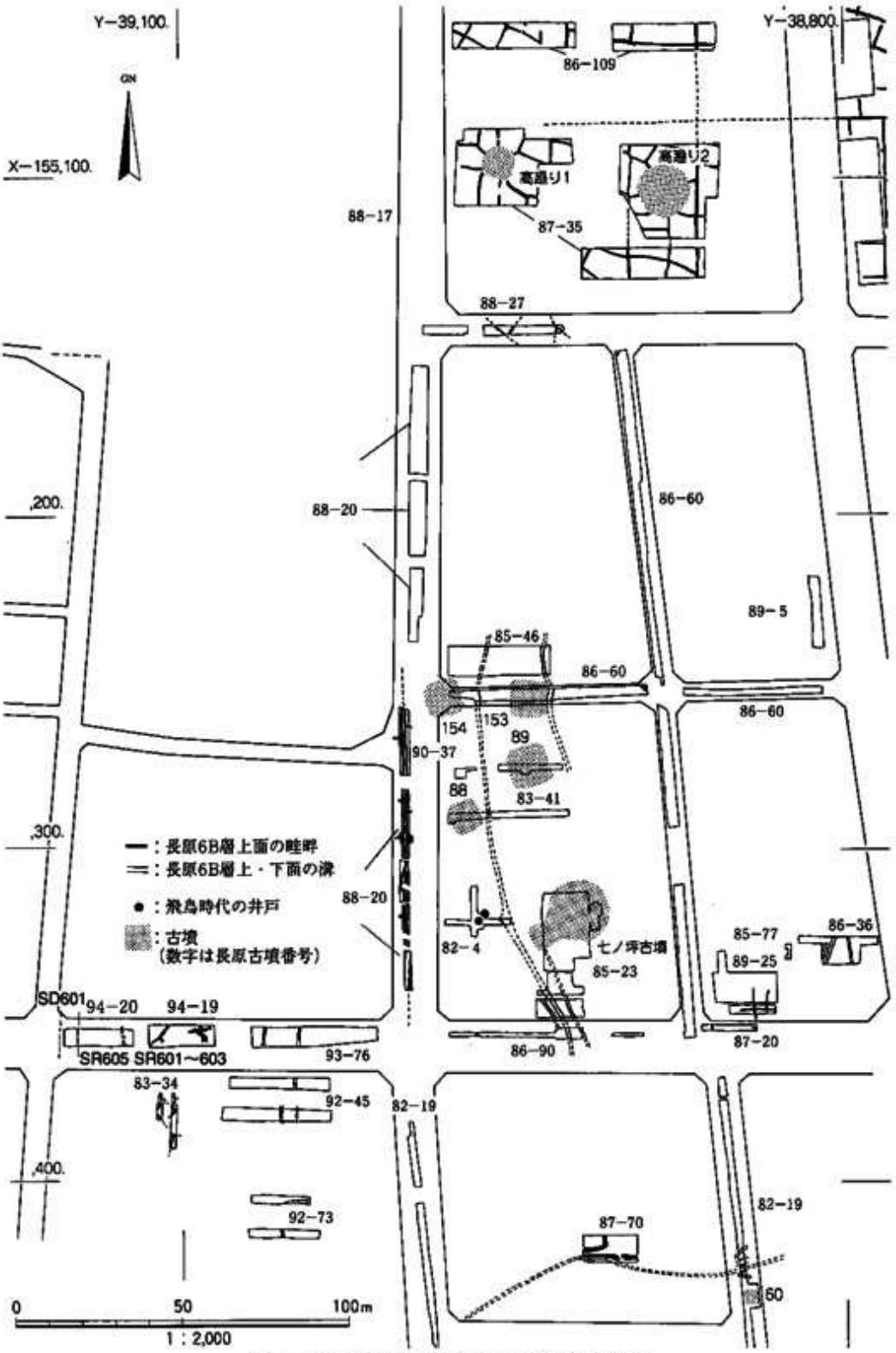


図87　中央地区における飛鳥〜奈良時代の水田

たことが予想できる。なお、94－20次調査地の長原6B層上面で検出した盛土遺構は、出土遺物や土質から古墳を破壊して築かれた高まりの可能性が強い。周辺の調査で、これまでに七ノ坪古墳(NG85－23次調査)や数多くの方墳が検出されていることから、調査地周辺の未調査地域においても古墳が存在している可能性が強い。

旧石器～弥生時代では、縄文および弥生時代の石鏃が数点認められたのみで、遺構や旧石器遺物の検出には至らなかった。

2)長原遺跡東南地区の調査成果

今年度は1個所のみの調査であったが、調査面積のわりには各時代で大きな成果を上げることができた。なかでも当地区の北に拡がる平安時代の遺構が検出されたことは特筆されよう。以下では94－4次調査の結果を中心に、周辺の調査成果を含めた遺構・遺物の内容について、時代順に述べていきたい。

室町～江戸時代は周辺は耕作地となっていたと思われ、比較的規模の大きな南北方向の溝SD201が検出された。

鎌倉時代の遺構は耕作に係わる溝群と土壙墓が1基確認されたのみで、東南地区北部の遺構の分布は稀薄である。当該期には居住地は前時代までにあった場所から、当地区の南西に移動することが指摘されており[大阪市文化財協会1994]、今年度の調査もそれを裏付ける結果となった(図88)。

平安時代では当地区の北東に10～11世紀の居住地が推定されているが、94－4次調査でも柱穴や井戸・溝が見つかり、居住の痕跡を知ることができた(図88)。検出した遺構の中でとくに注目されるのが、10世紀末～11世紀初頭に比定される土器埋納遺構SP401～404である。ここでは2種類の甕と、その蓋となる2種類の杯を意識的に組み合わせて、中に小皿を入れた上で並べて埋納した可能性が高い。すなわち、一方のピットでは通有の甕と「て」字状口縁の皿が組み合わされるのに対し、もう一方では奈良・平安時代の人面土器と製作技法が類似する特殊な甕に外反する口縁部をもつ皿を蓋としていた。なお、この2基で一対となるピットは、建物の東西両端に同様な形で位置していた。このことから、土器は意図的に組み合わされ、それぞれが密接な関係をもって建物の東と西の端に埋納されたと推定できる。この時期の土器埋納遺構は、長原遺跡内では他の地点でも多数検出されており、検討がなされてきている[櫻井久之1992]。左記の文献によると、今回の例は埋納の分類のなかでB1式に属し、建物の周囲で見つかる例が多いことから、地鎮・鎮宅を目的と

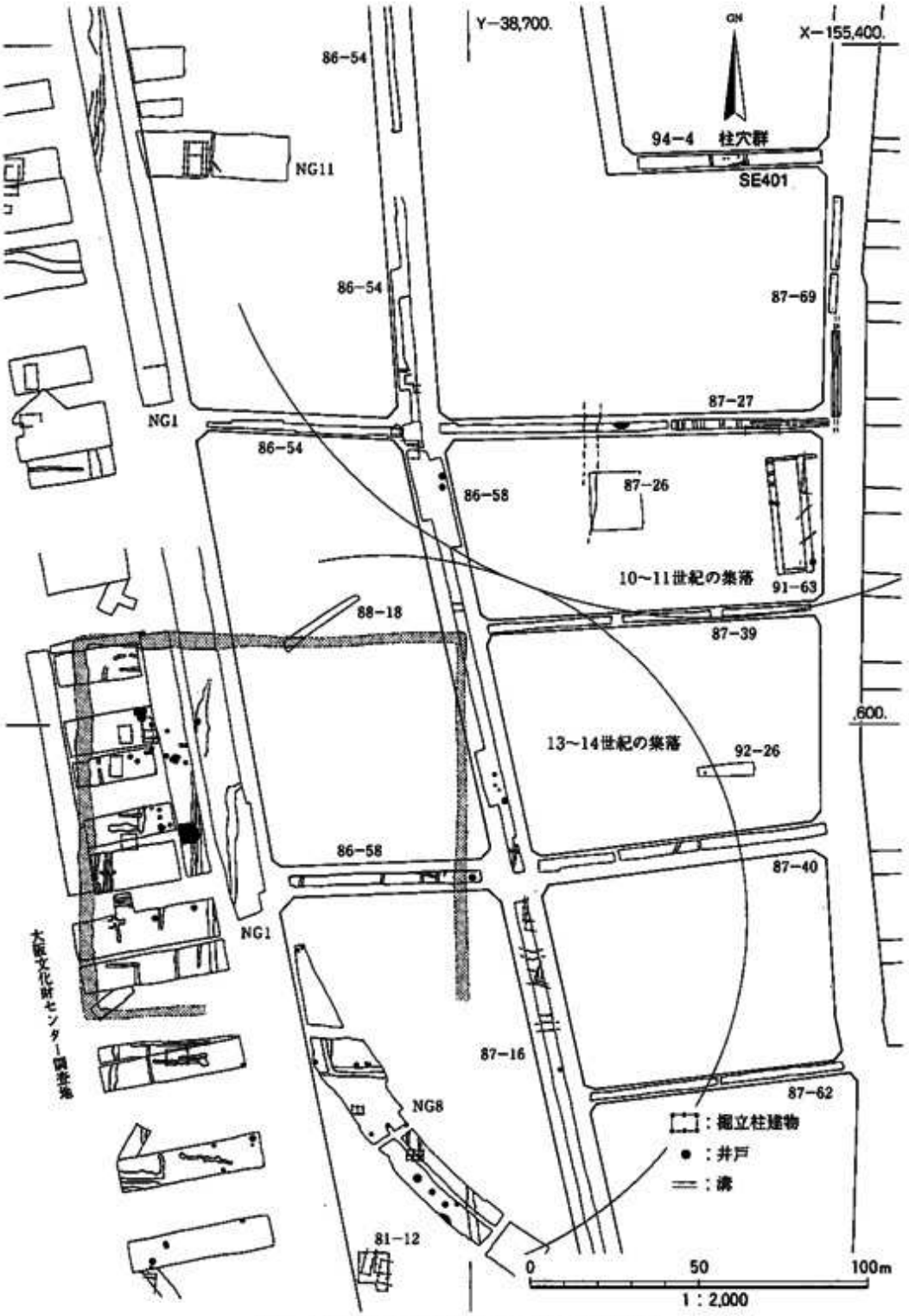


図88　東南地区における平安〜鎌倉時代の遺構

したものとされている。今回の調査例も、これと同様の目的で埋置されたものであろう。

奈良時代では土壙SK601と溝SD601が切合って検出され、多くの遺物が出土したことから、近隣に居住地が存在する可能性が高いといえよう。SD601は南西－北東方向に見られ、正方位とは大きくずれている。東南地区の南部ではこれと似た方向をとる、長原５層で埋る溝が検出されており、水路と考えられている[大阪市文化財協会1994]。今年度の例も含め、調査地周辺の土地区画の方向を考える上で興味深い資料となろう。なお、94－４次調査では奈良時代の洪水層である長原５層は堆積しておらず、そのために遺構が良好な状態で検出されたと考えられる。

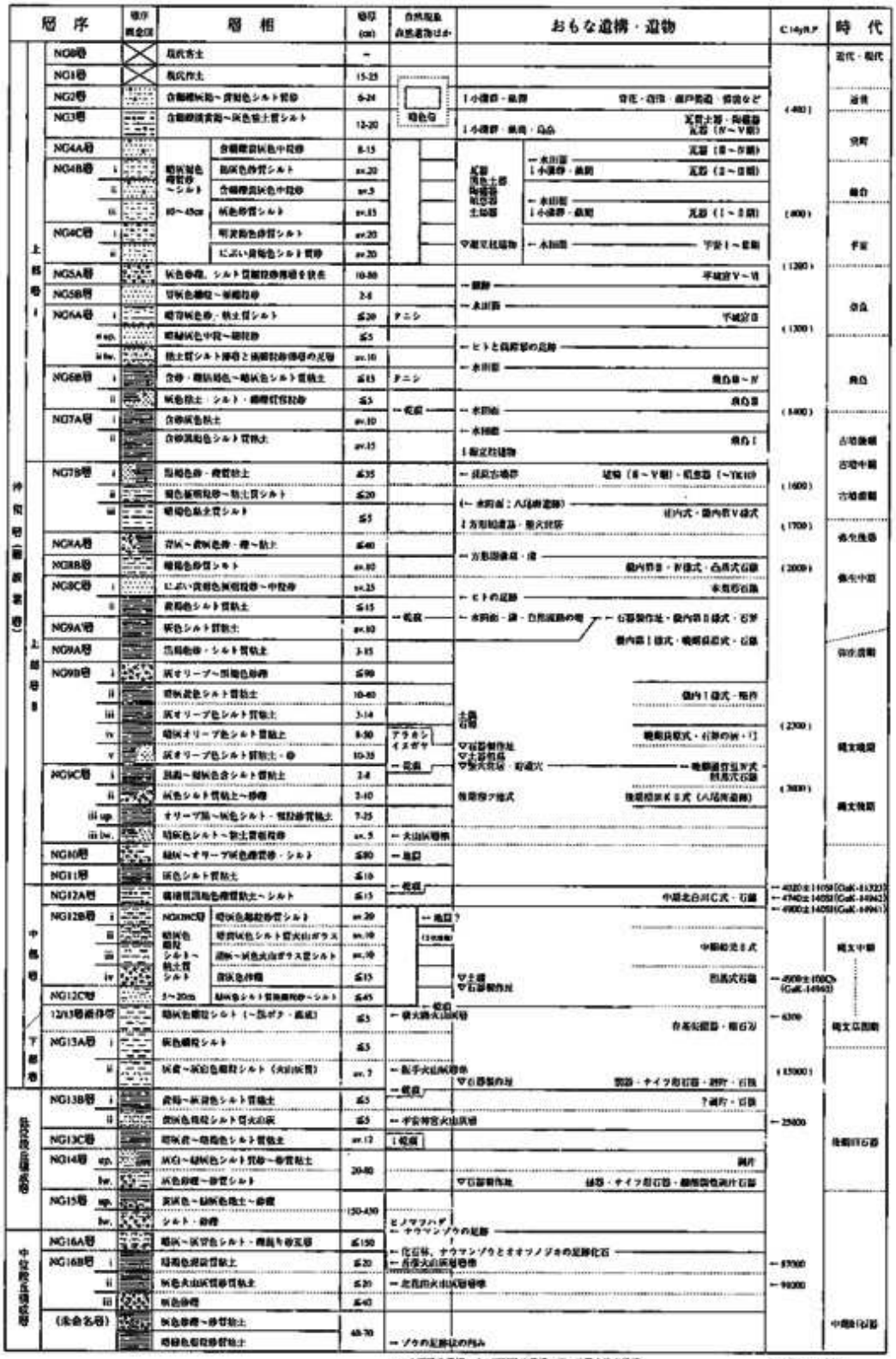
次に、飛鳥時代では長原6Bi～7A層にかけての水田面が確認され、全体的な把握には程遠いが、傾斜地での水田の変遷をある程度おさえることができた。すなわち長原7A層段階までは、調査区内に存在した谷地形の斜面のコンターラインに平行した南北畦畔を細かく設け、水田一筆内で水平面を確保する工夫がなされているが、長原6B層段階になると土砂による埋没で谷地形が水平化し、これとともに一筆の面積が大形化する。このことは、当時の水田経営が地形や自然の影響に左右されながら行われたことを示しているといえよう。また、この大形化に伴い水田経営のありかたにも変化があったことが予想される。

弥生～古墳時代では幅約５ｍになるSD801を検出した。SD801は長原7B層の基底面で検出され、断面の観察と出土遺物から弥生時代後期以降に人為的に掘削し直したことがわかった。この溝は1987年度の調査でSD701として報告された、東南地区を南西から北東へ蛇行して流れる溝と同一と思われる[大阪市文化財協会1994]。この報告ではSD701は自然流路で、下層では長原8B層と思われる砂礫が認められ、溝が完全に埋った後に長原7A層が堆積するとされている。今年度の調査によって、溝が最初に形成された時期は不明だが、少なくとも一度は人の手が加わっていることが新たに明らかとなった。

旧石器～縄文時代では、長原12層の上部から縄文時代の石鏃やサヌカイト剥片が多数出土し、製作址とはいえないが、石器遺物が集中する箇所も確認された。今後、周辺での縄文時代の生活痕跡を追及していく必要があろう。なお、旧石器時代の遺構および遺物は検出されなかった。

別　表

別表1　長原遺跡の標準層序1995



層序		層相	層厚 (cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C14yR.P	時代
神南層（難波累層） 上部層Ⅰ	NG0層	現代客土	―				近代・現代
	NG1層	現代作土	15-25				
	NG2層	含鋼礫灰褐～黄褐色シルト質砂	6-24	暗色層	↑小溝群・鉄鋼　背花・砲弾・鋼戸鉄道・備前など	(400)	近世
	NG3層	含鋼礫淡黄褐～灰色粘土質シルト	12-20		↑小溝群・鉄鋼・鳥点　瓦質土器・陶磁器 瓦器（Ⅳ～Ⅴ期）		安町
	NG4A層	暗灰褐色礫質砂～シルト 10～45cm　含鋼礫黄灰色中粒砂	8-15		瓦器（Ⅲ～Ⅳ期）		
	NG4B層 i	暗灰色砂質シルト	av.20		瓦器 灰色土器 陶磁器 瓦器 土器 ←水田面 ↑小溝群・鉄鋼　瓦器（Ⅱ～Ⅲ期）		鎌倉
	ii	含鋼礫黄灰色中粒砂	av.5		←水田面 ↑小溝群・鉄鋼　瓦器（Ⅰ～Ⅱ期）	(400)	
	iii	灰色砂質シルト	av.15				
	NG4C層 i	明黄褐色砂質シルト	av.20		▽鋼文杖遺物　←水田面　平安Ⅰ～Ⅱ期		平安
	ii	にぶい黄褐色シルト質砂	av.20			(1200)	
	NG5A層	灰色砂礫、シルト質鋼粒砂礫層を状在	10-80		←鋼跡　平城宮Ⅴ～Ⅵ		
	NG5B層	暗灰色鋼粒～鋼鋼粒砂	2-4		←水田面		奈良
	NG6A層 i	暗青灰色砂・粘土質シルト	≦20	アニシ	平城宮Ⅱ	(1300)	
	ii up.	暗緑灰色中粒～細粒砂	≦5		←ヒトと鳥類等の足跡		
	iii lw.	粘土質シルト層と鋼鋼粒砂礫層の足層	av.10		←水田面		
	NG6B層 i	含砂・礫灰褐色～暗灰色シルト質粘土	≦15	アニシ	飛鳥Ⅲ～Ⅳ		飛鳥
	ii	灰色粘土・シルト・細礫質粘砂	≦5	←乾痕	飛鳥Ⅱ	(8400)	
	NG7A層 i	含砂灰色粘土	av.10		←水田面		
	ii	含砂黒褐色シルト質粘土	av.15		←水田面　飛鳥Ⅰ ↓鋼文杖遺物		古墳後期
神南層（難波累層） 上部層Ⅱ	NG7B層 i	黒褐色砂・礫質粘土	≦35		←採取古墳群　埴輪（Ⅲ～Ⅴ期）・鳥類器（～TK10）	(1600)	古墳中期
	ii	褐色極粗粒砂～粘土質シルト	≦20				古墳前期
	iii	暗褐色粘土質シルト	≦5		(←水田面：八尾南遺跡)　庄内式・畿内第Ⅴ様式 ↓方形周溝墓・整火焼塔	(1700)	
	NG8A層	青灰～黄灰色砂・礫～粘土	≦40		←方形周溝墓・溝		弥生後期
	NG8B層	暗褐色砂質シルト	av.10		畿内第Ⅲ・Ⅳ様式・凸馬式石器	(2000)	弥生中期
	NG8C層 i	にぶい黄褐色灰褐粒砂～中粒砂	av.25		水煎形石器		
	ii	黄褐色シルト質粘土	≦15		←ヒトの足跡		
	NG9A層	灰色シルト質粘土	av.10	←乾痕	←水田面・溝・自然流路の端　←石器製作址・畿内第Ⅱ様式・石斧		
	NG9A層	黒褐色砂・シルト質粘土	3-15		畿内第Ⅰ様式・晩期長原式・石器		弥生前期
	NG9B層 i	灰オリーブ～黒褐色砂礫	≦90				
	ii	暗灰黄色シルト質粘土	10-40		畿内Ⅰ様式・陥斧		
	iii	灰オリーブ色シルト質粘土	3-14		土器 石器		
	iv	暗灰オリーブ色シルト質粘土	8-50	アラキシイヌガヤ	晩期長原式・石器の灰・口	(2300)	縄文晩期
	v	灰オリーブ色シルト質粘土・砂	10-35	←乾痕	▽石器製作址 ▽土器粗鳥 ▽整火焼塔・貯蔵穴　←晩期遺物型Ⅳ式 黒馬式石器		
	NG9C層 i	黒褐～暗灰色含シルト質粘土	2-4				
	ii	灰色シルト質粘土～砂礫	2-10		後期深ヶ浦式　後期標準Ⅱ式（八尾南遺跡）	(3800)	縄文後期
	iii up.	オリーブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土	7-25				
	iii lw.	暗灰色シルト～粘土質粗粒砂	av.5	←火山灰層横			
	NG10層	緑灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト	≦80	←地震			
	NG11層	灰色シルト質粘土	≦10	←乾痕			
中部層	NG12A層	橋梁質黒褐色礫質粘土～シルト	≦15		中期北白川C式・石器	←4020±140BP(GaK-11323) ←4740±140BP(GaK-14942) ←4900±140BP(GaK-14941)	
	NG12B層 i	NG12BC層　暗灰色粗粒砂質シルト	av.20	←地震？			
	ii	暗灰色粗粒シルト～粘土質シルト　暗青灰色シルト質火山ガラス	av.10	(2次地震)			
	iii	暗灰～灰色火山ガラス質シルト	av.10		中期船元Ⅱ式		縄文中期
	iv	青灰色砂礫	≦15		▽土器 ▽石器製作址　黒馬式石器	←4900±100Cb (GaK-14943)	
	NG12C層	5～20cm　緑灰色シルト質粗粒砂～シルト	≦45	←乾痕			
	12/13層標準層	暗灰色粗粒シルト（～黒ボク・鉄成）	≦5	←横大路火山灰層	春高尖頭器・粗石刃	←6300	縄文草間期
下部層	NG13A層 i	灰色粗粒シルト	≦5				
	ii	灰黄～灰白色粗粒シルト（火山灰質）	av.7	←阪手火山灰層単 ▽石器製作址	製器・ナイフ形石器・剥片・石核	(15000)	
鉄分段丘構成層	NG13B層 i	黄褐～灰黄色シルト質粘土	≦5	←乾痕	？剥片・石核		
	ii	黄灰色粗粒シルト質火山灰	≦5	←平安神宮火山灰層		←25000	
	NG13C層	暗灰黄～暗褐色シルト質粘土	av.12	↑乾痕			後期旧石器
	NG14層 up.	灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土	20-80		剥片		
	lw.	灰色砂礫～砂質シルト			▽石器製作址　掻器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器		
	NG15層 up.	黄灰色～緑灰色粘土～砂礫	150-450				
	lw.	シルト・砂礫		ヒノマツハダ ←ナウマンゾウの足跡			
中位段丘構成層	NG16A層	暗灰～灰黄色シルト・細粒牛砂瓦層	≦150	←化石林、ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石			
	NG16B層 i	暗褐色泥炭質粘土	≦20	←百塚火山灰層層単		←87000	
	ii	灰色火山灰質砂質粘土	≦20	←北花田火山灰層層単		←90000	
	iii	灰色砂礫	≦40				
	（未命名層）	灰色砂礫～砂質粘土	40-70				中期旧石器
		暗緑色粗粒砂質粘土		←ゾウの足跡状の凹み			

←：上面検出遺構　↑：下面検出遺構　▽：地層内検出遺構

Cb：炭　Sb：土壌

［趙哲済1997］に加筆

別表2　石器遺物計測表

報告番号	次数	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	登録番号	備　考
85	94−46	石鏃	2.69	1.55	0.31	1.31	94AL183	
86	94−46	石鏃	3.13	1.51	0.42	2.07	94AL63	
87	94−46	石鏃	3.32	1.98	0.43	2.09	94AL385	
129	94−63	石鏃	1.68	1.61	0.30	0.53	94AR237	
130	94−63	石鏃	1.66	1.09	0.27	0.37	94AR253	
131	94−63	石鏃	1.91	1.28	0.25	0.48	94AR196	LC901
132	94−63	石鏃未製品	2.66	2.14	0.42	2.11	94AR192	LC901
133	94−63	スクレイパー	8.31	4.17	0.80	26.95	94AR96	LC901
134	94−63	クサビ本体	3.71	2.23	1.75	11.03	94AR211	LC901
135	94−63	クサビ剥片	1.96	0.92	0.34	0.63	94AR245	LC901
136	94−63	剥片	1.96	2.25	0.32	1.37	94AR193	
137	94−63	不明石	8.48	6.03	5.57	201.77	94AR105	図版32のみ
157	94−18	ナイフ形石器	4.71	1.84	1.15	7.81	94AF233	
215	94−33	石鏃	2.90	1.66	0.41	1.61	94AI27	
284	94−56	磨製石斧	10.56	5.13	2.76	285.30	94AP21	
335	94−19	石鏃	3.86	2.00	0.43	3.13	94AG57	
336	94−19	石鏃	1.80	1.58	0.36	0.76	94AG64	
362	94−20	石鏃	2.66	1.58	0.23	0.81	94AH64	
363	94−20	石鏃	1.45	1.04	0.31	0.27	94AH91	
451	94−4	石鏃	3.67	1.41	0.47	1.90	94AB131	
452	94−4	石鏃	2.02	1.47	0.37	0.67	94AB132	
453	94−4	石鏃	1.91	1.46	0.26	0.47	94AB136	
454	94−4	石鏃	2.05	1.90	0.28	0.73	94AB286	
455	94−4	石鏃	2.08	1.62	0.26	0.69	94AB150	
456	94−4	石鏃	1.72	1.60	0.31	0.70	94AB149	
457	94−4	石鏃	2.39	1.67	0.38	0.86	94AB140	
458	94−4	石鏃	2.54	1.85	0.30	1.00	94AB269	

別表3　木製遺物計測表

漆製品						
報告番号	次数	種類	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	備　考
21	94−5	漆皿	底径7.8	−	−	
94	94−46	漆皿	10.1	1.6	0.2〜03	
95	94−46	漆皿	9.8	1.6	0.4	
木製品						
報告番号	次数	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　考
89	94−46	杭	33.0	4.0	3.7	図版30のみ
90	94−46	杭	31.7	6.7	3.3	図版30のみ
91	94−46	杭	35.9	7.4	4.3	図版30のみ
92	94−46	杭	42.3	11.1	10.8	図版30のみ
93	94−46	杭	48.4	11.2	12.0	図版30のみ
450	94−4	箆状加工木	23.9	1.9	0.6	

引用・参考文献

伊藤晃1995、「儺前」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社、 pp.412－424

大阪市文化財協会1979、『長吉小学校分校校舎建設に伴う長吉川辺遺跡発掘調査略報』

1990a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1990b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1991、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1993a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1993b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1995a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

1995b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ

1995c、「能澤淳二氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG93－18)略報」：『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.118－140

1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅹ

1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ

1998、『山之内遺跡遺跡発掘調査報告』

1999a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ

1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅢ

岡村勝行1992、「長原古墳群の家形埴輪」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.273－284

亀井節夫1991、『日本の長鼻類』築地書館

川西宏幸1988、「円筒埴輪総論」：『古墳時代政治史序説』塙書房

京都大学文学部1968、『京都大学文学部博物館考古資料目録』第2部

久保和士1995、「動物遺体の調査結果」：大阪市文化財協会編『森の宮遺跡』Ⅱ、pp.134－174

古代の土器研究会編1992、『古代の土器1　都城の土器集成』

樫井久之1990、「一ケ塚古墳(長原85号墳)の形象埴輪」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.264－272

1991、「長原40号墳の形象埴輪」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.192－210

1992、「長原遺跡の土器埋納遺構－飛鳥～平安時代－」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.268－286

佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102－114

積山洋1992、「一ケ塚古墳(長原85号墳)の埴輪編年」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.251－271

「ゾウの足跡調査法」編集委員会1994、『ゾウの足跡化石調査法』地学ハンドブックシリーズ9、地学団体研究会

高橋克壽1988、「器材埴輪の編年と古墳祭祀」：史学研究会編『史林』71巻2号、pp.51－71

高橋工1991、「甲冑形埴輪の検討」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.165－175

龍野市教育委員会1982、『福田天神遺跡』龍野市文化財調査報告書Ⅳ

田辺昭三1966、『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ

趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ、pp.41－44

奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所学報第26冊

西中川駿・松元光春1991、「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」：『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、pp.164－188

野尻湖発掘調査団足跡古環境班1992、「上部更新統の野尻湖で発見されたナウマンゾウの足跡化石」：『地球科学』46巻6号

兵庫県教育委員会1992、『下相野窯址』近畿自動車道舞鶴線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XVII

広島県教育委員会1995、『草戸千軒町遺跡発掘調査Ⅳ－南部地域南半部の調査－』　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

松井章1986、「城山遺跡出土の動物遺存体」：大阪文化財センター編『城山(その2)』Ⅱ、pp.227－232

松木武彦1988、「畿内における靭形埴輪の変遷－埴輪に描かれた鏃と実物の鏃－」：福永伸哉編『待兼山遺跡』Ⅱ　大阪大学埋蔵文化財調査委員会、pp.33－47

松本百合子1997、「遺物の検討」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XI、pp.129－134

森島康雄他1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社、pp.315－337

森田勉1982、「14－16世紀の白磁の分類と編年」：貿易陶磁研究会編『貿易陶磁研究』　No.2、pp.47－54

Chaix, L. & Méniel, P. 1996　*Éléments D'archéozoologie.* Editions Errance, Paris. 112 ps.

Driesch, A. von den. 1976　*A Guide to the Measurement Animal Bones from Archaeological Sites.* Peabody Museum Bulletin 1. 136 ps. Harvard:Peabody Museum.

Grant, A. 1982　The use of Tooth Wear as a Guide to the Age of Domestic Ungulates. :*Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites.* BAR British Series 109. pp. 91-108

Sisson, S. 1953　*The Anatomy of the Domestic Animals* (Revised by J. D. Grossman). 4th Edition. W. B. Saunders Co. Philadelphia and London. 949 ps.

あ と が き

長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査も終盤にさしかかっている。遺跡の中を細い線状に発掘し、遺構や地層の堆積状況を明らかにしていく地道な努力の結果、当遺跡の歴史的景観については概略を述べることができるまでになったといえよう。

日本社会も高齢化や少子化が進み、昨今は生涯学習という言葉があちこちで聞かれるようになった。今後はこれらの調査成果の蓄積を詳細に検討し、わかりやすい形で市民のために還元することが重要となっていくであろう。

末筆ながら、本書を成すに当ってご協力を賜った関係各位に深謝の意を表するとともに、今後とも文化財保護と当協会事業へのご理解とご支援を賜るようお願いする次第である。

（永島暉臣慎）

索　引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞とを一括して収録した。

M　MT15型式　26
O　ON46型式　26
T　TK10型式　35, 125
TK43型式　26
TK47型式　26
TK48型式　51
TK208型式　31, 35
TK216型式　26
あ　朝顔形埴輪　27, 51, 57, 66, 79, 89, 91
足跡化石　5, 6, 69, 71, 72, 76, 77
飛鳥Ⅰ　93
飛鳥Ⅱ　35, 96
飛鳥Ⅲ　31, 35, 36, 130
飛鳥Ⅳ　35, 96, 130
当て具痕　26, 35
吾彦火山灰層　69, 71
綾杉文　27, 61, 84
庵寺山古墳　68
い　家形埴輪　4, 27, 59, 66, 80
生駒西麓産　38, 39
一ケ塚古墳　4, 5, 47, 49, 51, 56, 66, 68, 77～79
井戸　85, 86, 131, 133, 144
入母屋造　59, 80
う　ウシ　4, 19, 31, 36, 40, 41, 43, 46
臼玉　27
ウマ　4, 9, 10, 16, 31, 36, 40～43
馬池谷　3, 5, 13, 43, 44, 46, 55
馬形埴輪　51
漆皿　14, 29
え　円筒埴輪　4, 10, 51, 55～57, 66, 79, 89, 96, 122, 125
お　押縁　59
か　囲形埴輪　4, 80
笠部　51, 59, 80
飾り板　56, 61, 66, 84
火山ガラス　31, 86, 119, 131
滑石製品　27, 46
甲冑形埴輪　84
鎌　21
唐津焼　9, 101, 109, 112, 116
偶廻り　61, 80
乾痕　49, 69, 130, 131
韓式系土器　86, 92
き　北白川上層式　38, 39
衣蓋形埴輪　4, 51, 56, 57, 80
京焼　112
鋸歯文　62, 84, 109
魚網錘　35
切妻造　61, 80
く　杭　28, 131
偶蹄類　35, 74, 75, 80, 130
草摺形埴輪　4, 61, 62, 80, 84
クサビ　39
し　シカ　75, 78, 121
自然流路　29, 35, 50, 71, 77, 95, 111, 115, 121, 146
七ノ坪古墳　144
忍冬系対称文　61
下相野遺跡　109
周溝　4, 5, 47, 49, 56, 64～66, 77, 78, 80
人物埴輪　51
す　水田　3～8, 13, 30, 35, 36, 44, 46, 56, 93, 95, 105, 106, 111, 112, 115, 118,

119, 125, 138, 142, 146
スカシ孔 26, 51, 55～57, 61, 66, 89, 92
スクレイパー 39
硯 88
せ 製塩土器 24
青磁 9, 18, 21
石鏃 27, 39, 64, 112, 119, 125, 130, 131, 141, 144, 146
石鏃未製品 39
石斧 99
た 高廻り2号墳 68, 84
高床式 59, 61, 80
立飾り 51, 56, 57, 80
盾形埴輪 4, 27, 61, 80, 84
短甲形埴輪 61, 62, 80, 84
丹波焼 109, 112
ち 鋳造炉壁 27
つ 塚ノ本古墳 4
造出し 4, 56, 78, 80
つちのこ 99
壺形埴輪 4, 57, 66, 79
と 砥石 130
東播系 9, 22, 102, 111
動物遺体 12, 37, 40, 43, 121
動物埴輪 51, 80, 84
土器埋納遺構 131, 133, 135, 144
土壙墓 131, 133, 144
土馬 130
軺形埴輪 4, 80, 84
鶏形埴輪 80, 84
な ナイフ形石器 51, 77
ナウマンゾウ 5, 72, 74～78
長原131号墳 92
長原76号墳 6, 86, 89, 91, 92, 105, 108
長原古墳群 4, 6, 77, 80, 89, 92
に 二枚貝 10, 40, 114
ね 粘土採掘壙 70, 71, 77, 95, 106
は 羽釜 10, 14, 22, 33, 88, 95, 99, 101, 102, 105, 106, 119
白磁 9, 21, 22, 49, 50, 64, 88, 101, 109, 120, 126
筒部 66, 84
ひ 東除川 6, 7, 97, 100～102, 104, 105, 106
肥前磁器 21, 101, 109, 112, 116, 119, 131
備前焼 22, 109
平瓦 22, 109, 136
ふ 鞴羽口 95
福田天神遺跡 22
武人埴輪 117
布留式 26
へ 平安時代Ⅰ期 118, 126, 128, 136
平安時代Ⅱ期 126, 136
平安時代Ⅲ期 22, 64, 118, 135
平安時代Ⅳ期 64, 88, 119
平安神宮火山灰 49
平城宮Ⅰ 119
平城宮Ⅱ 24, 112, 125, 126
平城宮Ⅲ 24, 112, 119, 125, 136, 138
平城宮Ⅳ 24, 126, 128, 136
平城宮Ⅴ 24, 122, 128
平城宮Ⅵ 34
ま 曲物 88, 133
丸瓦 22
み ミニチュア 137
宮山古墳 68
む ムカシニホンジカ 75, 77
も 木製品 29, 79, 99, 140
や 山之内遺跡 77
ゆ 靫形埴輪 4, 27, 61, 66, 68, 80, 84
よ 寄棟造 80
り 緑釉陶器 109, 112, 128

Archaeological Reports

of

Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XIV

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1994

October 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

LC : Lithic concentration
NR : Natural stream
SA : Palisade or fence
SB : Building
SD : Ditch
SE : Well
SK : Pit
SP : Posthole or pit
SR : Paddy field baulk
SX : Other features

CONTENTS

Preface
Explanatory notes

Chapter I Excavation of the Nagahara site 1
S.1 The outline of excavations in 1994 1
1) Excavations 1
2) Procedure of publishing this report 2
S.2 Outline and progress of excavations 3
1) Western sector of the Nagahara Site 3
i) Research area NG94-3 and NG94-17
ii) Research area NG94-5
iii) Research area NG94-46 iv) Research area NG94-63
2) South-western sector of the Nagahara Site 4
i) Research area NG94-18 ii) Research area NG94-33
iii) Research area NG94-52
3) Southern sector of the Nagahara Site 4
i) Research area NG94-39 ii) Research area NG94-47
iii) Research area NG94-56
4) Central and South-eastern sector of the Nagahara Site 7
i) Research areaNG94-19 ii) Research area NG94-20
iii) Research area NG94-4

Chapter II Results of research in the Western sector of the Nagahara Site 9
S.1 Research area NG94-3 and NG94-17 9
1) Stratigraphy and finds from each stratum 9
2) Features and finds 13
i) The Muromachi Period ii) The Nara Period
S.2 Research area NG94-5 14
1) Stratigraphy and finds from each stratum 14
2) Features and finds 15
i) The first half of the Muromachi Period
ii) The second half of the Muromachi Period
S.3 Research area NG94-46 19
1) Stratigraphy 19
2) Finds from each stratum 21
i) Finds from No.2~6 stratum ii) Finds from No.7~16 stratum
iii) Finds from No.16~20 stratum iv) Other finds
3) Features and finds 28
i) From the Muromachi to Edo Periods

ii) From the Final Heian Period to the Kamakura Periods
iii) From the Nara Period to the first half of the Heian Periods
iv) From the Kofun to Asuka Periods
S.4 Research area NG94-63 31
1) Stratigraphy 31
2) Finds from each stratum 33
3) Features and finds 35
i) The Heian Period ii) From the Asuka to Nara Periods
iii) The Jomon Period
S.5 Investigation results of the Faunal remains 40
i) The outline of the materials of 1994
ii) The description of the materials from western sector
iii) Conclusion
S.6 Conclusion 44

Chapter III Results of research in the South-western sector of the Nagahara Site 47
S.1 Research area NG94-18 47
1) Stratigraphy and finds from each stratum 47
i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum
2) Features and finds 52
i) From the Heian to Edo Periods ii) From the Kofun to Nara Periods
iii) The Ichigazuka Kofun
S.2 Research area NG94-33 63
1) Stratigraphy and finds from each stratum 63
2) Features and finds 65
i) The Muromachi Period ii) The Ichigazuka Kofun
S.3 Research area NG94-52 69
1) Stratigraphy 69
2) Features and finds 70
i) From the Edo to Modern Periods ii) The Middle Palaeolithic
S.4 Conclusion 77
1) The result of reserch in the South-western sector of the Nagahara Site
2) The Ichigazuka Kofun and finds
i) Introduction ii) *Haniwa* from the Ichigazuka Kofun

Chapter IV Results of research in the Southern sector of the NagaharaSite 85
S.1 Research area NG94-39 85
1) Stratigraphy 85
2) Features and finds 86
i) The Heian Period ii) From the Asuka to Nara Periods
iii) Kofun no. Nagahara 76
S.2 Research area NG94-47 93

1) Stratigraphy and finds from each stratum 93
2) Features and finds 95
i) The Edo Period ii) From the Heian to Kamakura Periods
iii) From the Asuka to Nara Periods
S.3 Research area NG94-56 97
1) Stratigraphy and finds from each stratum 97
i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum
2) Features and finds 100
i) The Edo Period ii) The Muromachi Period
iii) From the Heian to Kamakura Periods
iv) From the Kofun to Nara Periods
S.4 Conclusion 106

Chapter V Results of research in the Central and South-eastern sector of the Nagahara Site 109
S.1 Research area NG94-19 109
1) Stratigraphy and finds from each stratum 109
2) Features and finds 112
i) The Edo Period ii) From the Nara to Heian Periods
iii) The Asuka Period
S.2 Research area NG94-20 116
1) Stratigraphy and finds from each stratum 116
2) Features and finds 119
i) From the Muromachi to Edo Periods
ii) From the Nara to Kamakura Periods
iii) The Asuka Period iv) The Jyomon Period
S.3 Research area NG94-4 126
1) Stratigraphy and finds from each stratum 126
2) Features and finds 131
i) From the Kamakura to Edo Periods
ii) From the Nara to Heian Periods iii) The Asuka Period
iv) The Yayoi to Kofun Periods v) The Jyomon Period
S.4 Conclusion 142
1) Results of research in the Central sector of the Nagahara Site 142
2) Results of research in the South-eastern sector of the Nagahara Site 144

Tables 148

Bibliography 150

Postscript
Index
English Contents and Summary
Reference Card

ENGLISH SUMMARY

The Nagahara and Uriwari sites are located in the south-eastern part of Osaka City, Japan, and are composed of archaeological features from the Palaeolithic through to the Pre-Modern Period (AD 1603~1868). This volume reports the results of 14 excavations at the Nagahara site (total area 1822 square meters) carried out during fiscal 1994. Major finds from each period are summarized as follows.

Excavation in the southwestern sector of the Nagahara site uncovered the remains of a mid-Palaeolithic period streambed (NG94-52). Around the streambed, we found the footprints of the Naumann Elephant and an extinct species of Japanese deer ("*Mukashinihonjika* "). This is only the second time these types of features have been reported in Osaka City, the first being at the Yamanouchi site.

In the western sector of the Nagahara site, fragments of Late Jomon period pottery vessels and evidence of stone tool production were uncovered (NG94-63). This is the first occurence of such remains in this sector.

Investigations also include the excavation of the Ichigazuka *Kofun* (Nagahara Tomb No.85) and Nagahara Tomb No.76. Ichigazuka *Kofun* is situated in the southwestern sector of the Nagahara site, and was constructed in the early fifth century (NG94-18&33). The *kofun* is one of the largest tumuli in the Nagahara Tomb cluster and features a circular mound approximately 50m in diameter with a square projection. A lot of representational *haniwa* recovered from the *kofun* during this excavation was combined with that of previous investigations. Nagahara Tomb No.76 is a small-scale square shaped mound, situated in the southern sector of the site (NG94-39). Cylindrical *haniwa* were recovered from the moat.

From the Asuka to Pre-modern periods, almost all locations within the site produced remains interpreted as cultivated fields and irrigation works, indicating a possible shift to agricultural activities in this district. In the southeastern sector of the site, a Heian period buried-pottery feature was uncovered (NG94-4) and an inkstone was recovered from a Heian period well in the southern sector of the site (NG94-39). In other investigations, excavation at the Higashiyoke River (NG94-56), thought to have been constructed during the Asuka period, were unable to clarify the exact time of the construction project. Finally, lacquered dishes of the Kamakura period were recovered in the western sector of the site (NG94-46). The dishes were in a very good state of preservation.

報告書抄録

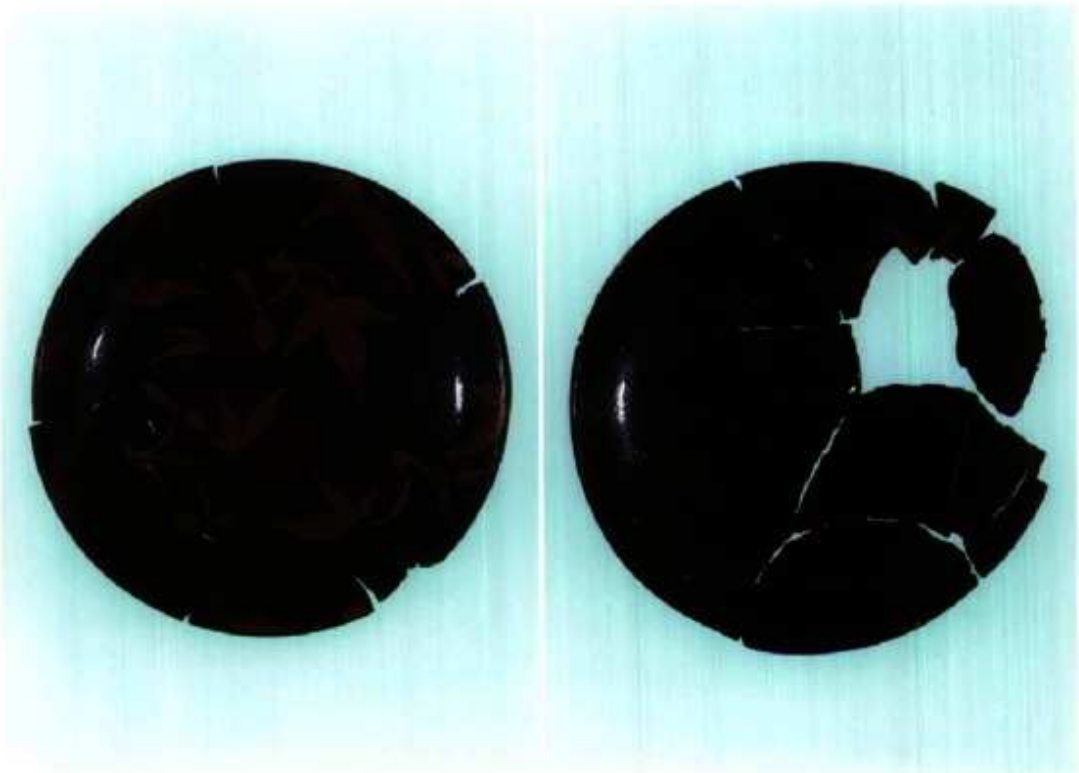
ふりがな	ながはら・うりわりいせきはっくつちょうさほうこく14
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告XIV
副書名	1994年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小田木富慈美・久保和士・ Robert Condon・宮本康治・永島暉臣慎
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35　　TEL.06-6943-6833
発行年月日	西暦　1999年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしながはらにし 長吉長原西2～4丁目 ながよしかわべ 長吉川辺1丁目 ながよしながはら 長吉長原3丁目 ながよしながはらひがし 長吉長原東3丁目	27126	－	34° 36′ 00″	135° 34′ 40″	3次　19940411～19940523 4次　19940409～19940803 5次　19940416～19940603 17次　19940711～19940726 18次　19940629～19940916 19次　19940711～19940905 20次　19940711～19940905 33次　19940912～19941014 39次　19941006～19941028 46次　19941101～19950223 47次　19941102～19941122 52次　19941115～19950315 56次　19941124～19941217 63次　19941210～19950302	80 190 114 14 334 114 100 140 60 203 80 216 60 117	土地区画整理事業(長吉瓜破地区)施行に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
長原遺跡	集落 田畑 古墳 その他	旧石器時代	自然流路・足跡化石	ナイフ形石器
		縄文時代	石器集中部1 土器片集中部2	北白川上層式土器 石鏃・スクレイパー・楔
		弥生時代	溝	弥生土器・石鏃・磨製石斧・木製品
		古墳時代	古墳2基 溝・土壙	須恵器・土師器・韓式土器・製塩土器・円筒埴輪・形象埴輪(家・衣蓋・盾・靫・短甲・草摺・人物・動物形)・滑石製品・ウマ骨
		飛鳥～奈良時代	土壙・畦畔・溝・自然流路	須恵器・土師器・ミニチュア土器・土錘・土馬・砥石・ウマ骨・ウシ骨
		平安時代	掘立柱建物柱穴・井戸・土器埋納遺構・溝・畦畔	輸入陶磁器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器・須恵器・土師器・ウマ骨・貝
		鎌倉～江戸時代	土壙墓・土壙・溝・畦畔・島畠	国産陶磁器・輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師器・瓦・漆器・杭・ウマ骨・シカ骨・ウシ骨・貝

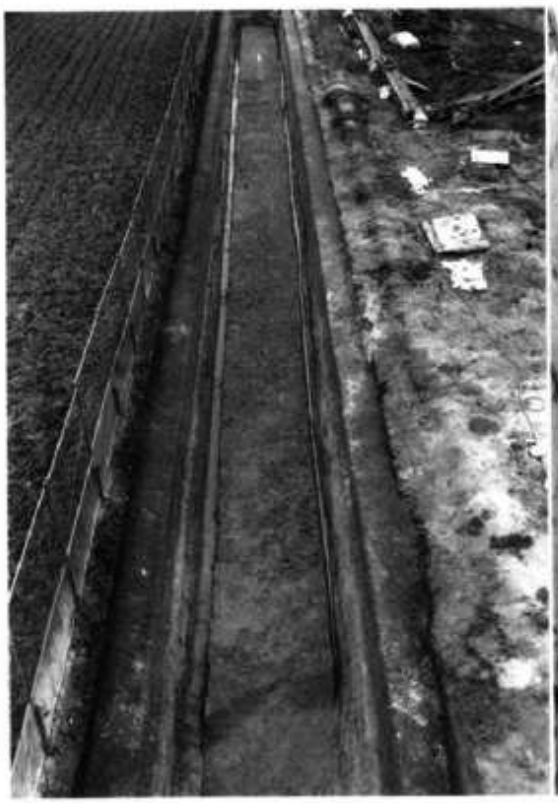
原色図版

94－4次調査　土器埋納遺構出土の土器



94－46次調査　鎌倉時代の漆皿

図　　版



94－3次調査　第5a層上面全景(北から)

94－17次調査　第5層上面(北から)

94－3次調査　第5a層上面の水田断面

94－3次調査　第5c層出土のウマ骨

SR302（南から）

SD401とウマの頭蓋骨（北から）

SD402検出状況(西から)

SD402検出状況(西から)

東半部第２層下面の小溝群（西から）

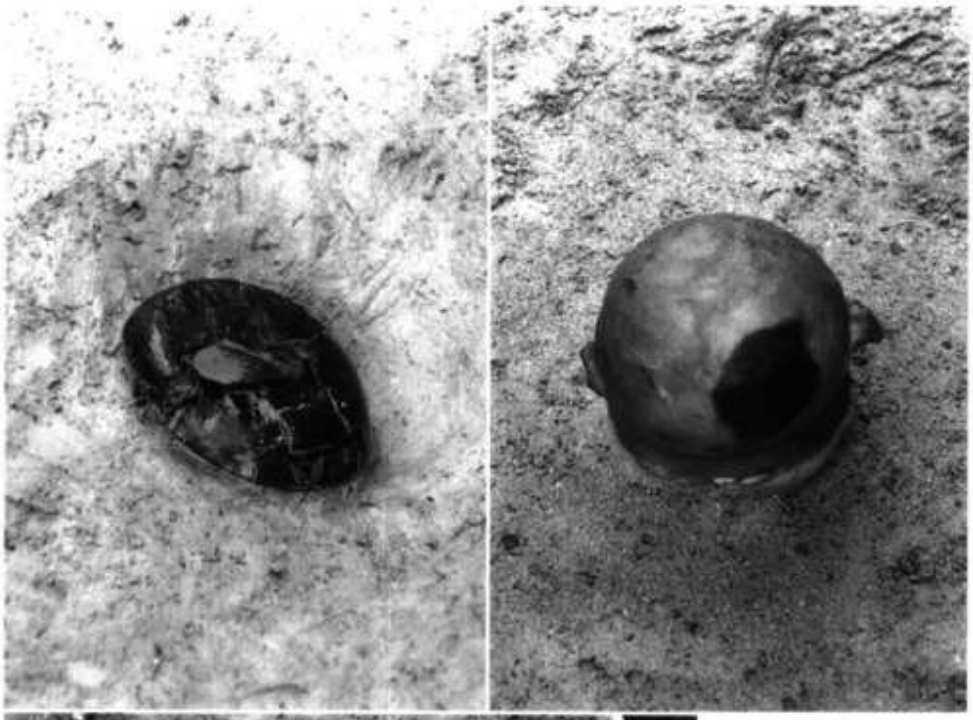
西半部第２層下面の小溝群（東から）

調査区東半部北壁断面（南から）

第8層上面SR301(西から)

第14d層基底面SX403(南西から)

図版六　長原遺跡西地区94—46次調査地　古墳～鎌倉時代の遺物出土状況

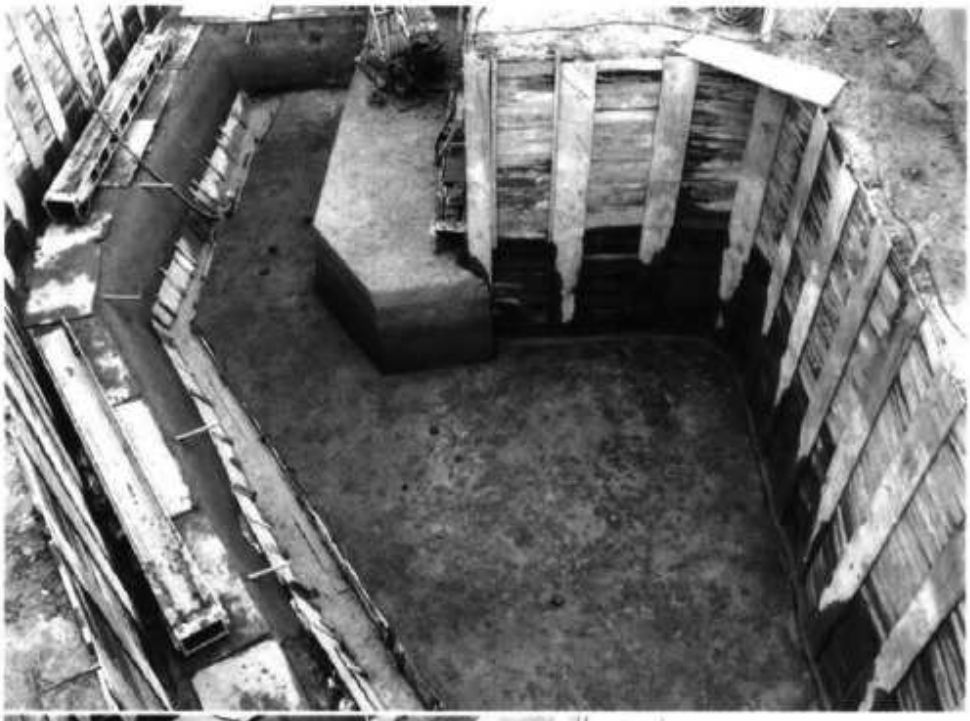


左：第14a層漆皿94・95出土状況（西から）
右：第16層土師器壺58出土状況（西から）

第20層須恵器甕71出土状況（西から）

第8層上面検出遺構（南から）

第8層下面検出遺構（西から）



第19層下面足跡検出状況(南から)

第22・23層縄文土器・石器出土状況(南から)

SD601北壁断面（南から）

第7層上面踏込み検出状況（東から）

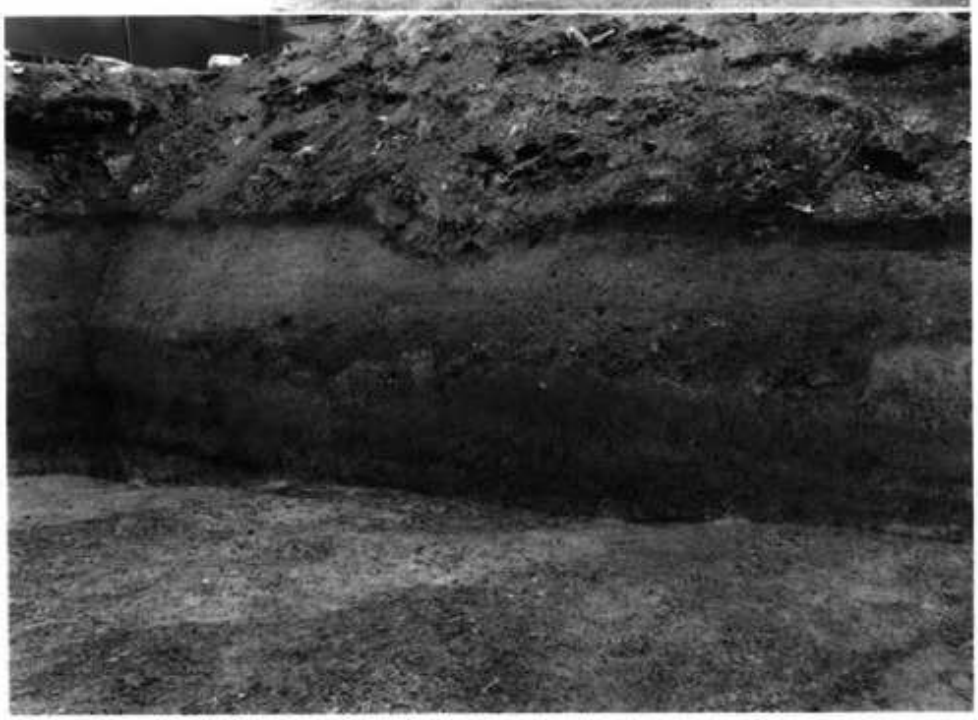
図版一〇　長原遺跡西南地区94―18次調査地　古墳～奈良時代の遺構

第8層下面検出状況（東から）

一ケ塚古墳周濠基底面の埴輪出土状況（南西から）

図版一一　長原遺跡西南地区94―33次調査地　古墳時代の遺構と地層断面

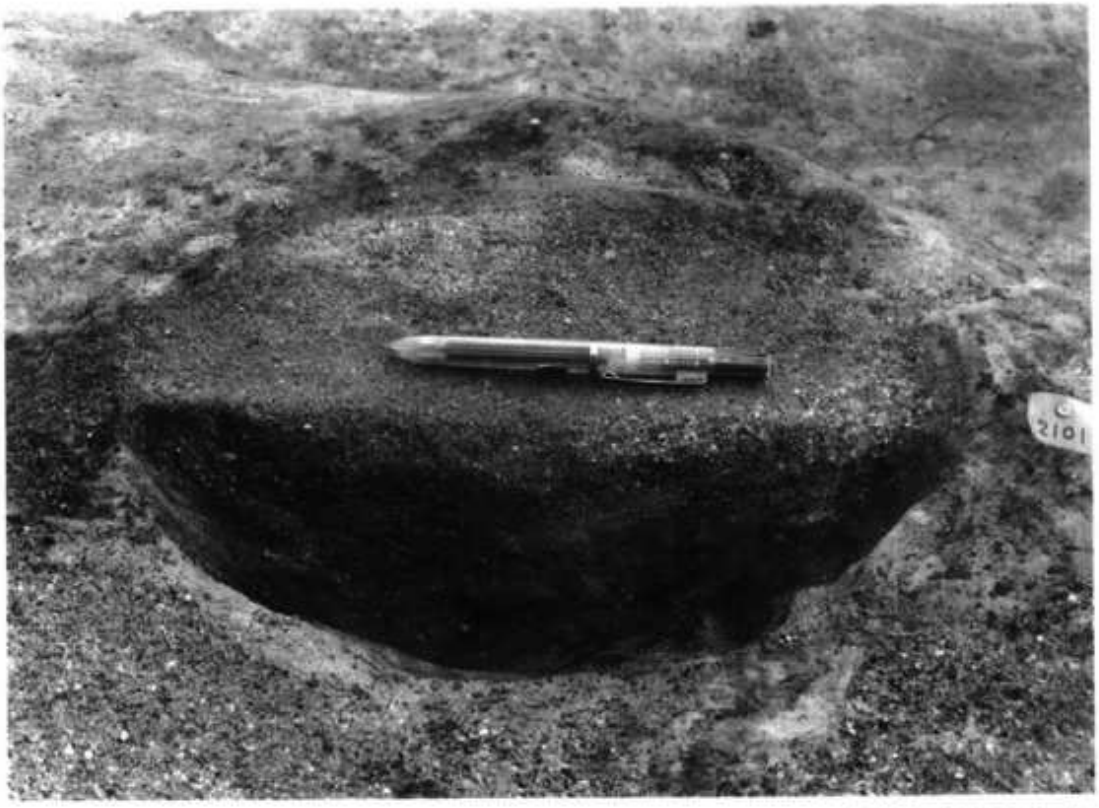
一ケ塚古墳周濠完掘後全景（北から）



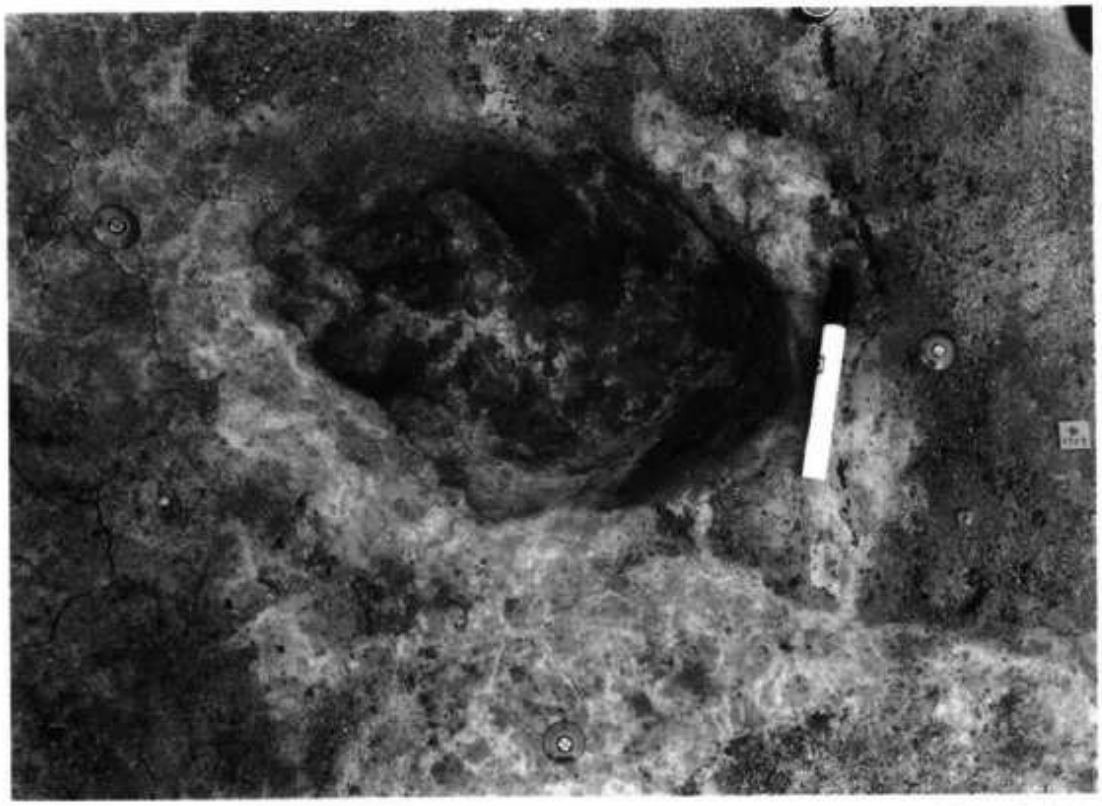
調査区北壁断面

調査区全景（北から）

調査区SD1601の南半部（東から）



足印2の断面（西から）



足印1（南から）

長原76号墳全景（南から）

周溝内埋土の堆積状況（北東から）

東半部第5層上面における畦畔の検出状況（東から）

西半部SD601（東から）

西半部SD602（北から）

図版一六　長原遺跡南地区94―56次調査地　地層断面

西区　北壁断面（西から）

東区　北壁断面（西から）

西区　東除川の西肩検出状況(西から)

西区　第17層上面検出状況(西から)

西区　第21層上面検出状況(西から)

西区　第20層の分布状況(西から)

図版一八　長原遺跡中央地区94―19次調査地　全景および地層断面

調査地全景：奥は94－20次調査地（南東から）

調査区南壁断面（北から）

第1層基底面検出遺構（東から）

第18層下面検出遺構（東から）

図版二〇　長原遺跡中央地区94―20次調査地　奈良時代の遺構

NR501完掘状況（東から）

第11層上面検出状況（東から）

第14層上面検出状況（東から）

調査区西端の盛土・溝状遺構南壁断面（北から）

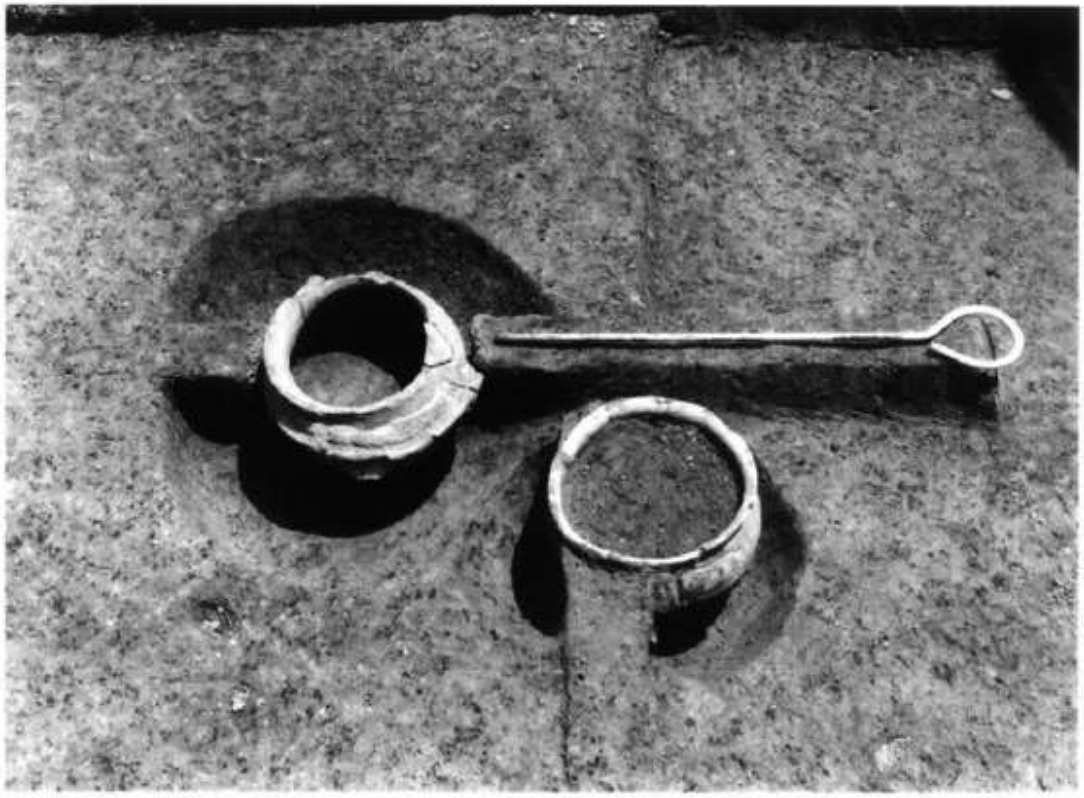
図版二二　長原遺跡東南地区94―4次調査地　地層断面と平安時代の遺構

調査区北壁断面（飛鳥時代～中世）

第2層基底面・第6層下面検出遺構（西から）

SK601・SD601（南から）

SD801（西から）



土器埋納遺構SP401・402（北西から）

土器埋納遺構SP403・404（北西から）

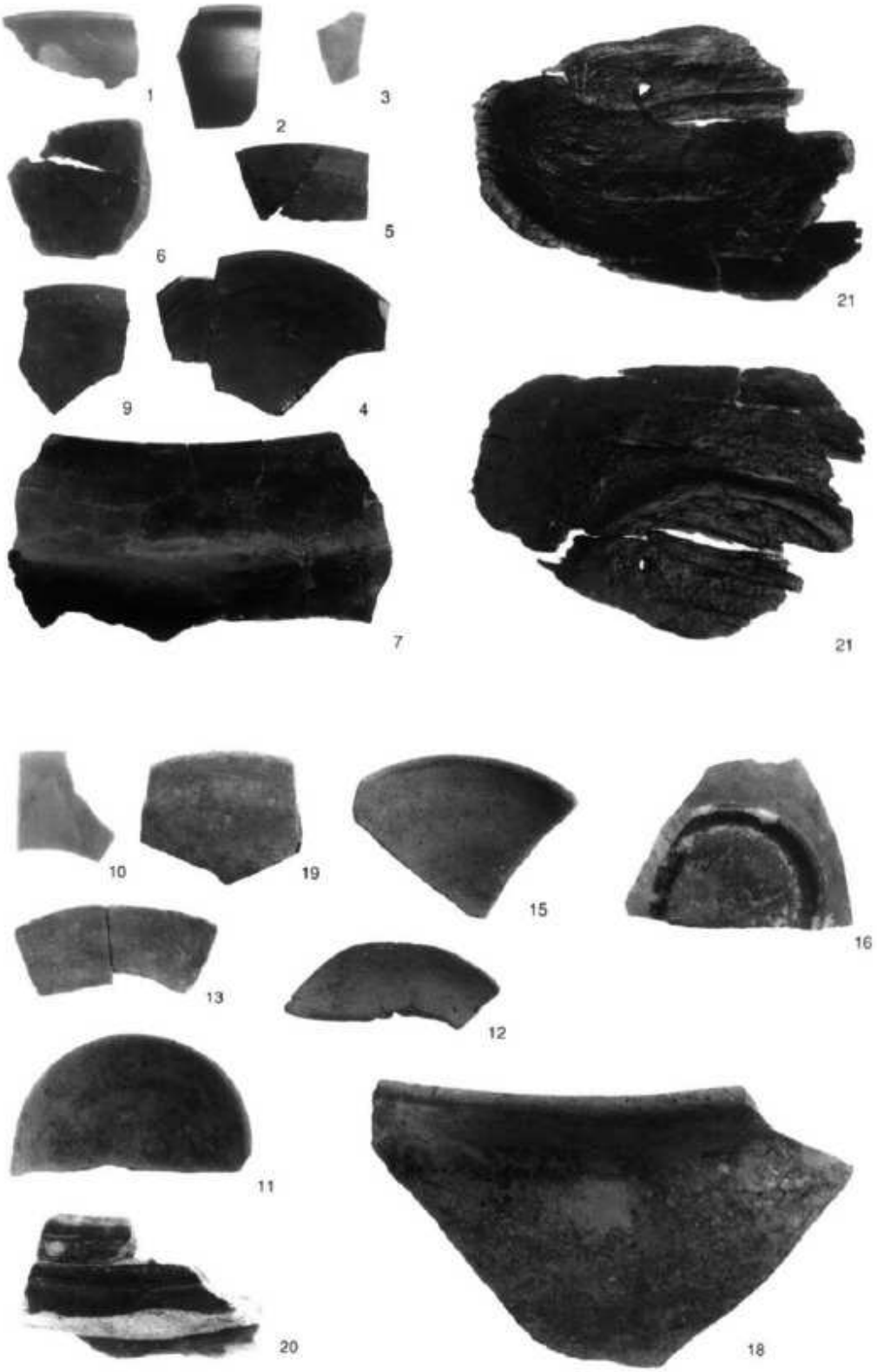
第9層上面検出水田(西半、東から)

第9層上面検出水田(東半、西から)

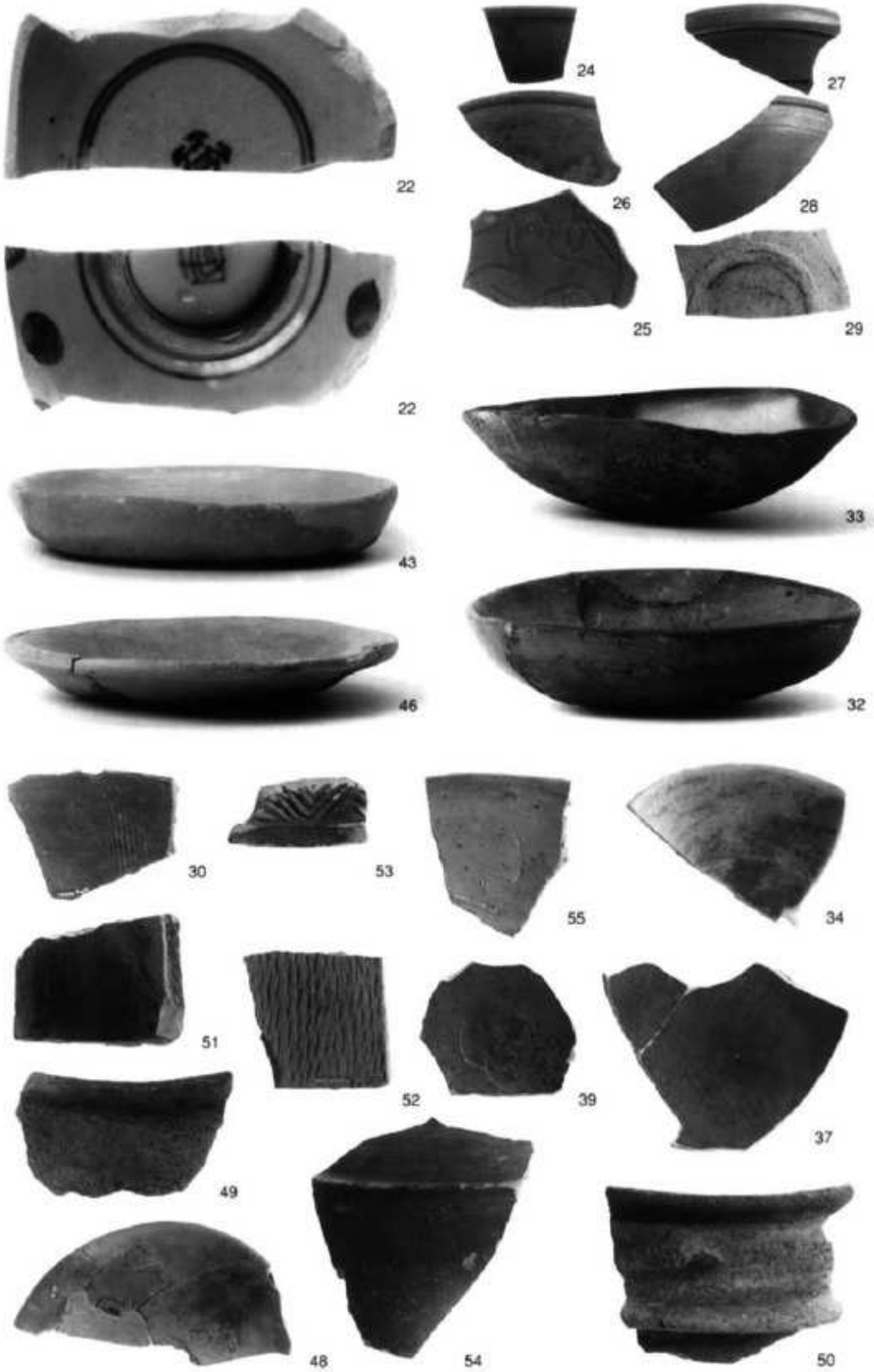
第13層上面検出水田(西半、東から)

第13層上面検出水田(東半、西から)

図版二六　長原遺跡西地区94－3・17、94－5次調査の出土遺物



94－3・17次：第3層(1)、第4層(2)、第5b層(3)、第8層(4・5・9)、第7a層(7)、第7b層(6)　94－5次：SD402(10～13・15・16・18)、第3層(21)、第4層(19・20)



第1層基底(22)、第9層(24～26・30・34・50・53)、第10層(27・33・37・49・55)、
第11層(32)、第13層(28・29・43・46・54)、第14層(39・51・52)

図版二八　長原遺跡西地区94－46次調査の出土遺物

第13層(42・44)、第16層(56～58)、第20層(59～64・66・67)

図版二九　長原遺跡西地区94－46次調査の出土遺物

65

41

68

47

74

70

73

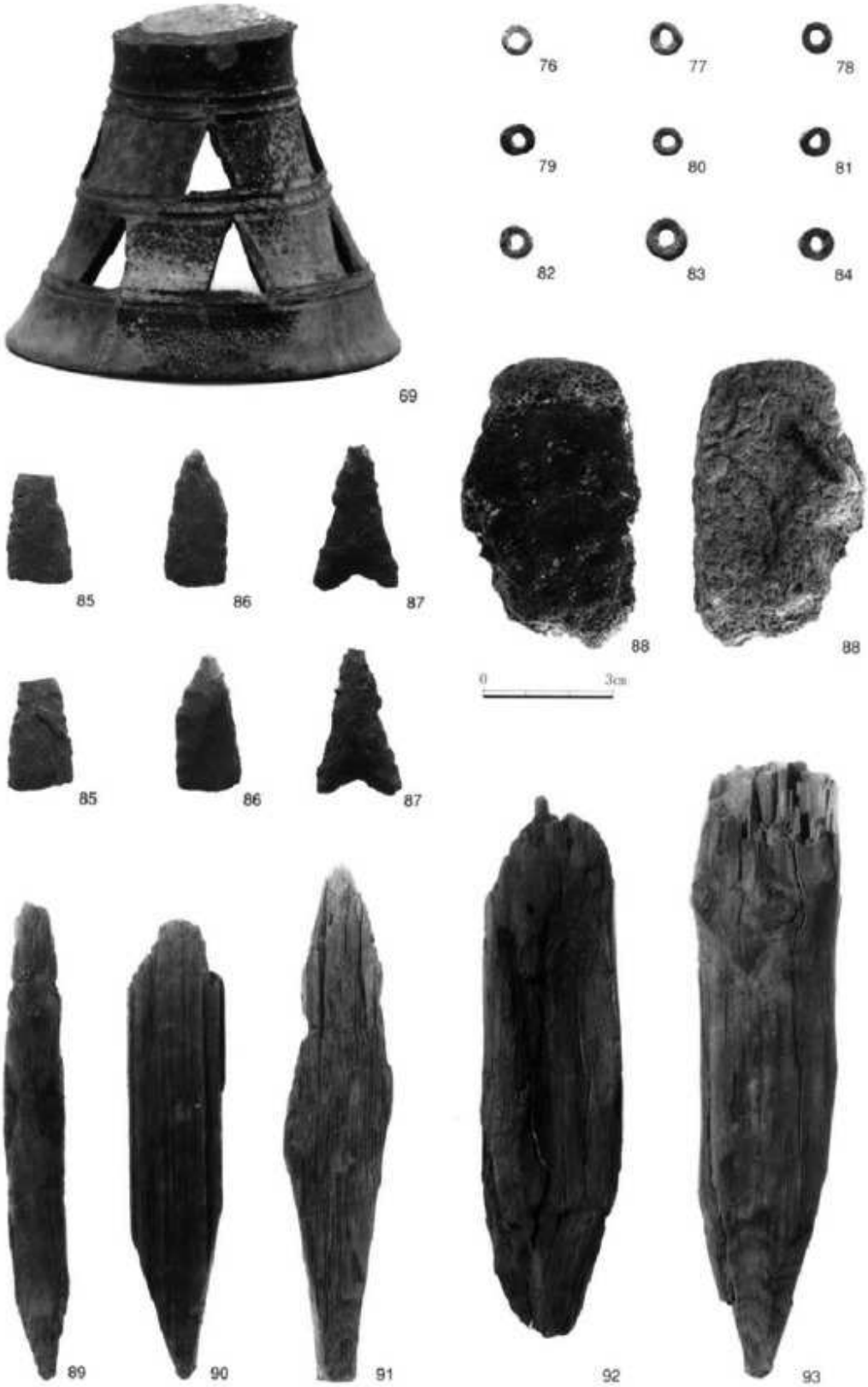
75

71

72

第7層(41)、第9層(73～75)、第14層(47)、第19層(68)、第20層(70～72)

図版三〇　長原遺跡西地区94－46次調査の出土遺物



第5層(86)、第10層(89～93)、第14層(88)、第20層(69・76～84)、洗浄土境中(85・87)

94

95

94

95

94

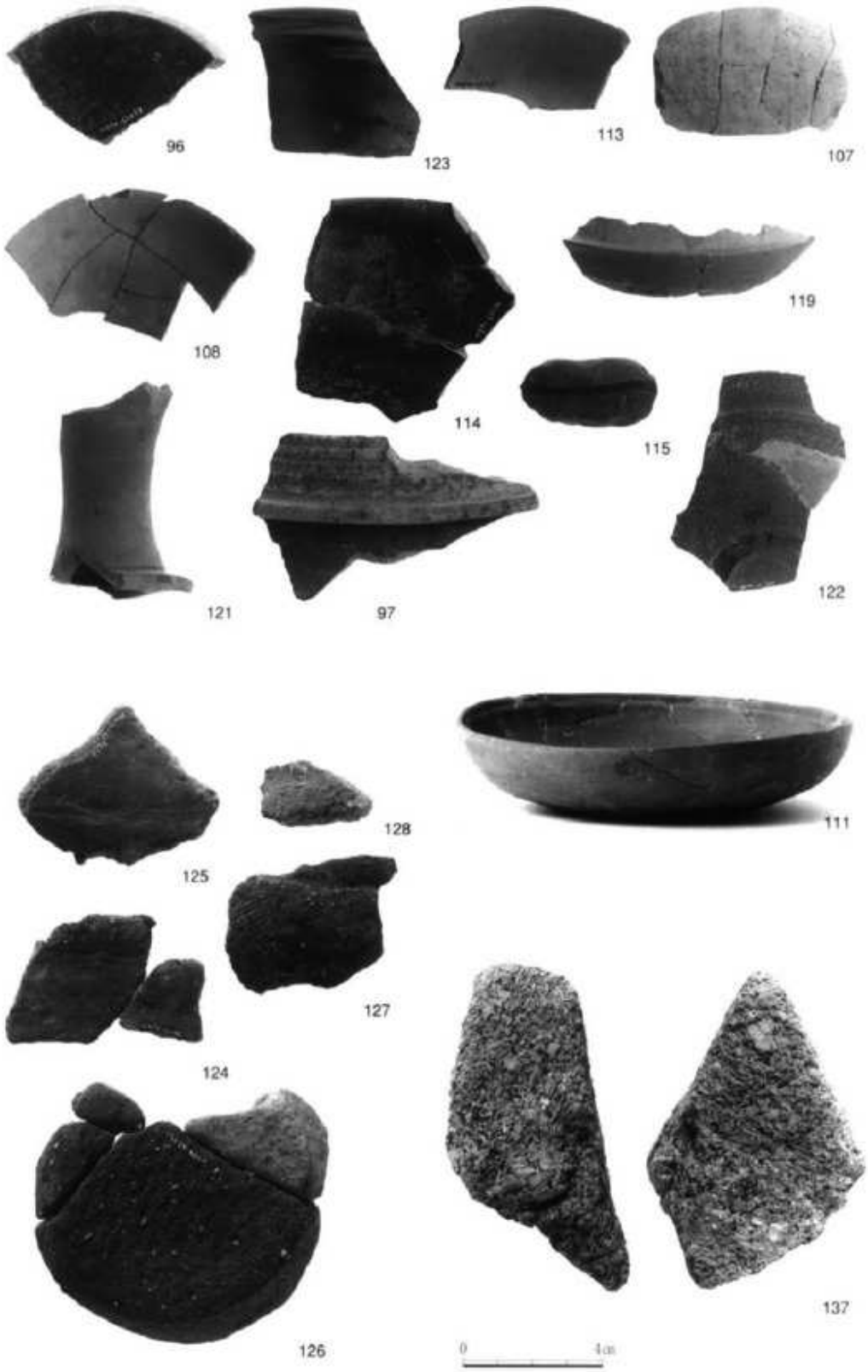
95

23

23

第4層(23)、第14a層(94・95)

図版三一　長原遺跡西地区94－63次調査の出土遺物



第5層(107・108)、第6～7層(96・97)、第18層(111・113・115・121)、第19層(114・119)、第20層(123)、第22・23層：土器群1(127)、土器群2(124～126・128)、第23層(137)

94－63次：LC901(129～132、134～136)、第23層基底(133)
94－18次：第2層(141)、第3層(144)、第4層(150～152)、第5層(153～155)、第7層(156)

SD601：円筒埴輪(158～160・164・165)、包含層：円筒埴輪(161・162)、朝顔形埴輪(163)、
衣蓋形埴輪(168)

179

181

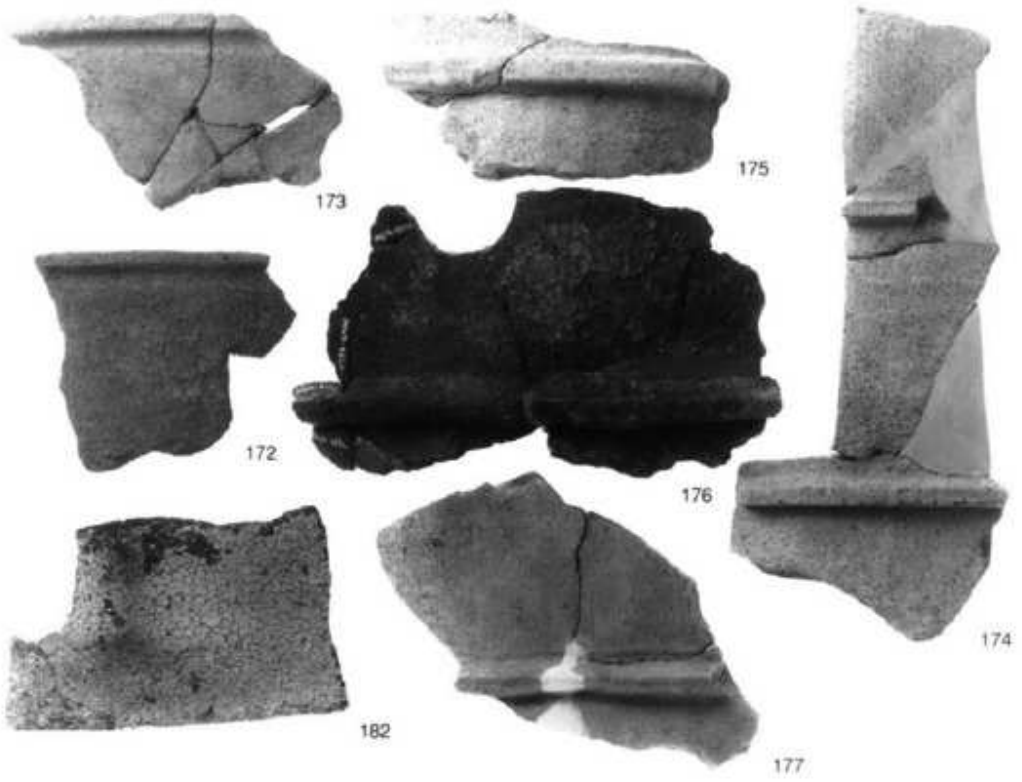
180

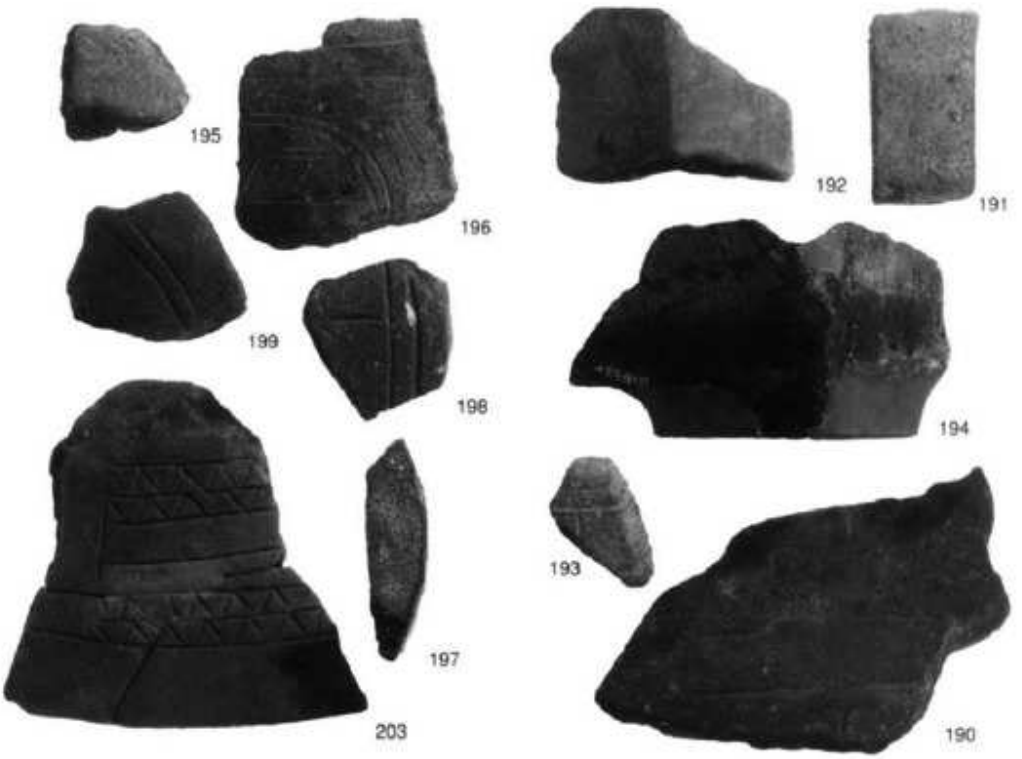
178

188

一ケ塚古墳：円筒埴輪(178～181)、衣蓋形埴輪(188)

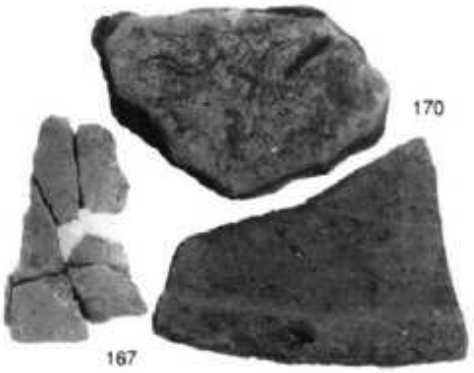
図版三六　長原遺跡西南地区94－18次調査の出土遺物





一ケ塚古墳：円筒埴輪(172～177・182)、家形埴輪(190～194)、盾形埴輪(195・196)、
鰭形埴輪(197)、短甲形埴輪(198・199)、草摺形埴輪(203)

166


170

167

171

169

169

169

184

185

184

185

186

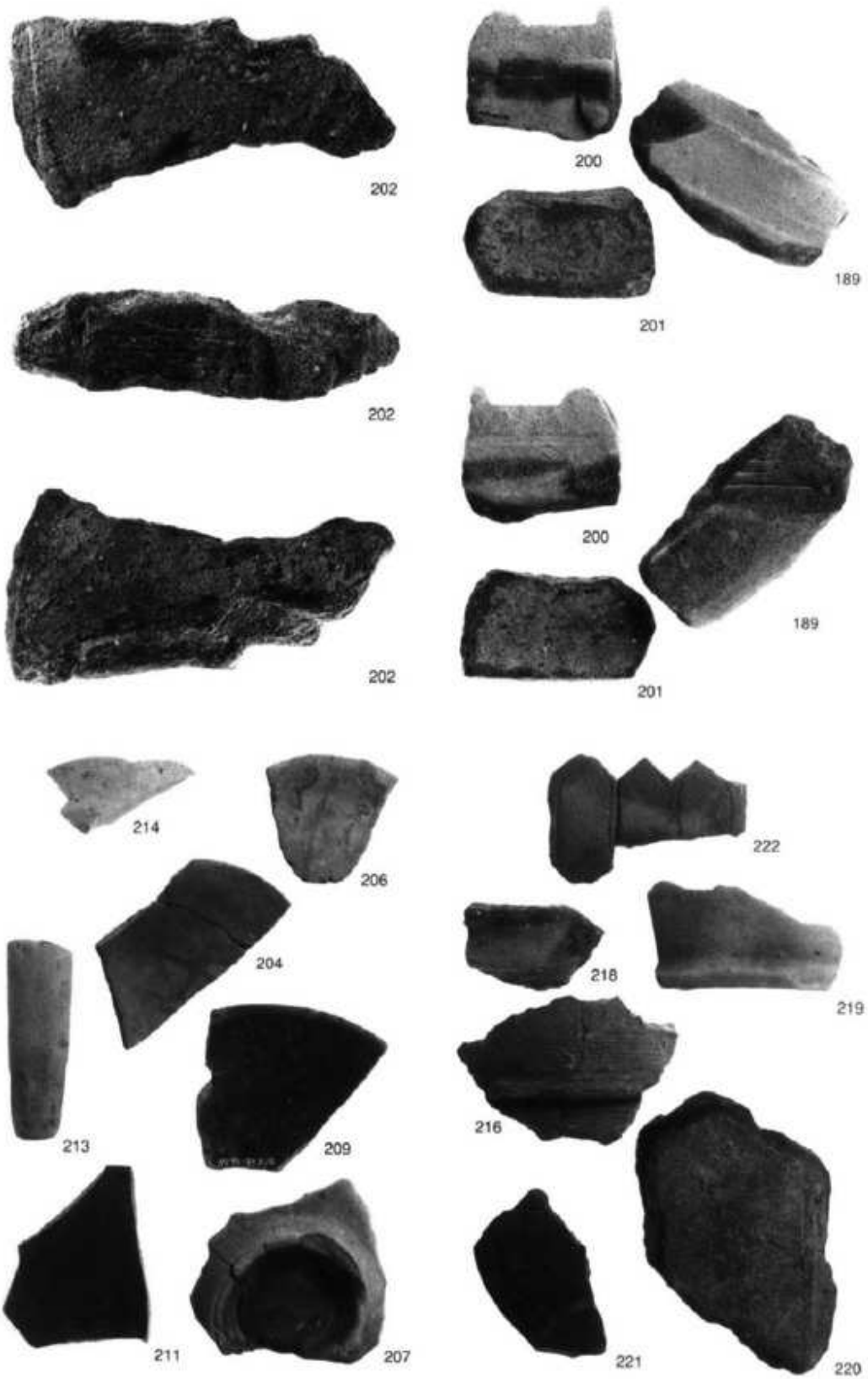
186

187

187

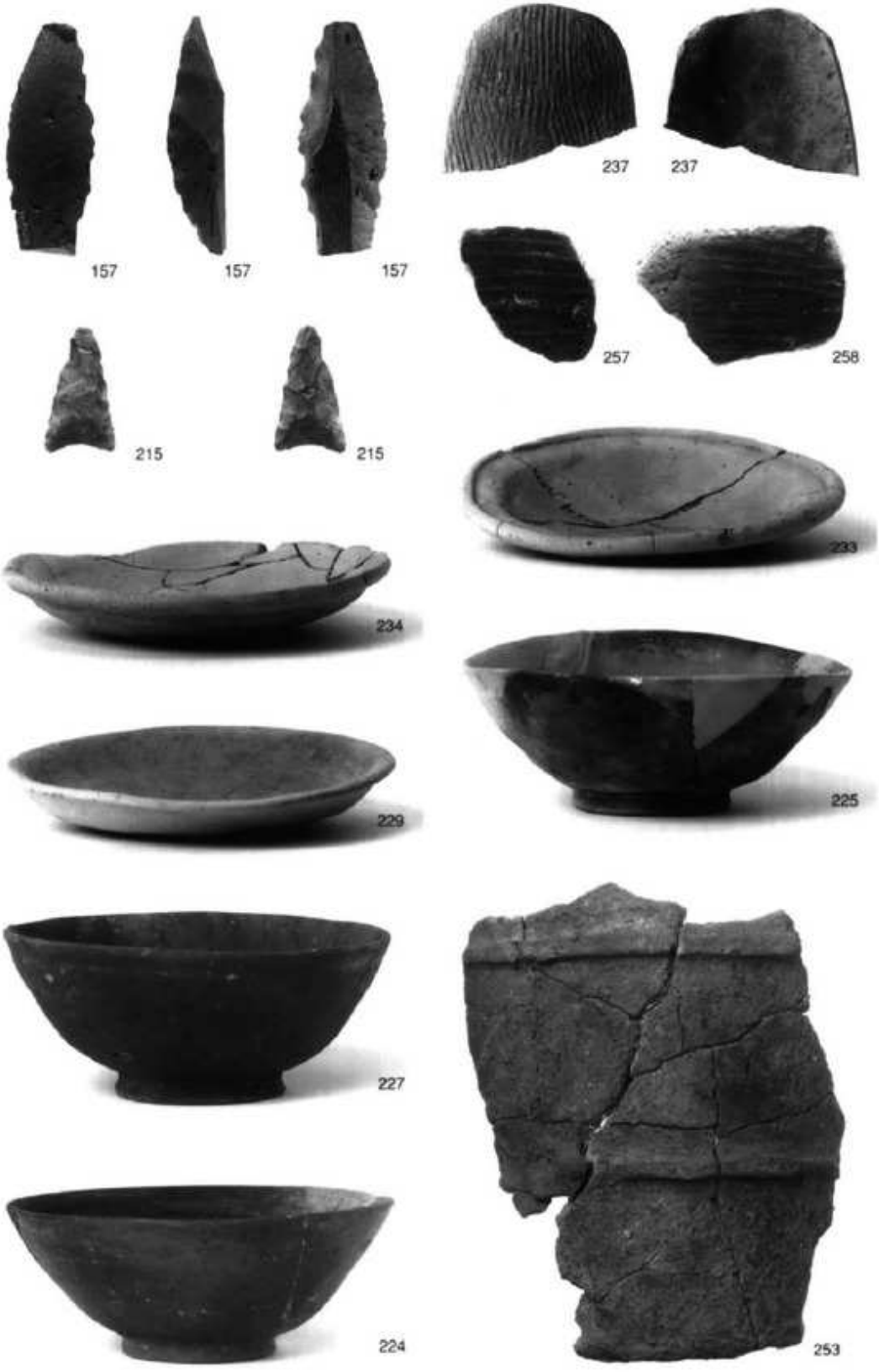
SD601：衣蓋形埴輪(169・171)、包含層：人物埴輪(166)、動物埴輪(167)、衣蓋形埴輪(170)、一ケ塚古墳：衣蓋形埴輪(184～187)

図版三八　長原遺跡西南地区94－18・94－33次調査の出土遺物



94－18次：一ケ塚古墳：家形埴輪(189)、不明形象埴輪(200～202)
94－33次：SX301(204)、第5c層(216)、第6層(209)、第7層(206・207・211・213・214)、
一ケ塚古墳：朝顔形埴輪(218・219)、家形埴輪(220)、鞆形埴輪(221・222)

図版三九　長原遺跡西南地区94－18・94－33次、南地区94－39次調査の出土遺物



94－18次：第5層(157)、94－33次：第7層(215)、94－39次：SE401(224・225・227・229・233・234・237)、長原76号墳：円筒埴輪(253)、韓式系土器(257・258)

図版四〇　長原遺跡南地区94－39次調査の出土遺物

238

240

241

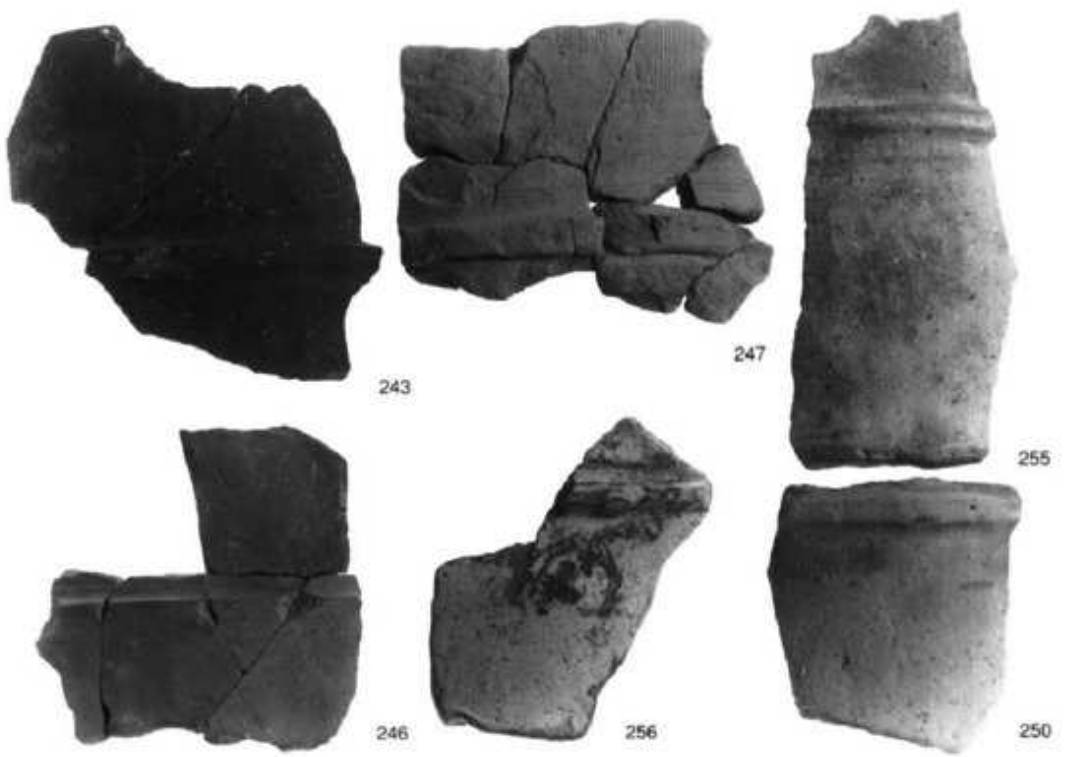
248

249

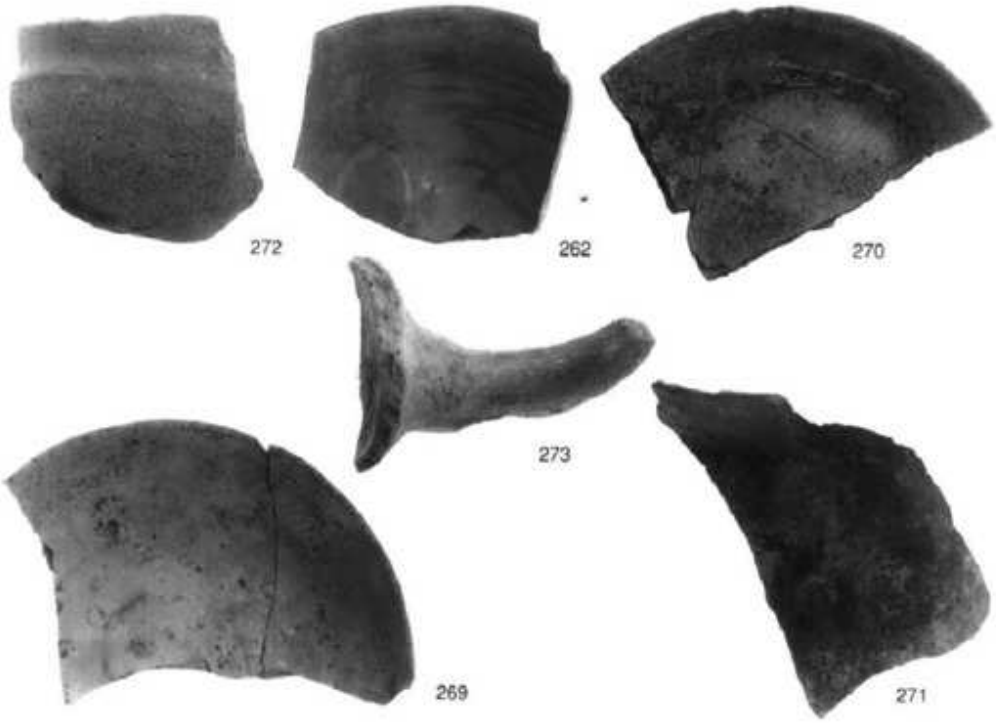
242

長原76号墳：円筒埴輪(238・240～242・248・249)

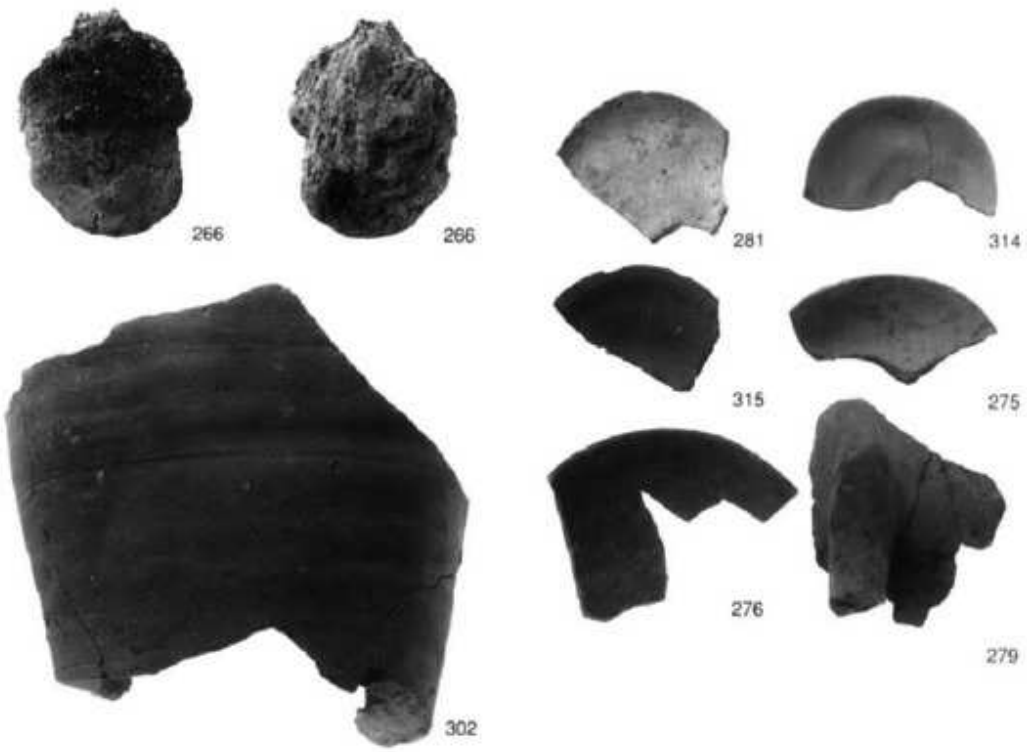
長原76号墳：円筒埴輪(247)、朝顔形埴輪(244・245)



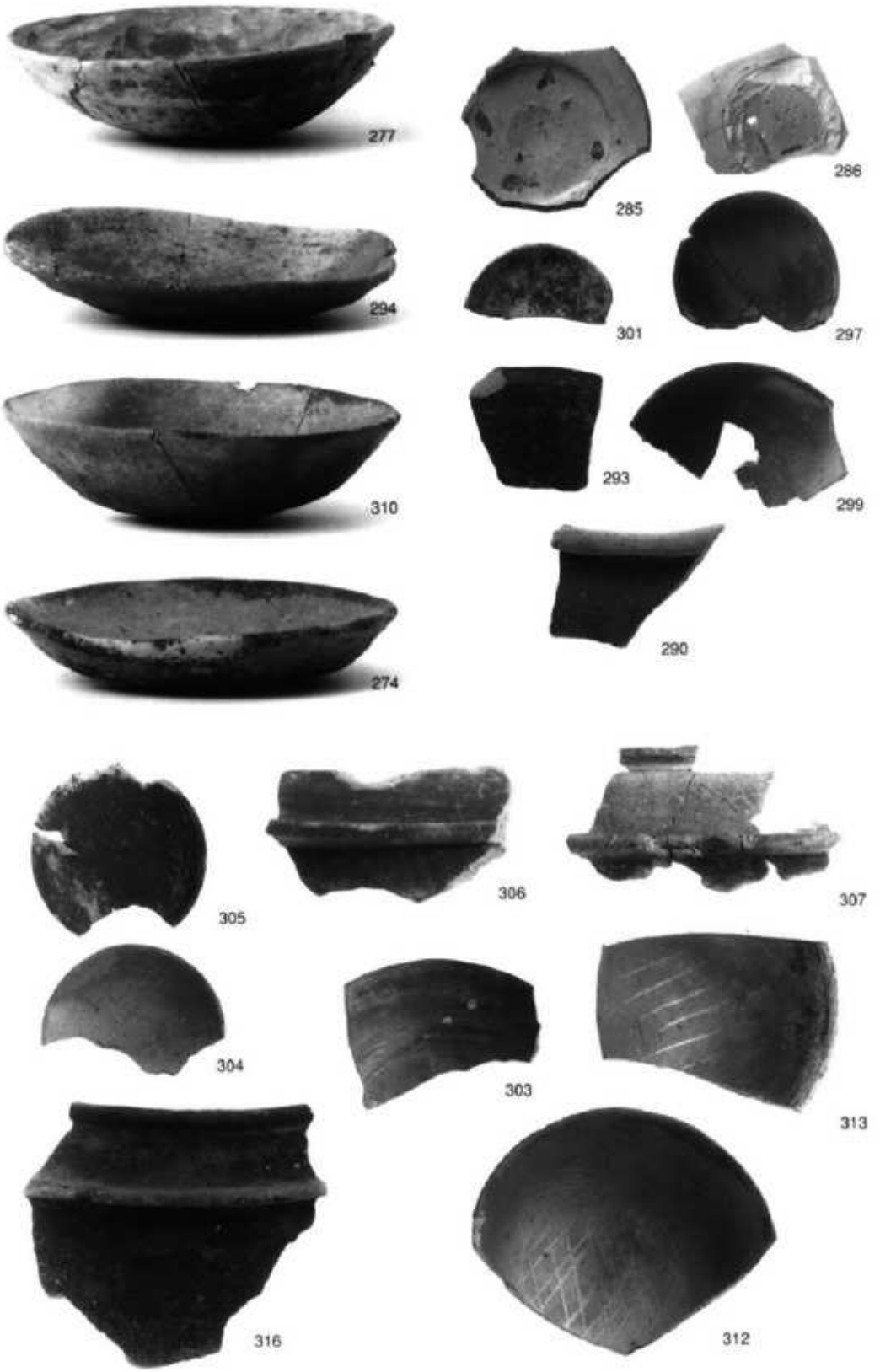
長原76号墳：円筒埴輪(243・246・247・250・255・256)



94－47次：第7層(273)、溝状遺構(262)、SD601(269～272)

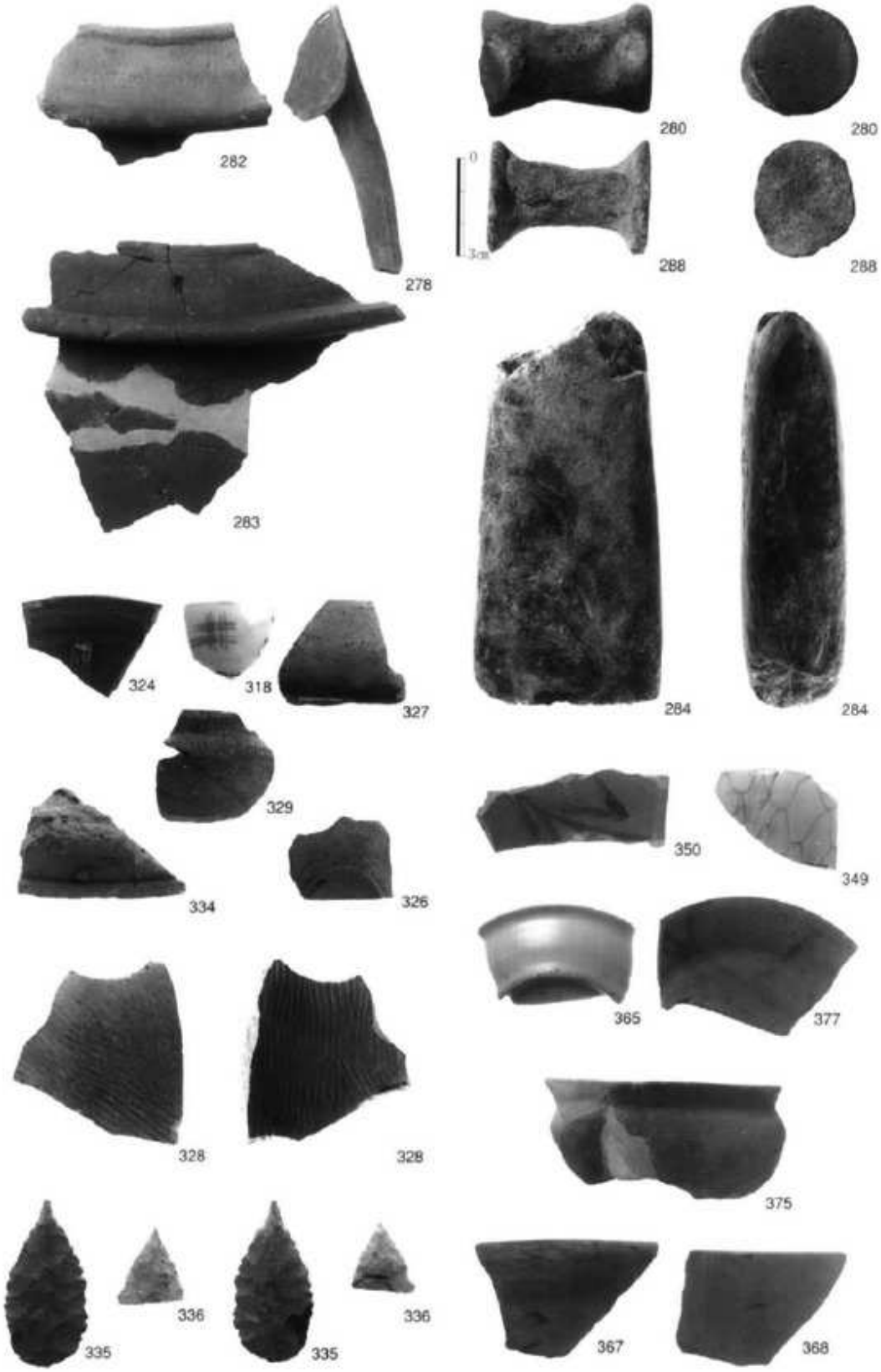


94－47次：SD401(266)
94－56次：第11層(275・276・279・281)、東除川(314・315)、SD304(302)



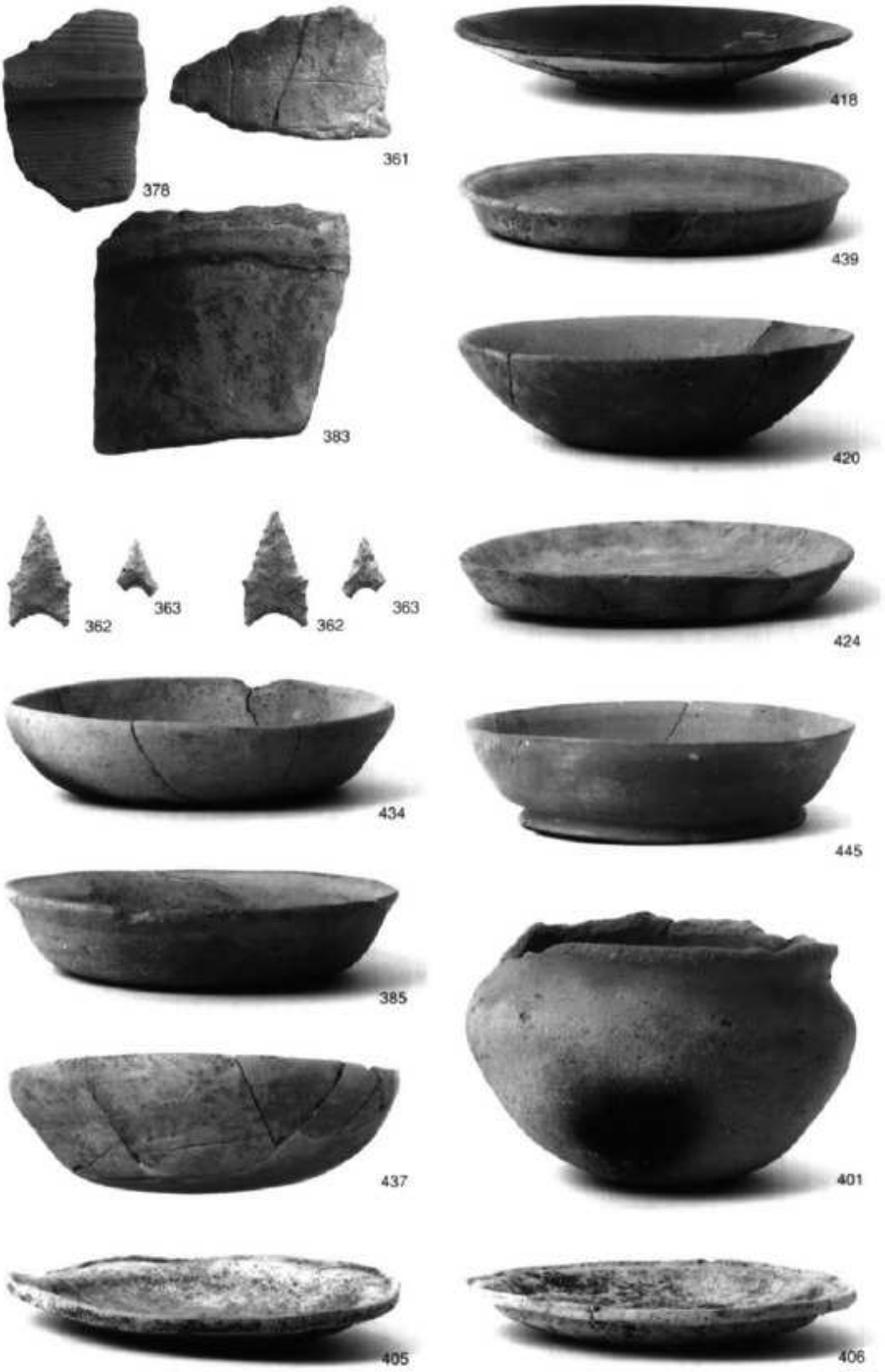
第11層(274・277)、SX201(285・286)、SD202(290)、SD301(293)、SD304(294・297・299・301)、SD305(303～307)、SD401(310)、東除川(312・313・316)

図版四四　長原遺跡南地区94－56次、中央地区94－19・94－20次調査の出土遺物



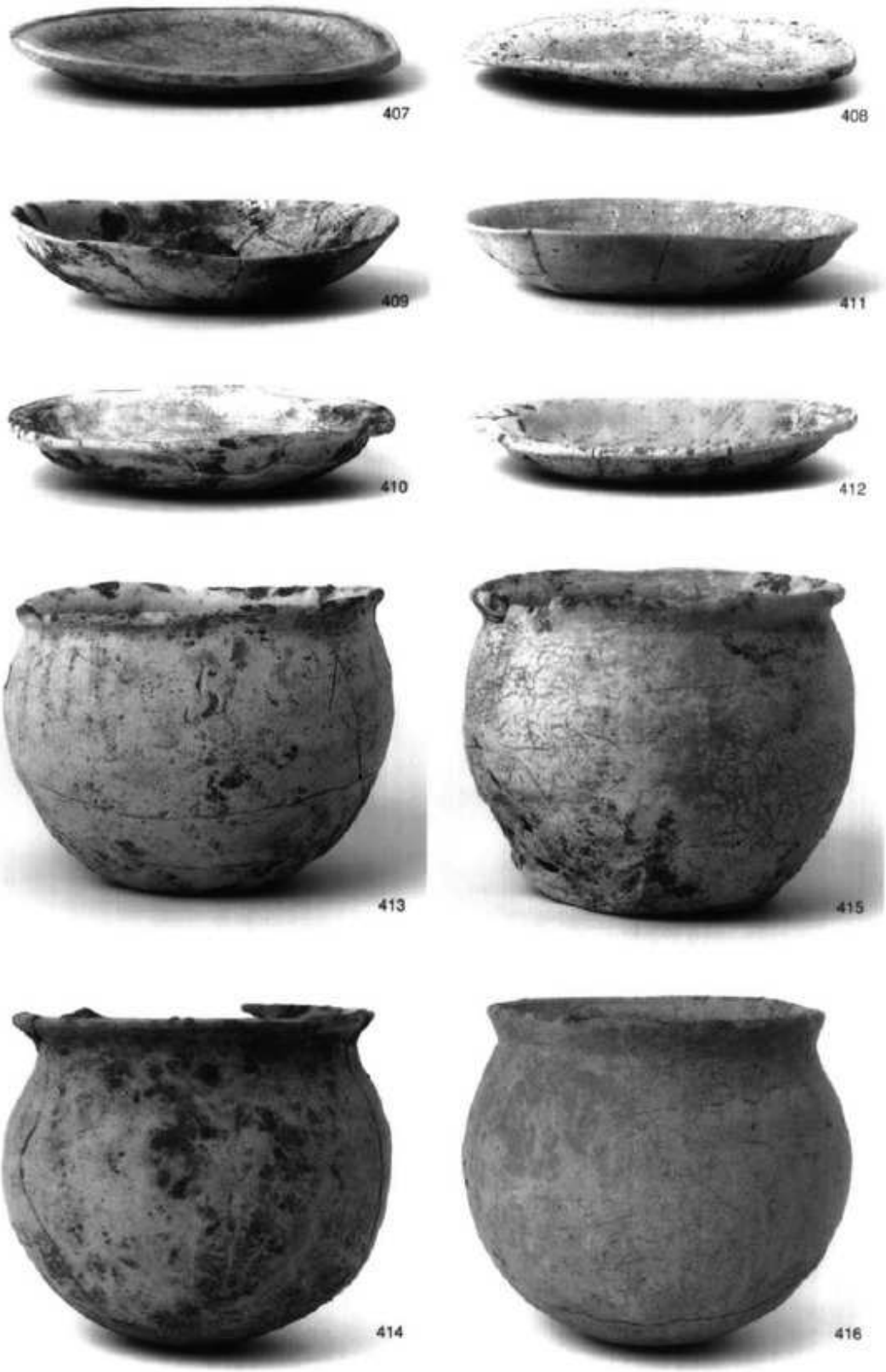
94－56次：第9層(278)、第11層(280・282～284)、SK201(288)
94－19次：第2層(318・324・326・327・334)、第3～7層(328・329)、第18層(335)、第19層(336)
94－20次：第2層(349・350)、SD302(365・367・368)、NR501(375・377)

図版四五　長原遺跡中央地区94－20次、東南地区94－4次調査の出土遺物

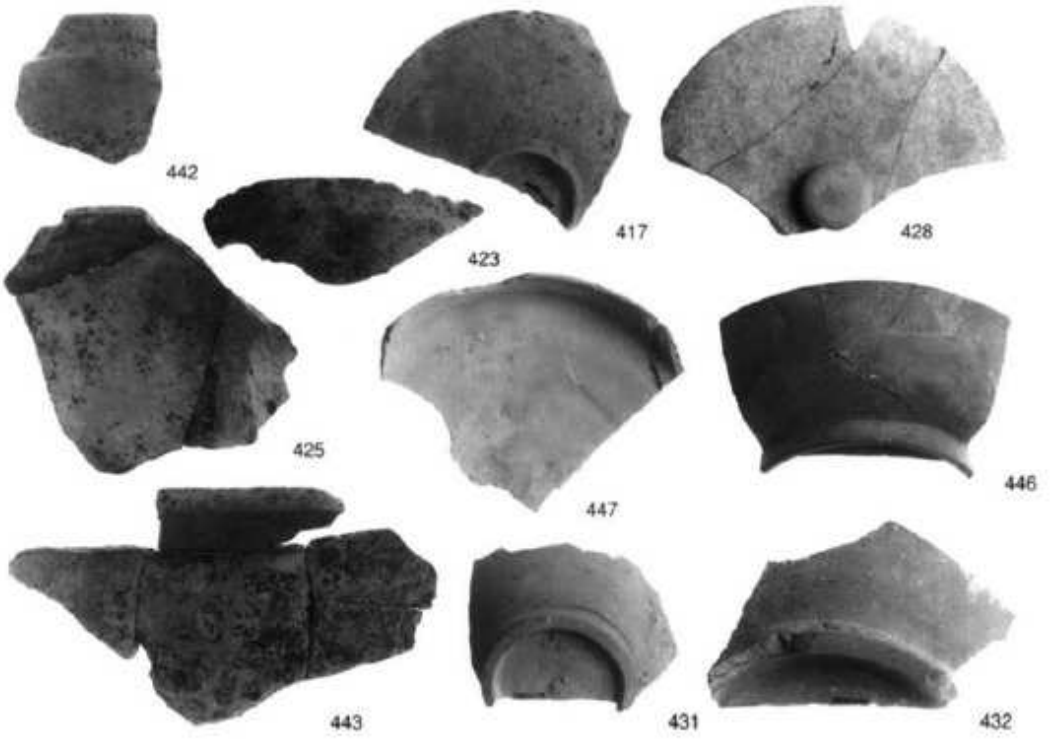


94－20次：第7層(361)、第15層(362)、第16層(363)、NR501(378)、SX604(383)
94－4次：第6層(385)、第8層(401)、SP401(405)、SP402(406)、SD404(418・420)、SD601(424)、SK601(434・437・439・445)

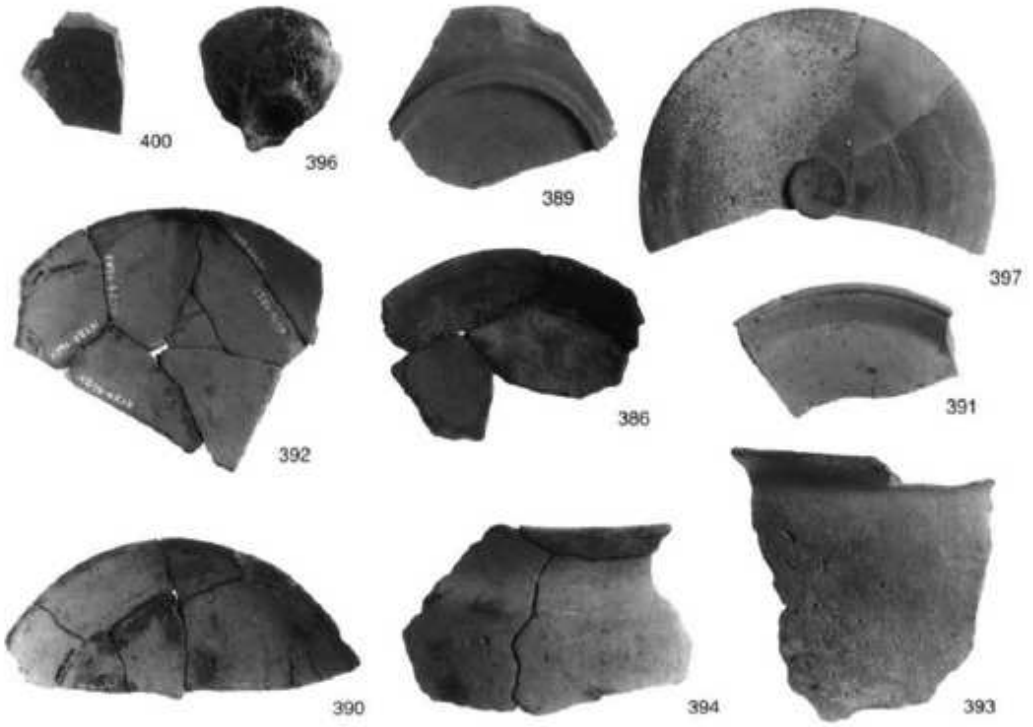
図版四六　長原遺跡東南地区94－4次調査の出土遺物



SP401(409・413)、SP402(410・414)、SP403(407・411・415)、SP404(408・412・416)



SD404(417)、柱穴群(423)、SD601(425・428・431・432)、SK601(442・443・446・447)

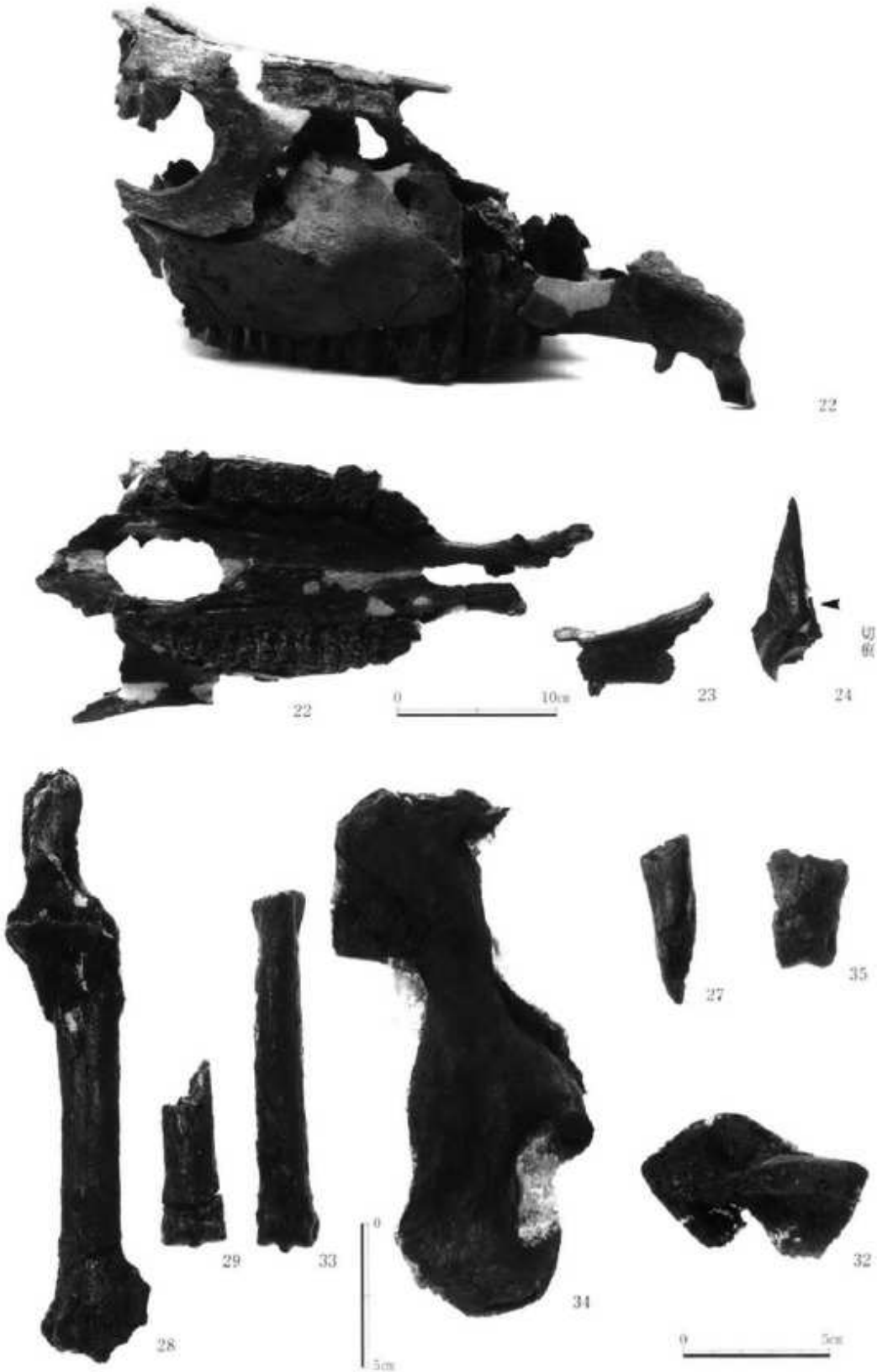


第6層(386・389)、第7層(390～394・396・397・400)

図版四八　長原遺跡東南地区94－4次調査の出土遺物

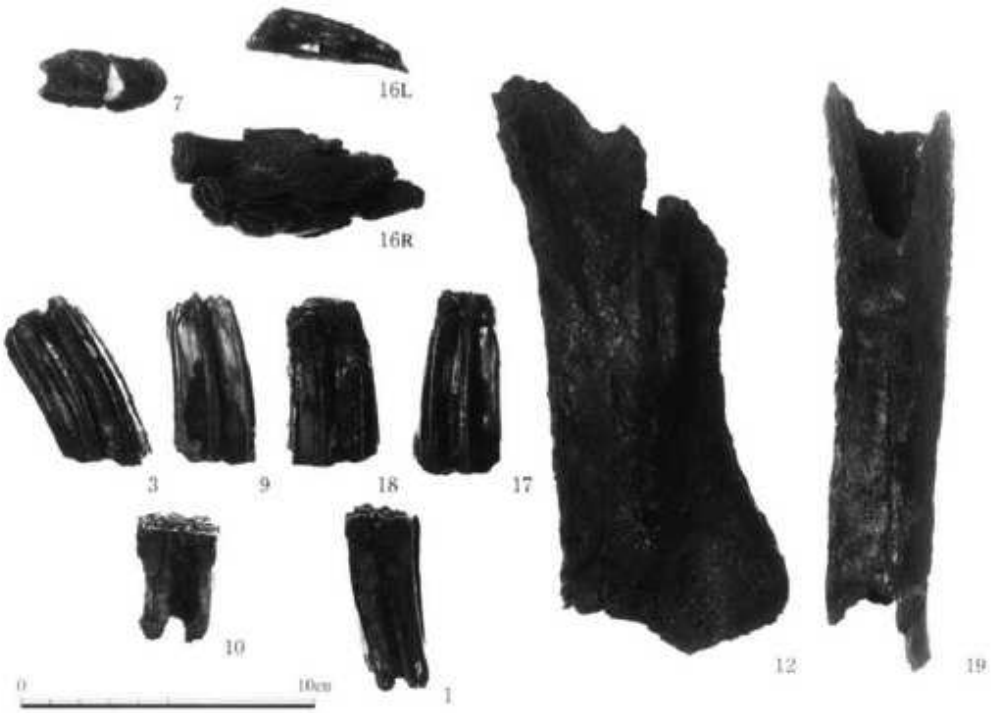
第7層(395)、第8層(403・404)、SK601(448)、SD801(449・450)、第9層(451)、
第10層(452)、第22層(453～458)

図版四九　長原遺跡西地区94－5・94－63次調査出土の動物遺体



94－5次：SD401(22～24)、94－63次：第17層(27～29・32～35)　番号は表6に対応

図版五〇　長原遺跡西地区94－3・94－46次、中央地区94－20次調査出土の動物遺体



94－3次：第5b層（1）、第5c層（3）、第7b層（7・9・10・12）、第8層（16～19）　番号は表6に対応

94－46次：第18b層（26）、94－20次：SX401（41）　番号は表6に対応

大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XIV

ISBN4－900687－37－5

1999年10月31日　発行 ©

編集・発行　財団法人 大阪市文化財協会

〒540－0006　大阪市中央区法円坂１－１－35

(TEL 06－6943－6833　FAX 06－6920－2272)

印刷・製本　岡村印刷工業株式会社

〒558－0004　大阪市住吉区長居東３－４－17

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XIV

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1994

October 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XIV

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1994

October 1999

Osaka City Cultural Properties Association